平成15年度～19年度　文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業

学術フロンティア推進事業　研究成果報告書

「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」

第２部門

中山間地における地域社会の変容と子どもの生活

～長野県・組合立小海中学校区における調査から～

SEITOKU UNIVERSITY
INSTITUTE OF LIFELONG LEARNING

聖徳大学　生涯学習研究所

あ い さ つ

聖徳大学生涯学習研究所の研究計画「生涯学習の観点に立った『少子高齢社会の活性化』に関する総合的研究」が文部科学省の「私立大学高度化推進事業学術フロンティア推進事業」の採択を受け最終年度を迎えました。この研究はおよそ５分野にわたる領域を進めていますが，本編は，そのうち第２部門「少子社会における青少年の健全育成」に関する研究報告書としてまとめたものです。

これまで，第２部門は，すでに「少子社会における子どものための地域活動の展開」と「子ほめ運動と地域の教育力の向上に関する研究」をまとめていますが，今回は，長野県・組合立小海中学校区において「校区の特性および教育課題等」を調査し，家族や住民の地域活動と子どもの地域観や自然観，地域生活，そして道徳的発達に焦点をあて，さらに長期宿泊体験である山村留学についても調査研究したものを，「中山間地における地域社会の変容と子どもの生活」としてまとめました。

これらの研究に当たっては，小海中学校区での長期にわたる共同研究に対して外部研究員である岡崎友典放送大学准教授をはじめ７名の研究者の方々に，積極的に参画していただきました。この成果としては，都市とは異なる条件の中での青少年教育の推進方策のヒントが，幾つも得られているものと思われます。この成果を基に，今後は，より具体的な方策やプログラムの開発，および実践に発展させていきたいものと考えています。同時に，高齢化が進む農山漁村の交流活性化が社会的課題となるなかで，子育てと生涯学習を中核としたまちづくりのために，その成果の活用が関係者の間で積極的に行われるよう，さらに研究を進めていきたいと考えております。

この研究に取り組んでいただいた研究者および研究協力委員の皆様，さらにご協力いただいた生徒，保護者，小海中学校，地域住民そして行政関係者の皆様に心から感謝いたします。あわせて，この研究が今後もさらに推進され幅広く活用されることを念願しております。

2008年３月

聖徳大学生涯学習研究所
所長　福留　強

平成15年度～19年度　文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業
学術フロンティア推進事業　研究成果報告書
「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」

第２部門　「少子社会における青少年の健全育成」報告書

中山間地における地域社会の変容と子どもの生活

～長野県・組合立小海中学校区における調査から～

SEITOKU UNIVERSITY
INSTITUTE OF LIFELONG LEARNING

聖徳大学　生涯学習研究所

目　次

はじめに　～組合立小海中学校区への提言～

放送大学 准教授，学術フロンティア推進事業外部研究員　岡崎 友典

…… 5

1.　調査の概要と小海中学校区の特性および教育課題

放送大学 准教授，学術フロンティア推進事業外部研究員　岡崎 友典

1. 研究調査の目的と小海中学校区の概略と特性 …… 9
2. 中学生と保護者調査の概要 …… 10
3. 地域社会の変容にともなう教育課題　～自由記述を手がかりとして～ …… 13
4. 地域コミュニティの創造と生涯学習の課題　～小海中学校区の調査から学ぶこと～ …… 18
5. 自由記述にみる親子の地域観　～テキスト分析ソフトを使った地域観に関する自由回答分析の試み～…… 20

2. 家族の現在と子どもへのまなざし

明治学院大学 非常勤講師　春日 清孝

はじめに　～家族を問う視点～…… 23
1. 家族・親族の実態 …… 24
2. 家族観・家族意識 …… 26
3. 家族の地域参加 …… 28

3.「農」の体験と教育効果　～「表象」としての自然と農業・農村体験学習～

神奈川大学 非常勤講師　牧野 修也

1. はじめに …… 31
2.「農の教育的効果」の広がり …… 31
3. 豊かな「自然」とは？ …… 33
4. K中学校生徒と保護者の地域社会への意識 …… 35
5. まとめ …… 40

4. 住民の地域活動と地域認識　～子どもの生育環境をめぐって～

明治学院大学 非常勤講師　春日 清孝

1. 住民の地域活動の現状 …… 43
2. FAに見る親の子育て環境評価 …… 44
3.「子どもの遊び」と「自然」の抱えるアポリア …… 45
4. 子どもの遊び体験をいかに確保するか　～子育て環境をつくるということ～ …… 47

5. 中山間地の子どもの地域定着に関する仮説的モデルの構築

ELC Research International Canada　岩瀬 章良

1. はじめに …… 51
2. 過疎化問題における「問題の所在」…… 51

3. 調査方法と手続 …… 52
4. 同居・近居に関する親と子の意向 …… 52
5. 子どもの地域親近感と基本モデル …… 54
6. 基本モデルの検討 …… 56
7. 仮説的モデルの構築 …… 58

6. 道徳性の発達と地域社会

日本女子体育大学 専任講師　冨江 英俊

1. はじめに …… 61
2. 中学生の道徳性 …… 62
3. 地域社会の人間関係と道徳性 …… 62
4. 電子メディアと中学生の道徳性 …… 63
5. 携帯電話利用の有無と道徳性 …… 65
6. 結語　―道徳教育の場としての地域社会のあり方― …… 65

7. 農山村における社会・自然体験の教育的意義　～㈶「育てる会」の山村留学についての考察～

児童福祉施設 非常勤職員　竹内 弘枝

1. はじめに …… 67
2. 山村留学とは …… 67
3. 北相木山村留学センターの調査 …… 67
4. 『山村留学総合効果の検証』より …… 70
5. 小海町の大人と子ども達 …… 71
6. 山村留学の成果を都会の子ども達に広く還元するには …… 73

8. 親や地域住民が子どもを誉めて育てることの実証的考察

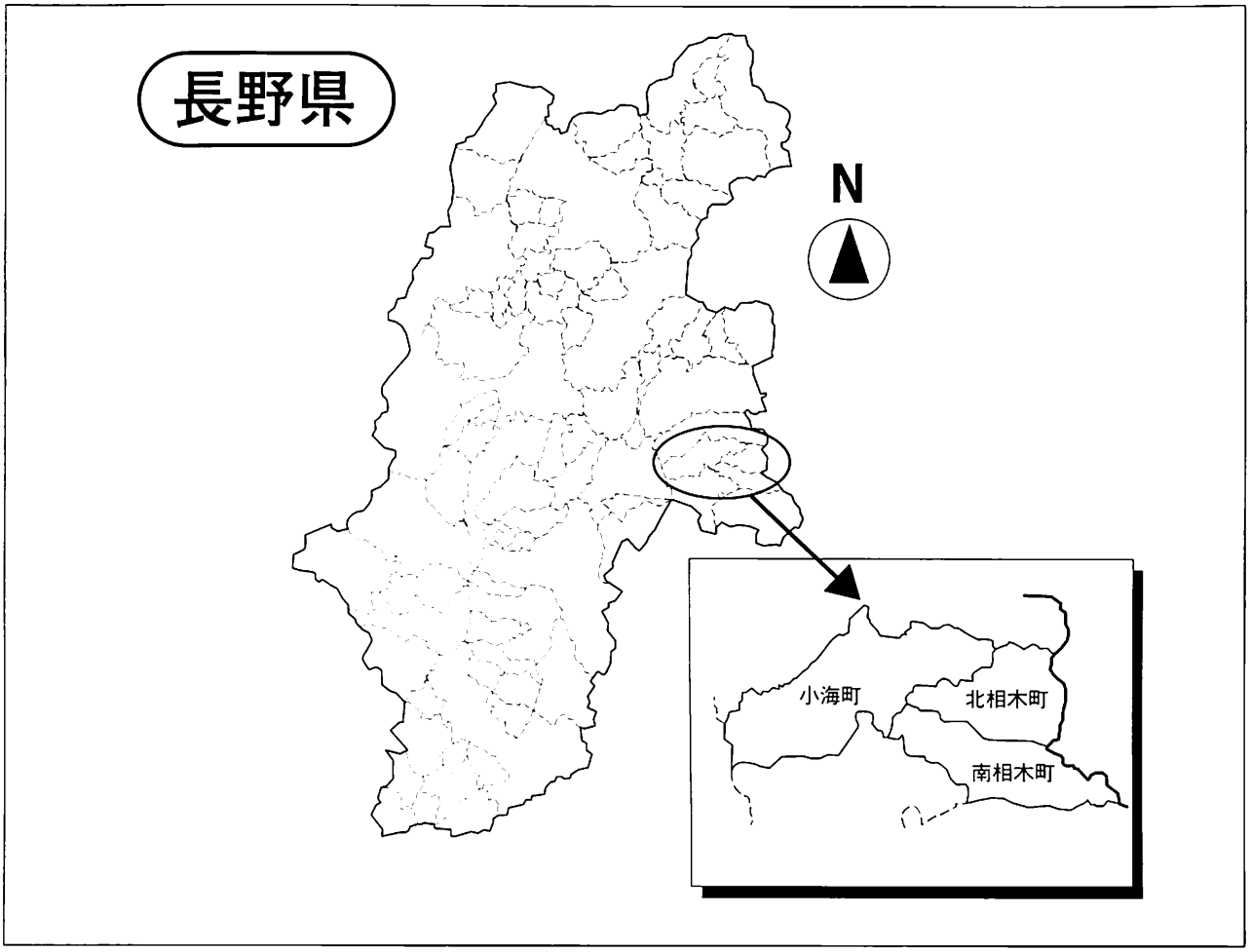
元・聖徳大学准教授，元・学術フロンティア推進事業研究員　夏秋 英房

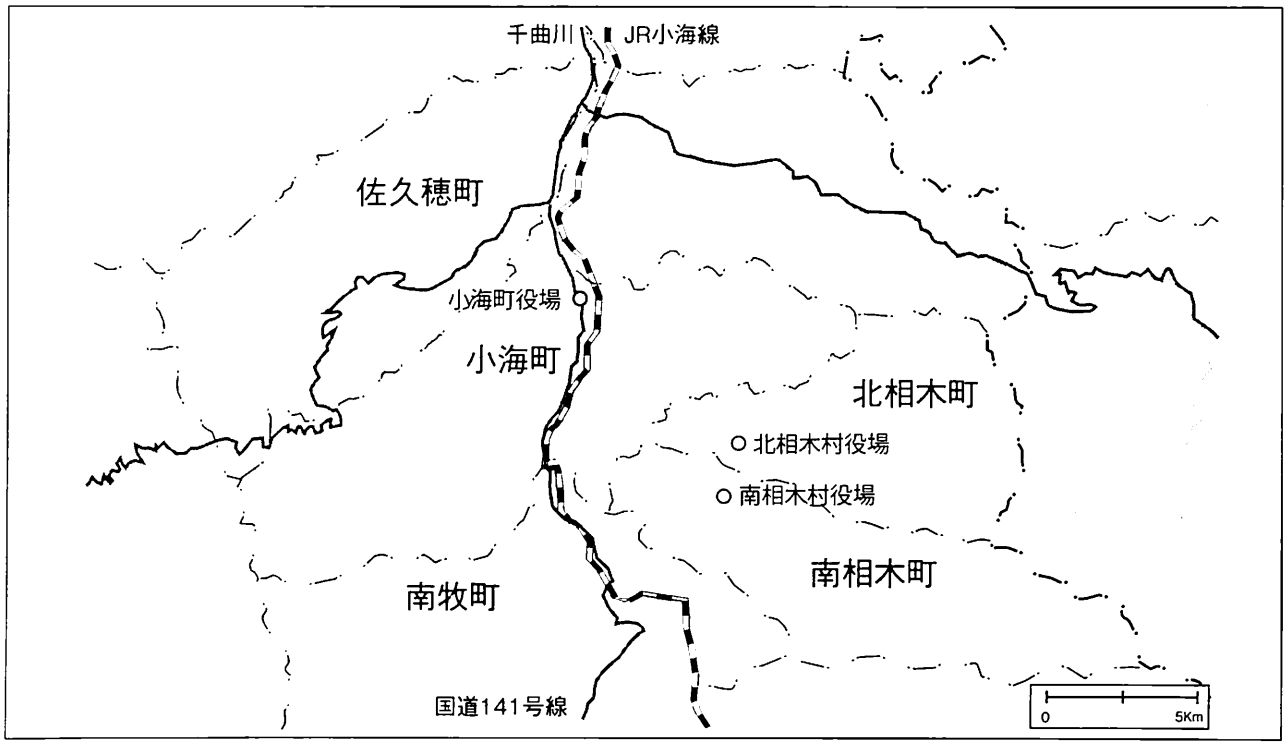
1. 本報告の目的 …… 77
2. 誉めることと叱ることの前提 …… 77
3. 親から誉められること・叱られること …… 78
4. 地域住民から誉められること・叱られることと子どもの生活と意識 …… 82
5. おわりに …… 85

9. 資料

調査票　～　生徒票・保護者票　～ …… 89
地域評価　良い点，不満に感じる点　総合評価の生徒と保護者の比較 …… 99
「小海中学校保護者懇談会」要約 …… 103
「小海町地域住民組織・教育懇談会」要約 …… 109

長野県全図と小海中学校区の位置





はじめに

～小海中学校区への提言～

放送大学准教授，学術フロンティア推進事業外部研究員
岡崎 友典

この『中山間地における地域社会の変容と子どもの生活　～長野県･組合立小海中学校区における調査から～』の研究のねらいは，地域社会における子育ての実態を明らかにするとともに，生涯学習まちづくりの観点から子どもの育成活動を活性化するための提案を行うことにある。

地域社会の教育力が問われるなかで，家族の子育てや地域の育成活動のありかたと子どもの地域体験・地域意識との関係に焦点を合わせ，この調査では，家族意識・地域意識・職業意識・将来への意識・規範意識，近隣との付き合い関係等の調査項目を通じて，親と子の間の意識と行動を捉えようとする。中山間地における子どもの教育環境の分析により地域社会の教育課題を探る手がかりを得るものである。生涯教育・学習により新たな「まちづくり」によって，地域社会の活性化をもたらすには，各自治体の生活を詳細に分析し，そこに内在する課題を明らかにする必要があるからである。

このような課題意識をもって，7名の研究者で2006年度から3年間にわたり，長野県南佐久郡の組合立小海中学校区において調査票調査を実施すると共に，聞き取り調査を数次にわたって繰り返してきた。

そこでまずはじめに，各章の研究報告をもとに，小海中学校区への提言を簡単にまとめておこう。

(1) 住民が本音で情報交流する「居場所」「たまり場」を

保護者の自由記述から浮かび上がってきた1つの点は，児童・生徒数の減少に対応して，学校教育と社会教育が連携した「子どもの育成活動」の展開が必要であり，とくに住民が本音で情報交流できる機会や場を行政として作るべきだということである。「もっと子どもの声を聞ける場所やセミナーのようなものがあると，それぞれの家庭で何を考え，何に悩み，何を望んでいるかが親同士で情報交換ができ，お互いの解決の糸口がみつかるように思います」といった形で，住民が本音で情報交流する機会・場を求めているのである。それは，大人にとっての「居場所」「たまり場」のようなものかもしれない。

(2) 子どもも地域社会の一員として，保護者と共により重層的な「地域社会」参画を

保護者は「ボランティア活動」については，今後の参加希望としてはもっとも高い20.9%を示している。このことは，特に大人の地域参加希望，そして何よりもその「自発性」という観点からも，今後の地域づくりに参加しうる可能性を指摘しておきたい。

子どもたちの「地域イベント」等についての参加率は高いが，逆にそれ以外の特に地域活動についての参加率は低い。確かに楽しい遊びを中心とした活動には子どもたちの参加が期待できるとは思うのだが，それは必ずしも，地域社会における子どもの学びに結びついていないと言うこともできる。

子どもたちは，遊びの要素が強いものや楽しい行事にのみ参加していれば良いのだろうか。彼らを「子ども」としてではなく，地域社会の一員として，より重層的，多層的に「地域社会」に関われるような受け皿を構築することも求められよう。親と同様，子どもも私的（プライベート）にのみ地域に関わっているということができないだろうか。

(3) 農村・農業体験の意義や「自然の豊かさ」の生活に根ざした意義の見直しを

農村・農業体験の意義を自覚的に認識しなければならない。「その場所でしか体験することができない身体性の問題として評価するとき，農業や農村を起点とする新しい価値が生まれてくるように思う」というように，単純な農村・農業賛美とそれに基づく教育実践ではなく，地域住民の身体に定着した身体性を踏まえての教育実践の方法を見出していくことが肝要となる。そのなかで，「自然が豊か」であるということの意味を，保護者や生徒がアンビヴァレンツな地域社会観を踏まえて，再度自然との関わりをとらえ返すことで小海町の「よさ」の再発見へとつなげることができるだろう。

(4) 住民の地域学習活動による子育て地域課題の解決を

保護者へのヒアリングでは，自然環境が良い点としてあげられているにもかかわらず，実際の子どもたちの遊

びは屋内で（テレビ）ゲームということが多いという。また自然が豊かである反面として「危険性」が指摘されていた。事例では，自転車と交通事故という観点から触れられている。とくに危険性の問題と責任の問題がセットになったとき，子どもたちの経験の幅を狭めるような管理的，保護的なまなざしが主流となりやすい。それらは子どもの経験の幅を抑制するように作用しないだろうか。

また，ヒアリングのなかで語られた「つくってあげた自然体験」ということばで表現されるような経験は，果たして「生きていく力」（つまり「生きる力」）につながるのだろうか。ヒアリングでは，この地域の不便さが，地域の衰退の要因として語られ，そのことが地域を支えていく子どもたちの育成につながらない現状が示された。

このような二律背反的で，また不利な地域条件のなかで，どのようにしたら子育てしやすく，生きる力を育てられる町づくりができるのか，住民自身の学習活動を通じて「民学官」が連携した町づくりが要請されているのではないだろうか。

(5) 保護者の地域への関心と関わりの深さが子どもの地域への親近感の形成につながる

中山間地の子どもの地域定着に関して，中山間地の子どもが成長して地元地域に定着するか否か，あるいは都市部へ転出した後に地元地域にＵターンして定着するか否かという「地域定着」の可能性は，親子の関係性に大きく影響される。とくに，子どもの「地域に対する親近感」が，子どもの将来の認知レベルにおける「地域への愛着」「故郷への郷愁」「地域での良き想い出」などを経由して，子どもの将来の行動レベルの「地元定住」「地元回帰」「近在に就職」「親との同居・近居」という行動を生起させるというモデルの妥当性が検証できた。

(6) 道徳性の発達と地域社会

地域社会での大人との交流が，子どもの道徳性の発達につながるので，道徳教育の場として地域社会を設定することは基本的に正しい。今回の調査では，道徳教育の場として重要である地域社会での人間関係が，携帯電話の使用によってより強められる，と考えられた。携帯電話の中学生の使用については警戒する声も強いし，また実際に多機能な携帯電話はさまざまな闇の世界への窓口にもなり得るが，地域社会を何らかの形で，「再設計」「創造」する必要があり，その手段がネット上での人のつながりではないか。

道徳教育の場としての地域社会は，住民運動のような個人が自発的に集合して作るものではなく，町内会・自治会などの伝統的な地域組織をベースとして作ることが現実的であると述べた。伝統的な地域組織，自発的な団体・サークル活動，保護者を中心としたグループ，そしてネット上でつながる地域の人々すべて，地域社会での人間関係を作っていると言ってよい。子どもの道徳教育において，地域社会が一つの実践の場所であることをしっかりとおさえ，様々な形をとる地域社会での人と人とのつながりを認識し，よりよい地域社会を作り上げていくことが，これからの道徳教育において，不可欠である。

(7) 農山村における社会・自然体験は地域住民が学び，文化を伝えることによって

「㈱育てる会」の北相木山村留学センターの特徴は次の３点である。①家事を自分達でする，②自然の中で暮らす，③家族以外の人との深い絆を結ぶ。その土台は「擬似的な家族・親子関係」」にあるといえよう。子どもはただ単に自然に触れ，山村に居留するだけではない。自然といかに関わるかを地域住民や同輩から学び，生活文化を住民から身をもって示され肌で感じる。家族以外の他者と結ぶ濃密な人間関係があってはじめて，「自然」に触れることも「農山村」を体験することも，子どもの人間形成に深い影響を与えるものになり得る。テレビがなくても全く退屈しない生活を送ることができる。しかし，そのような体験を子ども達に提供するには，地域住民自身が，自分たちの生活文化の意味を深くとらえ返す学習活動が基本となるであろう。

(8) 親や地域住民がともに活動に参画しながら子どもを誉めてそだてよう

小海中学校生徒は，地域の大人との関わりが深い。子どもたちにとって地域の大人は尊敬の対象となり，困ったときに相談する相手となる。さらに，地域の大人と関わる経験とつきあいの深さは，子どもたちの人間関係や社会性の基盤ともなるのである。親とは異なった視点から子どもたちを誉め，子どもたちの社会生活のモデルとなることに，地域の大人との関わりの意義があろう。

子どもの個性や意志を尊重しようとすることと，生活の規律と社会的な規範を伝えることは，必ずしも対立することではない。「枠の中の自由」という言葉があるように，野放図に振る舞うことが自由ではなく，意味や目的のはっきりとした規範と規律の中で，子どもたちは大人から誉められることをとおして育っていく。「愛情の反対語は憎しみではなく，無関心である」とは，ヒアリングのなかで住民の方が口にした言葉である。子どもに関わりを持とうとしないのは，愛情の乏しさの現れかも

しれない。

子どもを育てる町づくりのきっかけとして，まず子どもを誉めようという運動を起こし条例化している事例もある。流動的で不安定な時代に，自信に満ちた「大人らしい」姿を子どもに見せて接することはむずかしい。また，やたらと管理的・干渉的に関われば逆効果となる。大人たちが大人の文化や価値を創り，共有し享受するなかで，社会生活には魅力と意義があり，人と関わることは楽しいことであるという姿を子どもに示し，誘っていく力を増すことが大切であろう。子どもたちは大人の本当の姿を見透かして，さまざまなメッセージを大人の姿から読み取っていく。まちづくりに本気で悩み，取り組む大人の姿に触れ，関わることは，子どもたちにとって重要なモデルとなり生きる手がかりとなるだろう。

以上，検討してきた諸課題を踏まえて提案するとすれば，経済産業省が平成17年度まで事業化していた「地域プラットフォーム」を，小海町を中心に小海中学校区で創設したらいかがであろうか。「地域プラットフォーム」は地域資源を活用した新事業創出のために平成11年に施行された「新事業創出促進法」に基づき提唱された構想で，東京都ではこれを敷衍して「地域教育プラットフォーム」とし，平成17年度から具体化に取り組んでいる[1]。

「地域教育プラットフォーム」とは，一定の地域において，学校・家庭・地域が協働し，子どもの育成・教育活動に取り組んでいくための共通の土台を整え，多様な担い手の参加の下に，地域の教育力を再構築していくためのしくみづくりを目指すものである。

とくに小海中学校区が，「子育てしやすい町づくり」「高齢者にやさしい町づくり」「自然の豊かさ」「伝統文化」などを鍵として地域の発展を展望するためには，地域課題を確認・検証し，地域資源（地域のよさ）を再発見・再評価し，さらに諸機関と地域住民のネットワークを構築して地域課題に対応してゆく力（地域力）を育成する取り組みが不可欠である。大都市圏ではなく中山間地である小海中学校区だからこそ，地域・家庭・学校が協働して子どもの育成と教育活動に取り組むことをはじめとして，三町村の諸機関と地域住民の力を実質的に結びあわせることが必要である。このネットワークを生み出すコーディネーターを育成するために，地域住民の学習活動をぜひ促進していただきたい。地域学習活動を核として，企業・大学・ＮＰＯ・福祉医療機関等，専門的教育力を有する社会資源と連携しながら，教育をコーディネートする機能をもった「地域教育プラットフォーム」を実質的に形成することによって，地域の課題にこたえ，新たな事業を創出し，地域を活性化することが可能になるのではないだろうか[2]。

なお，本研究は，下記のとおり，学会紀要論文２編と，３回の学会発表により，研究成果を公表してきたものである。

- 夏秋英房・岡崎友典（2007）「中山間地における地域社会と中学生との関わり ――長野県Ｋ中学校生と地域の大人との関係に焦点をあてて――」『聖徳大学生涯学習研究所紀要　生涯学習研究』第５号，37～42頁．
- 岩瀬章良（2007）「子育てに対する親の関心と子の育ち方の関係に関する一考察 ――調査票回答親群と無回答親群の子どもたちの家族と地域社会に関する認知の違いを手がかりに――」『国際幼児教育研究』14，45-52頁．
- 「中山間地における地域社会と家族と教育に対する意識－長野県Ｋ中学校親子調査の結果から－」平成18年９月，日本教育社会学会第58回大会（大阪教育大学）
- 「中山間地における地域社会の変容と子どもの生活」平成19年７月，日本子ども社会学会　第14回大会（昭和女子大学）
- 「中山間地における地域社会と家族と教育に対する意識Ⅱ～長野県Ｋ中学校区調査の結果から～」平成19年９月，日本教育社会学会第59回大会（茨城大学）

【注釈】

(1) 東京都生涯学習審議会，平成18年11月建議「東京都におけるこれからの地域教育の具体的方策について～子どもたちによりよい教育環境を提供するために～」。

(2) 岡崎友典，高島秀樹，夏秋英房（2008）『地域教育の創造と展開～地域教育社会学～』放送大学教育振興会なども参照していただきたい。

1．調査の概要と小海中学校区の特性および教育課題

放送大学准教授，学術フロンティア推進事業外部研究員
岡崎 友典

1．研究調査の目的と小海中学校区の概略と特性

(1) 調査の目的と概要

現在の日本は少子化と高齢化が進行するなかで，活力ある社会をいかに創造していくことができるか，その道筋を模索している状況にある。聖徳大学では，「学術フロンティア推進事業」として「少子・高齢社会の活性化に関する生涯学習の研究」を展開してきた。その第2部門のテーマは「少子社会における青少年の健全育成」でありこの研究の一環として，「家族の子育てや地域の育成活動のあり方と子どもの地域体験・地域意識との関係」に焦点をあてて，調査研究を進めてきた。

この研究のねらいは，地域社会における子育ての実態を明らかにするとともに，生涯学習まちづくりの観点から子どもの育成活動を活性化するプログラムの提案を行うことにある。そのためには地域住民の日常生活場面に具体的な事例を詳細に分析することが重要である。本報告ではその事例として，中山間地のモデルとして長野県南佐久郡を取りあげることにした。

とくに中山間地を対象としたのは，「地域社会の変容・再編」といった。現代日本の今日的課題を象徴的に表していると考えたからである。1960年代の高度経済成長期における全国規模での急激な人口の分布変動は，大都市地域の過密と農山村地域における過疎といった社会問題，つまり人々の日常生活場面としての地域社会での共同生活を困難にさせる状況は，さまざまな病理的な現象を生みだしてきた。

これまで大都市地域で顕著だった青少年の病理，非行や犯罪が，近年は大都市周辺地域から地方の農山村へと拡散している。これは情報社会の進展といった社会現象が，地域住民の生活様式を変容させてきたからに他ならない。住民の地域社会との結びつき，とくに人と人との直接的な関係が希薄化することによって，子どもだけでなく大人についても，人間としての成長発達を保障できなくなっているのではなかろうか。「少子社会における青少年の健全育成」といった課題を連関させて捉えるためには，この中山間地で生活する人々の現状を「都市と農村」，「中央と地方」を対比する形で分析することが有効であるとの仮説に基づく。

地域社会の教育力が問われるなかで，家族の子育てや地域の育成活動のありかたと子どもの地域体験・地域意識との関係に焦点を合わせ，この調査では，家族意識・地域意識・職業意識・将来への意識・規範意識，近隣との付き合い・人間関係等の調査項目を通じて，親と子の間の意識と行動を捉えることにより，中山間地における子どもの教育環境を分析し，地域社会の教育課題を探る手がかりを得るものである。今回は中山間地の事例として，長野県南佐久郡の組合立小海中学校区で調査を行った。

(2) 調査地の地域特性

1-2-1. 中学校区の概要

長野県南佐久郡の小海町，北相木村，南相木村の三町村が学校組合を設立して組合立小海中学校の運営にあたっている。この地域は，一般には「佐久地方」と呼ばれているが，長野県（人口約220万人）の行政区域（東信地区の一部）の「佐久広域連合（人口約22万人）」（小諸市，佐久市，南・北佐久郡の2市5町4村で構成）に含まれている。日本有数の河川，千曲川の中・上流域に位置している（巻頭地図参照）。小海町，北相木村，南相木村の三町村の人口等のデータは表1－1のとおりである。

中学校の位置する小海町の人口は約5,600人，高齢化率は32.6%（2006（平成18）年9月1日）である。産業別就業人口（2000年国調）は，第一次23.0%，第二次29.4%，第三次47.6%である。1955年に旧北牧村と小海町の合併時には約9700人の人口が急激に減少しているとはいえ，世帯数は約1,900で世帯分離は少なく一定している。1970年代には周辺地区の農業集落の町の中心部への移転（「集落移転」）も行われている。高原野菜の産地であるが，第三次産業就業比が5割近

くを占めており，JR の小海駅のある町の中心部には商業機能が集積している。

千曲川の最上流部の川上村，南牧村そして南・北相木村といった埼玉県と山梨県の県境に接する四つの村を「後背地」にもつといった地域特性から，農山村とはいえ生活圏域中心の「小都市」ということができる。

小海町は標高 850 メートルから 1,200 メートルの山間地帯に 23 の集落が点在している。1956 年に川を挟んだ同規模の二つの村が合併(1957 年「町村合併促進法」の指定により町政を施行）して半世紀。一時期，人口がおよそ 1 万人になったが，1960 年代の高度経済成長期に急激な人口の減少をきたしている。しかしながら，現在の人口は第一回国勢調査時（1920 年）とはほぼ同じである。世帯数の増大は，1970 年代に核家族世帯化が進行したことによる。もちろん町中心の商業地区への他町村からの流入もみられる。産業構成を考え合わせるならば，この地域の人口扶養能力（キャパシティー）は，6,000 人程度とみることもできる。つまり，集落単位では過疎化が進行し町の中心部への集落移転が行われた所もあるが，町全体としては過疎とはいえず，土地との結びついた産業構造と生活様式を維持している。

ただし，集落ごとに見るならば，限界集落（65 歳以上人口比 50% 以上 高齢化が進み，共同体の機能維持が限界に達している状態)に近づいていることも否めない。南相木村，北相木村では，村全体について限界自治体に近づきつつあり，政策課題としてその対応が迫られている。

2. 中学生と保護者調査の概要

(1) 調査の対象

子どもの育つ環境としての家族，学校，地域社会の現状を，子どもそして保護者（親）がどのように受け止めているか，そしてそこにどのような教育上の課題がみられるかについて，中学生とその保護者を対象に「調査票調査」を実施した。すでに述べたように中山間地を対象としたのは，いわゆる子どもをめぐる問題・病理がこれまで大都市地域(中央)で多く生起してきたのだが，近年，これが地方・農山村部まで拡散してきているからである。農山村との境界としての中山間地といった地域類型が，地域社会分析の上で，成り立つかどうか。本研究は急激に変動する現代日本の地域社会の教育環境の整備・改善について，実践上の課題を提起することをも目指している。

(2) 調査の方法と調査項目

調査は 2006 年 6 月 13 日に学校経由で実施。生徒（2 年 5 クラス，3 年 3 クラス，計 149 名）は学級活動の時間に，校内放送で全体の説明（調査のお願い）を行った後，調査マニュアルに沿って学級担任と調査者が同席する形で実施した。保護者は生徒に調査票を自宅に持ち帰ってもらい，記入後の調査票は大学宛に郵送してもらった。回収数は 86（男 13 人，女 73 人　回収率 57.7%）である。調査項目は，家族の構造と意識，地域の社会関係と地域イメージ，子どもの進路と職業観，規範意識などで，これを日常生活場面での人間関係・コミュニケーションの実態，また地域活動への参加状況に即して分析した。

なお，調査票の作成にあたっては，個人のプライバシーに立ち入る項目が多いこともあり，学校，教育行政担当者と綿密な打ち合わせを行い，また教職員，保護者の意見を聴取しこれを反映させた。以下，本報告書の各論稿で基本資料として使用する「調査票調査」の対象者の属

表１－１　小海町、北相木村、南相木村の概要

	人口（人）	世帯数	年少人口比（%）	老齢人口比（%）	就業人口（人）			可住地面積率（%）
					第１次	第２次	第３次	
小海町	5,663	1,921	12.8	33.2	709	720	1,480	19.0
南相木村	1,151	426	14.1	39.4	239	98	244	13.4
北相木村	942	355	13.5	38.9	166	98	190	9.9

※　人口、総世帯数、就業人口は、総務省統計局「平成 17 年国勢調査」。

性についてその概要を示した。

(3) 生徒の属性

男女比はほぼ同じ，部活動への加入は男9割，女8割で男がやや高くなっている。学年による差は少ない(表1－2)。

(4) 保護者の属性

2-4-1. 世帯主の職業 本人の出身地 と 居住年数

世帯主の職業は，公務員・団体職員30%，民間企業勤務40%，商工自営業18%，農業･林業10%である（図1－1)。

出身地（中学校卒業までに一番長く過ごしたところ）は，地元58%，エリア内19%，県内9%，県外14%である（図1－2)。居住年数は，10年未満8%，10年～19年37%，20年～29年18%，30年～39年19%，40年以上18%である（図1－3)。

これを男女別にみると地元町村出身は男性9割，女性5割で，女性の出身地は多様である。これを反映して居住年数にも差が認められる（表1－3)。

さらに表1－4にみるように，現住地に居住した理由として「結婚」と回答する女性＝母親が45人(62.5%)と多く，婚姻によって現住地に移住したのであるが，日常生活圏域内の佐久地方からが約2割，長野県内が約1割であり，8割以上が長野県出身者ということになる。なお「県外」が17%を占めているが，このなかには地元出身のU・Jターン者との婚姻に伴う移住者が含まれているのではないか。

図1－1　世帯主の職業

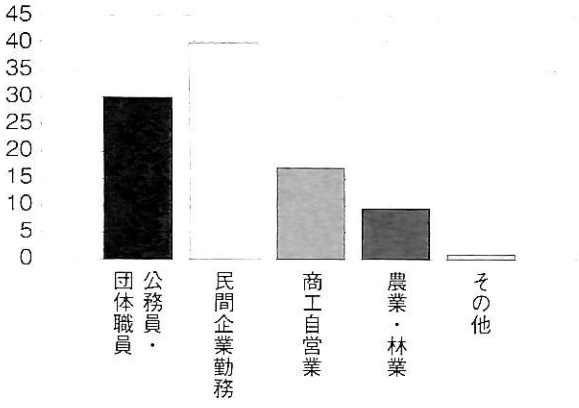


図1－2
出身地（中学校卒業までに一番長く過ごしたところ）

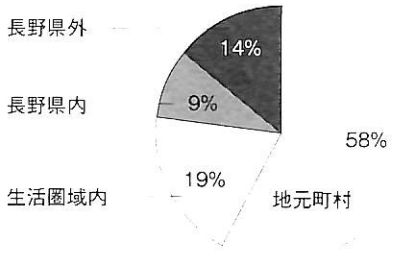


図1－3　居住年数

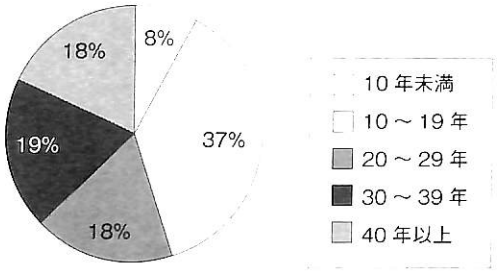


表1－2　子ども性別と部活動の有無

			部活動の有無		合計
			はい	いいえ	
子ども性別	男	度数	67	6	73
		%	91.8	8.2	100.0
	女	度数	62	14	76
		%	81.6	18.4	100.0
合計		度数	129	20	149
		%	86.6	13.4	100.0

表1－3　保護者の性別と出身地

			出身地				合計
			小海町・北相木村・南相木村	上記以外の佐久地方	佐久地方以外の長野県	長野県以外	
親性別	男	度数	12	1	0	0	13
		%	92.3	7.7	0.0	0.0	100.0
	女	度数	37	15	8	12	72
		%	51.4	20.8	11.1	16.7	100.0
合計		度数	49	16	8	12	85
		%	57.6	18.8	9.4	14.1	100.0

表1－4　保護者の性別と居住理由

			居住理由：結婚	合計
			はい	
親性別	男	度数	2	2
		%	100.0	100.0
	女	度数	43	43
		%	100.0	100.0
合計		度数	45	45
		%	100.0	100.0

2-4-2. 保護者の性別・年齢と世帯類型

保護者の性別・年齢と世帯類型を表１－５と表１－６に示した。

年齢では，40歳未満は男女とも２割に満たないが50代が男性で４割を示すのが特徴的である。人数は少ないが年齢の高い男性が今回の調査に多く回答してくれている。世帯類型で男性の方が３世代，４世代以上が多いこととの間に何らかの関係があるのだろうか。２世代＝核家族世帯よりも拡大家族世帯の方が年齢の高い男性（祖父ではなく父親）が子どもの教育に高い関心をもっているか，あるいは拡大家族の方が女性＝母親が忙しいため父親に回答作業を依頼したためなのか，世帯規模は家族における子育ての関係性を考えるうえでの手掛かりの一つでもある。

2-4-3. 保護者の居住年数

居住年数は15年以上が８割，生徒の年齢にあたる15年未満が２割で，性別により，年数にかなりの差が認められる（表１－７，表１－８）。すでに述べたように女性＝母親の場合は婚姻によって現住地に移住しているからである。とくに10年未満の約１割（７人）については，子どもが生まれてから現住地に移住したことになる。いずれにしても年代と居住年数は高い相関をみせている。

2-4-4. 保護者の移住体験と居住地

保護者が現住地以外での地域生活体験をもつか否かを，「移住体験」として示したのが表１－９，表１－10である。男性の場合は現住地出身者が多いのだが，これまでに他地域での生活体験を８割近くがもっている。年代では40歳代の保護者の方が，40歳未満と50歳以上の保護者よりも移住体験が多くなっている。地域社会の雇用・就業の機会が時代によって異なっているからなのだろうか。表１－11は最も長く過ごした移住地（居住地）を示したものだが，移住経験者44名中35名が「長野県外」であり，次いで「佐久地方」が18人で「佐久地方以外の長野県内」は７人と少なくなっている。進学・就職のいずれであれ現住地以外，とくに県外での生活体験をもつ保護者が全回答者の半数近くを占めていることが，子どもの教育・養育とどのように関わってくるか，「移住と定住」といった視点から，以下の論稿で検討したい。なお，回答者の自由記述による「地域観」については次節および資料を参照されたい。

表１－５　親の性別と年代

			出身地				合計
			～39	40～44	45～49	50～	
親性別	男	度数	2	4	2	5	13
		%	15.4	30.8	15.4	38.5	100.0
	女	度数	13	33	19	8	73
		%	17.8	45.2	26.0	11.0	100.0
合計		度数	15	37	21	13	86
		%	17.4	43.0	24.4	15.1	100.0

表１－６　保護者の性別と世帯類型

			世帯類型			合計
			２世代家	３世代家	４世代家 世代以外の	
親性別	男	度数	4	7	1	1
		%	33.3	58.0	8.3	100.0
	女	度数	3	3	2	7
		%	47.9	49.0	2.8	100.0
合計		度数	3	4	3	8
		%	45.8	50.0	3.6	100.0

表１－７　保護者の性別と居住年数

			居住年数						合計
			～9	～14	～19	～29	～39	40～	
親性別	男	度数	2	2	2	0	2	5	13
		%	15.4	15.4	15.4	0.0	15.4	38.5	100.0
	女	度数	5	8	19	16	11	12	71
		%	7.0	11.3	26.8	22.5	15.5	16.9	100.0
合計		度数	7	10	21	16	13	17	84
		%	8.3	11.9	25.0	19.0	15.5	20.2	100.0

表１－８　保護者の年代と居住年数

			居住年数						合計
			～9	～14	～19	～29	～39	40～	
親年齢カテゴリー化	～39	度数	4	2	3	0	6	0	15
		%	26.7	13.3	20.0	0.0	40.0	0.0	100.0
	40～44	度数	2	7	11	2	3	11	36
		%	5.6	19.4	30.6	5.6	8.3	30.6	100.0
	45～49	度数	1	1	3	10	3	3	21
		%	4.8	4.8	14.3	47.6	14.3	14.3	100.0
	50～	度数	0	0	4	4	1	3	12
		%	0.0	0.0	33.3	33.3	8.3	25.0	100.0
合計		度数	7	10	21	16	13	17	84
		%	8.3	11.9	25.0	19.0	15.5	20.2	100.0

表１－９　保護者の性別と移住体験

		移住経験		合計
		ある	ない	
親性別 男	度数	10	3	13
	%	76.9	23.1	100.0
親性別 女	度数	56	14	70
	%	80.0	20.0	100.0
合計	度数	66	17	83
	%	79.5	20.5	100.0

表１－10　保護者の年代と移住体験

		移住経験		合計
		ある	ない	
親年齢カテゴリー化 ～39	度数	10	5	15
	%	66.7	33.3	100.0
親年齢カテゴリー化 40～44	度数	30	7	37
	%	81.1	18.9	100.0
親年齢カテゴリー化 45～49	度数	18	2	20
	%	90.0	10.0	100.0
親年齢カテゴリー化 50～	度数	8	3	11
	%	72.7	27.3	100.0
合計	度数	66	17	83
	%	79.5	20.5	100.0

表１－11　保護者の年代と最長居住地

		最長居住				合計
		佐久地方	佐久地方以外の長野県	長野県以外	99	
親年齢カテゴリー化 ～39	度数	4	1	3	1	9
	%	44.4	11.1	33.3	11.1	100.0
親年齢カテゴリー化 40～44	度数	7	4	16	2	29
	%	24.1	13.8	55.2	6.9	100.0
親年齢カテゴリー化 45～49	度数	3	2	12	1	18
	%	16.7	11.1	66.7	5.6	100.0
親年齢カテゴリー化 50～	度数	4	0	4	0	8
	%	50.0	0.0	50.0	0.0	100.0
合計	度数	18	7	35	4	64
	%	28.1	10.9	54.7	6.3	100.0

3．地域社会の変容にともなう教育課題
～自由記述を手がかりとして～

(1) 地域社会における生活実態の多様性

本調査では，中山間地の地域社会の変容と子どもたちの教育環境について，組合立小海中学校区の調査をとおして検討した。これからの各章・報告で明らかなように，中山間地とはいえ，子どもたちのそして大人たちの生活行動や意識の基本的な部分は現代日本全体に共通している。高度に発達した情報社会としての日本において，このことは当然のことなのかもしれない。

しかしながらその詳細に立ち入ってみると，地域社会の社会的・自然的条件に規定された特性を読み取ることができる。「少子社会における青少年の健全育成の課題」を検討するに際して，今回あえて平準化・均質化したといわれる現代日本社会を「都市と農村」，「中央と地方」を対比する形で分析することが有効であるとの仮説に基づき中山間地を事例に取り上げたのは，この「特性」を導き出すためである。

小海中学校の通学区の小海町，北相木村，南相木村は，3町村合わせても8,000人に満たないが，同じ通学区でも集落によって住民の意識・行動に違いがみられることは，同じ日本人であっても様々な生活様式，生き方があるのであって，これを定型的・画一的にとらえられないことを示している。自然環境についても家族環境についても，そこで生活する住民の生活史によって大きく異なることを今回の調査は教えてくれる。明治期中期，昭和中期以来の平成の大規模町村合併が進行するなかで，各市町村行政は財政だけでなく住民の生活実態に対応する施策をどのような形で展開していくべきか。住民のニーズに即しての行政は簡単なことではない。新たな「まちづくり＝地域社会の活性化」を生涯教育・学習によって可能にするためには，各自治体が住民の生活実態を詳細に分析し，そこの内在する課題を明らかにすることが何よりも重要なのである。

1960年代の高度経済成長期以降，3町村の人口は急激に減少しているが，このような現象は全国各地で生起してきたのだが，問題は人口の減少そのものではなく，このわずか半世紀の間にわが国の地域社会の構造が大きく変化してした点である。農業を中心とした社会から，高度に発達した産業社会への転換は，「都市化」といった人口の全国規模での大移動をもたらした。大都市の過密と地方の農山村の過疎が社会問題化するなかで学校の

新設・統廃合が行われ，学校の立地する地域は「子どもの居場所」としての「教育機能」を失い始めていたのである。

(2) 地域社会の人間関係の重要性

地域社会と教育の関係を考えることは，教育という営みつまり人間の成長発達（人間の社会化＝ソーシャリゼイション（Socialization）が，地域社会のどの部分（組織）と，またどのような働き（機能）とかかわっているかを明らかにすることである。地域社会では家族，学校，職場といったさまざまな集団のなかで人間の社会化が行われている。このような地域社会に成立する集団は互いに重なりあい，密接な関係をもって存在している。しかし教育の営みが展開する場面としての地域社会は，そこに成立する他の教育にかかわる諸集団をそのなかに包括するといった特異な性格をもっている。この点を今回の小海中学校区の調査によって明らかにしようと試みたのである。

そこで以下，子どもだけでなく大人にとっても，地域社会の人間形成機能の重要性について，保護者の調査票への「自由記述」のなかから，その手がかりを探ってみた。

表１－12は「親の出身地・移住体験と地域比較＆総合的な要望と意見」を示したものである（ゴチック表記が本文への引用部分）。どこで生まれどこで育ちどのような仕事をし，どのような家族を体験・形成してきたか。一人ひとりの生活史（ライフヒストリー）によって，意識と行動はおのずから異なる。出身地や移住体験が，子育ての環境に対し異なった意識を生み出す可能性がある。

たとえば長野県外出身の女性（47歳）の，「子どもの数がどんどん減り同じ人間としか出会う機会が少ないというのが，子供の成長に関して一番心配なところです」といった意見に対し，大阪への移住体験後，Uターンした地元出身の男性（45歳）は「少人数学級は絶対に必要である」と主張している。

1970年代に組合立の中学校に３町村の学校が統合されたのは，生徒数の減少によって，二つの村が独自に中学校を維持できなくなったからではあるが，このことと一般によくいわれる「児童・生徒の数が少ないと競争心が育たない」といった教育観とは，どのような因果関係をもっていたのだろうか。

農山村部だけでなく都市部でも中心市街地の空洞化のなかで，学校の統廃合が進行しているだけに，学校規模・学級規模の問題と「子どもの育成活動の活性化」との関係をどのようにとらえてゆくかは今後の大きな課題である。子どもたちの健全育成を図ろうとするならば，学校教育と社会教育そして生涯学習とを結びつけて考える必要がある。この地域においても生涯学習課（公民館）の所管で，様々な子ども対象の事業（「子ども探検隊」や「子ども対象の地域行事」）が実施されているが，学社連携また生涯学習における世代間交流（子どもと大人）といった意味では，多くの困難を伴っている。特定の人々の個人的な努力に依存するところが大きいのである。もちろんこれはこの地域だけでなく，全国に共通することではあるが。

さらに子育て環境について具体的な保護者の意見をみると，地元出身で移住経験をもつ女性（41歳）は，「今住んでいるところでは誰もが親しい感じで，隣近所のつながりが濃い」としたうえで，「今の子供たちは忙しすぎて，自分の子供の頃のような気持ちのゆとりがないように思う。『ゆとり教育』というのは，どこをどうしたかったのだろうととてもわかりにくい。もっと違うゆとりのもたせ方を考えてほしい」と提言している。またエリア外の長野県内出身の女性（38歳）は，前住地と比較して現住地の良さとして「人の優しさ」をあげ，子育てについて「個人差が一番出る時期だと思います。親もそうですが，もっと子どもの声を聞ける場所やセミナーのようなものがあると，それぞれの家庭で何を考え，何に悩み，何を望んでいるかが親同士で情報交換ができ，お互いの解決の糸口がみつかるように思います」といった形で，住民が本音で交流する機会・場をつくることの重要性を指摘しているが，これはまさに生涯教育・学習行政の果たす役割の一つであるといえる。

地域の人間関係については長野県外出身の女性（40歳）が，「よそ者と言われる所」を現住地の特徴として指摘している。一方，エリア外の長野県内出身の女性（41歳）は，「以前に住んでいた所は都市部だったので，色々と便利だった。歩いて街の中心部に行けたが，今は車がないと用が足せない。でも，人との付き合いは今の方が親密にできると思う。また，付き合わなければ生活ができない環境でもある」といった微妙な表現と重ね合わせて考えると，人間関係の親密さは優しさにつながることもあれば，逆に冷酷な関係を生み出す可能性を秘めているのである。都市の開放性＝自由と農山村の閉鎖性＝不自由といった形で，このようなアンビバレントな関係をとらえることもできるが，地域社会の共同性といった側面に着目するならば，都市と農山村といった二分法では捉えきれないのである。この点について全国規模の調査結果を参考に，家庭と地域社会の教育について考えてみ

たい。

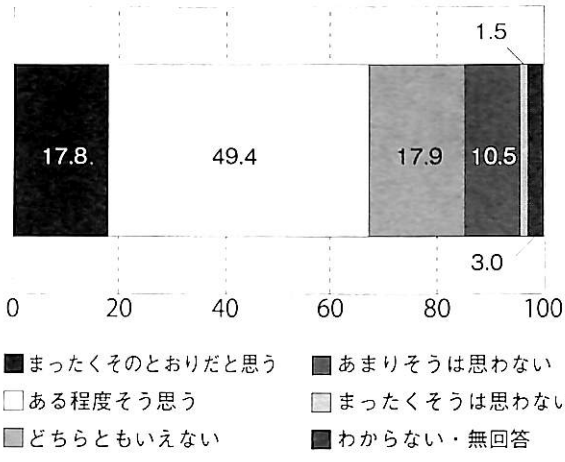
(3) 家庭と地域社会の教育力の低下

文部科学省の「文部科学白書（平成17年度版）」は家庭教育の現状とその支援上の課題」のなかで地域の教育力について興味深い指摘を行っている（第1部第2章第1節）。「家庭教育は，すべての教育の出発点であり，子どもが基本的な生活習慣・生活能力，豊かな情操，他人に対する思いやりや善悪の判断などの基本的倫理観，自立心や自制心，社会的なマナーなどを身に付ける上で重要な役割を果たす」としたうえで，「しかしながら，近年の都市化，核家族化，少子化，地域における地縁的なつながりの希薄化など，家庭や家族を取り巻く社会状況の変化の中で，家庭の教育力の低下が指摘されています」と述べ，その資料として，国立教育政策研究所の「家庭教育の低下について」，「子どもと同居する親」を対象とした意識調査結果を紹介している（図1－4）。

およそ8割の親が低下していると応えているが，その理由を白書は「かつて日本では3世代同居型の家庭が多く，親以外に多くの大人が子どもに接し，それらが全体として家庭教育を担っていました。地域の人々とのつながりも今より密接で，人々が子どもたちを『地域の子ども』として見守り，育てていました。そして，子どもたちも地域の年の違う子どもと接したり，幼い子どもの世話をしたりした経験を持つなど，子育てを支える仕組みや環境がありました」といった形で，地域と家族の変化を指摘しているのである。そして，地域の教育力について同白書は，文部科学省が実施した小・中学生の保護者対象の「地域の教育力に関する実態調査」をもとに，保護者のおよそ6割が「以前と比べて低下している」と回答している点について「地域の教育力の低下について認識が高い」と説明している。いずれの調査も子どもをもつ親あるいは保護者が「子どもの教育環境」が昔に比べて悪化していると指摘している（図1－5）。

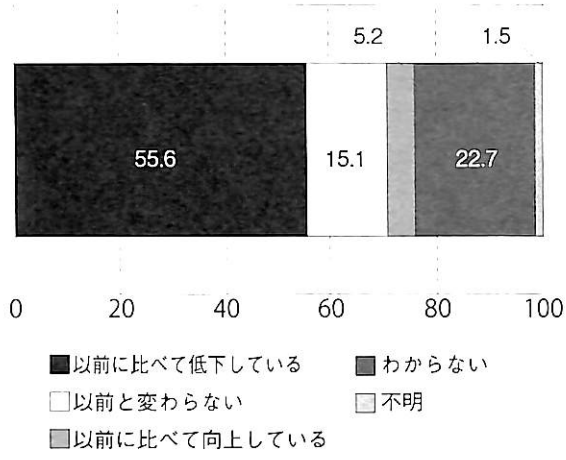
それではどのようにして地域の教育力を取り戻せばいいのだろうか。近年教育界で「子どもの居場所」の重要性が指摘されているが，居場所の確保にあたっては「地域社会（地域コミュニティ）」を，保護者と学校が中心となって創造する以外に道はないと思うのだが。そこで次にこの居場所について，地域コミュニティといった視点から整理しておきたい。

図1－4　家庭の教育力の低下について（%）



（注）　調査対象は，子どもと同居する親のうち，25歳～54歳の男女
（資料）国立教育政策研究所「家庭教育研究会」「家庭の教育力再生に関する調査研究」（平成13年）

図1－5「地域の教育力」の状態について（%）



（注）　調査対象は，小・中学生の保護者
（資料）文部科学省「地域の教育力に関する実態調査」（平成17年度）

(4) 地域社会＝地域コミュニティの果たす役割

全国調査でも明らかなように，「居場所」の確保は，子どもだけでなく大人にとっても重要な今日課題である。家庭にも職場にも学校にもそして居住地にも居場所がない状況が，現代日本の様々な社会問題，社会病理を引き起こしているのではなかろうか。子どもたちだけでなく大人たちの「健全な育成」を図るためには，この「居場所」といった概念は極めて重要である。大人たちにとっては，「たまり場」といった方が適切かもしれない。地元の居酒屋や集会所に集う大人たちの交流は，家族をそして地域を守るために，さまざまな社会問題・病理の解

表 1-12　親の出身地・移動体験と地域比較＆総合的な要望と意見

性別	年齢	出身	移動経験	15歳以降の生活地との比較	地域への総合的な要望と意見
男性	53	現住地	あり	仕事を覚えるため。	
男性	45	現住地	あり	夏の暑さが大阪では我慢できない　生活の足が公共バス，電車と自家用車	少人数学級は絶対に必要である。
男性	45	現住地	あり		無駄なお金を使わずに，子ども達のためになるようなことに使って欲しい。
男性	44	現住地	あり		少子化が進んでいる現在では，子育て支援をより充実させてほしい。 町の人口が減少しているので，町内で仕事が出来る環境づくりに取り組んでもらい，子供の人口を増加させる取り組みをしてもらいたい。
男性	43	現住地	あり	商店が少ないこと。	治安が悪くなり，中学生（女子）の通学に不安を感じています。
男性	40	現住地	あり	生活の利便性。	アンケート結果，有効に活用して下さい。
女性	43	学区内	なし		生活をするのには，のんびりとした自然豊かな良い所であると思いますが，学校教育の中味が都市部に比べて薄いと思います（年々，ミリョクのある先生が減っている）。
女性	45	県外	あり	交通の便が良く，病院や交通整備が整っている。高校も多く，選べる。	
女性	45	現住地	あり	生活の必要な物が手に入りやすい。いろいろなタイプの人と友人になれた。多くの資格がとれた。必要な技術を学ぶ場が多くある。	なやむ子供たちや母親が意見やストレスの原因を話せるようなサークルがあれば少しづつでも心が安まるのですが，いじめをしている子供や母親たちのグループが強すぎてなかなか。今，私の家の一部を“ぶっちゃけ会”というお茶会に使っています。
女性	46	現住地	あり	すべてにおいて選択しながら生活できた。保育園も学校も決まった所ではなく選んで行けた。交通の便も良かった。	子どもの通学用にある町営バスなども時間の希望など出しても取り入れてもらえず，児童館も使いたい時に使えない（バスが無い為）。アンケートをとっていただいて，それが今後活用され改善されたら嬉しいのですが……。
女性	44	県外	あり		・「3km以内は徒歩」の廃止　・　スクールバスの導入　・外灯をふやし　明るい夜道　・犬・年配者の散歩などによる通学時間帯の人目の確保　・警察による通学時間のパトロール　・子どもの集まれる場所がある。
女性	43	現住地	あり	自然が無く，落ち着いて生活していけない。	過疎の地域なので，なるべく便のいいように協力して欲しいと思います。
女性	52	学区内	あり		
女性	48	県内	あり		
女性	49	県外	あり	両方とも交通の便が悪いところだったので特にありません。	今住んでいる地域には図書館がないので，読みたい本のある図書館が欲しいです。
女性	42	現住地	あり	交通の便も良く，買い物等にも便利だった。	
女性	41	現住地	あり	今住んでいる所では誰もが親しい感じで，隣近所のつながりが濃い。	今の子供たちは忙しすぎて，自分の子供の頃のような気持ちのゆとりがないように思う。「ゆとり教育」というのは，どこをどうしたかったのだろうととてもわかりにくい。もっと違うゆとりの持たせ方を考えてほしい。
女性	38	県内	あり	人の優しさ。	個人差が一番出る時期だと思います。親もそうですが，もっと子どもの声を聞ける場所やセミナーのようなものがあると，それぞれの家庭で何を考え，何に悩み，何を望んでいるかが親同士で情報交換ができ，お互いの解決の糸口がみつかあるように思います。
女性	40	県外	あり	日常生活をするうえで不便がない。以前の所は，道路・鉄道・空港・病院・スーパー・学校など，子どもも親も不便を感じなかった。その上，自然も近くにある（人工的なものではない）。今は，全てまず車で出かけなければ（30分～1時間）何もない・何もできない。自然は近くに	
女性	47	県外	あり	周囲に商業地域が少なく，役場等も離れている。交通手段が少ないので，免許がないと行動範囲が狭くなってしまう。何をやるにも不便さを感じる。	全国的に見て劣らないような教育レベル。保育園・小学校では身近に子供がいないので，否応なく友人関係が限られ合わせないと孤立してしまう。人数が少ないと家庭環境も見えてしまい，かえって注意できない面もあり，先生には悪いことをしたらしっかり叱れるご指導をお願いし
女性	49	学区内	あり	文化施設がある。買い物に便利。情報が早く，ホールなど文化施設があり，コンサート，観劇など近くにあり，よい。	結果を詳細に報告をしてください。
女性	44	現住地	あり	交通の便利さ。物資の多さ。人工の多さ。など田舎と都会の差を強く感じる。生活する上では，ほしい物はすぐ手に入り便利だが，近所関係など全く持てず，常に孤独を感じて生活していた。	自然に恵まれていても，その自然を利用し，ここでしかできない事が，少しずつ失われているように感じます。ゆとり教育が盛んに考えられ，その結果，今となっては学力低下など聞こえてきますが，もっともっと地域の人たちと「交流を深め，お年寄りだけでなく，小さな子供たち

女性	47	県外	あり	いわゆる都会にビルの中で，圧倒的な時間の早さの中で過ごしました　近くに公園もsports施設などもあり，それなりに気分転換は出来，仕事も楽しく，充実していました　一番違うのは人の多さと時間の流れでしょうか。（「自分」というものを持っていればどんな場所でも生活し	**・子供の数がどんどん減り，同じ人間としか出会う機会が少ないというのが，子供の成長に関して一番心配なところです。** ・いろんな場に参加させよう（自分も参加する）とおうと，移動手段が限られてしまう。
女性	49	現住地	あり	東京の方が交通の便が良く，買い物に行くにも便利。	
女性	49	現住地	あり		私は聖徳の卒業生です。私の学生時代の松戸はまだ自然も多くとても感じました。子どもを育てることはやはり自然が多いところでのびのびと育てたい育ってほしいと願います。
女性	38	県内	あり	都会と田舎でまるで違います　人・環境・考え方・行事etc.	
女性	44	現住地	あり		子どもたちが自分と親しい仲間とばかり過ごすのではなく，色々なふれ合い，話せる機会が多くもてる地域であり学校であって欲しい　周りの人に目を向けられる子ども・人間に育って欲しい。
女性	43	県内	あり	人口・歩いて買い物ができた・子どもの友人が周囲にいた	
女性	46	学区内	あり	交通が便利（バス・電車）。	
女性	42	現住地	あり	交通の便と店などの便利さ。	都会の子どもに遅れをとらない学習環境づくり。
女性	44	県内	あり	交通の不便。	豊かな時代であるためか，大人が子供に気を遣いすぎるように思う。例えば駅前で高校生がタバコを吸っていても，駅員も警察も周囲の大人も注意しない。たまに注意しても高校生の方が強かったりする。中学でも，校則を守らなくても先生方は守ることを強要せず，『自由』の名の
女性	34	現住地	あり	近所・同じ団地内の人たちとの会話・付き合いがない	
女性	41	県内	あり	**以前に住んでいた所は都市部だったので，色々と便利だった。歩いて街の中心部に行けたが，今は車がないと用が足せない。でも，人との付き合いは今の方が親密にできると思う。また，付き合わなければ生活ができない環境でもある。**	
女性	45	現住地	あり	色々な地方から人が集まるので，人間の色んな特質（地域的に自然がもたらしているもの）があっておもしろい（やりにくい時もあるが）。	親にとって子どもは３人いれば３人に色々考えとは別です。子どもとひとまとめに質問されるやりにくいです。
女性	43	県外	あり		言葉づかいの見直し！　学校でも国会でもいねむりがめだつ！　見て見ぬふりをして，しかりがたりない先生が多い！
女性	43	現住地	あり	便利（生活面・交通の便など），働く場所が多い。	子どもがどんどん減り，学級数が少なくなったり，子ども同士の競争やたくさんの友達と知り合う機会も減ってしまう気がします。スポーツや合唱などでの他の学校との交流は，子どもに良い影響を与えてくれると思います。全県や全国まで目指せるような大会への参加を増やして
女性	40	4	あり	**よそ者と言われる所。**	
女性	37	現住地	なし		期待・要望はするだけ無駄ですのでしません。子ども自身の人生，ある程度はサポートしますが，それ以上は望みません。アンケートをしたのなら結果を教えていただきたいものです。
女性	42	現住地	あり	交通機関　　ほしい物はすぐ手に入る。	
女性	39	県外	なし		
女性	53	県内	あり	交通機関　現在の所は，車がないと生活できない。	
女性	40	現住地	なし		勉強以外の挨拶やマナーなど，人間として大切な物を身につけられるようこれからもよろしくお願いします。
女性	42	現住地	あり	人付き合いの多いところ。	
女性	44	学区内	なし		やる気のない子，勉強の邪魔をする子に毅然とした態度をとって欲しい
女性	40	現住地	あり	買い物が便利。	地域活動は強制的なので本当に嫌です。休日に地域行事があるが，休日は買い物や旅行に行きたい。行政：赤い羽根募金・年末募金は1000円です，と最初から言われて困ります。
女性	52	学区内	あり	佐久市の方が近所の悪口など言わず過ごしやすい。町が開けているので便利である。	
女性	35	現住地	あり	交通の便／人間関係	子どもを巻き込む事件がまた増えていることが不安。
女性	39	学区内	あり	ＰＴＡやご近所との関わりが今住んでいる地域の方が多い分安心感はあるが，逆にそのことで言いたいことが言えなかったり，したい事が思い切り出来ないというところがある。“人の目”というのが良くも悪くも違うと思う。	
女性	45	学区内	あり	あるといっても一番長いのはやはり小海町。佐久市に２年くらいしか住んだことがないので比べるほどは生活してないが，やはり自然が多いのが一番！	
女性	38	現住地	あり	交通の便／商店が少ない／品数がなく，新鮮ではない	

決のための共同作業・行動を生み出し，地域社会を活性化させる。そのことによって，地域社会が子どもの居場所になることが可能なのである。

子どもをめぐる問題が多発化するなかで，「子どもの居場所」として地域が論じられているが，子どもより大人の地域とのかかわりが問題である点に留意しなければならない。子どもだけに眼が行くのは，子どもの教育にとって，家庭・学校そして地域の果たす役割が大きいからではあるが，学校や家庭よりも地域がことさら強調されるが，地域の現状はどのようになっているのだろうか。

家庭崩壊，学級崩壊といった教育病理が指摘されるなかで，地域社会の崩壊が同時進行しているのではないかといった認識のもとで，地域とはどのようなものかについて再確認しておきたい。「居場所としての地域」は，単なる地理的な空間あるいは範囲ではなく，そこに人々の生活が展開されているかどうか，つまりひとつの「社会」として成立しているかどうかが重要である。一般に地域と呼称されるが，それは「地域社会」として認識されるべきもの，つまり地域が社会になっているかどうかが問われているのである。

地域社会の概念・用語を簡潔に示すならば，その第1点は，「一定の地理的空間」において，第2点は，「そこに人々の生活の協同性」が成立する場面であり，地理的空間と生活の協同性を2つの柱に定義することができる。そしてわが国ではこれまで，地域社会と類似した用語としてコミュニティが使われてきたのだが，英語のCommunity（コミュニティ）は一般に共同体と訳され地域に限定されない。にもかかわらず1970年代以降の日本では，これが地域社会と同義で用いられてきたのである。近年になって行政機関が意識的に「地域コミュニティ」といった形で頭に地域を付けているのは，コミュニティが必ずしも地域に限定されるものでないことを意識し始めたからといえる。

外来のカタカナ用語によって地域社会の変容を捉えようとすることは，1960年代以降のわが国の地域社会研究にとって重要であったとしても，国民だけでなく行政担当者もこの用語に，様々なイメージというよりも地域社会再生の「期待・希望」を込めてしまったのである。研究・分析上の概念と日常用語との間の乖離がそこに存在したのである。

アメリカの社会学者マッキーバー（Maciver,R. Morrison1882-1970）は，「コミュニティとは，ある程度の社会的結合をもつ社会生活の一定の範囲」と簡潔に定義している。ここで重要なのは社会的結合（social coherence），また社会生活の一定の範囲とは何かである。マッキーバーはコミュニティの「典型例」として，「社会生活の一定の範囲」を地域性（locality）と規定し，そこに所属する人々（member）の地域社会感情（Community Sentiment）＝帰属意識によって「社会的結合」が行われるとき「地域コミュニティ」が成立するとしている。このように地域社会をコミュニティ（共同体）との一つである！と定義するならば，現代日本の地域社会はこれまでの伝統的な社会に比べて，この地域性，地域社会感情，そして社会的結合の仕方が大きく変化してきているのである。ただ留意したいのはコミュニティは地域に限定されるものではないこと，地域性を抜きにした社会生活の範囲が存在することである。

いずれにしても今回の調査地・小海中学校区の集落には，地域性を土台とした伝統的な社会＝村落共同体が残存しているのではあるが，全体社会の産業構造の急激な変化にともなって，住民の地元への強い郷土意識が，逆に「偏狭」な「地域社会感情」を生み出すことにより，新規来住者との間に軋轢をもたらし，新たな「地域コミュニティ」の形成にとってマイナスの要因に作用する可能性を秘めているのである。このことは保護者の次のような地域意識に表れている

4．地域コミュニティの創造と生涯学習の課題
～小海中学校区の調査から学ぶこと～

エリア内出身の女性（39歳）は次のように述べている。「PTAやご近所との関わりが今住んでいる地域の方が多い分安心感はあるが，逆にそのことで言いたいことが言えなかったりして，したい事が思い切り出来ないというところがある。"人の目"というのが良くも悪くも違うと思う。」

「人の目」といった言葉と「良くも悪しくも」といった記述は，地域コミュニティの機能を象徴しているのではなかろうか。人の目を意識しながらの生活が，子どもの成育環境にとってどのような影響を与えるかについては，各家庭がどのような歴史をもっているかにかかわっているといえる。人の目を避けなければならないときもあれば，人の目に支えられなければ生計を維持できないケースもあろう。地域コミュニティは，このような緊張関係を孕んでいるのである。

このような地域環境のなかで，長野県外出身の女性（47歳）の要望は，教育の専門職者への期待を示すものである。「全国的に見て劣らないような教育レベル。保

育園・小学校では身近に子供がいないので，否応なく友人関係が限られ，合わせないと孤立してしまう。人数が少ないと家庭環境も見えてしまい，かえって注意できない面もあり，先生には悪いことをしたらしっかり叱れるご指導をお願いしたい。」学校教育の内容と水準を高く評価しているのだが，いわゆる子どもの道徳性についての指導について，地域特性に即してさらなる要望を提起している。大人同様子どもの人間関係が緊密であることが，人間の成長発達を阻害，逆に作用することに対しての指導を望んでいる点に，中山間地の小規模校の課題を読み取ることができる。

このことは子どもだけでなく大人の教育・学習についても言えるのではなかろうか。「人の目」をマイナスではなく，プラスに働かせるためには，緊密な人間関係をどのように展開したらいいのだろうか。

地元出身の女性（40歳）が，移住地は「買い物が便利」だったと指摘したうえで，現住地について，「地域活動は強制的なので本当に嫌です。休日に地域行事があるが，休日は買い物や旅行に行きたい。行政：赤い羽根募金・年末募金は1,000円です，と最初から言われて困ります。」と不満を示しているが，そのような意識は移住地での体験が反映しているからではないか。地域活動を強制されたり，募金を強要されることは都市地域では少ないとしても，ここで重要なのは地域活動や募金がなぜ行われるかについてのコンセンサス（合意形成）が，現代日本の多くの地域社会でなされていないといった現実である。

このことは行政サービスに対する要望にも表れている。地元出身の女性(46歳)は移住地の体験について「すべてにおいて選択しながら生活できた。保育園も学校も決まった所ではなく選んで行けた。交通の便も良かった。」と述べ，そして現住地への要望・意見を子どもの生活環境問題として具体的に述べている。

「子どもの通学用にある町営バスなども時間の希望など出しても取り入れてもらえず，児童館も使いたい時に使えない（バスが無い為）。アンケートをとっていただいて，それが今後活用され改善されたら嬉しいのですが……。」

このような要望は現地調査のなかでも住民の要望として数多く聞かされている。長野県外出身の女性(47歳)が，「周囲に商業地域が少なく，役場等も離れている。交通手段が少ないので，免許がないと行動範囲が狭くなってしまう。何をやるにも不便さを感じる」と述べているが，交通の便や商業施設など日常生活の「不都合」は多くの保護者が指摘している。

しかしながら行政のできる住民サービスには限界がある。都市と農山村では異なった行政施策が行われることを，それぞれの地域住民は学習する必要があるのではなかろうか。個人の体験だけでの判断は，住民間のコミュニケーションを阻害することになろう。子育て，青少年の健全育成のためのプログラムを作成させるためには，地域社会の教育環境について，その地域の歴史，自然・社会環境，さらには自治体行政の抱えている課題についての共通認識が必要なのではなかろうか。

異なった特性をもつ小海中学校区の市町村が，組合立の中学校を生み出さざるを得なくなったなかで，偏狭な郷土意識による対立は地域社会の活性化を阻害することになろう。大規模な町村合併が進行するなかで，地方自治体（公共）と地域住民の自治組織（民間）の「共同・連帯」が，教育環境をより豊かなものにしてゆくために不可欠だと言えよう。

小海町では1970年代に，小学校の分校が廃止され，また町の中心部への集落移転も行われている。近年「限界集落」(65歳以上人口が半数以上を占め，社会的共同生活の維持が不可能な集落）が社会問題化しているが，わが国の辺地では四半世紀前から生起していたのである。小海町ではすでに移転の行われた集落に今も残留して生業を営む住民（移転先に住民登録された居住者）や，「Iターン」（地域を愛しての移住）の形で大都市地域から転入して農林業などに従事する町民もいる。住民がいないはずの地域に居住者がいるのは，行政サービスを受けずに生計を維持できるからであろうか。このような地域，隠遁者ともいえるアジール（ASIL＝権力の及ばない地域・寺院・聖域）が現代日本に存在するのである。限界集落の概念に「社会的生活の維持」が示されているが，学校教育は社会生活に不可欠な機能であるが，65歳以上の高齢者に学校教育は必要ないかもしれない。限界集落さらには限界自治体を消滅させるか否かは，行政による後継者の育成にかかっているのではなかろうか。

北相木村は全国に先駆けて1980年代に「山村留学」を導入し，小学校の複式学級の解消を図っている。また南相木村は東京電力のダム開発と並行して，自然環境を生かした青少年の体験施設（キャンプ場など）の整備に力を入れている。交流人口によって村の再生を図ろうとしている。

スクールバスだけでなく町村経営のバスは小・中学校生の学校生活（終業時間や学校行事）に合わせて運行されている。赤字経営の民間の路線バスが撤退するなかで，

子どもだけでなく住民の「足」は奪われているが，基本的な交通手段は確保されている。地元の学習塾が学校の部活動や行事に合わせて，授業開始時間を調整するなどといったきめ細かな対応は，都市地域ではみられないのではなかろうか。

今回の中山間地の中学校区の調査で明らかにされた住民の意識と行動は，決して特異なものではないであろう。現在のわが国は人口の流動性が高いだけに，伝統的な地域社会とは違いさまざまな意識・行動の人々が混住している。それだけに，小海中学校区の生徒と保護者の調査票調査また地域調査から，わが国の青少年の育成のために何が求められているか，その手がかりを得ることができるのである。都市と農山村，中央と地方は裏表の関係にあることを認識して健全育成のプログラムを，さらなる調査によって提起することを今後の研究課題としたい。

5. 自由記述にみる親子の地域観

～テキスト分析ソフトを使った地域観に関する自由回答分析の試み～

元聖徳大学准教授，元学術フロンティア事業研究員
夏秋 英房

(1) テキスト分析の概要

第3・4節では保護者の自由記述から地域観について読み取れることをもとに論じてきた。

自由回答を分析する際には，サンプル数が100を超えるとその作業が繁雑となり，分析者の主観に頼りがちな傾向が見られる。そこで，本章では一つの試みとしてテキスト分析システム「Mining Assistant」（ジャストシステム）を使用して，生徒と保護者の地域観に関わる自由回答を分析することを試みた。解析ソフト使用の習熟と結果の解釈の妥当性の確保において，まだ不十分な点があるので，参考資料として補足する。

分析の手順としては，まず，自由回答と回答者の属性をデータとして用意する。つぎに文章から好評・不評の「傾向把握」を行った。今回の調査では，あらかじめ「いますんでいる町村の一番よいところは何ですか」「いちばん嫌いなところは何ですか」と，肯定的評価と否定的評価を分けて質問してあるので，名詞に関わる形容詞を分析することで評価のポイントを析出し，感性に関わる

図１－６　生徒の町村への肯定的評価と性別・学年

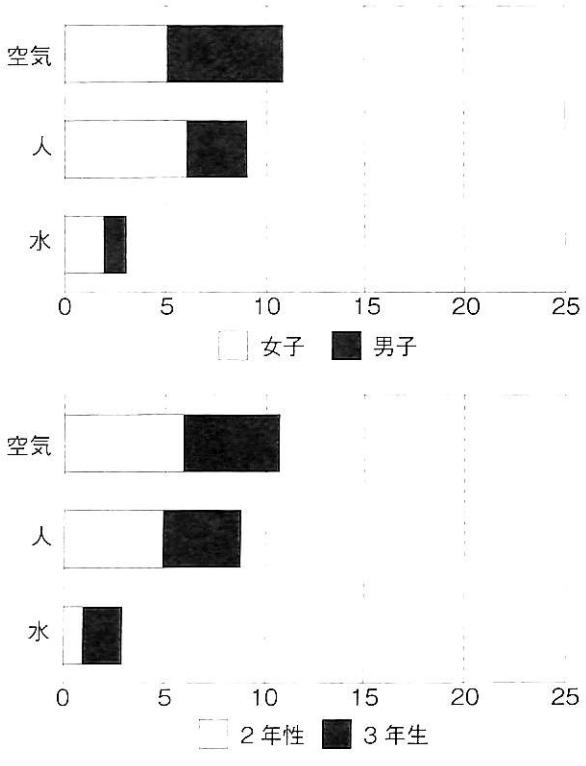
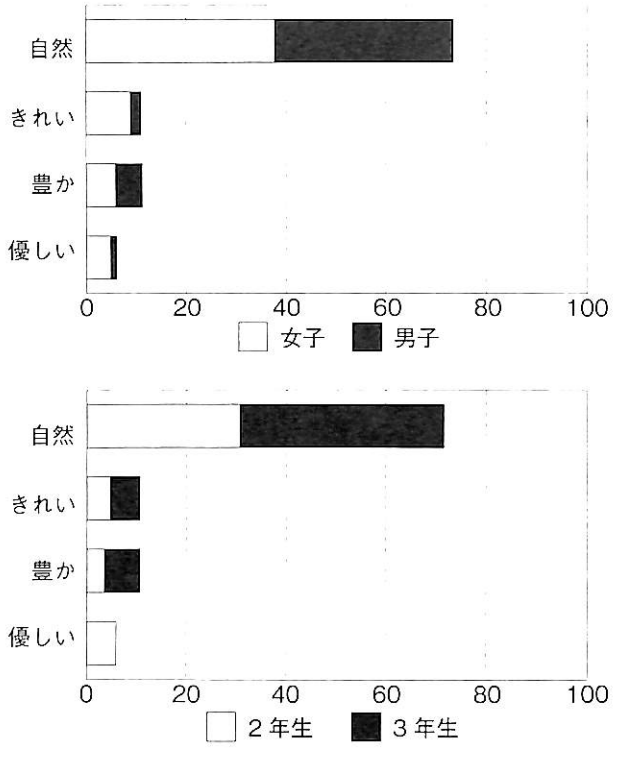


図１－７　生徒の町村への肯定的イメージと性別・学年



形容詞句によって評価イメージを分析した。それぞれ，評価・感性が一致または分散している度合いを示す「均一性」がプラスの項目を中心に分析している。

今回の調査では肯定的評価の自由回答のなかに「自然」という語句が多用され，214の名詞句全体のうち「自然」の登場頻度は71回に及んでいる。このように，自然はあらゆる肯定的評価と関わりがあるためか，名詞句の分析においては中心に取り上げられず，むしろ肯定的イメージを表す形容詞句として分類されている。品詞の分類についての操作に習熟していないので，ここではそのまま結果を表示することとした。

最後に，コレスポンデンス分析によって，町村へのイメージ（感性）と属性との関係をグラフ化した。この際，縦軸，横軸には固定的な意味はなく，図の上に語句と属性がプロットされている距離がそれらの関係の深さや特異性を表すものとして，解釈を加えていくのである。

(2) 地域への肯定的評価

それでは，生徒の地域観について，まず地域観を代表する語彙から見ていこう。

まず，肯定的評価のポイントとなる名詞句として空気，人，水を取り上げた。人と水を肯定的評価として挙げるのは，女子の方が多いようである。また，水を挙げるのは3年生が多かった。

つぎに肯定的な地域イメージを形容詞句によってみてみると，地域の自然が豊かであることを肯定的にとらえるのは，性別では差が認められないが，学年では3年生に多かった。また，町村が「きれい」で人が「優しい」ととらえるのは女子に多く，人の優しさを肯定的イメージとして挙げたのは2年生だけであった。

さらに，地域参加の度合いとの関連をみると，地域参加の度合いが低い生徒は，自然の豊かさを肯定的イメージとして挙げる傾向があるのに対して，地域参加の度合いが高い生徒は，わずかではあるが人の優しさを挙げることが多い。

以上の傾向を総合すると，2年生は地域参加の度合いが高く人の優しさを肯定的イメージとしてあげる傾向が有るのに対して，3年生は地域参加の度合いが低く，自然の豊かさや環境の静かさを挙げることが多いことがわかる。

図1－8　生徒の町村への肯定的イメージと地域参加の度合い

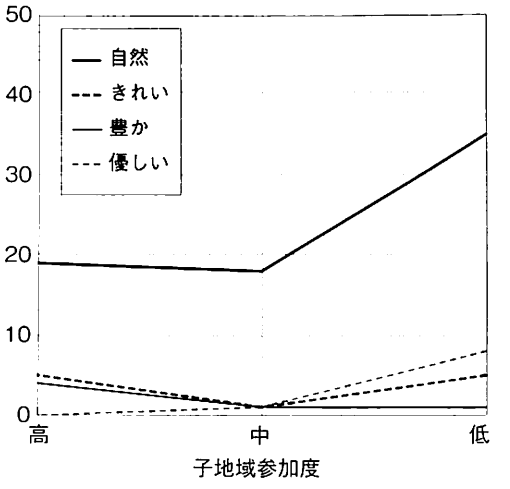
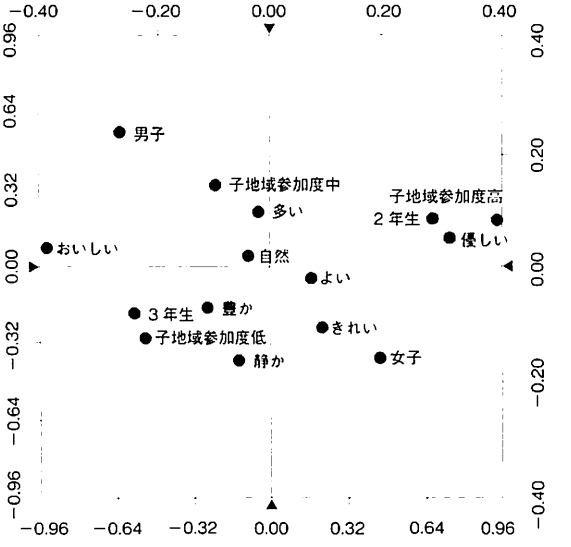


図1－9
生徒の町村への肯定的イメージと属性のコレスポンデンス分析



(3) 地域への否定的評価

生徒が町村へ不満を抱くポイントを名詞でみてみると，店が少なく，財政の借金や無駄な建物があり，行事がつまらないといった点であった。このような不満のポイントについては学年と性別による差はほとんどなかった。図1－10に示したように，地域参加の度合いが低い生徒は店の少なさや行事のつまらなさが不満につながっているのに対して，地域参加の度合いは町の財政への関心が不満へとつながっているようである。

否定的な地域イメージについて形容詞句でみてみると，店が少ないことについての学年と性別による差はみられなかった。

地域参加度が低い生徒は，とくに店の少なさを訴える傾向があるが，財政の無駄やつまらなさを訴える傾向も

認められ，地域参加の度合いが地域への否定的イメージを左右していることがわかる。

そこで，総合的に地域への否定的イメージと生徒の属性との関わりをみてみると，「つまらない」「すくない」「無駄」というイメージは女子で地域参加の度合いが低いことと関連が強いことが伺える。

（※その他，生徒と保護者の自由記述の詳細については，巻末の資料をご覧ください）

図１－10 生徒の町への不満（店，借金，行事）と地域参加度

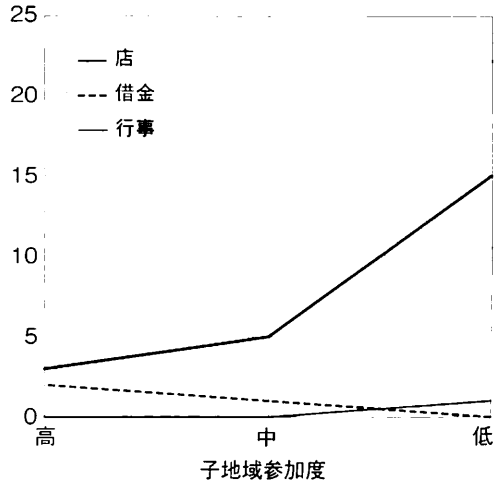


図１－12 生徒の町村への否定的イメージと地域参加度

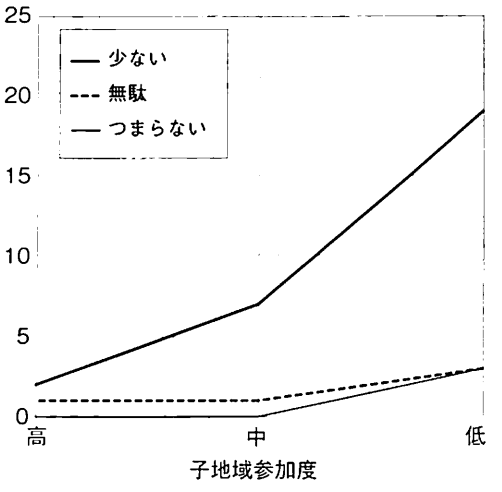


図１－11 生徒の町村への否定的イメージと学年・性別

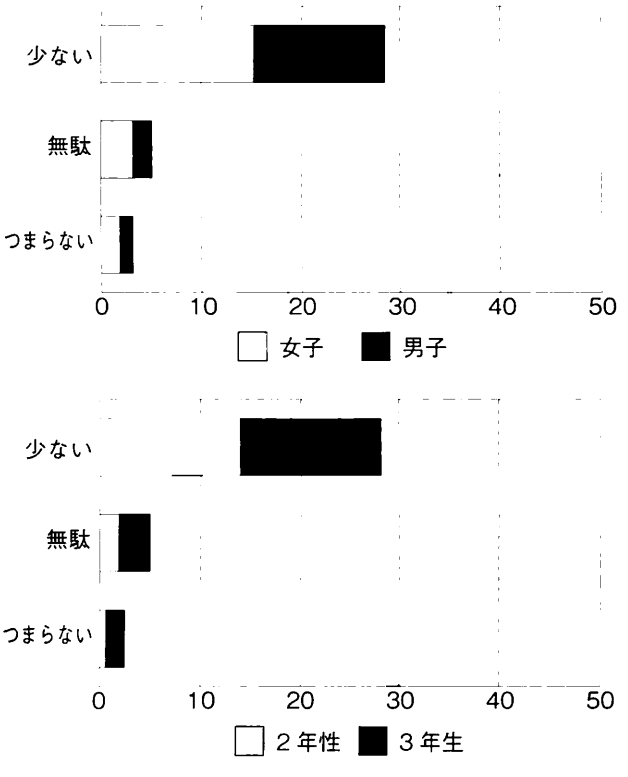
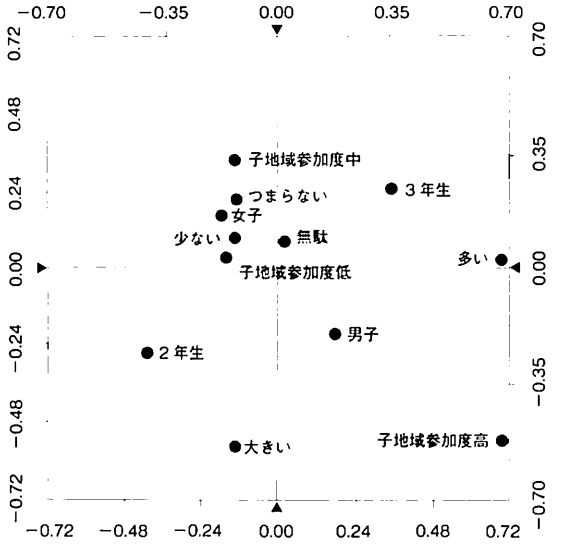


図１－13
生徒の町村への否定的イメージと属性のコレスポンデンス分析



2. 家族の現在と子どもへのまなざし

明治学院大学 非常勤講師
春日 清孝

はじめに
～家族を問う視点～

現代において,「家族」はその自明性を喪失しつつある。一方で，家族の解体や変容，そして多様性に着目した家族論が隆盛となっており，他方では世に言われるほど家族は揺らいではいないという議論が対抗する。前者についてはさらに，その変動を肯定的に捉える立場と，否定的に捉える立場が混在し，後者についても，個々の経験的な「自明性」を前提とする立場と，冷静な客観的分析に依る立場などが存在し，議論は一様ではない。更にそれらのもとに様々なサブカテゴリーが存在し，そこから種々多様なバリエーションが展開するため，事態がより錯綜としていると言えよう。しかしながら，この家族というテーマが，即自的にではなく，対自的に取り上げられるようになってきたこと自体，現代において「家族」が問題として意識されていることを表しているのではないだろうか。

もともと,「家族」というものを普遍的・一般的に定義づけること自体が難しい。確かに辞書的には，家族は婚姻を中心とした夫婦関係と，そこから派生する親族関係によって構成されるものであり，その結合の紐帯は「感情融合」により，その目的を成員の生活保障とすること，さらにそれは「社会の基本的単位」であり，そこでは基礎的な社会化が行われるという説明がなされている[1]。G.P.マードック以降，家族とは核家族によって代表されている。一組の夫婦と未婚の子どもたちからなり，性，経済，生殖，教育の４つの機能を担う社会集団として，核家族はある種の普遍性を獲得した。進藤雄三によれば，核家族概念には，①制度的家族の抑圧性とは異なった，成員相互の愛情と合意による「友愛家族」の理念，②パーソンズによって提起された，家族機能の専門性と独立性，およびその産業社会との適合性③配偶者の自由選択・平等主義・核家族構成の自立性などからなる「夫婦家族」，などの近代の理念が融合し，「外的権威に依拠した家父長制的核家族から内的友愛に依拠した民主的夫婦＝核家族へ」[2]という近代家族としての位置づけが確立したと説明される。近代家族＝核家族という定式化は，その近代理念の「普遍性」によって正当化されるが，現代においてはその近代の理念が達成されていないという（正当な）批判が行われるようになり，それが結果的に家族の揺らぎの遠因になっているとは言えるであろう。

特に核家族を前提にする場合，構成員の転出や死亡，離別によって，家族は容易に変容，解体，消滅するものでもあり，この意味では実体としてスタティックなものではない。さらに，よく言われるように親族の範囲は生物学的に決定されるものとは言い難く，そこにはある種の主観性が介在している。一例として，上野千鶴子は「ファミリィ・アイデンティティ」という概念を用いながら，家族の主観的構成を描き出して見せた[3]。ファミリィ・アイデンティティとは，誰を（何を）家族と同定するかという主観的な「境界定義」のことであり，この概念を用いた調査において，「居住の共同」や「血縁の共同」とは無関係にファミリィ・アイデンティティが保持されていることが示された。ここで重要なのは，現代において家族が一つの型に収まるのではなく，より多様化しつつあるその実態である。

しかしながら，その多様性は無制限に増殖しているわけでもない。現代社会に生きる私たちは，そこで生きていくために様々な規範や慣習を学習し身につけており，それが好むと好まざるとに関わらず，私たちに影響を与えている。私たちは真空の空間ではなく，多くの場合，ある特定の関係，すなわち家族のもとに生まれてくる。その家族という関係は親族や友人，知人，そして隣人などの様々な社会的な諸関係と連接し，さらには住まいという空間性から特定の社会環境にとりまかれている。家族とその成員は，個々人をとりまく社会環境や社会関係，そしてそこに偏在する様々な正当性とそれに裏付けられた規範，固有の歴史，文化のもとで，互いに相互交渉しながら固有社会での「成員性」を身につけていく。言い換えればその関係性の中で「地域性」を通して社会化していく。

本章においては，上記のような問題意識に基づいて，対象地域において家族がどのように経験されているのか

を検討する。まずは，家族構成や親族との関係という「形式」を通して，次に親と子の家族観を比較検討し，最後に親子がどのように地域的な関係を保持しそこに参加しているのかを見ていく。

表 2-1-1-1　男女別家族構成

	2世代家族	3世代家族	それ以外	合計
男	33.3	58.3	8.3	100.0
女	47.9	49.3	2.8	100.0
合計	45.8	50.6	3.6	100.0

表 2-1-1-2
親年齢カテゴリー化と2世代・3世代同居のクロス表

			2世代・3世代同居			合計
			2世代家族	3世代家族	4世代家族・3世代以外の人	
親年齢カテゴリー	～39	度数	11	4	0	15
		%	73.3	26.7	0.0	100.0
	40～44	度数	15	19	2	36
		%	41.7	52.8	5.6	100.0
	45～49	度数	8	12	1	21
		%	38.1	57.1	4.8	100.0
	50～	度数	4	7	0	11
		%	36.4	63.6	0.0	100.0
合計		度数	38	42	3	83
		%	45.8	50.6	3.6	100.0

表 2-1-1-3
居住年数カテゴリーと2世代・3世代同居のクロス表

			2世代・3世代同居			合計
			2世代家族	3世代家族	4世代家族・3世代以外の人	
居住年数カテゴリー	～9年	度数	5	2	0	7
		%	71.4	28.6	0.0	100.0
	～14年	度数	5	5	0	10
		%	50.0	50.0	0.0	100.0
	～19年	度数	11	7	1	19
		%	57.9	36.8	5.3	100.0
	～29年	度数	6	9	1	16
		%	37.5	56.3	6.3	100.0
	～39年	度数	5	7	0	12
		%	41.7	58.3	0.0	100.0
	40年～	度数	6	10	1	17
		%	35.3	58.8	5.9	100.0
合計		度数	38	40	3	81
		%	46.9	49.4	3.7	100.0

1．家族・親族の実態

(1) 家族構成

まず最初に家族構成を検討する。ただし，ここでいう家族とは正確には「世帯」のことであり，あくまで客観的な形式にのみ着目していることをお断りしておく。また，調査においてその方法的な問題から親票サンプルの男女比が不均等になっている。今後の説明にも関わるところなので，まずはこの点を明示しておきたい（表2-1-1-1）。[親票サンプルの男女比：男性（15%），女性（85%）]

2-1-1. 家族構成（同居，非同居の別）

構成比から見ると，3世代と2世代は半々となっており，2006年に国立社会保障・人口問題研究所が行った「全国家庭動向調査」（3回）で示された農村的地域（非人口集中地区）における最も高い数値（「どちらかの母親と同居」:40.2%）と比しても10%以上，上回っている。また，回答者が男性の場合，3世代家族（すなわち拡大家族）が60%近くなっており，その意味でも近代家族の理念とは若干のズレを見出すことができるのではないか。

総計から見ると2世代家族と3世代家族の構成比はほぼ同値だが，年齢別に見ると若い層での核家族化が高いと言える。今回の調査は中学生の子どものいる親を対象としているため，もっとも若年でも30代となっているので，全体的な傾向は窺い知れないが，先の「第3回全国家庭動向調査」における，「年齢が上がると同居率が上がる」という調査結果と同様の傾向と見ることができるのではないだろうか。ただし，その同居理由を先行調査と同様に「親世代の長寿化によるもの」と言えるかどうかは，現段階では不明である。

例えば，3世代同居率のポイントが高いのは，地域共同体における慣習が存続し，個々の判断に何らかの影響を与えているのかもしれない。ここではその当該地域にどの程度長期的に居住しているのか，言い換えれば，どの程度，その地域規範に触れ，社会化される期間が長かったのかを検証しようとした。表2-1-1-3から見る限り，居住年数との関係は必ずしも明瞭ではないが，20年以上同じ町村に居住している場合，3世代家族の率はやや高くなる。逆に，現在の町村に転居したのが，子どもが生まれた後や直前，または数年前など，比較的近年の場

合は，同居率も低くなっている。

(2) 親族との交流頻度

先にも述べたが，近代家族とは核家族という形態で，しかもそれが他の親族に対する独立性を保持していることが特徴とされていた。しかしながらここには地域的偏差があり，特に核家族＝近代家族の枠組みでは捉えきれないような家族の形態がある。例えば有賀喜左衛門の提起した「同族団」は先祖を同じくした本家＝分家関係などに代表される家と家との関係を指し，農山村においては現代に至るまで特徴的な形態であるといえよう。牧野は日本の農業が家族経営であることを踏まえ，「家とは，家産を基礎として家業を経営して，家系を存続させていく組織」[4]と定義づけている。このとき，近代的な核家族という概念規定は，その存立の基盤となる地域性やそこでの諸関係と無縁ではないことを示していよう。有賀は核家族について，それを夫婦関係に細かく分節していくやり方を批判し，家族の背後にあり，それを規定している文化に着目する。「社会のなかでもって家族がある性格づけをされる」[5]側面を忘れてはならないだろう。理念化された核家族とは異なり，個別家族を超えた親族や同族が決定権を持つ場合も存在する。さらにはそのようなネットワークは家族構成員，特に子どもにとって，重要な人間関係の資源ともなりうるであろう。

以下，ここでは親族に限って，そことの交流がどの程度頻繁に行われているのかを検討する。

2-1-2. 他の親族との交流頻度（親を基点とする）

本節においては，実際に身体の移動を伴う「行き来」と，その他の情報ツールによる「連絡」とを分けて聞いた。図 2-1-2-1 で見るように，交流の頻度は，「自分の父」や「自分の母」，「自分のきょうだい」など，その育った定位家族のメンバーに対する場合が圧倒的に多い。交流の頻度が最も高いのは「自分のきょうだい」であり，次に「自分の母親」が続いているものの，そこには 10 ポイント以上の開きが生じている。もう一つこの二者に共通するのは，「連絡」が「行き来」を上回っていることで，それ以外は軒並み「連絡」の方が下回っている。

次に家族形態別に交流頻度を取ってみた。核家族世帯における親族との交流頻度は図 2-1-2-2 で示したように，自身の定位家族のメンバーおよび配偶者の定位家族のうち，母親が突出して高くなっている。これと比較すると，3 世代家族ではそれが圧倒的に少なくなる。今回の調査では，夫婦どちらの親と同居しているのかとい

図 2-1-2-1　他の親族との交流頻度

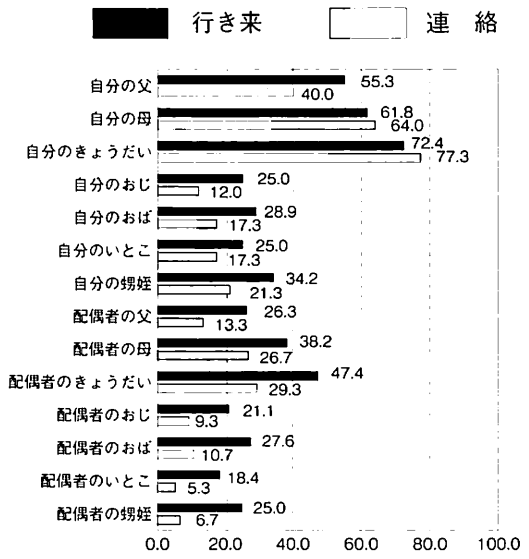


図 2-1-2-2　親族関係 (2 世代)

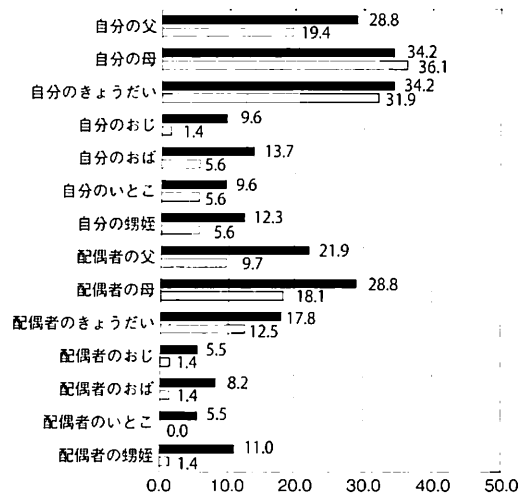
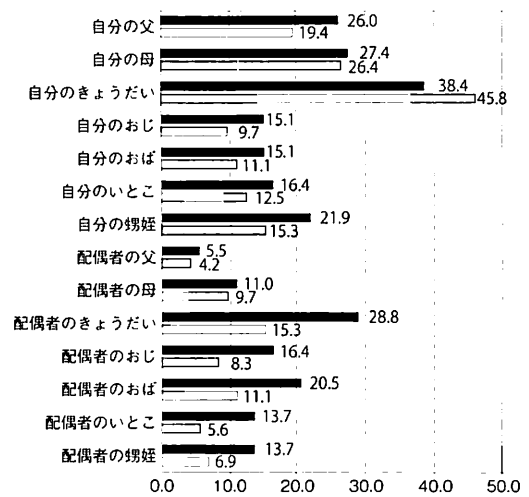


図 2-1-2-3　親族関係 (3 世代)



う質問項目を省略したため明確には言えないが，2世代家族と3世代家族との交流頻度を比べてみると，ここに大きく差異が生じていることが分かる。3世代家族において「自分のきょうだい」および「配偶者のきょうだい」が突出してくるのは親同士の配慮と見なすことができる。また，3世代家族においては2世代家族よりも配偶者のおじ，おば，いとこのポイントがアップしてくるのは，回答者が配偶者の親と同居をしているからではないかと推測され，おじ等はそれに引っ張られるようにして「行き来」の頻度が上がっているのではないかと考えられる。

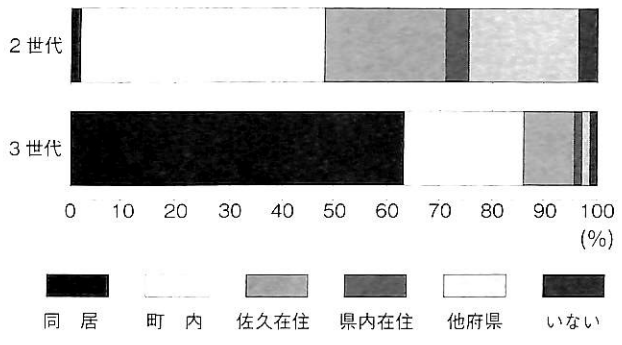
もともとの「行き来」と「連絡」とを同じ交流の深浅のスケールとしようとしたこと自体が誤りであったのかもしれない。「連絡」を取るということは，たわいもない話であっても気楽にすることができるという心安さの表れであると読んだ方が良さそうである。

それを確かめるために図2-1-2-4を見ていただきたい。

親から見た祖父母は同居別居に関係なく，同じ町内にいるケースが多い。2世代家族といえども，近居という形をとるものが多いことは注目に値する。ここから逆に上記の交流において，「連絡」が少なく，「行き来」が多くなる理由が想像できるように思う。

また，先に挙げた調査では近居別居の傾向性について「若い世代では同居より別居を，別居であれば親からの便宜を享受しやすい近居別居を選択する傾向」[6]があると分析している。

図 2-1-2-4　家族形態別祖父母居住地



2. 家族観・家族意識

(1) 親子の家族観比較

まずは以下の図（図2-2-1-1）をごらんいただきたい。親の観点からすると「家族がまとまっていることはとても大事だと思う」という項目について，「とても～」と「少し～」を併せて96.5%が肯定的に評価している。

ただし，この項目は家族観の中でも特に「価値」に特化したものであり，必ずしも「実態」として家族がまとまっていることを示してはいない。これを子どもの評価（図2-2-1-2）と比較してみよう。

確かに，親と同様，「家族のまとまり」は90%におよび，重要なこととして認識されているようであるが，「何かをするとき，家族で相談して決める」という項目については，親：81.4＞子：50.3となり大きな開きが生じる。

図 2-2-1-1　親の家族観

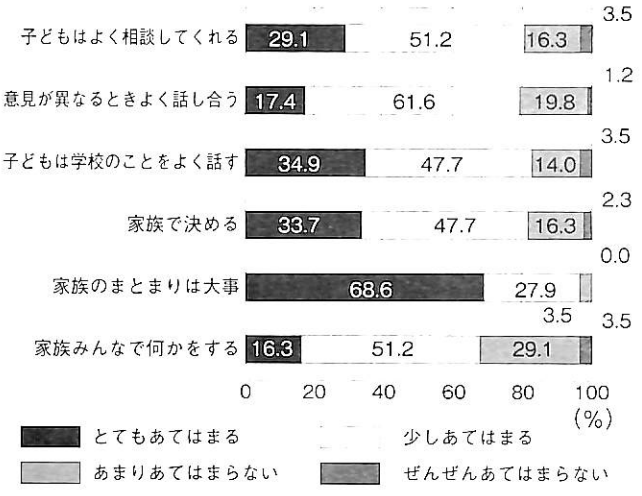
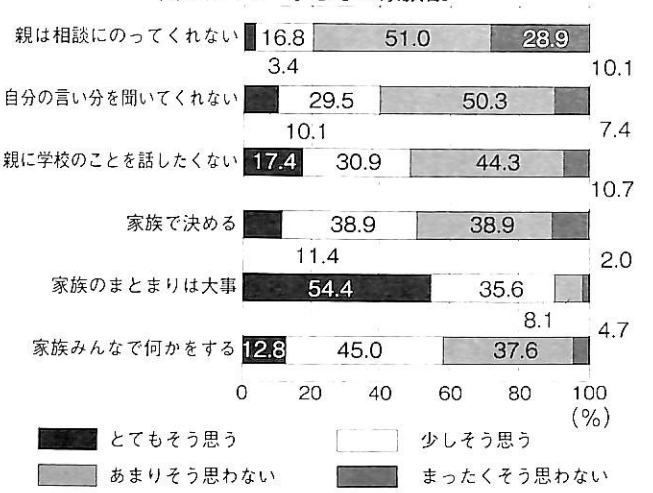


図 2-2-1-2　子どもの家族観



明瞭な差異が生じているのは，「学校のことについて話す」という項目についてである。8割以上の親が「子どもはよく話す」としているが，逆に49.3%の子どもは「話したくない」と考えている。因みに平成13年に内閣府が行った「第2回青少年の生活と意識に関する基本調査」では，中学生における親との会話頻度は『話す方』を併せると母親相手で94.6%(父親72.2%)となっている。本調査の質問項目とではワーディングも異なっているため単純比較はできないが，それでも48.3%の子どもが学校のことを話したくないといっていることは注目に値しよう。

「家族みんなで何かをする」も，若干ながら子どもではポイントを低下させている（親：67.5＞子：57.8)。佐々木美智子は福岡県で行った調査結果から，小学生においては家族について「家族がお互いに助け合い協力し合う場」と答えたものが38.9%で最大値を示すが，中学生で最大値を示したのは「心身の休養や安らぎの場」となり，その傾向は高校生において圧倒的となり，実に47.1%がそのような家族観を示すと述べている[7]。地域性の差異を考えるならば，この指摘をそのまま当該地域に適応可能かどうかは微妙だが，少なくとも，子どもが成育に従って家族観を変容させていくということは重要な指摘であろう。

親と子の家族観を比較するため，以下ではクロス表を用いたい。

先に親子共にプラス回答が多かったと述べたが，右のようにクロス集計表にしてみると，親(列)と子ども(行)の期待が食い違う例が若干存在し，それは子どものマイナス評価に顕著だといえる。

次に，親と子どもの会話であるが，ここには齟齬が顕著に見受けられる。親は子どもがよく話すと認識しているが，子どもは話したくないと思っているケースが27例存在する。

親と子の意見が違った場合の対応については，（親）話し合う―（子）聞いてくれるというケースが多いものの，掛け違いも目立っている。特に，親が話し合っているつもりでも，子どもの側に「聞いてくれない」という認識を持っているものが多い。

家族という関係は子どもにとって豊かな資源を提供し得るものであり，そのこと自体は疑うべくもない。家族とは第一次的には子どもに社会的な属性を与えて定位させることができるし，そこでの経験はその後の諸関係を構築する上で極めて重大な役割を果たすと言える。しかし，それは親子関係の認識上の不一致を是正していくこととは直接にはつながらない。むしろ，そのような過度に統一的な家族は子どもの居心地を悪くするだけかもしれない。確かに現代においては子どもが「問題」とされ，その逸脱行動の責任を家族に帰するような言説は枚挙にいとまがない[8]。しかし，そこで監視的なまなざしが注がれるとしたら，そこは規律・訓練を通して規格化を個々人に強制する「監獄」でしかないかもしれない（M・フーコー)。村瀬学はそのような子どもの成育を大人の生き

表2-2-1-1
家族のまとまりは大事と家族のまとまりは大事のクロス表

			家族のまとまりは大事			合計
			とても あてはまる	少し あてはまる	あまり あてはまらない	
家族のまとまりは大事	とても そう思う	度数	38	13	2	53
		%	71.7	24.5	3.8	100.0
	少し そう思う	度数	15	10	1	26
		%	57.7	38.5	3.8	100.0
	あまり そう思わない	度数	5	1	0	6
		%	83.3	16.7	0.0	100.0
	まったく そう思わない	度数	1	0	0	1
		%	100.0	0.0	0.0	100.0
合計		度数	59	24	3	86
		%	68.6	27.9	3.5	100.0

表2-2-1-2
親に学校のことを話したくないと子供は学校のことをよく話すのクロス表

			子どもは学校のことをよく話す				合計
			とても あてはまる	少し あてはまる	あまり あてはまらない	ぜんぜん あてはまらない	
親に学校のことを話したくない	とても そう思う	度数	2	7	3	1	13
		%	15.4	53.8	23.1	7.7	100.0
	少し そう思う	度数	7	11	6	1	25
		%	28.0	44.0	24.0	4.0	100.0
	あまり そう思わない	度数	15	21	3	1	40
		%	37.5	52.5	7.5	2.5	100.0
	まったく そう思わない	度数	6	2	0	0	8
		%	75.0	25.0	0.0	0.0	100.0
合計		度数	30	41	12	3	86
		%	34.9	47.7	14.0	3.5	100.0

表2-2-1-3
自分の言い分を聞いてくれないと意見が異なるときよく話し合うのクロス表

			意見が異なるときよく話し合う				合計
			とても あてはまる	少し あてはまる	あまり あてはまらない	ぜんぜん あてはまらない	
自分の言い分を聞いてくれない	とても そう思う	度数	2	5	0	0	7
		%	28.6	71.4	0.0	0.0	100.0
	少し そう思う	度数	4	10	7	1	22
		%	18.2	45.5	31.8	4.5	100.0
	あまり そう思わない	度数	8	22	8	0	49
		%	16.3	67.3	16.3	0.0	100.0
	まったく そう思わない	度数	1	5	2	0	8
		%	12.5	62.5	25.0	0.0	100.0
合計		度数	15	53	17	1	86
		%	17.4	61.6	19.8	1.2	100.0

る社会の共同性から行うことを「治め」といい，逆に自然性や遊び観点から行うことを「戯れ」としている。子どもの体験は後者が優位となり，大人の体験は前者が優位となる。もちろん，個々人はその一極を生きるわけではなく，そこでの自在な適応が可能であるが，中でも家族，そして夫婦関係は「治め」と「戯れ」を恣意的に柔軟に移行することができ，子どもはそこで「世界の原型を生きる」。重要なのは「現実の持つ二極性を，家族がどのような度合いで体験しているかによって，子どもの世界体験が違ってくることを理解することである」[9]。

それでは，家族成員はそれぞれがどのような世界体験をしているのだろうか。地域における活動を通して，その傾向性を検討してみたい。

3. 家族の地域参加

近年，「住民参加」の地域づくりが声高に唱えられ，それは構造改革，地方分権などの行政改革と呼応しながら進行しつつある。時に批判されるように，それは一方で，国家の財政負担を減らすことを目的としたものであるかもしれないが，他方で，そこに住む個々人が自分たちの住む環境に積極的に関わり，自らの手で地域に参画していくことで活性的な地域関係が構築できるのではないかという期待もあろう。行政と住民とが，単なるサービスの送り手と受け手という関係から脱し，それぞれが地域づくりの主体として活動していくことが求められている。

これを家族の側からいうならば，私生活領域に対する公的領域からの働きかけと見ることもできるし，逆に自らの生活世界を開くチャンスといえるかもしれない。本節においては，大人と子どもがそれぞれどのような地域活動に参加し，どのような経験を開いているのかを，家族というフィルターを通して検討する。

なお，本調査において，親票ではそれぞれの選択肢について参加しているか否か，今後参加する意向はあるか，という2点を調べた。対して子票では参加の実態のみを聞いている。

(1) 親の地域参加

選択肢の中でもっとも参加度が高かったのは「PTA活動」で，95.3%にのぼる。逆にいえば，PTA活動に参加している親が積極的に回答してくれたということでもあるかもしれない。

一つ調査手法上の反省点となりうるのは，子ども対象の調査が中学生を対象に中学校という教室空間で行われたことと，その生徒に親票を持ち帰らせ，親に答えてもらったことにあるかもしれない。つまり，学校という公的な機関が解答について微妙なバイアスとなった可能性は否定できない。「PTA活動」に対する参加率の高さはその結果であるかもしれず，それは，「保育園・学校の行事」(75.6%) の参加率も同様に高いことから推測されるところである。

「お祭り」この地域におけるお祭りは自治会主催となるものが多く，そこに参加する仕方が問題となるが，ここでは「自治会・役員会」，「美化運動」などと並んで，

図 2-3-1-1　地域活動への参加 (親)

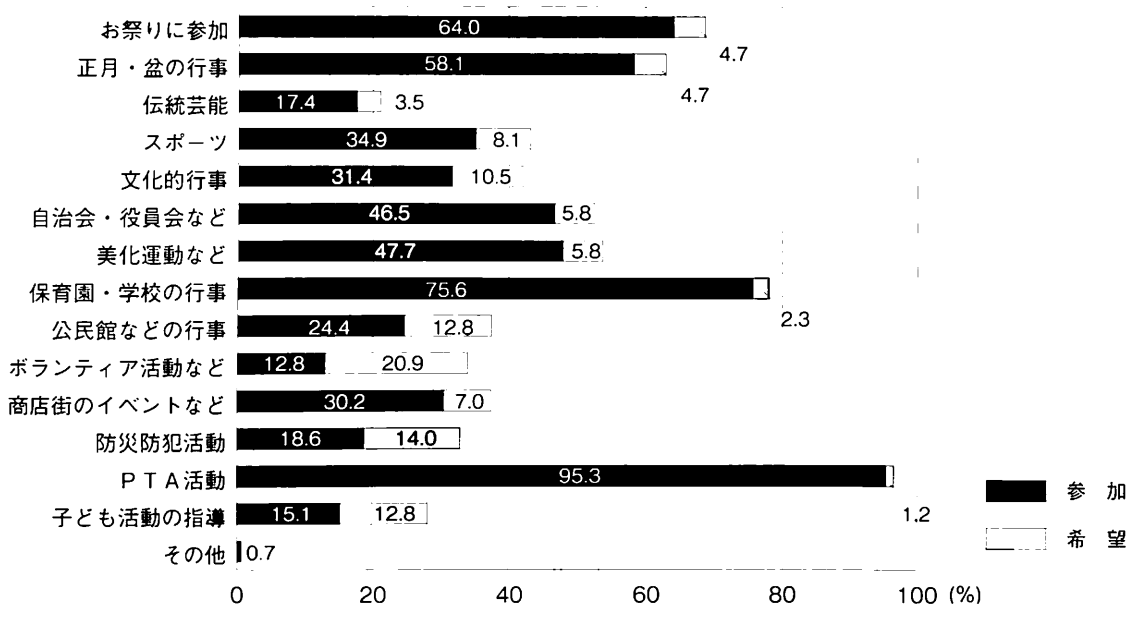


表 2-3-1-1
親年齢カテゴリー化とボランティア活動などのクロス表

			ボランティア活動など			合計
			○	△	x	
親年齢カテゴリー化	～39	度数	3	3	9	15
		%	20.0	20.0	60.0	100.0
	40～44	度数	4	8	25	37
		%	10.8	21.6	67.6	100.0
	45～49	度数	3	2	16	21
		%	14.3	9.5	76.2	100.0
	50～	度数	1	5	7	13
		%	7.7	38.5	53.8	100.0
合計		度数	11	18	57	86
		%	12.8	20.9	66.3	100.0

地域の公的な行事と見なした。ただ，これらの活動に対する参加率が「PTA 活動」への参加率の半分ほどでしかないことを考え合わせると，活発な参加とは言い難いとも言える。

「ボランティア活動」については，参加率そのものは諸選択肢の中で最低だが（12.8%），今後の参加希望としてはもっとも高い 20.9% を示している。このことは，特に大人の地域参加希望，そして何よりもその「自発性」という観点からも，今後の地域づくりに参加しうる可能性を指摘しておきたい。

ボランティア活動についてのみ年齢層とクロスを掛けたのが表 2-3-1-1 である。

○は参加者で，△は参加希望者を表す。年齢カテゴリーにおける 50 歳以上と，45 歳以下で参加希望が高くなっていることのみ指摘しておきたい。

(2) 子どもの地域参加

子どもの地域参加は「夏祭り」や「伝統行事」などのイベントにおいて数値が高くなっており，次いで「文化的行事」となっている。これらは基本的に地区または公民館において行われるものであるため，地域イベントへの参加率と読みかえることが可能である。ただし，夏祭りへの参加率が半数程度にとどまるのは，はたしてどのような理由からであろうか。学年別に見ると，中学の 3 年生よりも 2 年生の方が地域イベントに参加する率は高くなっていることから，受験／進路の問題が影響を与えているのかもしれない。

■ジェンダー差

男子と女子を比較すると，男子は圧倒的に夏祭りや伝統行事への参加率が高いが女子はその参加率が男子に比べて低く，代わりに文化的行事への参加率が高くなっている。因みに，子ども会と宗教行事への参加は女子に顕著に見られた。

図 2-3-2-1　子どもの地域参加

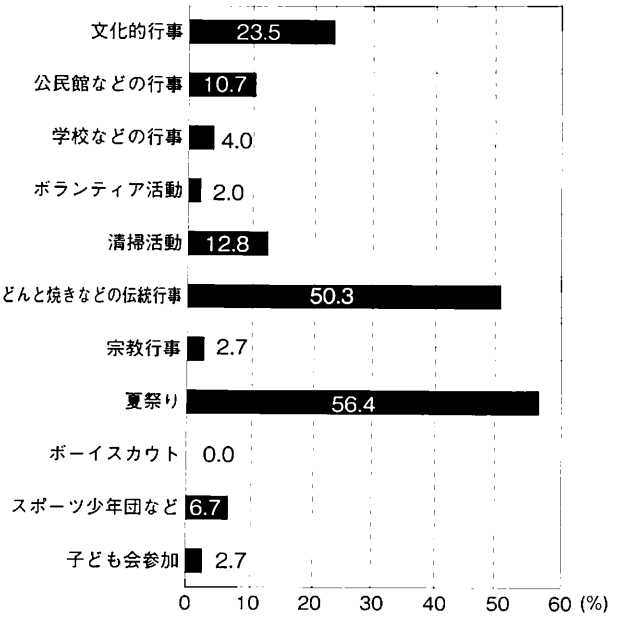


表 2-3-2-1　男子

Dichotomy label	Name	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
子ども会参加	c08_01	1	0.8	1.8
スポーツ少年団など	c08_02	6	4.8	10.5
夏祭りなど	c08_04	43	34.7	75.4
どんと焼きなどの伝統行事	c08_06	38	30.6	66.7
清掃活動など	c08_07	9	7.3	15.8
ボランティア活動	c08_08	2	1.6	3.5
学校などの行事	c08_09	3	2.4	5.3
公民館などの行事	c08_10	9	7.3	15.8
文化的行事	c08_11	13	10.5	22.8
Total responses		124	100.0	217.5

16 missing cases ; 57 valid cases

表 2-3-2-2　女子

Dichotomy label	Name	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
子ども会参加	c08_01	3	2.3	4.7
スポーツ少年団など	c08_02	4	3.0	6.3
夏祭りなど	c08_04	41	31.1	64.1
どんと焼きなどの伝統行事	c08_06	4	3.0	6.3
清掃活動など	c08_07	37	28.0	57.8
ボランティア活動	c08_08	10	7.6	15.6
学校などの行事	c08_09	1	.8	1.6
公民館などの行事	c08_10	3	2.3	4.7
文化的行事	c08_11	7	5.3	10.9
Total responses		132	100.0	206.3

12 missing cases ; 64 valid cases

上記の結果から一つだけ指摘しておきたいのは，子どもたちの「地域イベント」等についての参加率の高さと，逆にそれ以外の特に地域活動についての参加率の低さである。確かに楽しい遊びを中心とした活動には子どもたちの参加が期待できるとは思うのだが，それは必ずしも，地域社会における子どもの学びに結びついていないと言うこともできる。

矢野峻は地域社会の教育力を，学校に限定されない「人間形成的諸力」と定義し，その三つの次元として①社会規範②生活体験③地域集団を挙げている[10]。これらが相互に関連しあう中でいっそうの人間形成的機能が果たされると矢野は期待する。一方，社会教育や生涯学習からも様々な問題提起が起こり，90年代のユネスコ，21世紀教育国際委員会の報告書では，知識の獲得を偏重した教育制度が批判され，97年のハンブルグ宣言では，持続可能な社会を再構築するためには能動的な市民の形成が求められた。生涯学習の理念を待つまでもなく人間形成，すなわち社会化は大人になっても継続する。

データを見る限り，大人の地域参加は自身の子どもを中心に展開する「児童中心主義」のそれに見える。それを批判するつもりはないが，大人，親が自らの体験を開いていくことによって，生 life のオルタナティヴを獲得していくことも重要だろう。家族が閉じられたシステムではなく，そこをステージとしながら様々な経験が交流しあう場でもあるとしたら，親（大人）の体験は当事者個人のみならず，そこにかかわり，連なる人々との新たな関係を開くことができるかもしれない。

もちろん，これは個別家族や個人単位で取り組むには少々負担が大きい。そのためには行政その他による公的なサポートも必要になってこよう。同時に，何が問題であるのか，そして，何が必要であるのかというニーズを掘り起こしていくことも重要である。その問題点の詳細な検討は今後の課題とし，ここでは実態の提示にとどめておくこととする。

【引用文献・参考文献】

(1) ここでは『社会学小辞典』(1997)有斐閣を参考にした。
(2) 進藤雄三「家族の概念と定義」，石川実編『現代家族の社会学』第2章，1997，有斐閣．
(3) 上野千鶴子(1994)『近代家族の成立と終焉』岩波書店．
(4) 牧野修也（2007）『農家後継者の「教育戦略」―農村市民社会を目指して―』ハーベスト社37頁．
(5) 北川隆吉編（2000）『有賀喜左衛門研究』東信堂58～59頁．
(6) 『第3回全国家庭動向調査結果の概要』〈http://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ3/NSFJ2003.pdf〉
(7) 佐々木美智子「現代家族の二つの個別化と親子関係」鈴木広監修『家族・福祉社会学の現在』2001，ミネルヴァ書房第6章89～111頁．
(8) 例えば次を参照。『「少年A」この子を生んで……』1999，文藝春秋．
(9) 村瀬学（1984）『子ども体験』大和書房
(10) 矢野俊（1981）『地域教育社会学序説』東洋館出版社132～138頁．

3.「農」の体験と教育効果
～「表象」としての自然と農業・農村体験学習～

神奈川大学 非常勤講師
牧野 修也

1. はじめに

現在，子どもの「育ち」と「教育」をめぐる議論の中で，「自然の中での育ち」が提起され，「自然の中での育ち」を図っていこうとする実践が高く評価されている。この問題提起は，「子どもの生きる力[1]」の育成の必要が叫ばれ，食農教育・体験教育の重要性が教育の側から示されたことが一つの契機となっている。と同時に，グローバル化が進む中で，農業の側からも国内農業を存続維持していくために，「農の多面的な機能」を積極的に打ち出す必要が生じてきたということも契機となっている。つまり，「自然の中での育ちの重要性」は，教育と農業の２つの営為に対する危機感が募る過程の中で，具体的な日程に乗ってきたということができるであろう。

もちろん，こうした「自然の中での育ち」が持つ意味は，近年，急に浮上してきた問題ではない。これまでも，「農」と人間性の関係の密接さは，繰り返し語られてきた。例えば，浜田陽太郎（1973）は，昭和２年の高等小学校の農村用の教科書をテキストにして，農村向けの教科書での農業・農村についての記述の特徴として，次の点を挙げている。

1．農業は着実・忍耐・堅実性を養う
2．農業は身体を健康にする
3．農業は家族愛を育てる
4．農村（田園）の自然は素晴らしいという言い方で農村を賛美する
5．農業は衣食住の源である
6．勤労を賛美し，その労が報われるのが農業である

もちろん，これらの記述の特徴は，浜田の指摘にもあるように，近代経済合理性に基づく合理性を追求することで，農業従事者が減少することを防ぐために，農村向けに作られた教科書の特質であって，全ての子どもに向けられたものではない。したがって，全ての国民が，農業・農村の価値を共有すべきであるという認識で書かれたものではない。しかし，農業の価値と精神的な側面が結びつけられることが，決して目新しい認識ではないこと[2]に着目しておく必要がある。

こうした認識の背景には，農と教育の連携が有効であるということが，自明的に存在していることがある。つまり，農と関わることによって，人間のパーソナリティの発達＝育ちに効果があることが，疑われることのない大前提として存在していることがわかる。だが，この大前提は妥当なのであろうか。また，農的世界で育った子どもは，「自然の中で育っている」ということが言えるのであろうか。これらの点を明らかにするため，本稿では，長野県Ｋ中学校区をフィールドとした調査データを手がかりに考えていきたい。

2.「農の教育的効果」の広がり

農と人間性の関係性が強いことを強調することは，先に見たように，これまでは，農村社会を存続・維持させるために使われてきたロジックであった。しかし，現在の農と教育との関係性を巡る言説の対象は，農村社会のみを射程にしているのではなく，都市社会をも含む全体社会に向けられたものであることに特徴がある。だが，農の意味を農村社会のみに限定せず，全体社会に対して問う動きは，1999年の食料・農業・農村基本法の制定によって「農の多面的機能」という概念が，制度的に位置づけられる以前から生じつつあった。

山村留学を提起した「育てる会」の青木孝安は，子どもの理想的な「育ち」のありようを，“子どもが，内なる自己の興味，関心，特性，個性に気づき，発見し，それを自己の力で，嬉々として育てていく，自己発展の姿（青木，2004，５頁）”とし，そのための理想的教育環境として，“（引用者補足：活動を行うために）ふさわしい活動場所とは，できるだけ観光資本の入っていない，ありのままの自然が残され，そして，農山漁村等の一次産業に従事する人々の暮らしがある所が理想である（青木，2004，６頁）”といった理由から，教育の理想空間としての農山漁村を挙げる。青木が考える農山村空間の教育的機能は，次の記述からもわかる。

子どもたちを，自然の中で生活する人々（いわゆる中山間地で農業等を営む人々）のなかに入れ，その人々と生活をともにさせることの必要性に気づいた。山間地で，一次産業を営む人々の暮らしには四季の自然が生きている。農作業に，食事に，祭りに，共同作業に，そして細やかな人情に，とあらゆる分野が自然と微妙にかかわっていることに驚く。この生活の中での自然と，子どもたちをかかわらせることによって，自然が宿す，いわば“自然の精”なるものが，子どもたちの心の扉を開くことに気がついた。（青木，2004，5－6頁）

この記述からは，「なぜ，山村留学なのか？」という問いに対して，「農山村＝共同作業＝細やかな人情＝自然との関わり」があるからという前提があっての山村留学であることがわかる。つまり，「農村生活＝自然の中の生活＝人間性の育成」という認識が，青木の議論の暗黙の前提としてあることがわかる。こうした議論の背景には，農山村空間を“われわれ日本人が共通に抱いている共感，憧憬，帰依といった情感が潜んでいる（青木，2005，4頁）”空間であるとし，農山村空間で生活をすることを通じて，“日本人の，かつて持っていた豊かな自然観，宗教観は，一見，近代の物質文明の中にあっても決して滅びず，日本文化の根底に流れ，それが今の親や子どもの心の奥底に流れていることを知る（青木，2005，7頁）”ことができるため，それらの体験を通じて，「近代の物質文明」の中でも「滅びず」に存在する「日本文化の根底」が現在においても存在していることがわかるとする青木の認識が根底にあるが，こうした認識は，先の浜田の指摘にもあるように，まさに都市とは人工的な人間性を疎外する空間であるのに対して，農村は自然と人間関係に恵まれ，人間性を涵養していく空間であるという旧来からの「都市－農村」間の対立図式を再現しているものであり，特に目新しい視点ではないことがわかる。

小池聡（1996）は，「農業・農村の教育力」が語られる背景に，教育現場における知識偏重教育・全体社会レベルでの都市化と工業化の急速な進展があるとした上で，教育の側の農業・農村への期待と農村地域の自治体の「農業・農村の教育力」への期待の政策的関連性を次のように述べている。

教育者たちは，教育の荒廃に対して一定の軌道修正をもたらすために，農業・農村が教材として積極的に活用できるのではないかと期待する。そこで，農業とは自然生態系のなかで働くことの実感が得られる営みであり，また農村とは伝統的な文化が継承され，相互扶助的な生活が営まれる場と捉えられる。一方，農村地域の自治体の側では，都会（特に東京や大阪といった大都市）の子ども向けの農業・農村体験プログラムが盛んに取り組まれるようになってきた。そこには，「農業・農村の教育力」をバネに都市との交流や，都市住民の地方移住を進めようという意図がある。（小池，1996，26頁）

小池の議論からは，「農の教育的意義」が，教育と地域振興を図りたい自治体の両者の「思惑」の狭間の中から見出されてきたとみることができる。このことは，「農の教育的意義」が，農の側から提出されてくる場合も同様である。根岸久子（2002）は，食農教育といった形で，「農」が教育の中に取り込まれてきた背景として，二つの政策転換が大きな意味を持っていることを指摘する。一つは，「生きる力」の育成を出発点とした“子どもの心身の課題が顕在化する中で知識詰め込み型教育から，教育の中に体験を組み込む方向に切り替えた文部行政の転換（根岸，2002，394頁）”という文部科学省の政策転換が行われたことである。もう一つは，農水省の側の政策転換である。平成12年度の『食料・農業・農村白書』で明らかになったように「農業と聞いても何も思い出せない子ども」が増加し，農業という産業の存続そのものに危機感を抱いたことに加えて，“農産物が国際的競争にさらされてくる中で，これまでは生産性や消費拡大の視点が色濃かった農政が，国民の食生活や食教育に目を向けはじめ（根岸，2002，394頁）”たことである。農水省の政策転換は，小中学校での農業体験の体験学習を積極的に推し進めることに繋がり，この延長線上で食料・農業・農村基本法のなかにも「体験学習の重要性」が取り入れられたと，根岸は指摘している。こうした関心の下，1998年に合意された「文部省・農林水産省連携の基本的方針」で，この方向が明確に位置づけられることになった。その意味を，根岸は「食農教育」と結びつけて，次のように指摘している。

実体験が希薄化している子どもの「生きる力」を育む上では，自ら探求する形で，科学知を身につける必要に迫られ農業の教育的機能に着目した文部省と，食教育や体験を通した農業理解と食料

自給率向上を意図する農林水産省が，それぞれの目的達成にとって農業体験への取組みが共同の課題となったためであろう。こうした事情が食農教育を生み出したといえる。（根岸，2002，395頁）

根岸の議論からも分かるように，これまでとは異なる政策を行って行かざるを得なくなった文部科学省と農水省が，新しい政策に転換し，それを遂行していく上で共有できるフィールドが「食農教育」であったのである。

小池と根岸の議論を踏まえて考えていくと，「農」と「教育」が繋げて考えられていく背景には，それぞれの政策を立てる主体が直面している存在意義の危機があることがわかる。つまり，「農の教育的意義」が，政策的に取り上げられる時，その政策を立案する主体の存続を賭けての部分が強く，ある意味では同床異夢的とも言える「似て非なる」部分を持つのである。

3. 豊かな「自然」とは？

(1) 自然は「教育的」な存在か？

ここまで「農と教育」の関係もしくは「自然と教育」の関係が，どのような言説として流通してきたのかをみてきた。これらの言説をみていくと，その関係性の捉え方には「自然は人間性の発達に寄与する」という一つの認識が自明性を持った「事実」として存在することが浮かび上がってくる。もちろんこれまで見てきたように，この認識自体が政策立案的に生み出されてきたという過程を考えれば，「自然は教育的である」という前提は，農村社会や農業といった「食農教育」を維持するためには不可欠な「装置」であるから，それを問い直す必要はないのかもしれない。

鬼頭秀一（1996）は，「自然との共生」という言葉が“自然を人間がコントロールでき，多少の余裕があるから自然を守ってやるということが暗黙に前提されている（鬼頭，1996，9頁）”という認識の下に，都市生活者の自然観に疑問を投げかける。

都会に住んで，近代的な生活を送っているものにとっては，通常の生活は，一見，「自然」から切り離されたところに成り立っている。例えばわたしたちの生活において「土」とのふれあいはどんどん疎遠になってきている。生活を便利にするために道路を整備する。砂ぼこりの舞い上がるようなデコボコの道も，車を運転したり生活に便利なように舗装していく。このように人間は今まで，人工的な自然を作り上げていくということを追求してきたし，現在でもわたしたちの多くはそれを願っている。わたしたちは，ますます自然から離れた，いわば「反自然」の生活を高度に作り上げようとしている。そのような生活をしているわたしたちが，生活の余剰部分では「自然」とのふれあいを求めていく。都市周辺の，「自然がまだ残っている」ところに行き，それを享受する。昨今のアウトドアブームの中では，都市住民の間で，「自然」はますます希求されている。反自然の生活の中に身をおき，「自然」からますます離れた生活をより高度に構築している一方で，「自然との共生」をうたいあげるとは，なんと逆説的であろうか。（鬼頭，1996，9－10頁）

鬼頭の指摘は，都市住民による「自然の共生」を目指す実践に対する批判である。しかし，先に見た「農と教育」の関係の議論は，小池が「教育者たちは，教育の荒廃に対して一定の軌道修正をもたらすために，農業・農村が教材として積極的に活用できるのではないかと期待する」と指摘するように，農業・農村は「農＝自然」といった前提に立って企図されて行われる教育的働きかけのためのツールとしての位置づけであり，その教育的働きかけの主たる対象は都市の子どもであり，農業・農村は「教育的装置」として扱われていかざるを得ない。言い換えれば，こうした教育的働きかけは，都市住民の側からみた「自然」観と「農業」観と「農村」観に基づいたものである。鬼頭が「都市住民の間で，『自然』はますます希求されている」と指摘するように，日常的継続性を持った居住ではなく，いずれは居住の拠点である都市に戻るという意味において，山村留学にしても体験学習にしても，農村社会や農業そのものを生活の基盤にしていくわけではない。もちろん，「農」の体験による教育的効果は，「農業とは自然生態系のなかで働くことの実感が得られる営みであり，また農村とは伝統的な文化が継承され，相互扶助的な生活が営まれる場」であり，そのような場であるからこそ「生活の中での自然と，子どもたちをかかわらせることによって，自然が宿す，いわば“自然の精”なるものが，子どもたちの心の扉を開く」という教育効果が期待できるという指摘があることも，先に見た。しかし，「農の教育効果」が語られるような状況にあるわ

けではないことを，小池（1996）は少年刑法犯検挙率を基準に各都道府県別にみたところ，農村部を多く含む県の検挙率が高いことを示し，農村部のみが問題構造が逃れているわけではなく，地方の中小都市や農村であっても変わらない状況となり，“農村地域の子どもは，物理的な空間上は農村にいたとしても，社会文化的には都市にいるのと変わらない事態（小池，1996，21頁）”が生じていると指摘している。実際，本論のフィールドにおいても「不登校[3]」に代表される「子どもの問題」が存在しており，都市における子どもの問題と異なっているわけではない状況があることを窺うことができる。

(2) 表象としての自然

「農」的なものと教育の連関が取り上げられる時，これまでも繰り返し述べてきたことではあるが，自然は人工物と対比的位置に置かれ，農村は都市と対置されていく。そして，農村＝自然という図式で捉えられていく。しかし，鬼頭が「人工的自然を作り上げていくと指摘したように，われわれの眼前に広がっている農村の風景は，必ずしも原生の自然ではない。徳野貞雄（2007）は，日本の農村風景の多くが人工的なものであることを，次のように述べている。

> 日本人のほとんどが，秋になると稲穂の上を赤とんぼが舞っているのが，日本の故郷の風景だと思っています。しかし，田んぼも畑も自然ではありません。山も自然ではありません。私たちの先祖（農民）が，営々と汗を流して大地と格闘した結果の産物です。稲穂も田植え草取りをしてしか実りません。（徳野，2007，24頁）

徳野は，日本人の原風景と言っても良い故郷の風景が農村風景であるとし，農村の風景と自然観がわれわれの歴史的生活の中で構築されたものであることを指摘する。

若林幹夫（2007）は，われわれの地域社会に対するイメージとは，歴史的に蓄積されてきたイメージが，メディア[4]を通じて再構築され，形成されるものであるとする。

> 地形，地名，風景，建物，碑文，掲示，文書，そして口伝えの伝承やガイドの案内などにより，村や都市，地域や国土は，伝承や記憶や記録がそこに埋め込まれ，読み解かれ，再想起され，更新されてゆくメディアとなり，舞台となる。その伝承や記憶や記録によって，私たちは過去のその土地に生き，暮らした人びととの間にあるつながりの中に自らを置くことになる。（若林，2007，88頁）

徳野と若林の指摘からも分かるように，われわれの地域イメージとは，現実の実態とともに，過去のイメージによって再生産されていく部分が強いことがわかる。小池（1996）は，親が地域体験学習を重要と考えるようになる要因として，「さまざまな地域体験をしながら育った自分自身の過去に対するノスタルジア」があるとする。小池によると，自分の子どもに地域体験を積ませようとする親の心理の背景には，過去の自分が積み重ねてきた経験と既に「失われてしまった」故郷への想いが基底となっているノスタルジアにあるという。小池の指摘に対して，K中学校区は中山間地であるから，「失われた」故郷という地域認識は当てはまらないという批判もあり得る。だが，小池の分析地方都市圏域という枠組みで，山形県酒田圏域・愛知県豊橋圏域・宮崎県都城圏域の中心都市と周辺農村部をフィールドとして行われたことを考えると，農村空間に居住する親であっても，体験学習が必要であると認識せざるを得ない状況が存在しているとみることができる。

この問題を，K中学校区の保護者へのヒアリングでの語りを手がかりにみていきたい。

保護者の1人であるKR氏は，子供たちを巡る自然環境について次のように語る。

> だんだん，私，初老の期から見てもやはり子供は近所に少なく……。それで川も近いし山も近いんですけど，山も今は手入れしなくて，人工林が多いもので，自然，ある程度……自然がいっぱいとか香りが近いと，何かそれは近いのは確かなんですね。だけどいざ山へ行って遊ぶというあれはないんですよね。山は手入れしていないから入れないんです。親から見てもキツネが出たりシカが出たりね。2～3年前まではイノシシが出たりして危ないから入ってはいけないと。1人2人になるとね。どうしても山はそばにあるけど，いざ入れないと。そうなると子供は1人2人で遊ぶということになるとうちの中で遊ぶ，うちの周りで遊ぶ。昔みたいにこういう木や，いろいろな……皆コンクリで囲まれていて自然にと……いうんですか，……どうしてもね，こういう魚がいるところまで。そうかといって小さい水路，昔の田んぼの水路や

なんかがあったんですけど，昔は土でできていたからドジョウがいたり，いろいろ，今，そうではないんですね。皆三面貼られているものでコンクリでできているものでね。そういうところでも遊べないと。川はあるし遊べない，山はあっても遊べない。そうかといって子供がたんといればそんなに遊びができるかと思えば，１人２人ではどうしても365日，子供，遊びには行くんですけど，そっちのうち行った，こっちのうち行ったくらいで終わってしまうと，そういう状態です。

KR氏の語りからは，K中学校区のような中山間地に所在し，山も川もあるように思われている環境であっても，山や川で子どもが遊ばないという現実があることがわかる。K中学校区には，山村留学を行う主体である「育てる会」の「学園」がある。ヒアリングの中で，学園の職員は「山村留学に来る子供たちが，地元のことを掘り起こす」と語ったが，山村留学に来る子供たちによって，元々，地元に存在していたものを地元の人びとに認識させていく[5]という効果を持っている。つまり，日常の居住空間が農山村であるからと言って，地元の人びとの日常的な生活のスタイルが伝統的なライフスタイルを踏襲しているのではなく，外部者が伝統的ライフスタイルを生活のスタイルとして追求することによって，伝統的なライフスタイルを外部者から模倣していくという状況が生まれてくるのである。

秋津元輝は，「農村空間の商品化[6]」の議論の中で，“農村景観へのまなざしの画一化が都市住民だけではなく，農村住民にも共有されている（秋津，2006，49頁）”と指摘するが，外部者である都市住民がイメージする農村生活の追求によって，“伝統な農村文化”が農村住民に担われていくという構造が生じてくるのである。また，このことは，生活空間としての自然である以上に，イメージとしての自然＝表象としての自然を作り出していくことになる。そして，この表象としての自然を体験するための「体験」とその欲求に応える農村社会という状況が生まれてくるのである。

4. K中学校生徒と保護者の地域社会への意識

(1) アンビヴァレンツな地域社会観

自然環境が「豊か」であると，されているK中学校区であるが，そこに暮らしている中学生にとって，K中学校区とはどのような地域社会と認識されているのであろうか。表3-1と表3-2は，K中学校２年生と３年生に対して行った質問紙による意識調査[7]の結果の一部である。表3-1で「地域社会の良いところ」，表3-2で「地域社会の悪いところ」を示した。

表3-1からも分かるように，「空気がおいしい」「水がそのまま飲める」「緑が多い」「自然が多い」といった理由から「自然環境」に高い評価を与えている生徒が多い。次に評価が高い項目も，人間関係が密接しているという理由から「人間関係」が良いと評価する生徒が多い。表3-3に示したように，地域社会で「自分に声を掛けてくれる人がいる」と認識している生徒が，93.9%と高いレ

表3-1　K中学校生が持つ自分の生活する地域社会の良いところ

A　人間関係	11	「親切なところ」「村の人はみんな優しい」「知らない人でも挨拶をすれば返ってくる」
B　自然環境	59	「空気がおいしい」「水がそのまま飲める」「緑が多い」「自然が多い」
C　行事	6	「昔の行事が残っている」「お祭り」
D　買物・遊び	0	
E　人口	3	「人が少ない」
F　社会環境	1	「事件事故が少ない」

表3-2　K中学校生が持つ自分の生活する地域社会の悪いところ

A　人間関係	3	「村長が大嫌い」「人間関係」「人があまり親切ではない」
B　自然環境	8	「山と畑ばかりで建物がない」「熊に出くわす可能性がある」
C　行事	3	「行事がつまらない」
D　買物・遊び	30	「店がない」「店が少ない」「ゲームセンターがない」「遊べるところが少ない」
E　人口	3	「人口が少なくて出会いがないこと」
F　社会環境	23	「町にお金がない」「無駄な建物が多い」「バスが少ない」「携帯の電波が届きにくい」

表3-3　地域社会で自分に声を掛けてくれる人（%）

たくさんいる	62.8
少しいる	31.1
あまりいない	6.1

ベルで数字を示していることからも分かるように，多くの生徒が地域社会の人との関係性があると認識しているとみることができる。また，地域社会の人びとに声を掛けられる人間関係についても，「息が詰まる」と感じるような閉鎖的意識を持っていないことがわかる。

しかし，地域社会の悪いところをみていくと，「買い物をするところがない」，「ゲームセンターなどの遊ぶ場所が少ない」といった買い物や遊び場に対する不満が最も多く，また，2番目に多い不満としては，「バスが少ない」「携帯の電波が届かない」といった社会環境への不満が多いことが分かる。そして，プラスの評価点であった「自然環境」に対しても，「山と畑で建物がない」，「熊に出くわす可能性がある」という不満がある。

自然環境が豊かであるということは，人工物が少ないということ，すなわち，人間が作ったものに対する不足感であり，生徒の不満は「自然が豊かである」ことの裏返しともいうことができる。もちろん，こうした状況があるから，青木が「理想の教育環境」として山村留学の地として選んだのであるが，都市的生活様式が浸透した農村社会[8]で生活する生徒たちにとっては，「理想の教育環境」ではなく不満の要因となっている。

一方，地域社会での人間関係についてみると，親の意識では全く異なる傾向が現れてくる。

表5は「子育てをする時に周りの人びとの支えがある」と認識している保護者を，表3-6が，「地域社会で生活に煩わしさを感じることがある」と認識している保護者の数を示したものである。

68.6%の人が「周りの人びとの支えがある」と考えている一方，53.5%の人が「煩わしさ」を感じていることがわかる。表3-7からも分かるように，「支えられていると感じながらも，煩わしさも感じる」人がいると見ることもできる。しかし，それとともに，「人びとの支え」があったと認識していない人ほど，「煩わしさ」を感じているという傾向も見ることができる。このことは，「煩わしい」から「支えられた」と思えないのか，もしくは，「支えられた」と感じられないから「煩わしい」のかが問題となってくる。

この問題を考える上で手がかりとなる「語り」が，保護者へのヒアリングの中にある。MMさんは，若い年代の母親が「母親サークル」を作って，母親同士の繋がりを作っている現在と自分たちの年代との違いを次のように語っている。

> もし私たちがやりたいと思っても，結局，おしゅうとさんと一緒にいるとそれができないわけです。私の場合は本当にうちで商売をやっていましたし，子供がいても，子供にも言ったことがあるけれど，私は乳母車を突いて子供を散歩に連れて歩いたことなんかないぐらい，うちで事業をやっていると何が忙しいと言われてもちょっと言えないんですけども，そのくらいなので，ではお茶会しようとか，何かしようといっても，そんなふうには出ていかれないし，気兼ねもありますよね，ある程度。今になると，おばあちゃん，こうだからお願いねと言えるけど，最初の何年間というものはちょっとそういうのは言い出せないし，学校へ行くのにもやっぱり気兼ねというのもあったし，ではあそこでお茶をやるから行くんだよというのはちょっと，そういうのが言い出せないというのが世代というか，それはうちの体質というか，あると思いますよね。

表3-4　地域社会で生活していて「息が詰まる」と感じることがある（%）

とてもそう思う	1.3
少しそう思う	20.8
あまり思わない	46.3
まったく思わない	31.5
合計	100

表3-5　子育てをする時に周りの人びとの支えがある（%）

とてもそう思う	23.3
少しそう思う	45.3
あまり思わない	24.4
まったく思わない	7
合計	100

表3-6　地域社会で生活に煩わしさを感じることがある（%）

とてもそう思う	10.5
少しそう思う	43
あまり思わない	39.5
まったく思わない	7
合計	100

表3-7　人びとの支え×煩わしさ（%）

		煩わしさ			
		よく感じる	時々感じる	あまり感じない	全く感じない
人びとの支え	とてもそう思う	0	21.6	29.4	33.3
	少しそう思う	33.3	51.4	41.2	50
	あまり思わない	44.4	24.3	20.6	16.7
	まったく思わない	22.3	2.7	8.8	0
合計		100	100	100	100

MMさんの「語り」から浮かび上がってくるのは，舅姑に代表される「家」の問題である。もちろん，「今になると，おばあちゃん，こうだからお願いねと言えるけど，最初の何年間というものはちょっとそういうのは言い出せない」と語っているように，現在ではそうではないと語っているものの，最初の頃は気兼ねが存在しているのである[9]。かつて，竹内利美（1969）が，東北農村をフィールドに「性別年序」原理による「家」と「村」が，農村社会の基本的な仕組みの一つであると指摘したが，地域社会の中で生きる中で，嫁と舅姑といった「家」の問題が，最初に直面し絡め取られる問題であったとしても不思議ではない。特に，K中学校区は，現在においても，マケといった同族集団が地域社会の中で精神的に重要なシンボルとなっているだけに，「家」の問題が場合によっては大きな負担となっていた可能性は否定できない。

(2) 非「農村社会」的生活志向と進路

先に，K中生が捉える地域社会のK中学校区の「良いところ」と「悪いところ」を見たが，地域社会の個別の問題についてはどのように捉えているのだろうか。本研究における質問紙調査では，「家が都市にあれば勉強に有利だと思う」「遊び場として不満はない」「楽しい行事がたくさんあると思う」「息が詰まることがある」の4つを指標として見た（表3-8）。これらから分かることは，「勉強」や「息が詰まる」と感じてはいないが，「遊び場」や「楽しい行事」には不満を抱いている生徒が，50%以上であるという現状があることがわかる。

「買い物」や「遊び場」に対する不足感や不満感は，中学生の中で強いことは表3-2で見た通りである。「行事」については，どうであろうか？　表3-11を見ても分かるように，行事ごとや性別によるばらつきはあるが，男女ともに地域の行事に参加していないわけではない。「夏祭り」は半数以上が参加しており，「伝統行事」にも半数前後が参加している。その他の行事については参加度の低さが目立つが，性別に大きな差があるわけではない。これらの数字からは，男女ともにほぼ同じような行事参加度であることがわかる。もちろん，行事ごとにばらつきがあるが，「楽しくない」から「行事に参加しない」のではなく，「行事に参加」していても「楽しくない」と感じている生徒が50%以上存在している。

それでは，K中学校区という地域社会に対して不満を抱いているのはどのような生徒なのであろうか。「生徒の地域意識」を性別で見たのが，表3-10，表3-11，表3-12，表3-13である。性別で見た場合，「遊び場として不満がない」と「楽しい行事がある」のみが統計的有意さを示しているが，女子の方が，地域社会としての

表3-8　生徒の地域意識（%）

	勉強	遊び場	行事	息が詰まる
とてもそう思う	8.1	13.4	8.8	1.3
少しそう思う	30.8	30.2	35.8	20.8
あまり思わない	49.0	41.0	39.9	46.3
まったく思わない	12.1	15.4	15.5	31.5
合計	100.0	100.0	100.0	100.0

表3-9　性別行事参加度　（%）

	男	女
子ども会	1.4	3.9
スポーツ少年団	8.2	5.3
ボーイスカウトなど	0.0	0.0
夏祭りなど	58.9	53.9
宗教行事	0.0	5.3
伝統行事	52.1	48.7
清掃活動	12.3	13.2
ボランティア	2.7	1.3
学校行事	4.1	3.9
公民館行事	12.3	9.2
文化的行事	17.8	28.9

表3-10　性別×家が都市にあれば勉強に有利（%）

	勉強				合計
	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	
男	2.7	37.0	47.9	12.3	100
女	13.2	25.0	50.0	11.8	100

表3-11　性別×遊び場として不満はない（%）

	遊び場				合計
	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	
男	16.4	42.5	30.1	11.0	100
女	10.5	18.4	51.3	19.7	100

カイ2乗検定　1%で有意

表3-12　性別×楽しい行事がたくさんある（%）

	行事				合計
	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	
男	11.1	44.4	29.2	15.3	100
女	6.6	27.6	50	15.8	100

カイ2乗検定　5%水準で有意

表3-13　性別×息が詰まることがある（%）

	行事				合計
	とても思う	少し思う	あまり思わない	全く思わない	
男	2.7	19.2	47.9	30.1	100
女	0	22.4	44.7	32.9	100

表 3-14　将来の希望生活地（%）

将来の希望生活地	地元一貫	3.4
	都会	20.1
	Uターン	17.4
	非地元非都会	7.4
	未定	51.7
	合計	100.0

表 3-15　将来の希望生活地×勉強有利感の有無（%）

		勉強有利感有無	
		あり	なし
将来の希望生活地	地元一貫	1.7	5.5
	都会	36.3	6.8
	Uターン	24.1	15.1
	非地元非都会	6.9	9.6
	未定	31.0	63.0
	合計	100.0	100.0

カイ２乗検定　　1%水準で有意

表 3-16　将来の希望生活地×遊び場満足感の有無（%）

		遊び場満足感有無	
		あり	なし
将来の希望生活地	地元一貫	6.2	1.6
	都会	12.3	18.0
	Uターン	18.5	21.3
	非地元非都会	10.7	6.6
	未定	52.3	52.5
	合計	100.0	100.0

表 3-17　将来の希望生活地×行事満足感の有無（%）

		行事満足感有無	
		あり	なし
将来の希望生活地	地元一貫	4.5	3.4
	都会	15.2	18.6
	Uターン	18.2	22.0
	非地元非都会	10.6	5.1
	未定	51.5	50.8
	合計	100.0	100.0

表 3-18　将来の希望生活地×息詰まり感の有無（%）

		息詰まり感有無	
		あり	なし
将来の希望生活地	地元一貫	0.0	4.3
	都会	33.3	17.4
	Uターン	3.0	18.8
	非地元非都会	18.2	4.3
	未定	45.5	55.2
	合計	100.0	100.0

カイ２乗検定　　1%水準で有意

K中学校に対して否定的評価を下していることがわかる。特に，遊び場については，男子の約6割が「遊び場に不満はない」と答えているのに対して，女子の約7割が「遊び場に不満がある」と答えている。行事についても，男子の55%が「楽しい行事がある」としているのに対して，女子の65%が「楽しい行事がない」と答えている。つまり，K中学校区で行われている行事は，男子にとっては楽しいものであっても，女子にとって参加はしていても楽しくないものとして認識されているのである。

このことは，「遊び場」についても同様である。K中学校区は中山間地であり，山も川もあり，「自然」に恵まれて遊ぶところに恵まれているように思える。しかし，先に挙げたKR氏の発言からも分かるように，子どもが遊ぶという自然環境ではない。人間によって作られた「自然」は，人間による整備がされなくなった現在，鬼頭（1996）が「驚異の対象」とするように，人間の立ち入りを拒否する存在であり，「遊び場」としては認識されていないのである。もちろん，小学生の保護者でもあるSK氏が，「小学校の裏手の方に裏山があるんですけれども，そちらの方を良い程度でちょっと整備しまして，それで道というか，道なき道をつくりまして，それで山頂の方にハンモック的な，木を利用して，上にちょっと遊べるような場所をつくったり，そういったことは毎年毎年，年一回ずつですけれども，PTAの方で整備してやったりはしています」と語るように，原生的な自然ではなく，人間によって整備された「自然」が存在していないわけではない。しかし，中学生の女子にとっては，「裏山で遊ぶ」という選択肢はないと言っても良いだろう。中学校教員へのヒアリングの中でも，「女の子は買い物とかの方の関心が強いでしょうけれど，私のクラスの男の子たちは，今日はどこに釣りに行ったとかどこに釣りに行くとかという話をよくしてきますよ。」という発言があったように，男子生徒については外遊びをしても[10]，女子は「買い物」＝遊びという意識があることを示唆している。

こうした地域社会への意識は，将来の生活地の希望にどのような関係があるのだろうか。地域意識と将来の生活地の関係を見ていきたい。将来の希望生活地については，「ずっと地元で暮らしたい（地元一貫）」「都会で暮らしたい（都会）」「都会で暮らした後，地元で暮らしたい（Uターン）」「地元でもなく都会でもないところで暮らしたい（非地元非都会）」「まだ決めていない（未定）」

とした。

表 3-14 から分かるように，51.7%が「未定」のため，将来的には未確定の部分が大きいが，調査時点では，最終的に地元で暮らしたい人[11]が 20.8%，地元以外で暮らしたい人が 27.8%と，地元以外で暮らしたい人が若干上回っている。また，将来的には地元で暮らしたいが，一度は都会で暮らしたいと考えている人が 17.4%がおり，都会に暮らすという経験を望んでいる人は 37.5%いるということがわかる。

「将来の希望生活地」と「地域社会への意識」と関係で，統計的優位性が見られるのは，表 3-15 の「勉強の有利感」と表 3-18 の「息詰まり感」である。表 3-15 を見ると，「都会の方が勉強の面で有利である」と感じている人の 60.4%が「都会」志向であり，言い換えれば，「都会」に出るためには「勉強」が大きな役割を果たし，そのためにはＫ中学校区で暮らしていることは不利になると感じていると見ることができるであろう。一方，表 18 の「息が詰まる」ことがあると答えた者の半数が「地元」以外で生活をしたいと答えている。これは，「息が詰まるから，他の土地で暮らしたい」と考えることであり，このこと自体は，ある意味では当然のことであって，不思議なことではない。

それでは，保護者にとっての地域社会に対する意識はどうであろうか。保護者の地域社会に対する意識の指標としては，表 3-19 にあるように「都市部と比較して，学校・塾・予備校などお子さんの教育や進学の面で，お住まいの地域に不満はありますか？(教育環境の不満)」・「犯罪の発生，遊び場の危険性，環境の汚染など，お子さんを育てる環境として，お住まいの地域の安全性に不安がありますか？(安全性の不安)」・「都市部と比較して，お住まいの地域の自然環境はお子さんを育てるのに良い環境だと思いますか？（自然環境の良さ)」・「お住まいの地域の行事には，お子さんが楽しんで参加できるものが多いと思いますか？（子どもが楽しめる行事)」・「お子さんを育てるとき，地域の人々がいろいろ支えてくれて良かったと思いますか？（人びとの支え)」・「あなたのご家族やお子さんのことについて，お住まいの地域の人々が言うことや話すことが，煩わしく感じられることはありますか？（地域の煩わしさ)」・「子育てや子どもの進学などを考えると，できればお住まいの地域からよその地域に移りたいと考えることはありますか？（他地域移転希望)」の 7 項目である。

表 3-19 からは，多くの保護者が，地域社会としての

表 3-19　保護者の地域社会評価（%）

	ある	ない
教育環境の不満	60.0	40.0
安全性の不安	40.7	59.3
自然環境の良さ	86.0	14.0
子どもが楽しめる行事	53.5	46.5
人びとの支え	68.6	31.4
地域の煩わしさ	53.5	46.5
他地域移転希望	44.2	55.8

表 3-20　教育環境×自然環境（%）

		自然環境の良さ		合計
		ある	ない	
教育環境の不満	ある	82.4	17.6	100
	ない	94.1	5.9	100

表 3-21　教育環境×地域転居希望感（%）

		地域転居希望感		合計
		ある	ない	
教育環境の不満	ある	62.7	37.3	100
	ない	17.6	82.4	100

カイ２乗検定　　１%水準で有意

Ｋ中学校区を，「子どもに安全」で「自然環境が良」く，「人びとの支え」がある地域社会と認識していることがわかる。しかし，その一方で，「教育環境」については不満を持っている人が 6 割いることがわかる。

つまり，「教育環境」には不満があるが，その他のことについてはおおむね満足している保護者像が浮かび上がってくる。このことは，表 3-20 を見ても分かるように，「教育環境」に不満を持っている保護者であっても，統計的有意さは出てこないが，「自然環境」には満足しているのである。しかし，そうではあっても，表 3-21 を見るとわかるように，「教育環境」に不満がある場合，「地域転居希望感」が強いという傾向がある。つまり，保護者にとっては，子どもの進学に不利だと感じる場合，自然環境が良いと感じていても，進学の教育のために転居したい[12]と考えているのである。

もちろん，ヒアリングの中では，偏差値や進学については，親子ともに強くは意識してはいないという声がほとんどであったが，保護者の中には子どもの進学のための転居を考えている人も少なくないのである[13]。

5. まとめ

本論では，長野県K中学校区の中学生とその保護者への質問紙調査とヒアリング調査をベースに，自然環境と子どもの「育ち」の関係を論じてきた。これまで，教育を巡る議論の中で，自然環境の豊かさ＝教育環境としての理想といった形で論じられてきた。しかし，そのベースになってくる「自然」認識そのものが都会住民の側のイメージによって構築されてきている部分が強く，農村住民が身体化している「自然」感と異なることも多く，農村住民の生活感覚とは必ずしも一致していないことを論じてきた。だが，このことは，農村・農業体験の意義を単純に否定しているわけではない。ただ，ここで自覚的に認識しなければならないのは，秋津元輝（2007）が，"農業は食料生産を行うので重要だ，とか私たちの原風景としての農村など，農業や農村を本質主義的に評価してしまうと，いわゆる農本主義の隘路に迷い込んで抜け出せなくなる。そうではなく，その場所でしか体験することができない身体性の問題として評価するとき，農業や農村を起点とする新しい価値が生まれてくるように思う（秋津，2007，173頁）"というように，単純な農村・農業賛美とそれに基づく教育実践ではなく，地域住民の身体に定着した身体性を踏まえての教育実践の方法を見出していくことが肝要となるのである。

【注釈】

(1) 「生きる力」について，文部科学省は，"これからの変化の激しい社会においては，学校で学んだ知識のみで社会生活を営むのではなく，子どもたち一人一人が自ら個性を発揮し，困難な場面に立ち向かい，未来を切り拓いていく力が求められます。このために必要となるのは，自ら学び自ら考える力などの「確かな学力」，他人を思いやる心や感動する心などの「豊かな人間性」，たくましく生きるための「健康や体力」などの「生きる力」"としている（文部科学省「確かな学力」2008年2月2日アクセス http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/korekara.htm）。この記述からも分かるように，「生きる力」とは，「確かな学力」「豊かな人間性」「健康と体力」の3つの総合としてのものである。「農」に対する期待は，「豊かな人間性」の育成に関連して論じられていっている。

(2) 浜田（1973）は，"更に最近では，都市の公害，大衆社会観からの離脱という意味から，人間性回復の職業・農業とか，緑の公害のない生活といういい方もなされている。それはかつて都市と田舎を対置させた現代版ともいえるだろう。(浜田，1973，19頁)"とし，都市と農村の関係性が戦前戦後を通じて変化をしていないという理解を示している。

(3) K中学校でのヒアリングでは，小規模の人数の小学校を卒業した生徒が，1町2村による組合立の中学校に進学したことによって，これまでとの環境と異なり過ぎることから，環境に適応できず，「不登校」になってしまうという事例があるという指摘があった。

(4) 若林は，メディアを新聞・テレビ・ラジオといったものだけを示しているのではなく，"村落や都市，国土などの空間やそこに流れる時間をも，ある種の"メディア"として理解すること（若林，2007，87頁）"という意味で用いている。

(5) こうした事例は，実は珍しいことではない。かつて，筆者が調査を行った長野県下伊那郡のある村においても，新規来住者の子どもの方が，元々の村の子供たちよりも，この村の子どもらしいという話が，ヒアリングの中で出てきたことがある。

(6) この場合の「農村空間の商品化」とは，農村空間にある土地や建造物等を実際に売買するという意味ではなく，都市住民の側から「農村らしさ」を規定され，都市のニーズに応えることができた農村のみが，都市－農村交流の対象として選ばれるということを意味している。「農村空間の商品化」についての詳細は，日本村落研究学会編 2005『年報村落社会学研究　消費される農村』を参照されたい。

(7) 質問紙調査については，2006年6月13日に学校経由

で実施した。調査実施については，生徒（2年5クラス，3年3クラス，計149名）は学級活動の時間に，学級担任と調査者が同席する形で実施した。調査項目としては，質問紙調査については，家族の構造と意識，地域の社会関係と地域イメージ，子どもの進路と職業観，規範意識の4つを柱として実施した。なお，調査票の作成にあたっては，個人のプライバシーに立ち入る項目が多いため，個人情報保護の観点および調査対象者への社会的状況への配慮もあり，質問紙作成の段階から学校，教育行政担当者と綿密な打ち合わせを行った。また教職員，保護者の意見を聞き取り，調査表作成の際に，それらの意見を最大限に反映させた。

(8) 大内（2007）が述べるように，農村社会と分類される地域社会であっても，都市化・兼業化・混住化が進んでおり，旧来の農村生活はメディアによって生産されたものになっている。

(9) 嫁という立場で，ヒアリングという「場」に出て，こうした話題について話すことができるという状況が，農村社会学における女性の社会的立場についての研究の知見にもあるように，現在では一般的な状況にも考えることができるが，こうした「場」に出ることができないと状況にある人が対象者の中にいる可能性も否定できない。

(10) しかし，町の子ども育成事業に携わる社会教育課の職員のARさんに，この話について聞いたところ，「外で遊ぶ子がいないわけではないが，中学校の近くの千曲川とか，一つ尾根を超した相木川などは危険地域に指定されており，子どもたちだけで行くとすれば相当元気な一部ではないか。経験上，自然の中で遊ぶ子どもは一部に限られており，皆が，というわけではない。逆に，そのような元気のある子は目立つから，そういう印象を受けるのではないか。」と話している。

(11) ただし，保護者へのヒアリングでは，「地元に仕事がないような状況で，子どもに戻ってこいとも言えないし，日々の自分の家の生活を守ることにいっぱいいっぱいで，地域づくりをするだけの余裕もない」という話をする人もいた。また，吉川徹（2001）は，県内における就職口の受け皿が小さいため，進学等で一度県外に流出した若年層が「Uターン」就職をしにくい県の一つとして，長野県を挙げている。吉川の指摘を踏まえると，県外流出した若者がUターンを志向しても，その希望が叶えられる可能性が高くないということができるであろう。

(12) 小池聡（1996）は，都会の親たちは，農村の自然環境を評価しても教育環境としては評価しない傾向があると指摘している。

(13) ただし，この問題については，ヒアリングの中にも出てきたが，高校に通学する時の交通の便の問題もあって，同じ学区内で移動するという選択肢である可能性もある。

【引用文献・参考文献】

- 青木孝安（2000）「自然体験は子供たちに「生きる力」を蘇らせる ——山村留学の実践から——」農林水産長期金融協会／農林漁業金融公庫『公庫月報』591号．
- 青木孝安（2004）「人生歴に今日を観る ——青少年の自然活動の原点」青少年問題研究会『青少年問題』606号．
- 青木孝安（2005）「山に，川に，森に神様がいる－農山村体験と親と子どもと私の思索」．
- 青木孝安（2006）「学校教育系の山村留学と社会教育系の山村留学」育てる会『育てる』451・452号．
- 秋津元輝（2007）「カルチュラル・ターンする田舎 ——今どき農村社会研究ガイド——」野田公夫編『生物資源問題と世界』京都大学学術出版会．
- 阿部英之助（2004）「農業高校における農業教育の多元化と地域社会 ——山形県庄内農業高校の事例を通じて——」日本村落研究学会編『村落社会研究』21．
- 大内雅利（2007）「都市化と村の変化」日本村落研究学会編『むらの社会を研究する ——フィールドからの発想——』農山漁村文化協会．
- 大野晃（2002）「四万十川と流域環境保全」木平勇吉編『流域環境の保全』．
- 大野晃（2005）『山村環境社会学序説』農山漁村文化協会．
- 吉川徹（2001）『学歴社会のローカル・トラック ——地方からの大学進学』世界思想社．
- 鬼頭秀一（1996）『自然保護を問い直す ——環境倫理とネットワーク』筑摩書房．
- 小池聡（1996）「農村における子どもの遊びと『地域体験学習』に関する調査報告」農村計画学会編『農村計画学会誌』15巻1号．
- 竹内利美（1969）『家族慣行と家制度』恒星社厚生閣．
- 立川雅司（2005）「ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容」日本村落研究学会編『年報村落社会学研究 消費される農村』41．
- 田仲康博（2007）「風景－エキゾチック・オキナワの生産と受容」佐藤健二・吉見俊哉編『文化の社会学』有斐閣．
- 徳野貞雄（2007）『村の幸せ，都会の幸せ ——家族・食・暮らし——』NHK出版．
- 根岸久子（2002）「学校教育と食農教育 ——学校給食の多様な可能性を食農教育に活かすために——」農林金融2002年6月号．
- 浜田陽太郎（1973）『日本近代農民教育の系譜』東洋館出版社．

・原山浩介（2005）「「地域活性化」言説における多重な消費の構造　――優良事例として消費される農村」日本村落研究学会編『年報村落社会学研究　消費される農村』41.
・牧野修也（2007）『農家後継者の「教育戦略」　――農村市民社会を目指して――』ハーベスト社.
・矢部賢一（2005）「体験される農村　――ポスト生産主義の視点から――」日本村落研究学会編『年報 村落社会学研究　消費される農村』41.
・若林幹夫（2007）『社会学入門一歩前』　NTT 出版.

4. 住民の地域活動と地域認識
～子どもの生育環境をめぐって～

明治学院大学 非常勤講師
春日 清孝

1. 住民の地域活動の現状

既に2章3節で検討した内容の概要だけしておく。

（1）親の地域活動

1）特にPTAや学校，保育園関連の，子どもや子育てに関連する行事についての参加率が高い。
2）お祭りや正月の行事など，慣習的に行っているものについては参加率も60%前後を維持している。
3）しかしながら，自治会や役員会，美化運動，公民館の行事など，ある種制度的に関わる行事については参加率が50%を下回る。
4）また，防災や防犯活動など，地域の安全に関わる行事についても参加率はそれほど高くない。しかし，これについては参加意思を持っているものも多く，参加意欲については14%となりボランティアについで高くなっている。
5）地域の子どもたちの活動支援については，こちらも参加率はボランティア活動についで低くなっているが，参加意志については12.8%と第二位の数値となっている。
6）ボランティア活動や自主的なサークル活動については，現在参加している比率が最も低いが（12.8%），参加意志については全ての項目の中で最も高い20.9%を示した。

以上を要約すると，特に学校や幼稚園，保育所に関わる行事については参加率が高く，その実態と意識との間にギャップもあまり見受けられないが，子育てや防災・防犯，ボランティアについては，参加したいという意志はあるものの，実際には参加できていないというギャップがあるといえる。

参加意志のみに着目すると，地域活動におけるフォーマルな側面よりも，比較的インフォーマルな活動への参加意志が強いように見える。子育て環境としての地域について聞いた設問で，地域の支援評価と煩わしさについても聞いた。そこでは，地域住民が支えてくれたことについて68.6%がプラス評価を下しているが，同時に，煩わしさについても53.5%がそれを感じるというアンビバラントな結果が出ている。このことを，地域活動への参加希望と重ね合わせると，地域社会へ積極的に関わるというよりは，自身と自身の子どもや家族の生活に関わる範囲で地域活動に参加する傾向が散見されないか。仮にそれをプライバタイゼーションの傾向と読み替えるならば，地域活動への参加傾向から共同性の減衰を予見できるかもしれない。

（2）子どもの地域活動

次に，子どもたちの地域活動への参加状況を概略的に記す。

1）祭りや伝統行事，文化行事など，特に子どもたちが主体になるものについては参加率が高い。
2）遊びの要素が薄れる行事については，それが学校であれ公民館であれ，参加率が極端に下がっている。
3）対象者が中学生ということもあるので，一概には言えないが，子ども会やスポーツ少年団についても参加率が低く，その後に続く地域の受け皿は基本的に存在しない。

要約すると，私的で遊びの要素が強いものには参加する機会が多いが，このことが，それ以外の地域行事や活動への参加へと連結していない傾向があるということである。言い換えれば，より豊かな社会化と自己形成を行うために，「地域社会」に関わる関わり方が限定されているということではないか。親と同様，子どもも私的（プライベート）にのみ地域に関わっているということができないだろうか。

子どもたちは，遊びの要素が強いものや楽しい行事にのみ参加していれば良いのだろうか。彼らを「子ども」としてではなく，地域社会の一員として，より重層的，多層的に「地域社会」に関われるような受け皿づくりを

構想することも可能ではないだろうか。

2. FAに見る親の子育て環境評価

親は現在住んでいる対象地についてどのように感じているか。それぞれ,「子育て環境として,お住まいの地域の一番良い点は何ですか」,「子育て環境として,お住まいの地域で不満に感じる点は何ですか」という設問のもと,自由記述で回答してもらった。その内容を,「その他」を含めて,それぞれ6つのカテゴリーに分類した。

表4-2-1　良い点カテゴリー　FA回答例

●自然環境

自然が多い／自然環境がとても良い／自然に恵まれている

●共同性

地域の人が皆知り合い／近所の人が子どもを知っている／子供同士の縦のつながりが密で,年上の子から年下の子へと受け継がれていくものがあり,子供にとってとても良かった／子どもに目が届く／近所の人も見守ってくれること（アドバイスをしてくれたり,手を貸してくれたりすること）

●安全

交通量が少ない所なので,安心して外で遊ばせることができる／都市部に比べて犯罪が少ない

●教育環境

比較的小さなクラス単位で授業を受けられる／子どもの数が少ない分,学校で一人一人が良く見てもらえる

●のんびり

静かなこと／のどか

表4-2-1　良い点カテゴリー

		度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ	有効ﾊﾟｰｾﾝﾄ	累積ﾊﾟｰｾﾝﾄ
有効	自然環境	37	24.8	58.7	58.7
	共同性	11	7.4	17.5	76.2
	安全	2	1.3	3.2	79.4
	教育環境	5	3.4	7.9	87.3
	のんびり	6	4.0	9.5	96.8
	その他	2	1.3	3.2	100.0
	合計	63	42.3	100.0	
欠損値	ｼｽﾃﾑ欠損値	86	57.7		
合計		149	100.0		

表4-2-2　不満な点カテゴリー

		度数	ﾊﾟｰｾﾝﾄ	有効ﾊﾟｰｾﾝﾄ	累積ﾊﾟｰｾﾝﾄ
有効	交通の便	17	11.4	29.3	29.3
	過剰な共同性	6	4.0	10.3	39.7
	子どもの少なさ	8	5.4	13.8	53.4
	子どもの居場所の少なさ	8	5.4	13.8	67.2
	学習環境	11	7.4	19.0	86.2
	その他	8	5.4	13.8	100.0
	合計	58	38.9	100.0	
欠損値	ｼｽﾃﾑ欠損値	91	61.1		
合計		149	100.0		

表4-2-2　悪い点カテゴリー　FA回答例

●交通の便

交通事情が悪い／交通の便が悪いので,習い事や友人の家に行くのにも親が送り迎えをしなければならない／中学・高校と進学するにつれ遠くなるので,子供の負担はもちろんの事,交通費等親の負担も大きい

●過剰な共同性

人間関係がうるさい／人のことを干渉しすぎる／うわさ話がすき／他人の事を干渉したりウワサすることが多い／小さな町なので,すぐに人のことに対して噂になったり,いつも何かないか聞きたがる性格の人が多い

●子どもの少なさ

子どもが少ない／子ども数が少ないため,人間関係に変化がない／子ども数が少ないため,友達が少ない

●子どもの居場所の少なさ

公園など遊ぶ場所が少ない／児童館,図書館,公園が少ない

●学習環境

学校,文化施設,情報が乏しい／塾が少ない／学力の差／文化的なこと（コンサート・演劇など）に出会う機会が少ない／色々な経験ができる機会が少ない（塾,講演会,博物館,コンサートなどがほとんどない）

●その他

PTA活動など役員任せのところが大きく,ほとんどの役員がクジなどによって決められるところ／小さい子どもにとって恵まれているが,中・高生になるとやりたいことができなくて恵まれていないと思う

今回の調査で見る限り,良い点は自然環境をあげるケースが多く,それは実に有効パーセントの5割を超える。良い点で,次に多く挙げられているのは共同性である。子どものことを一緒に見てくれたり,互いに助け

表 4-2-3

	タイプ	良い点	悪い点
①	自然⇔交通	自然が多いこと	交通事情が悪い
②	自然⇔交通	四季の自然と生活がとけあっており良いと思う	公共交通手段が少ないため，通学時の送迎が必要となる
③	自然⇔過剰な共同性	自然環境が良い	人間関係がうるさい
④	自然⇔過剰な共同性	自然がたくさんある	人の家のことを干渉しすぎる
⑤	自然⇔子ども数	自然	子供が少ないため（子供の）人間関係（友人関係）に変化がない
⑥	自然⇔居場所	自然・緑が多い	子供の遊べる場所（公園など）がない
⑦	自然⇔居場所	自然に恵まれている	子供が安心して遊べる屋外施設がない
⑧	自然⇔居場所	自然が多い	施設が少ない，通学路のキケン箇所が多い，大きい公園が近くにない（子どもの遊ぶ所が少ない）

合ったりしてくれるような環境が良い点として挙げられているが，一方でそのような環境をネガティブに捕らえる傾向があることも見逃せない。

不満な点については，交通の便を挙げるものが多いが，例にも挙げたように，それぞれに相応の理由が示される。

ところで，良い点を自然環境としたケースで悪い点をどう判断しているか，それを対比して示したのが表 4-2-3 である。

自然環境とは必ずしも安全なものではなく，また便利さとも時に対立する要素を持っている。また，自然環境は常に人間に対して優しいものではないため，時にその中を生き抜くために相互扶助という形での共同性を必要とすることも多い。同じ意味で，自然の中で生活するために，同年齢層にとどまらない多世代にわたった関係性が醸成されることもありうる。自然が豊かであるということは，裏を返せば環境の破壊要因が少ないことを意味し，ある種の「不便さ」を前提とする。

それではここで語られている自然環境とは何であるか。自分たちの生活環境の点描として，または遠景として，生活に支障をきたさない範囲において，周囲を彩る「風景」なのかもしれない。

3.「子どもの遊び」と「自然」の抱えるアポリア

上記のような地域参加の相を取る親によって，当該地域はどのように評価されているだろうか。

本調査地における「自然環境」についての評価は極めて高く，プラス評価では 86%にのぼっていた。また，「子どもが楽しめる行事」については 44.2%がそのような行事が多いと感じ，また，「安全面」については 60%弱が「不安はない」としている。

しかしながら，その後の聞き取り調査において明らかになりつつあるのは，自然があるといってもその中での遊び方を知らない，遊ぼうとしない子どもと，安全性に注目することで外で遊ばない子どもを容認してしまう親の姿であった。

それでは親は，どのような基準によって地域を判定しているのか。

（1）親の自然観

まず，親の自然観だが，先の報告でもあったようにそれが表象としてのものであるならば，それがどのような経験に基づくのかを検討してみたい。なお，ここでの選択肢は「都市部と比較して，お住まいの自然環境はお子さんを育てるのに良い環境だと思いますか？」であった（表 4-3-1）。

単に移住経験の有無を比較しただけでは有意差は明らかではないが，どこに居住したかという経験とは関連する。当該地域から遠く離れて居住した体験を持つ人ほど，この地における自然環境を肯定評価する傾向が高い。

（2）親の安全性意識

次に，危険性についてはどのようにみなしているのだろうか。調査票上では「犯罪の発生，遊び場の危険性，

表 4-3-1　最長居住と自然環境のクロス表

			自然環境			合計
			とても そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	
最長居住	佐久地方	度数	9	4	5	18
			50.0	22.2	27.8	100.0
	佐久地方以外の長野県	度数	2	4	1	7
		%	28.6	57.1	14.3	100.0
	長野県以外	度数	25	8	2	35
		%	71.4	22.9	5.7	100.0
	99	度数	0	3	1	4
		%	0.0	75.0	25.0	100.0
合計		度数	36	19	9	64
		%	56.3	29.7	14.1	100.0

表 4-3-2　移住経験と安全性に不安のクロス表

			安全性に不安				合計
			とても 不安である	少し 不安である	あまり 不安はない	まったく 不安はない	
移住経験	ある	度数	2	29	33	2	66
		%	3.0	43.9	50.0	3.0	100.0
	ない	度数	1	3	13	0	17
		%	5.9	17.6	76.5	0.0	100.0
合計		度数	3	32	46	2	83
		%	3.6	38.6	55.4	2.4	100.0

環境の汚染など，お子さんを育てる環境として，お住まいの地域の安全性に不安がありますか？」であった（表4-3-2）。

こちらの場合は移住経験の有無で優位な差が出ている。移住経験がある人ほど安全性に対して不安を覚える率が高い。もっともそれは移住という経験に伴って安全性環境についてのまなざしを獲得したからなのかもしれず，反対に移住経験がない場合，ある種の自明性のなかで安心していられるからだと見ることもできる。

移住経験を自身の生活世界を再構成した経験と見なすならば，それは即自的な自明性を相対化し，自らが関わるという主体的な対自性に転換した経験と見なすこともできる。次の諸表は住民の地域活動と移住経験をクロスしたものである。ここから，移住経験がある方が地域活動への参加率が高いという傾向が見て取れる。

※　住民の地域活動を移住経験とクロス（参考）

移住経験とスポーツのクロス表

			スポーツ			合計
			○	△	×	
移住経験	ある	度数	26	6	34	66
		%	39.4	9.1	51.5	100.0
	ない	度数	4	1	12	17
		%	23.5	5.9	70.6	100.0
合計		度数	30	7	46	83
		%	36.1	8.4	55.4	100.0

＊調査票上は「ゲートボール，スケート，ゴルフなど，運動やスポーツ」

移住経験と美化運動などのクロス表

			美化運動など			合計
			○	△	×	
移住経験	ある	度数	35	3	28	66
		%	53.0	4.5	42.4	100.0
	ない	度数	5	2	10	17
		%	29.4	11.8	58.8	100.0
合計		度数	40	5	38	83
		%	48.2	6.0	45.8	100.0

＊調査票上は「地域の清掃や美化運動など，自治会や町内会が主催する活動」

移住経験と文化的行事のクロス表

			スポーツ			合計
			○	△	×	
移住経験	ある	度数	24	7	35	66
		%	36.4	10.6	53.0	100.0
	ない	度数	2	2	13	17
		%	11.8	11.8	76.5	100.0
合計		度数	26	9	48	83
		%	31.3	10.8	57.8	100.0

＊調査票上は「文化祭，音楽祭，コンクールなどの文化的行事」

移住経験と保育園・学校の行事のクロス表

			保育園・学校の行事			合計
			○	△	×	
移住経験	ある	度数	53	2	11	66
		%	80.3	3.0	16.7	100.0
	ない	度数	11	0	6	17
		%	64.7	0.0	35.3	100.0
合計		度数	64	2	17	83
		%	77.1	2.4	20.5	100.0

＊調査票上は「保育園や学校で行われる行事」

移住経験と自治会・役員会などのクロス表

			自治会・役員会など			合計
			○	△	×	
移住経験	ある	度数	32	5	29	66
		%	48.5	7.6	43.9	100.0
	ない	度数	6	0	11	17
		%	35.3	0.0	64.7	100.0
合計		度数	38	5	40	83
		%	45.8	6.0	48.2	100.0

＊調査票上は「自治会や町内会の会合，集会，役員会など」

移住経験とボランティア活動などのクロス表

			ボランティア活動など			合計
			○	△	×	
移住経験	ある	度数	6	17	43	66
		%	9.1	25.8	65.2	100.0
	ない	度数	4	1	12	17
		%	23.5	5.9	70.6	100.0
合計		度数	10	18	55	83
		%	12.0	21.7	66.3	100.0

＊調査票上は「地域の人たちが行う自主的なサークル活動やボランティア活動」

4. 子どもの遊び体験をいかに確保するか
～子育て環境をつくるということ～

(1) 子どもの遊びをめぐって

ここではヒアリングの結果をご参照いただきたい。

以下のヒアリングは2回にわたって行われた。まず，2006年6月13日にK中学校において，3人の親を招いて行われた「K町保護者懇談会」(以下PMと略称)がある。次に，「K町総合センター」において2006年9月12日に行われた「教育懇談会」(以下EMと略称)があり，こちらはK町で子どもや教育に関わる関係者を10人ほど招いて行われたものである。引用の最後にある記号はどちらの懇談会からかを表している。なお，下線やカッコ内の補足は引用者による。

事例1　K（K1小）

小学校の今の子供たち自体，やっぱりここら辺の子供たちもやはりゲームというんですかね，ゲームにどうしてもこだわって遊んでいると。だから外へ出て野山を駆け回って遊ぶとか，そういったことがないというのは。だから実際に友達同士で家へ帰って，友達同士で集まって遊ぶということが，私らの年代からすると少ないのではないかなというのはあります。ですからKM小学校でもそうですけれど，裏山をPTAで整備しまして，裏山の方を探索というんですか，探偵みたいなことでもってハンモックをつくったりだとか，そういったことはしていますけれども，実際に子供たちがそういったことを学校でしかできない。家へ帰ればそういったことは一切しないというのが現状でしょうね。（中略）野山でどうやって遊ぶのという世界だと思うんです。（EM）

自然環境が良い点としてあげられているにもかかわらず，実際の子どもたちの遊びは屋内で（テレビ）ゲームということが多いという。

事例2　S（K中）

（たとえば自転車について）練習をするときも公民館で練習をさせて，公民館では乗れることができたんですけど，道ではとても危なくて乗るということができなくて，そのまま，今。（中略）そうしたら今もう上の子，高校生になったんですけど，前（の道）は自転車に乗れないという感じになっちゃって，なので何か親もちょっと過保護なのか，余り手放しで遊びに行かせられないということもありまして。（中略）だから割と皆さん見ると自然が豊かでという感じで書かれているんですけど，これ，場所によっては狭すぎるということもあって，割と国道を走るとわかると思うんですけど自転車はとても危ない感じがするんですよ。それで結構けがをした中学生もいますし。（中略）あと，山に遊びに行くということもほとんどなくて，やっぱり女の子なのでやっぱり家の中でおままごとじゃないですけど。中学生になればやっぱり部活が忙しくて，3年生の6月まで部活がありますので，土日も出たりということがあるので，遊ぶという意味ではちょっと遊ぶ時間もないという感じで，そんな感じで3年間過ごして。（EM）

この「危険性」という指摘は重要であろう。ここでは自転車と交通事故という観点から触れられているが，このことは次の事例でより一般化されて語られる。

事例3　Y

一つの例を言いますとK地区を知っています。K地区の子供たちは，中学生ですけれど，川でね，ことしの夏あたりに川遊びをしているんです。魚をとる。それでK地区の子供たちが3人，中学1年生かな，その3人のところへ下から，どこの地区の子かわからないけどバスに乗って合流するんです。K地区まで行って。それでその子供たちがバスが来るのを待っていて，それで仲間で川に遊びにいく。そういったことをやっぱりやればやれる。やればというか，そういうのを許している親というのは立派だと思うんですよね。今，川へ行って魚をとってどうのこうのというのは。それは，だからある程度大人があれはだめよ，これはだめよ，こうやって行ったら危ないでしょうという規制しているというのもね，子供たちに洗脳されているような感じがあるから，かえって逆に外へ皆で出ていってするというのができなくなってきています。今の親とか学校とかPTAっていうのは何かあったときに責任は，責任をどうする。学校でこういうことをしてはいけない，ああいうことをしてはいけないと言ってくれないのかなというような感じが一番強いような気がする。だけど子供たち同士は考えれば遊びはなんぼでも出てくると思うんです。それを規制するのもやっぱり親であり，そういうところが強いような気がするんですね。逆にね。（EM）

危険性の問題と責任の問題がセットになったとき，子どもたちの経験の幅を狭めるような管理的，保護的なまなざしが主流となりやすい。裏を返せば，それらは子どもの経験の幅を抑制するように作用しないか。

事例4　H

私たちが子供を育てた時代というのはまだ20年しかたっていないんですけど，こんなに違ってしまったんだろうかと。社会的にいろんな犯罪とかがあって，歩くことすらままならなくなって，こんな山の中なのに全部バスとか送り迎えをしなければいけないということで，道草もできない子供たちというのがね，皆書いているのに，自然が豊かだと書いているのにうちからうちへ送りつけていくような生活しかできないというのがとても，私たち，20年前には確か子供たちを全部歩いて行かせて，バスに乗って帰ってくるともう一回歩いてこいと，私，子供に言って，上まで行って歩かせたんだけれど，今，そんなこと危険でできませんとPTAの方に言われるんですけれど，やっぱりそういう中でつくってあげた自然体験しかないのかな。ちょっと悲しいんですけど，でも私たちが，いろんな，こう見ているとやっぱり全部の子，育てた子供たちを見ていると生きていく力のというのがやっぱりすごく弱くなっているのかなと。とても学校で見ていると音楽会とか運動会はとてもすばらしくて，きちんとして，こんなに能力があるのに実際に生きていく，何か人と人と接触する，そういうコミュニケーションをとる力，すごく短絡的なんですよね。何か児童館で遊んでいてもこんなに仲よく遊んでいた女の子が次の瞬間，あんたは絶交よみたいな感じになってしまって，その間の会話がないんです。何かそういう友達同士のコミュニケーションとか，そういうのもとても弱くなってきているし，やっぱり家の，私たち，よく子供さんの様子を聞かせてくださいと言いますけど，子供が見えないんです，全然。地域の中に子供が，帰りに児童館へ寄っておうちへ帰るか，おうちの中で遊ぶかということで言われてしまって，子供たちが見えない環境の中にいるということで，やっぱりもう少し親御さんも家庭のところの中でもそうなんですけど，学校へ行ってもきれいにつくることはやるんですけど片づけることができないんです。調理をしてもつくることはやるけども片づけられない。やっぱり家庭の中でそういう家事経験とか体験というのがもう親も子も忙しすぎてなされていない。もう少し何かゆとりのある家事とか会話というのがとても必要なのではないかなと思います。（EM）

危険性の問題は，一方で単なる可能性としてではなく，子どもを被害者とする様々な事件によってさらに強調される。「つくってあげた自然体験」ということばで表現されるような経験は，果たして「生きていく力」（つまり「生きる力」）につながるか。

事例5　S（K2小）

子どもたちのアンケートとかの結果を見てもお店がないだとか，そういういうことが多いじゃないですか。やっぱりこの地域の不便さを非常に感じているような気がするんです。実際，子供のことでなくて親たちで考えてみたときに，実際に町外に出て働いている親の方が断然多いと思うんです。ここに帰ってきたいという思いが，ふるさとへの思いがあったとしても物理的に仕事がないだとか，そういったことがすごく悪影響というか，小海をこれからもどんどん人口をふやしてというような感じにはなっていかない一つの原因なのではないかなというふうにも思います。

最終的にこの地域の不便さが，地域の衰退の要因として語られ，そのことが地域を支えていく子どもたちの育成につながらない現状が示された。

補足として一つ触れておきたい。当該地域においてこれまで生涯学習課が中心に活動していた児童を対象にした「子ども探検隊」という事業は，本年度からNPOに委託されるようになった。本来は親子探検隊だったものが，親と子のペア参加にすると参加率が極端に低くなるため，子どものみを対象とした「子ども探検隊」となったという経緯がある。現在でも親の協力者は少ない。しかしながら，親の参加率が低かったのには理由がある。この地域には産業がないため車で30分ほど離れた地域にまで通勤する親が多く，帰りも遅くなるため子どもとの時間が取れない。休日には休みたいのでゆっくり子どもの相手をしている時間がないという。近年，第3次産業に就労する親が多いが，業種によっては生活時間を家族と共有できないケースもままある。

事例2でも触れたように，子どもたちに川遊びをさせることも，放置ではなく，見守りという形でも可能ではないか。実際に「子ども探検隊」では，多くの大人がサポーターとして参加する中で，子どもに鎌を持たせて

草を刈らせたり，ナイフで素材を削らせたりしつつ，直接体験させることをしているという。

最後に，調査対象地における子どもや子育てをめぐる施策の状況を，町づくりの方針とかねあわせて紹介しておく。

(2) 町行政における子育ての位置づけ

本調査地では，「人・町・自然の融合」を目指している。

行政的に重要なのは，町の人口を増やすことであり，特に若い人たちを対象とした施策をプランしている。

新たな産業を立ち上げたり誘致したりするよりも，広域圏を前提とし，そこでのベッドタウンでも良いのではないかと議論が立ち上がっている。安心して子どもを育てられる町，親や保育所以外でも子どものめんどうを見られる町とすることで，若年層に手厚くする。このために子育て支援の施策がたてられている。そのため，「子育て支援課」が新設され，先の子ども探検隊を委託するNPOの設置に積極的に関わった。

一方ではIターンを促すために，空き家や空室情報，別荘情報を発信している。

・平成十九年度予算編成を迎え，どの様な町づくりを目指すのか（K町18年度12月議会）

問　平成十九年度予算編成を迎え，どの様な町づくりを目指すのか

答　（町長）

子育てしやすい町，若者が住みたくなる町にして行きたいと思います。（後略）

問　町長就任一年目の考え（K町平成19年度3月議会）

答　（町長）

それでは公約をお話しする事により換えさせていただきたい。私は，子供は地域の財産です，地域ぐるみで子供の健全育成に取り組みますという事，二番目は子育てに悩んでいる方達を支えて行きますというお話しを申し上げました。取り組みとして，子育て支援課を設置して，窓口を一本化し，相談すれば対応してくれるという風に，子育てに関する全てを総括し，町民から信頼される課となる様にしていきたい。又，民間のNPO組織をしっかりサポートし，子育てや高齢者の活動の場を広げて行き，一緒に町づくりを考えますという事を申し上げました。それから民間企業でやって来たという意味におきましては，何かやる時には仕掛けとかいろいろいる訳です，そこで合宿の町にしても，別荘の分譲地の販売にしても簡単でも良いですから，一目見てこの様な組織があると分るパンフレットを作るというしっかりした手段を作っていく事が大事であろうと考えております。

町の方針として，子育てを中心とした地域づくりは理論的には可能であろう。ただ，そのためには対象地の現状における生活の在り方や，規範，通念などを再検討していくことも不可欠ではないだろうか。

子どもの成育環境や子育ての環境をめぐって，様々な議論がなされることは重要である。しかし，システムなどのソフトや個々のハードづくりと同時に，そこでどのような関係が取り結べるかが最終的には問われることになろう。環境づくりは関係づくりから始まると言えないだろうか。

関係を考える際に，その地域に定住している住民だけではなく，そこに興味関心を持ちアクセスしてくる人びとも含めて良いだろう。そのような開かれた関係によって，少なくともその地域は活性化していくのではないだろうか。近年指摘される「交流人口」というこの考え方は，あるひとつの可能性を示しているとも考えられよう。

5．中山間地の子どもの地域定着に関する仮説的モデルの構築

ELC Research International Canada
岩瀬 章良

1．はじめに

筆者がＫ町・Ｎ村・Ｍ村での調査に関わるのは第一次調査（2002-2003年）に続き２度目である。第一次調査において筆者は，今次調査でも協力いただいた組合立中学校の卒業生に対する追跡調査にもとづいて，卒業後すぐに地域内に定着した定住者，都市部へ移住した移住者，そして都市部から地元に回帰し定着したＵターン者それぞれの主観的満足度に焦点をあて，移住・定住の問題を考察することができた（岡崎・岩瀬 2003）。Ｋ町・Ｎ村・Ｍ村は過疎化という困難な問題をかかえる中山間地域であるが，今次調査では，組合立中学校に在学する中学生とその保護者（親）の双方に親票・子票間での親子関係を特定できる形での質問紙調査を行うという，非常に貴重な機会を得ることができた。そこで本稿では，調査対象地域の特性とこの調査方法の特性を生かすべく，過疎化問題を親子関係との関連で考察することにした。

具体的には，今次調査結果のなかで親子の関係性に着目し，中山間地の子どもが成長して地元地域に定着するか否か，あるいは都市部へ転出した後に地元地域にＵターンして定着するか否かという「地域定着」の可能性が，親子の関係性に大きく影響されるのではないかという点を検討してみたい。ここで「地域定着」とは，移住経験の有無を問わず農山村出身者が最終的に出身地域に居住する状態となることをいう。

2．過疎化問題における「問題の所在」

農山村の過疎化問題に関しては，過疎地域対策緊急措置法（1971年）以後，様々な施策が講じられ，60兆円を上まわる対策事業費が投入されてきたものの解決の兆しがみえていない。生活条件が特に厳しい中山間地と呼ばれる地域の中には，既に人口流出の段階を終え，親世代が絶対的に不足し新たな出生がみられないことによる「人口流出なき過疎化」の段階に移行した地区もみられる（財務省四国財務局 2005）。

過疎化問題に有効な対策が打ち出せていない原因のひとつに，この問題に関する調査研究の偏りがある。“生まれ育った農山村を離れて都市へ移住する”，“都市部で長く暮らした後に故郷の農山村にＵターンする”など，人々が一定期間暮らした土地を離れて移住するということは，本人にとって大きなライフイベントであるだけでなく，家族を持つ場合は配偶者や子どもを巻き込む重大な家族問題でもある。ところがこれまで，農山村からの人口流出やＵターンの問題は，人口学，経済学，社会学などの分野で主として労働力の社会移動として巨視的に論じられており，移動の主体である個々の人間の価値観，ライフスタイル，メンタリティや家族問題などに光があてられることはほとんどなかった[1]。

生活主体である人々のメンタリティや家族問題としての状況の深刻さを無視した巨視的考察の限界は，Ｕターン・Ｉターン研究にみることができる。Ｕターン・Ｉターン問題を扱った調査報告には，言葉としては両者を区別するものの，実際は「地方回帰志向」のもとに両者をまとめて論ずるものが多い。確かに地域振興という点では，地元出身者であれ他の地域出身者であれ人々が流入し定着してくれればそれでよいかもしれないが，農山村出身の都市生活者が出身地に戻るＵターンと，都市出身者を含む都市生活者が出身地以外の地域に移住するＩターンとでは，移住の動機づけは大きく異なるはずである。事実，岐阜県および長野県のＵターン者20名に対するヒアリングをまとめた日本労働研究機構No.57報告書（1994）によれば，自分または配偶者の出身地に移住するＵターンの動機づけは「第一に，生まれ育った土地であり，地域になじみがあること，第二に，そのために仕事，住宅，学校その他もろもろの生活情報を得やすいこと，第三に，親の土地，財産などの一部または全部を利用できるという恩恵を受けやすいこと，最後に，老親扶養・介護が可能なこと」とされており，移住先が出身地であることに大きなウエイトがおかれた動機づけとなっている。またここに挙げられた理由からも，移住が

労働力の社会移動という巨視的視点だけでは解明できない複雑な家族問題であることもわかる。

出口が見えにくい農山村の過疎化問題ではあるが，一方でわずかながらも光が見えつつある。ひとつは，Uターンを可能とする社会的条件が整いつつあることである。阿藤・井上・坪内・宝月・原田・吉田（1998）は高知県の中山間地において10名のUターン経験者にヒアリングを行っているが，移住者の意識や環境条件が以前と比べて大きくかわり，①従来は大都会にしか職がなく，高校を卒業すれば地域を出ることが当たり前であったが，現在では近在の地方中小都市でも職が得られるようになったこと，そして②道路事情や交通機関も発達し，地方でも都会並の文化的生活が送れるようになり，あえて大都会に出る必要性が薄れたことが記されている。このような社会的変化は人々の地方回帰の促進材料であるとともに，農山村で育つ若者の地域定着を促す好材料でもある。もうひとつは，農山村への移住を希望する都市生活者のなかでも，農山村出身者にUターン希望者が多いとされることである（井口・伊藤・北側 1995）[2]。これは貴重な知見である。なぜなら，農山村出身者にUターン希望者が多く，かつ，前述のように移住先が出身地であることがUターンの動機づけに大きく働いているとすれば，地域で生まれた子どもたちが成長して都市部へ移住するとしても，その前に（彼らが地域で生活している間に）彼らの地域との結びつき（愛着）を強めておけば，彼らが都市生活を経た後に出身地域にUターンする可能性がそれだけ高まると予測できるからである。

3. 調査方法と手続

今次調査の全体像は他章において触れられるはずであるが，ここでその概要を簡単にまとめておく。今次調査は，中山間地域とよばれる調査対象地域において，子どもの成育環境としての家庭，学校，地域社会の現状を中学生とその保護者（親）がどのように受け止めているのかを幅広い観点から検討するためのもので，親票・子票とも質問項目は多岐にわたる。調査地は長野県東部の千曲川上流域に位置するK町（人口約6,000人）とこれに隣接するN村およびM村で，地理的には中山間地域であるが，第3次産業が5割近くを占め，地域特性としては商業・サービス業が盛んな日常生活圏である。調査時期は2006年6月。被調査者はK町，N村，M村で設置する組合立中学校の生徒149名（2年生66名，3年生83名）とその保護者である。

調査方法と調査票回収率に関して，生徒には学校内で調査を実施し，調査票（子票）全数149を回収した。保護者には学級担任から生徒経由で調査票（親票）を配布し，郵送による回収を行った。親票回収数は86で，回収率は57.7%である。以下，調査票を回収できた親86名を「回答親群」，回収できなかった親63名を「無回答親群」とする。親票と子票に予め対応する数字を印字し，回収した親票・子票間で親子の対応関係が確認できるようにした。この結果，調査票回答親群に属する親と子86組と，無回答親群に属する子63名が特定された。

なお回答親群の親子86組については，筆者が調査結果にもとづき本稿とは別に子どもの発達に対する親の影響を検討した際に，9組の外れ値と思われる親子データが統計分析の信頼性を損なうものであったことから，この9組を分析から除外した[3]。本稿においてもこれら9組を除外して分析を行うので，対象となる回答親群の親子は77組となる。

4. 同居・近居に関する親と子の意向

過疎化は人口学的にみれば農山村から都市部への人口流出の結果であるが，家族社会学的にみれば，過疎化は個々の家庭において親との同居・近居を能動的にまたは受動的に拒んだ子どもたちが続出した結果でもある。同居・近居ができなかった最大の原因が社会経済的要因によるものだとしても，それぞれの家庭で親が農山村地域に取り残されたことに変わりない。では，いま，調査地域における親たち・子どもたちは将来の親子同居についてどのように考えているのであろうか。

図5-1は将来の子どもとの同居・近居希望に関する親の回答結果を示す。約半数が同居または近居を希望しており，子どもが成長した後も子どもと日常的に行き来ができる状況を欲している。かなり強い意向があるとみてよいであろう。これに対し，同居を希望しない親は2割しかいない。

一方，子どもたちはどのように考えているのであろうか。子票では親との将来の同居について直接には質問していない。その代わりに将来どこで生活したいのかを質問しているので，その結果をみていただきたい。図5-2に集計結果を示す。ここで「地元志向」は選択肢の「ずっと地元で生活したい」と「一度は都会に出るが地元で生

活したい」を合算したもので，「都会志向」は「ずっと都会で生活したい」にもとづく。「一度は都会に出るが地元で生活したい」を地元志向に含めた理由は，本稿の冒頭で述べたように，本稿では地域定着を“移住経験の有無を問わず農山村出身者が最終的に出身地域に居住する状態となること”と定義づけており，中学生たちのなかに“いずれ地元に戻ってきたい”という意識があることは，彼らの将来の地域定着に大きな要素となりうるからである。

図5-2に示されるように，地元志向が20.8％で，都会志向が20.1％となっており，ほぼ同じ割合である。この数字をどう読むべきかはなかなかむずかしいが，少なくとも，地元志向の20.8％が悲観的数字とは思われない。なぜなら，半数を占める「未定」の中にも高校卒業までに地元志向となる者が出る可能性があること，また，都会志向も20.1％とそれほど多くないことから，子どもたちのなかに，環境条件などによって地域に定着する要素があるとみることができるからである。

さて，「親の心子知らず」といわれるように，子育てのむずかしさのひとつは，親の気持がなかなか子どもに伝わらない，伝えられないことにある。親が子との同居や近居を希望しているとしても，その気持ちを子にうまく伝えることは容易ではないはずである。今次調査の親票では，同居について子どもに話をしたことがあるかを問う質問をしている。中学生の親にとって子どもとの同居問題はさほど差し迫った問題とは思われず，話をしている親は少ないと予想していたが，親の回答を集計した結果，4割の親がすでに子どもに同居問題で話をしていた（図5-3参照）。

比較データがないのでこの数字を単純に評価できないが，子が中学の段階で4割の親たちがすでに子と同居問題で話をしているということは，この調査地域において，子どもと同居するか否かという問題が親たちの大きな関心事のひとつであることを示していると思われる。

では，どのような親が将来の同居のことで子と話しているのであろうか。表5-1は同居・近居についての親の意向と，それについて子どもに話をしたことがあるか否かの回答をクロス集計した結果を示す。

表からわかるように，子との同居・近居を希望する親で子と話をしたことがある親はそれほど多くない。子との同居を希望しない親の5割強が子と話をしているのに対して，子との同居・近居を希望する親で子と話をしたことがある親は4割にすぎず，残り6割は子とその話をしていない[4]。親との同居は子に負担を強いることにな

図5-1　子どもとの将来の同居・近居の希望
（親票回答 N=77）

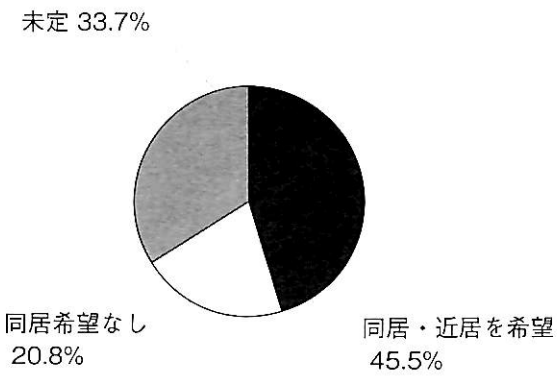


図5-2　将来生活したい場所
（子票回答 N=149）

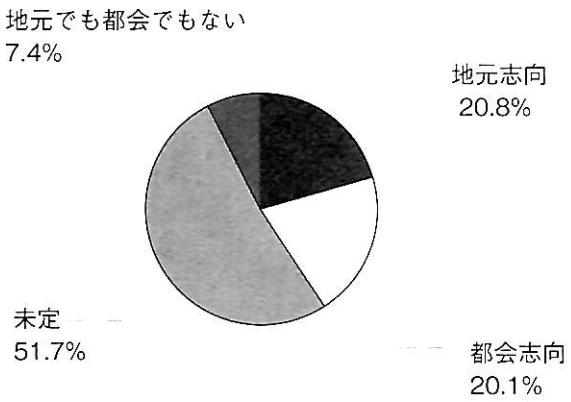
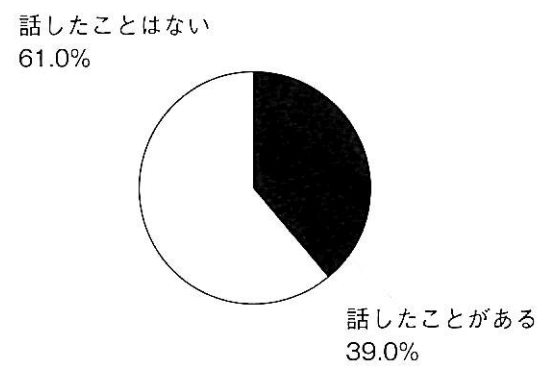


図5-3　同居について子どもと話したことがある・ない
（親票回答 N=77）



るので，これを話題にすることは，同居・近居を望む親にとって話しにくい事なのかもしれない。

表 5-1
子どもとの同居・近居の希望 vs. 子どもに話しているか否か

親の意向	同居についての話の有無		合計
	話したことがある	話していない	
同居・近居を希望	14 (40.0%)	21 (60.0%)	35 (100%)
同居は希望しない	9 (56.3%)	7 (43.7%)	16 (100%)
未定	7 (26.9%)	19 (73.1%)	26 (100%)

5. 子どもの地域親近感と基本モデル

(1) 子どもの地域親近感 ——地域への愛着の指標として

調査地域の親たちに子との同居・近居について比較的強い意向があることは上にみた通りである。こどもたちについては，地元志向（前掲の図 5-2）の割合はそれほど大きな数字ではないが，ここで少し視点を変え，子どもたちの地域への結びつき(愛着)について考えてみたい。

子どもの地域への結びつきや愛着を数値化することはなかなかむずかしい。特に中学生という発達段階では，「地域」や「地域社会」という言葉は知っていても，彼らにとってその言葉がどれほどのリアリティをもつものか，大変に怪しい。おとなとは異なり，彼らは日頃から地域や地域社会を意識して生活している訳ではないはずだからである。例えば，今次調査では親に対して地域社会で行われる様々な行事への参加経験や関心を問う質問を行っており（親票の問 13），一方で子に対しても町・村の行事への参加経験を問う質問をしている（子票の問 8)。地域行事への参加という意味では親票・子票で共通する質問ではあるが，親に関しては，地域行事への参加数・関心数が多ければ地域社会への関心の度合い（結びつき）が強いであろうという一応の推定ができるが，子については「地域社会への関心」というもの自体がおそらく未成熟であろうから，そのような推定が成り立たない。

ではどのようにして子どもたちの地域への愛着を測ればよいのであろうか。筆者は，子どもたちにとって地域での生活がどの程度楽しいのか，そして地域での生活がどの程度心地よいのかという 2 点に絞り，子どもたちの地域への愛着の強さを「親近感」(Cognitive Closeness）という概念で数値化してみることにした。楽しいか否か，心地よいか否かという具体的なレベルであれば，中学生にもリアリティがあると考えられるからである。

表 5-2 はこのような観点で設定された地域親近感 (Cognitive Closeness to Community）の質問項目を示す[5]。

表 5-2 において，地域の楽しさに関する 2 項目（Q1-1 と Q1-2）を楽しさ得点として算出し，快適さに関する 2 項目（Q1-3 と Q1-4）を快適さ得点として算出する。これらの値が大きいほど，子どもたちの地域社会に対する親近感が強いことを意味する。Q1-1 ～ Q1-3 は「とてもそう思う」～「まったくそう思わない」の 4 段階の選択肢を付した 4 検法の問いである。Q1-4 は最高点を 100 点として地域社会がどのくらい好きかを点数で表す問いであり，理想状態を 100 と仮定して現状を相対的に評価する手法を用いている。Q1-1 ～ Q1-3 と Q1-4 ではスケールが異なるため，得点化に際しては各項目得点を標準化したうえで，楽しさ得点と快適さ得点を算出した。

表 5-2　子どもの地域親近感　Children's Cognitive Closeness to Community

Q1-1	自分が住んでいる町や村には，遊ぼうと思えばどこでも遊べるので不満はない。 I'm not unhappy because in my town/village there are lots of places I can enjoy playing.	楽しさ得点
Q1-2	町や村で行われる行事には子どもにとって楽しいものがたくさんある。 Lots of events held in my town/village are great fun for kids.	
Q1-3	この町や村でくらしていると，ときどき，息がつまると感じることがある。(逆転) Sometimes I feel that the town/village I'm living is too stuffy. (reversed)	快適さ得点
Q1-4	あなたはいま住んでいる町（村）がどのくらい好きですか？最高点を 100 点として，あなたがどのくらい好きかを点数で表してください。 How much are you loving your town/village? Give it a mark out of 100.	

（2）親回答の有無と子どもの地域親近感

つぎに，このようにして得られた子の地域親近感（楽しさ得点と快適さ得点）を従属変数として，親子関係との関連性を検討する。

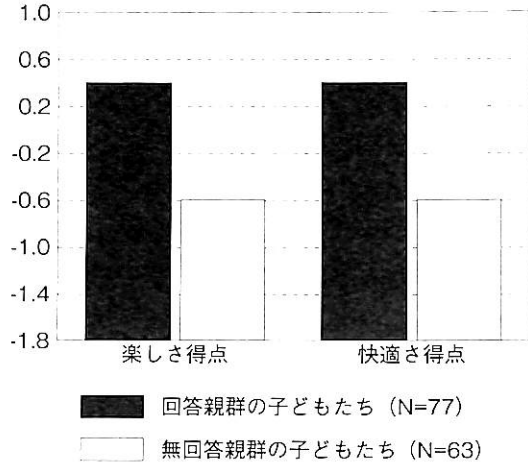
結論を先に述べると，別途の研究報告（岩瀬 2007）において既に報告したように，上述の子どもたちの地域親近感は親の子育ての仕方（parenting style）の影響を受けている。この点は本稿において非常に重要なポイントであるので，ここで詳しく説明する。

親調査票に回答した回答親群の子どもたち 77 名と，回答しなかった無回答親群の子どもたち 63 名の地域親近感を比較すると，回答親群の子どもたちの方が無回答親群の子どもたちよりも地域親近感が有意に高い。具体的には，回答親群の子どもたちの平均値は，楽しさ得点が 0.542（SD = 1.661），快適さ得点が 0.569（SD = 1.518），両者を総合した地域親近感（総合）が 1.111（SD = 2.726）である。そしてこれらの値は，無回答親群の子どもたちの楽しさ得点 -0.487（SD = 1.493），快適さ得点 -0.483（SD = 1.621），地域親近感（総合）-0.971（SD = 2.686）よりも，いずれも 0.1% 水準で有意に高い（F 検定）。

図 5-4 は回答親群と無回答親群の子どもたちの楽しさ得点と快適さ得点の平均値を視覚的に示すグラフである[6]。図から明らかなように，回答親群の子どもたちの楽しさ得点と快適さ得点はいずれも，無回答親群の子どもたちよりも顕著に高く，両群の子どもたちの間に明確な差があることがわかる。

このような差違を親の子育ての仕方との関連で検討してみたい。まず，親たちについては，調査票回答親群の親たちと無回答親群の親たちとの差は，端的には調査票に回答を記入し郵送したか否かという行動の違いであり，回答親群については回収した親票に情報が含まれているとしても，調査票を回収できなかった無回答親群については情報が何もない。このような場合，社会調査における回答群と無回答群を比較対象とし，調査が行われた状況や構造に基づいて背後に潜む要因を検討するという手法が社会学研究にある[7]。例えば北條（1998）は，社会調査に回答した回答群と回答しなかった無回答群の間には，回収率や無回答率などの統計的数字で表される以上の差違が存在しており，その違いを調査が行われた状況や構造に照らして合理的に読み解くことの重要性を強調している。北條は企業組織内でのアンケート調査に関連して，回答群には調査に協力しただけでなく企業組織の論理や方針に従った側面がある一方で，無回答群は調査に協力的でなかっただけでなく同時に企業組織の論理に相対的に従順でないことを意味すると述べ，回答群と無回答群との間に調査に回答したか否かという目に見える違い以上の差が存在することを指摘している。

図 5-4　回答親群と無回答親群の子どもたちの地域親近感



このような考え方に沿って今次調査における回答親群の親たちと無回答親群の親たちの行動の違いを考えてみると，調査が行われた状況や構造という意味では，以下の点が挙げられる。

まず，小中学生の子を持つ親にとっては，子どもが学校から持ち帰った親宛の連絡物など各種プリントに目を通すことは日常茶飯事であり，これも子どもの（教育の）ための大切な行動という意味で子育て行動のひとつといえる。そのプリントの中に親宛のアンケート用紙が含まれていたとすれば，それに回答することもはやり子育て行動のひとつといえるはずである。したがって，調査票（親票）に回答しそれを返送するという行動は（広義の）子育て行動のひとつと考えてよく，調査票に回答したか否かという行動の違いは，具体的な子育て場面における親の行動の差ということになる。

第 2 に，調査票（親票）が学級担任から生徒の手を経て親に届けられた点にも留意すべきである。なぜなら，これによって，この調査が学校の協力の下に行われつつあることがどの親にも明白な事実として了解可能だからである。

そして第 3 に，今次調査で用いた親票の質問総数とこれに回答するための所要時間である。親票の質問カテゴリーは合計 21 におよび，その多くが複数の質問を含むため質問総数は 106 個である。また，そのうち 6 個が自由記述の問いである。表紙を除く親票ページ数は 8

ページあり，全体の質問量は非常に多い。所要時間は回答者により違うとしても，おそらく全回答を記入し終えるまでに30～40分は必要ではないかと思われる[8]。さらに調査票を郵便ポストに投函する手間も考慮すると，質問に答えて調査票を返送するためには少なからぬ時間と労力を保護者に強いるものであることは疑いない。

以上のような点に留意しつつ，回答親群と無回答親群の違いの背後要因を考察するとつぎのようになる。

今次調査の場合，生徒調査は授業時間内に行われ，親調査票は学級担任から生徒を介して親に届けられている。前述の北條（1998）の指摘を適用すると，学級担任から子どもの手を介して渡された調査票に回答した親たちは（単に調査に協力しただけでなく）学校教育に協力的，しかも調査票の分量（質問数）が非常に多く回答するために相当の労力を要したであろうことを勘案すれば，回答親群の親たちは相対的に学校教育にとても協力的と考えてよいはずである。そして，学校は親たちが子どもに対する教育行為を委託したエージェント（代理機関）であるから，エージェントの仕事にとても協力的ということは自らの子の教育に熱心と考えてもよいと思われる。他方で無回答群の親たちは，回答群の親たちとの比較では学校教育にそれほど協力的でなく，したがって子どもの教育にそれほど熱心ではないということになる[9]。

また，上述のように，回答親群と無回答親群の違いは子育て場面における親の行動の違いであるが，我々が経験的に知っているように日々の子育てには様々な苦労が伴い，現実の問題として，子育て過程ではそのような苦労を一つひとつ克服しながら子どもの世話をしていかねばならない。その意味で，“面倒でも子どものために何かをする”“子どものために労を惜しまない”ということは親の子育て行為における基本要素でもある。したがって，子どもが学校から持ち帰ってきた分量の多い調査票に親が回答したか否かという違いには，（子どもの教育に限らず）より広く，子育てに対する親の関心の強さの違いが表出していると考えてもよいはずである。

（3）基本モデル

さて，このように考えてくると，地域社会に強い親近感を示している回答親群の子どもたちの背後には，子どものことに労を惜しまない親たちの存在が浮かび上がってくる。そしてこの親たちに，労を惜しまず子どものことに手間をかけるという行動を動機づける潜在的要因として，家族や子どもを大事にしたいという（無回答親群との比較では相対的に強い）認知が回答親群の親たちにあるのではないかと筆者は考えている。これを図式化したものが図5-5に示す基本モデルである。

この基本モデルは，親が子どものことに手間をかけるほど，子どもは地域生活に適応的となり，地域社会により強い親近感（愛着）をもつようになるというもので，家族や子どもを大事にしたいという親の認知が，子どものことに労を惜しまない親の行動を動機づけていることを示している。この基本モデルにおいて，親が子どものことに手間をかけるほど子どもは地域社会に対してより強い親近感をいだくようになるという点は，図5-4で支持されるはずである。親のそのような行動を動機づける認知の点に関しては，データによる直接的裏付けはないが，そのように十分解釈可能であることは上に述べた通りである。

6. 基本モデルの検討

さて，今次調査では，基本モデルに示した“家族や子どもを大事にしたい”という認知について親に直接質問していないが，親にとって子や家族がどの程度身近な存在なのかを問う質問をしており，その回答から親が“家族や子を大事にしたい”という認知の強さや親の子に対する関わり方を推し量ることができる。表5-3に示す親子親近感（Cognitive Parent-to-Child Closeness）がその質問項目である。

表5-3において，Q2-1～Q2-3の3項目が家族まとまり感（Cognitive Family Cohesion）に関する項目で，Q2-4～Q2-6の3項目が家族相互信頼感（Cognitive Family Inter-Trust）に関する項目である。前者は，

図5-5　基本モデル

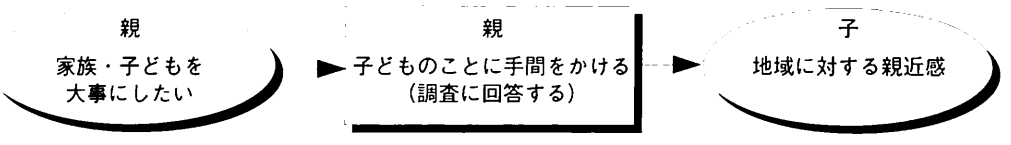


表 5-3　親の親子親近感 Cognitive Parent-to-Child Closeness for Parents

Q2-1	私の家族はみんなで何かをするのが好きです。 My family loves to do something together.	家族まとまり感
Q2-2	家族がまとまっていることはとても大事だと思う。 I believe that family cohesion is very important.	
Q2-3	私の家族では何かを決めるときに家族で相談することが多い。 My family is likely to talk to each other when we have to make a decision.	
Q2-4	子どもは学校のことをよく話してくれる。 My child talks to me a lot about his/her school.	家族相互信頼感
Q2-5	子どもと意見が異なるときはお互いに納得するまで話し合う。 When my child and I think differently, we talk a lot until we understand each other.	
Q2-6	何か困ったとき，子どもはよく相談してくれる。 If my child has a problem, he/she often asks my advice.	

親が自分の家族をどの程度まとまりがよいと認知しているかという側面から，また後者は家庭内で親子が素直に話し合えているか否かという点に焦点をおき，親が子とどの程度の信頼関係が構築できていると認知しているかという側面から，親自身が親子関係・家族関係をどの程度身近なものとして認知しているのかを数量化する尺度である。質問文は家族機能測定尺度（草田・岡堂 1993）および親役割診断尺度（谷井・上地 1993）などを参考に作成した。いずれの項目も回答に「とてもそう思う」～「まったくそう思わない」の 4 段階の選択肢を付した 4 検法の問いである。

親子親近感項目を調査票に含めた理由は，子どもの生育環境である家庭環境，学校環境，地域環境のなかでも家庭環境が子どもの健やかな成長発達に最も重要な役割を果たしており，親子関係や家族関係に関する親の認知の良否がその親自身が構築している家庭環境の質をある程度物語っていると思われるからである[10]。

さて，本来であれば，無回答親群の親と回答親群の親の間で親子親近感を比較すべきなのであるが，残念ながら無回答親群からは回答が返却されなかったのでこれを比較することができない。

ここで，親子親近感項目のなかでも特に Q2-4 ～ Q2-6 の家族相互信頼感については，親子がよく話し合い，互いに理解することを基本として家族生活が成り立つことを親子の相互信頼の前提としている。“子どものためになるから”という口実で親が自分の考えを一方的に子に押しつける親子関係では，親子の相互信頼感を培うことがむずかしいからである。その意味では，Q2-1 ～ Q2-3 の家族まとまり感と Q2-4 ～ Q2-6 の家族相互信頼感を比べると，家族相互信頼感の方が良好な親子関係をより基礎づけるものといえる。

図 5-5 の基本モデルでは，家族・子どもを大事にしたいと親が強く認知しているほど子の地域親近感が強いという関係であるので，親の親子親近感が強いほど子の地域親近感も強くなるという関係が予想できる。これを表 5-4 に示す分析結果から検証してみよう。

表 5-4　親の親子親近感と子の地域親近感の相関行列

		子の地域親近感		
		楽しさ得点（標準化得点）	快適さ得点（標準化得点）	地域親近感（総合）
親の親子親近感	親の家族まとまり感（項目素点）	.091ns	.137ns	.133ns
	親の家族相互信頼感（項目素点）	.308**	.236*	.315**
	親の親子親近感（総合）	.232*	.215ns	.259*

＊：p＜.05　＊＊：p＜.01

表 5-4 は親の親子親近感と子の地域親近感の相関分析の結果を示す相関行列である。表に示されるように，親の家族相互信頼感が子の地域楽しさ得点との間に .308（p<.01）の正の相関を示し，子の地域快適さ得点との間に .236（p<.05）の正の相関を示している。したがって，親の親子相互信頼感が強い家庭ほど子の地域親近感が強いという関係があることになり，基本モデルの妥当性が裏付けられていると考えられる。しかしながら，親の家族まとまり感に関しては，子の地域楽しさ得点とも快適さ得点とも相関を示していない。モデル自体に欠陥があるのか，家族まとまり感の尺度構成に難点があるのかなど，今後予定されている他地域での比較調査の結果などもふまえて検討する必要があろう。

いずれにせよ，良好な親子関係を基礎づける親の家族相互信頼感について子の地域親近感との間に正の相関が示されたことから，親が日頃から子とよく話し合うことに心がけている家庭ほど子の地域親近感が高いことが明らかとなった。部分的ではあるが基本モデルの妥当性が支持されたと考えられる。

7. 仮説的モデルの構築

以上に得られた知見をもとに，中山間地で育つ子どもの地域定着に関してつぎのような仮説的モデルを提唱したい。

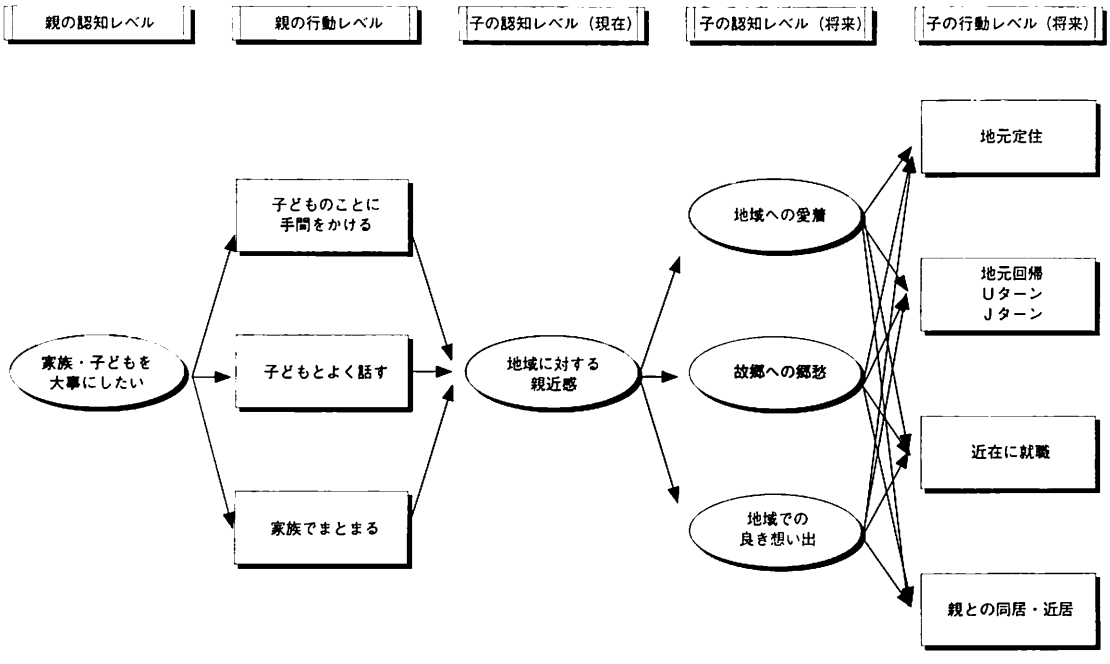
この仮説モデルは，認知が行動を生起し，その行動がつぎの認知を生起するという連鎖を示すもので，左から，親の認知レベル，親の行動レベル，子の現在の認知レベル，子の将来の認知レベル，そして子の将来の行動レベルの順でパスを描いている。いうまでもなく，この因果モデルのすべてのパスが今次調査の結果から支持されているわけではない。例えば，親の行動レベルにおける「家族でまとまる」は子の現在の認知レベルにおける「地域に対する親近感」との間に相関関係がみられず，少なくとも今次調査の結果に関する限り支持されていない。また，子の将来の認知レベルおよび子の将来の行動レベルに対するパスに関しては，厳密にいえば予想でしかない。しかしながら，例えばUターンに関する前掲の先行研究による知見やヒアリングの内容などをみると，これらのパスが必ずしも絵空事とも思われないはずである。そして，今次調査の結果のなかにも，少なくとも子の将来の行動レベルにおける「地元定住」と「地元回帰」に対するパスについては，その妥当性を示唆する結果が得られている。これについて図5-7を参照して説明する。

図5-7は，図5-2で説明した子票の「将来生活したい場所」に関する回答のうち，地元志向と都会志向の2群で子の地域親近感の楽しさ得点と快適さ得点を分散分析した結果を示すグラフである[11]。図から明らかなように，地元志向の子どもたちの地域親近感は都会志向の子どもたちのそれより顕著に高い。具体的には，地元志向群の子どもたちの地域親近感平均値は，楽しさ得点が0.414 (SD = 1.374)，快適さ得点が0.948 (SD = 1.192) で，これは都会志向群の子どもたちの楽しさ得点-0.745 (SD = 1.882)，快適さ得点-0.892 (SD = 1.906) よりもそれぞれ5%水準，0.1%水準で有意に高い。地元志向群の子どもたちがなぜ地元志向なのか，なぜ彼らは“ずっと地元にいたい”または“一度は都会に出るがいずれ地元に戻りたい”と考えるのかを問う項目は今次調査には含まれていないが，子どもたちのなかに地元志向が先にあって，その結果として地域への親近感が高まったとは考えられない。子どもたちのなかに地域への親近感が先にあり，それが地元志向を形成していると考えるべきであろう。

したがって，図5-6の仮説的モデルにおいて，子どもの現在の認知レベルにおける「地域に対する親近感」が，子どもの将来の認知レベルにおける「地域への愛着」「故郷への郷愁」「地域での良き想い出」などを経由して，子どもの将来の行動レベルの「地元定住」「地元回帰」「近在に就職」「親との同居・近居」という行動を生起させる因果パスの妥当性は決して小さくないと考えられる。

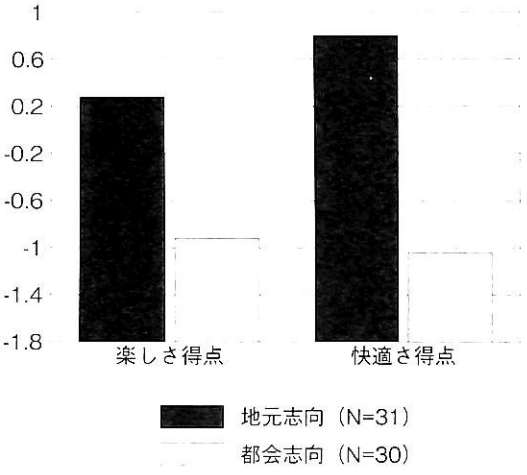
なお，図5-6の仮説的モデルは「家族・子どもを大事にしたい」という親の認知がひいては子の地域定着に寄与することを示してはいるが，いうまでもなく，定住

図5-6　中山間地の子どもの地域定着に関するモデル



やＵターンによる地域定着率の上昇が望ましいのは，地域への定着が本人たちにとって望ましい限りにおいてである。前掲の岡崎・岩瀬（2003）で検討したところによれば，今次調査と同一の調査地域において，Ｕターンで地域に定着した人々の主観的満足度は必ずしも高いものではなかった。人々の地域定着率を高めること自体を目標とするのではなく，地域に定着した人々の幸福度を高めることを目標とする施策が望まれるところである。

図 5-7　子どもの将来の生活地志向と現在の地域親近感



【謝辞】

今次調査では，中学生とその保護者の方々に親子関係を特定できる形での質問紙調査にご協力いただき，親子関係をベースにしながら地域の問題を検討するという大変に貴重な経験を得ることができました。調査に回答いただいた中学生と保護者の方々，そして調査にご協力・ご配慮いただいた学校関係者の方々，行政担当者の方々をはじめとして，お力添えをいただいた多くの関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

【注釈】

(1)　筆者は上掲の岡崎・岩瀬（2003）において，定住者，移住者，Ｕターン者それぞれの現在の生活に関する主観的満足度の比較を行ったが，このように人々のメンタリティにまで踏み込んで定住・移住の問題を扱った研究は少ない。

(2)　残念ながら井口らの研究でも，農山村出身の「Ｕターン希望者」には出身地以外の農山村への移住を希望するＩターン希望者が含まれてしまっている。

(3)　この検討結果については別途に報告する予定である。

(4)　同居・近居の意向が決まらない「未定」の親のなかで子と話をしていない割合が 73.1％と多いのは当然であろう。

(5)　表中の英文は国際学会での報告のため用意したものである。なお，子票にはこれら項目の他に「自分の家が大きな都市にあれば，私立学校，塾や予備校などがたくさんあって勉強や進学に有利なのにと思う」という質問が含まれていたが，この項目の回答が他の項目の回答とは異なる特異な分布を示していたため，統計分析に先立つ前処理としての項目分析の過程で除外された。

(6)　標準化された得点の比較であるので，厳密には平均値（0）からの距離と正負の方向を比較すべきであるが，ここでは視覚的な了解のしやすさから棒グラフとした。

(7)　代表的なものとしてブルデューの世論調査における無回答分析がある（「社会学の社会学」（田原音和監訳 1991）など）。

(8)　30 ～ 40 分という時間は実測値ではないが，調査票の分量は非常に多く相当の時間がかかることは確かである。

(9)　無回答親群には何らかの理由でたまたま調査票を返送できなかったという親が含まれていることも可能性としてはあり得る。したがって無回答親群の人数が少ない場合には一律の統計的処理が難しいが，この基礎調査では無回答親群が 63 名おり，統計処理が十分可能である。すなわち，いくつか例外があるとしても，無回答親群には全体としては何らかの共通する理由や特徴があって調査票を返送しなかったとみなすことができ，統計処理が可能であると考えられる。

(10)　今次調査では子票にもほぼ同一内容の親子親近感項目が含まれており，親と子の親子親近感には相互に強い相関があることがわかっているが，これについては別途に報告の予定である。

(11)　図 5-4 と同じく標準化された得点の比較であるので，厳密には平均値（0）からの距離と正負の方向を比較すべきであるが，ここでは視覚的な了解のしやすさから棒グラフとした。

【引用文献・参考文献】

・阿藤誠・井上俊・坪内良博・宝月誠・原田隆司・吉田純（1998）「晩婚化・未婚化の要因をめぐる実証研究」『厚生労働省 厚生科学研究費補助金総合的プロジェクト研究分野 子ども家庭総合研究事業 平成10年度研究報告』.

・井口隆史・伊藤勝久・北側泉（1995）「中山間地域における農林業生産と定住促進政策に関する意向調査の分析（I）中山間地域への移住の可能性に関して」日本林学会誌77．5，421～428頁.

・岩瀬章良（2007）「子育てに対する親の関心と子の育ち方の関係に関する一考察 ――調査票回答親群と無回答親群の子どもたちの家族と地域社会に関する認知の違いを手がかりに――」『国際幼児教育研究』14，45～52頁.

・岡崎友典・岩瀬章良（2003）「高度経済成長期における農山村の新規学卒者の『定住・移住』に関する研究」放送大学研究年報21，57～73頁.

・草田寿子・岡堂哲雄（1993）「家族関係査定法」岡堂哲雄編『心理検査学』垣内出版.

・財務省四国財務局（2005）「四国地域活性化研究会中間報告」.

・谷井淳一・上地安昭（1993）「中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み」『カウンセリング研究』26，113～122頁.

・日本労働研究機構（1994）「調査研究報告書No.57 Uターン者にみる職業と家庭生活」.

・北條英勝（1998）「VI-1. 方法論的考察」小林幸一郎編『環境変動に伴う造船重工企業の組織構造・組織文化に関する時系列的研究』文部省科学研究費補助金研究成果報告書.

・Bourdieu, P.（田原音和監訳1991）「社会学の社会学」藤原書店.

6. 道徳性の発達と地域社会

日本女子体育大学 専任講師
冨江 英俊

1. はじめに

（1）道徳教育において期待される地域社会

本章は，子どもの道徳性の発達に，地域社会がいかに関連しているのか，という観点の考察である。今日，道徳教育の充実が叫ばれていることに異論はないであろう。他人を思いやる基本的なマナーが低下していて，親や先生など目上の人を尊敬せず，将来の目標もないためコツコツ努力しようとする意欲もない，といったネガティブな評価が今の子どもに向けられることが多い。このような状態に子どもたちがなってしまった原因として，地域社会における教育力の低下が，挙げられることがある。

子どもの教育の場として，学校・家庭・地域社会の3つが挙げられることが多いが，道徳教育にあっても同様である。中学校学習指導要領では，第1章総則第1の2において，道徳教育について最も基本的なことを述べているが，そこには次のような記述がある。「道徳教育を進めるに当たっては，教師と生徒及び生徒相互の人間関係を深めるとともに，生徒が人間としての生き方についての自覚を深め，家庭や地域社会との連携を図りながら，ボランティア活動や自然体験活動などの豊かな体験を通して生徒の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう，配慮しなければならない。」[1]（下線は引用者）つまり，学校だけで道徳教育を行っても限界があり，家庭や地域社会との連携があって，道徳性が育っていくということなのである。学習指導要領解説の道徳編においては，さらに詳しく方策が示されている。中学校学習指導要領解説をみると，PTA・地域の人々・生徒が道徳教育を共に語るフォーラムの開催，保護者・教師・生徒・地域の人々の定期的な交流の機会の設定，地域の諸行事や自然体験活動などへの異年齢集団・異世代集団での参加など，様々な地域社会における道徳教育のあるべき姿が記載されている。[2]

（2）地域社会を変貌させるメディア

このように，道徳教育において期待をかけられている地域社会であるが，近年大きく変貌する可能性が出てきている。携帯電話やパソコンを中心としたメディアの爆発的な普及によってである。

地域社会における人間関係とは，自分が引っ越しをしない限り，選択不可能な，所与のものという性格がある。関係を持ちたいと思う人も，そうでない人も近所に住んでいるが，関係を持ちたくない人だけを，近所から追い出すことなど不可能であるからである。様々な人が生活する地域社会において，様々な人間関係を経験することが，子どもにとって有益で，大人になってから一般社会で生きていく上で必要な経験だとされているのである。

しかし，メディアを通しての人間関係は，地域社会にあるような地理的・空間的制約を超える。水越康介は，インターネット上のコミュニティを考察するにあたって，「ネット・コミュニティ」という概念を提示しているが，その定義について，以下のようにまとめている。[3]ネット・コミュニティは，従来からのコミュニティ（リアル・コミュニティ）と比較して，「構成員に相互作用がある」「共通の目標・関心などの絆がある」の2点は同様であるが，「一定の地理的範域を伴う」という点が抜けている，としているのである。このネット・コミュニティは，当然ながら自分から好きなところへ参加できる選択的なものである。このネット・コミュニティといったメディア上のつながりが増加していき人々の活動がそこに比重がかかることになれば，地域社会の人間関係は衰退していく，ということなのである。

（3）本章での仮説の設定

以上の議論をふまえて，地域社会やメディア上での人間関係と，子どもの道徳性について，次のような仮説を設定することとしたい。

① 地域社会の大人との交流が多い子どもは，道徳性が高い

② メディアをよく使う子どもは，地域社会との人間関係が弱い

③ メディアをよく使う子どもは，道徳性が低い

①は，地域社会での人間関係が，子どもの道徳性の発達に重要であるという，学習指導要領で目指されているような相関関係である。伝統的に教育学で論じられている「地域の教育力」を表していると言ってもよいであろう。②は，前述の議論のとおり，メディア上での人間関係が強い子どもは，それだけ地域社会での人間関係が弱いということである。③については，①と②から導き出される仮説であるが，「ケータイやパソコンに没頭している子どもは，問題がある，発達が歪む」といった，大人たちが漠然と持っていそうな認識とも言えるのではないか。肌身離さずケータイを持ち，寸暇を惜しんでメールの送信に励む子どもを見ると，大人はネガティヴな評価をすると推測されるのである。

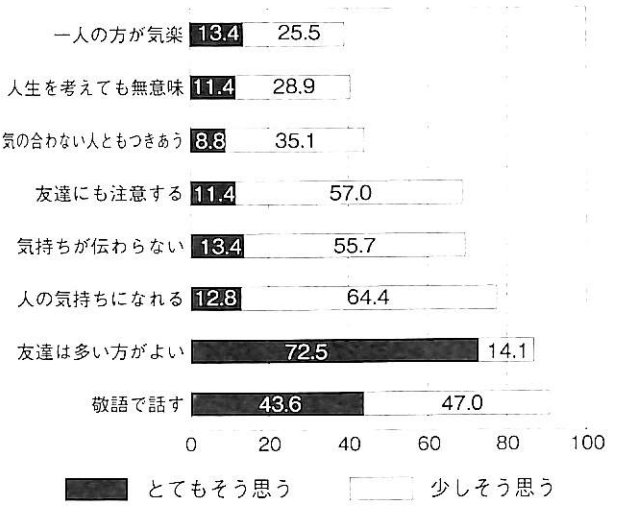
これらの３つの仮説を分析していくこととするが，本章は，以下のような構成となっている。第２節では，中学生の道徳性を，単純集計を中心として概括する。第３節・第４節・第５節でそれぞれ，仮説①・②・③を分析していく。そして最後の第６節で分析結果をまとめ，道徳性の発達と地域社会の関連，地域社会のとらえ方・あり方について考察する。

2. 中学生の道徳性

道徳性を測定する先行研究[4]を参考にして，図表6-1にある８つの質問を，道徳性をとらえる指標とした。最初にその単純集計結果を概略する。

「友達は出来ればたくさんいたほうがよい」「目上の人やおとなに，敬語で話しをする」に肯定的な割合が高く，基本的には友情の尊さや礼儀の意義を身につけ，道徳性を身につけた言動をしていると言える。また，「人の気持ちになって，考えたり行動したりできる」「仲の良い友だちでも，悪いことをしたら注意できる」も，７割前後の生徒が「そう思う」と答え，良好な対人関係を築いていることが伺える。しかし，「友だちといるよりも一人でいたほうが気楽だと思うことがある」に４割弱の者が「そう思う」と答え，「気の合わない人ともつきあったほうがよい」に肯定的回答をした者は半数弱に止まった。このあたりから，ある一線を越えた友達づきあいは敬遠するという傾向も見て取れる。

図表 6-1　中学生の道徳性　（単位：%）



また，「自分の気持ちが言葉で伝わらない」に約７割の者が「そう思う」と答えている。言葉を使って，自分から発信する，自己主張することが苦手なのである。それでは発信元の「自分」「自我」は形成されているのか。「人生とは何かと考えても，意味がないと思う」に４割弱の者が「そう思う」と答えている。自分自身を見つめなおすことが出来ない生徒もまずまず多いのである。

これらの道徳性について，学年・ジェンダー別にクロスしても有意差は認められない。ここに現れた調査対象者の価値観・規範意識は，男女や学年にとらわれないものだと言ってよい。項目間にいくつか有意な相関が認められた。「敬語で話す」とは「人の気持ちになれる」(.201・カッコ内は相関係数で以下同じ)，「友達は多いほうがよい」(.192)，「一人のほうが気楽」(-.181)。「人生を考えても無意味」とは「一人のほうが気楽」(.164)。「友達は多いほうがよい」とは「気の合わない人とも付き合う」(.319)，「一人のほうが気楽」(-.413)。「気の合わない人とも付き合う」とは「一人のほうが気楽」(-.212)，などである。

3. 地域社会の人間関係と道徳性

（1） 地域の大人とのかかわり

本節では，中学生の道徳性と地域社会での人間関係とのかかわりについて考察していくが，まず中学生は，どの程度地域の大人とかかわっているのかをみていく。２つの質問項目で尋ねた。１つめとして，子どもにとってつぎのような大人がいるかを３つの項目で聞いた（図

表 6-2)。「相談できる人がいる」「尊敬できる人がいる」「声をかけてくれる人がいる」は相互に有意な相関がある（図表 6-3）。

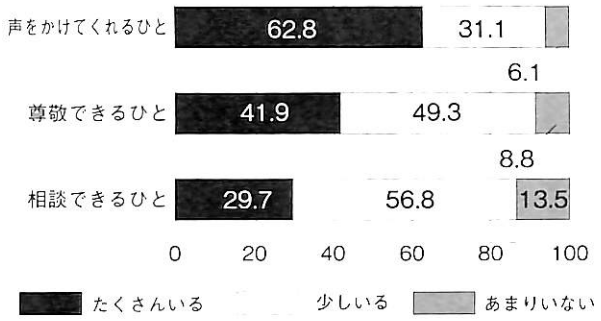
つぎに，大人からほめられることの有無を親，教師，近所の人，知らない人の 4 つの立場の大人についてたずねた。

大人からほめられることに関わる 4 つの項目は，相互に相関があり，とくに「親からほめられること」と「先生からほめられること」の相関（.470）と，「近所の人からほめられること」と「知らない人からほめられること」の相関（.532）が強い（図表 6-4）。

（2） 中学生の道徳性との関連

続いて，最初に提示した仮説①である，中学生の道徳性と地域の大人とのかかわりの関連についてみていく。図表 6-5 から図表 6-10 は，両者の関連が 5% 水準で統計的有意となった道徳性の項目である。仮説のとおり，地域社会とのつながりが強い子どもほど，道徳性が高いという結果となった。

図表 6-2　地域の大人との関係　（単位：%）



図表 6-3　地域の大人との関係の相関係数

	相談できるひと	尊敬できるひと	声をかけてくれるひと
相談できるひと	1	.489(**)	.549(**)
尊敬できるひと	.489(**)	1	.428(**)
声をかけてくれるひと	.549(**)	.428(**)	1

注：** 1% 水準で有意

図表 6-4　大人からほめられることの相関係数

	親からほめられる	先生からほめられる	近所の人からほめられる	知らない人からほめられる
親からほめられる	1	.470(**)	.282(**)	.147
先生からほめられる	.470(**)	1	.285(**)	.209(*)
近所の人からほめられる	.282(**)	.285(**)	1	.532(**)
知らない人からほめられる	.147	.209(*)	.532(**)	1

注：** 1% 水準で有意　* 5% 水準で有意

4. 電子メディアと中学生の道徳性

（1） 電子メディアの利用状況

本節では，電子メディアの使用と，地域社会との関連，道徳性との関連について考察していく。まずは，K 町の中学生がどれだけ使っているかの実態である。携帯電話の保持・使用の状況を見ると，携帯電話を使っているのは 54.1%，持っているが使っていないのは 4.1%，持っていないのは 41.9% であった。半数以上の子どもが携帯電話を使っている。携帯電話の用途と使う頻度を尋ねると（図表 6-11），友だちとはメールを 1 日に 11 回以上と頻繁に交わし，家族とは週に幾度か電話で話す，という使い方をしていることがわかる。

また，学校以外でパソコンを使うことがあるかどうかを尋ねると，使わない生徒は 37.9% であり，週に 1 ～ 2 日使うのは 31.7%，週に 3 ～ 5 日が 17.2%，週 6 日以上が 13.1% である。6 割近い中学生は週に 1 ～ 2 回

図表 6-5
（単位：%　以下図表 6-6 ～ 6-10 も同じ。）

		声をかけてくれるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
人の気持ちになれる	とてもそう思う	16.1	2.2	33.3	12.8
	少しそう思う	61.3	71.7	55.6	64.2
	あまりそう思わない	22.6	19.6	11.1	20.9
	まったくそう思わない	0.0	6.5	0.0	2.0
合計		100.0	100.0	100.0	100.0

図表 6-6

		相談できるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
人生を考えても無意味	とてもそう思う	11.4	7.1	30.0	11.5
	少しそう思う	25.0	35.7	10.0	29.1
	あまりそう思わない	52.3	44.0	40.0	45.9
	まったくそう思わない	11.4	13.1	20.0	13.5
合計		100.0	100.0	100.0	100.0

図表 6-7

		尊敬できるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
人生を考えても無意味	とてもそう思う	9.7	8.2	38.5	11.5
	少しそう思う	24.2	37.0	7.7	29.1
	あまりそう思わない	51.6	41.1	46.2	45.9
	まったくそう思わない	14.5	13.7	7.7	13.5
合計		100.0	100.0	100.0	100.0

図表 6-8

		相談できるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
友達は多い方がよい	とてもそう思う	93.2	65.5	60.0	73.0
	少しそう思う	2.3	21.4	10.0	14.2
	あまりそう思わない	4.5	10.7	10.0	8.8
	まったくそう思わない	0.0	2.4	20.0	4.1
合計		100.0	100.0	100.0	100.0

図表 6-9

		尊敬できるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
友達は多い方がよい	とてもそう思う	85.5	65.8	53.8	73.0
	少しそう思う	9.7	19.2	7.7	14.2
	あまりそう思わない	3.2	9.6	30.8	8.8
	まったくそう思わない	1.6	5.5	7.7	4.1
合計		100.0	100.0	100.0	100.0

図表 6-10

		尊敬できるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
一人の方が気楽	とてもそう思う	17.7	11.0	7.7	13.5
	少しそう思う	16.1	30.1	46.2	25.7
	あまりそう思わない	27.4	41.1	38.5	35.1
	まったくそう思わない	38.7	17.8	7.7	25.7
合計		100.0	100.0	100.0	100.0

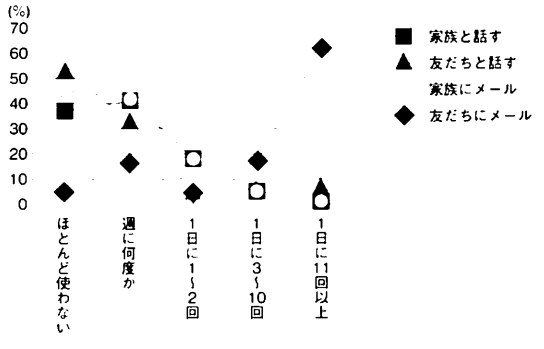
以上はパソコンに触れている。その用途を見ると（図表6-12），趣味（48.3%）やゲーム（40.3%），音楽（29.5%）が多く，チャット（22.1%）やメール（14.8%）などコミュニケーションのために使っているのは2割前後である。

これらの結果をふまえて，以降の分析では中学生が使う電子メディアを，携帯電話に限定することにしたい。所有の割合や使用頻度，使用方法などからして，中学生がメディア上で人との関わりを結ぶ道具としては，携帯電話がおもに使われていると考えられるためである。携帯電話の使用率は学年差，ジェンダー差が大きく，2年生の4割弱から3年生の7割弱へと増加し，また男子より女子のほうが使用率が高い。（図表6-13・6-14）

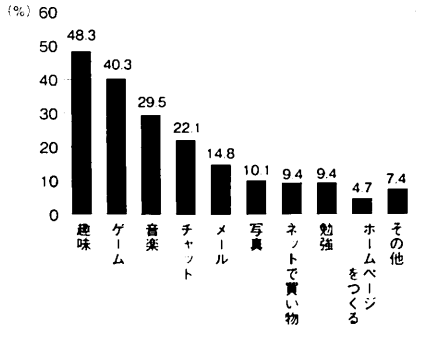
（2）携帯電話の利用状況と地域の大人とのかかわり

子どもが携帯電話を使うことは，地域の人間関係とどのようなかかわりがあるのだろうか。最初に示した仮説②では，メディアを使うほど，人間関係は弱いとした。図表6-15がその結果である。3年生では，地域の大人との関わりについての3項目と，携帯電話の使用の有無が，いずれも有意差を示した。携帯電話を使用している子どもの方が，大人とのかかわりが多く，仮説とは逆の結果となった。

図表 6-11　携帯電話の用途と使用頻度



図表 6-12　学校以外でのパソコンの用途



図表 6-13　携帯電話使用 と 学年

			学年		合計
			2	3	
携帯使用	携帯使っている	度数	24	56	80
		%	36.4	< 68.3	54.1
	携帯使っていない	度数	42	26	68
		%	63.6	> 31.7	45.9

注：「>」「<」は，カイ二乗検定において5%水準で有意。以下の表でも同じ。

図表 6-14　携帯電話使用 と 子どものジェンダー

			ジェンダー		合計
			男子	女子	
携帯使用	携帯使っている	度数	30	50	80
		%	41.1	< 66.7	54.1
	携帯使っていない	度数	43	25	68
		%	58.9	> 33.3	45.9

5. 携帯電話利用の有無と道徳性

最初に提示した仮説③では，メディアを使うことが，道徳性が低いとした。果たして両者の関係性はどのようになるのか。分析結果としては，携帯電話の使用の有無と，道徳性に関わる項目とのクロス集計をしても，全く有意差はみられなかった。さらに，統制変数（第3の変数）として学年，ジェンダーをとりあげ，3重クロス表を作成すると，1項目ずつ，有意差のある項目があった。（図表6-16）

概して，携帯電話の使用と道徳性は，ほとんど関係がないといえよう。

6. 結語
—道徳教育の場としての地域社会のあり方—

最後に，本章での分析結果をまとめ，その結果をふまえて道徳教育にあるべき地域社会の姿について，若干の提言を行うことにしたい。

本章の最初に提示した仮説は，「メディア」を「携帯電話」として分析を行ったが，その点をふまえて再掲すると，以下の3つとなる。

① 地域社会の大人との交流が多い子どもは，道徳性が高い
② 携帯電話をよく使う子どもは，地域社会との人間関係が弱い
③ 携帯電話をよく使う子どもは，道徳性が低い

分析結果をまとめてみよう。①については，支持された。②については，仮説と逆の結果となった。携帯電話を使う子どもほど，地域と大人との交流が強かったのである。③については，ほとんど相関がみられなかった。この結果を図示すると，図表6-17のようになる。

この分析結果を，これからの地域社会での道徳教育において，どのように活かすかを考察し，本章での分析を締めくくることとしたい。

まず，地域社会での大人との交流が，子どもの道徳性の発達につながることは，本章の第1節で述べたような，道徳教育の場として地域社会を設定することが，正当性があることを意味する。教育学で伝統的に言われている「地域の教育力」や，学習指導要領で強調されている「道徳教育における学校・家庭・地域の連携」という考え方は，基本的に正しいと言ってよい。

その上で，メディアの使用という行為をどのようにとらえるのかが，キーポイントとなろう。子どもが携帯電話を使うことは，道徳性には直接関係しないが，地域社会の大人との交流を強めることとは，正の相関となっている。つまり，道徳教育の場として重要である地域社会での人間関係が，携帯電話の使用によってより強められる，と考えられるのである。河井孝仁は，地域社会とは所与のものではなく，作り上げていく必要があるものだとして，その方法として，インターネット上にコミュニ

図表6-15 地域の大人との関わりと携帯電話使用（3年生）

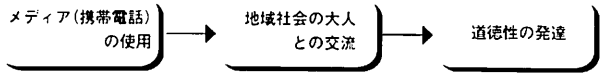
			携帯電話使用		合計
			使っている	使っていない	
相談できるひと	たくさんいる	度数	22	4	26
			39.3	> 15.4	31.7
	少しいる	度数	31	17	48
		%	55.4	< 65.4	58.5
	あまりいない	度数	3	5	8
		%	5.4	< 19.2	9.8
声をかけてくれるひと	たくさんいる	度数	39	11	50
		%	69.6	> 42.3	61.0
	少しいる	度数	16	13	29
		%	28.6	< 50.0	35.4
	あまりいない	度数	1	2	3
		%	1.8	7.7	3.7
尊敬できるひと	たくさんいる	度数	25	5	30
		%	44.6	> 19.2	36.6
	少しいる	度数	30	17	47
		%	53.6	< 65.4	57.3
	あまりいない	度数	1	4	5
		%	1.8	< 15.4	6.1
合計		度数	56	26	82
		%	100.0	100.0	100.0

図表6-16 道徳性と携帯電話の使用

		携帯電話使用	
		使っている	使っていない
友だちは多い方がよい	2年生	79.2	< 95.2
	3年生	85.7	80.8
人生を考えても無意味	男子	53.3	> 25.6
	女子	40.0	52.0

（注）道徳性は，「とてもそう思う」と「少しそう思う」を足した割合で，単位は%。
表の上半分が学年別，表の下半分はジェンダー別のクロス集計である。

図表6-17
道徳性・地域社会の人間関係・メディア使用の関連図



ティを作ることが有益であると，具体例を交えて述べている。[5]近隣の住民がすべて知り合いといったような，昔ながらの地域社会の強固な結びつきは，もはや薄まっているが，人々の生活や人間関係において，全く地域性がない状態というのはあり得ないし，望ましくもない。そのため，地域社会を何らかの形で，「再設計」「創造」する必要があり，その手段がネット上での人のつながりということである。本章での分析結果も，河井の提言と方向性を同じくするものといえよう。子どもが携帯電話を使用することにより，地域の大人とのつながりが強まり，地域社会が形成されていく。地域社会の形成は，道徳性の発達にとって有益なので，子どもの道徳性も高まる，という関連性が考えられるのである。

結局のところ，「地域の教育力の活用」「学校と地域の連携」を行おうと考えた時に，地域社会をどのようにとらえて，形成していくかが，大変重要なのである。かつて筆者は，道徳教育の場としての地域社会は，住民運動のような個人が自発的に集合して作るものではなく，町内会・自治会などの伝統的な地域組織をベースとして作ることが現実的であると述べた。[6]伝統的な地域組織，自発的な団体・サークル活動，保護者を中心としたグループ，そして前述したネット上でつながる地域の人々。すべて，地域社会での人間関係を作っていると言ってよい。子どもの道徳教育において，地域社会が一つの実践の場所であることをしっかりとおさえ，様々な形をとる地域社会での人と人とのつながりを認識し，よりよい地域社会を作り上げていくことが，これからの道徳教育において，不可欠であると言ってよいであろう。

【引用文献・参考文献】

(1) なお，小学校学習指導要領にも，ほぼ同様の文章が，総則に記載されている。

(2) 『中学校学習指導要領解説　道徳編』（文部省，1999），106 ～ 108 頁．

(3) 水越康介「ネット環境のデザイン」遊橋裕泰・河井孝仁編著『ハイブリッド・コミュニティ』日本経済新聞社，2007，183 ～ 220 頁．

(4) 青木孝頼・石川俏男・牧野禎夫他編著（2000）『新版道徳性検査 New　HUMAN』（図書文化社，2000）や古畑和孝他編著（1997）『HEART 道徳性診断検査』（東京心理，1997）といった道徳教育に関する心理テストや，浅野智彦編（2006）『検証・若者の変貌』（勁草書房，2006）などの規範意識に関する青年文化研究の質問票を参考とした。

(5) 河井孝仁「地域環境のリ・デザイン」遊橋・河井前掲書，105 ～ 147 頁．

(6) 冨江英俊「地域社会における道徳教育に関する一考察－いかなるネットワークが重要であるのか－」『道徳と教育』No.312・313（日本道徳教育学会学会誌），2002，333 ～ 341 頁．

7. 農山村における社会・自然体験の教育的意義
～（財）「育てる会」の山村留学についての考察～

児童福祉施設 非常勤職員
竹内 弘枝

1. はじめに

今回調査対象とした組合立小海中学校の設置主体は，小海町・北相木村・南相木村の３町村である。この北相木村には，財団法人・育てる会の「山村留学センター『からまつ荘』」がある。北相木山村留学センターの調査から，その成果と課題について「農山村における社会・自然体験の教育的意義」を，都会の子ども達へ還元するといった視点から考察する。

2. 山村留学とは

山村留学とは，「義務教育段階の小・中学生が保護者の元を離れ，農山漁村の豊かな自然環境の中で都会とは異なった体験・学習活動をすること」[1]である。「山村留学便利情報」（2000年１月）によれば，育てる会は1976（昭和51）年，青木孝安・現理事長が，文部省所管の「青少年社会教育団体・育てる会」として長野県八坂村（現大町市）で創設している。理事長は「当時は，過疎対策ということではなく，夏休みなどに行われる子どもたちの自然体験を１年間という長期間にわたって，四季の自然の変化の中で様々な体験として子どもたちに与えたいという願い」で始まり，東京都と長野県での教師生活体験，「都会と田舎の教育実践が原点」だったと述べている。

「育てる会」の山村留学には短期と長期の二種類があり，短期は学校の夏季休業中に１～２週間，長期は現地の学校に転校し寮（留学センター）や里親の元で生活する。近年は学校週五日制の実施に伴って，連休期間の「ミニ山村留学」を年６回程度実施している。

それでは山村留学をさせようという親，山村留学をする子ども，それはどのような人達なのだろうか。そしてどのような成果があるだろうか。それらを考察することで，都会の子ども達とその親にも役立つことがあるのではないだろうか。ここでは山村留学の成果を都会の親子の子育てに還元する視点から考えてみたい。

一口に成果といってもそれをどの様な点に注目して捉えるかについては，生徒指導の理念「生活体験や人間関係を豊かなものとする」という表現が適切であると考える[2]。さらに生徒指導の定義として「生徒の個性の伸長と同時に，社会的な資質や能力を育成し，自己指導能力の育成を目指すもの」という文部省の生徒指導資料がある。生徒指導は学校における概念であるが，その理念や定義からみれば児童・生徒の育成に関わる全ての場面において機能して然るべきものと考えられる。山村留学は義務教育段階の子どもを対象とするので，小学校における生徒指導の内容に注目する。小学校の内容がその後の中学校での指導の基礎となるからである。生徒指導の内容としては基本的生活習慣の形成，好ましい人間関係の構築，基本的モラルの育成と行動の形成[3]がある。基本的モラルについては，前二者が身についていればそれも育成されていると考えられるので，山村留学の成果として基本的生活習慣の形成＝しつけと好ましい人間関係の構築に注目したい。

山村留学生は都会出身の子どもである。第３節では北相木山村留学センターの現役生と修園生への聞き取り調査，第４節で過去に「育てる会」の行った修園生等への調査から，その子達が山村の環境に暮らしてどのように育つかをまず調べる。第５節では，もともと山村に暮らしている大人と子ども達はどのような人達かを調べる。最後に，両者と都会の子ども達の環境や育ち方を比較することで，山村留学の成果を都会の子育てに還元することを考えたい。

3. 北相木山村留学センターの調査

（１）調査の概要

2007年７月30日（月）

長野県南佐久郡北相木村の北相木山村留学センターで，主任指導員と手伝いの子ども達に聞き取りをした。

センターはちょうど長期山村留学生の夏休み中で，短期生を受け入れる時期であったため，手伝いの子ども達がボランティアに来ていた

対象者は，山村留学のOBと現在留学中の計7人，二村節子主任指導員で，調査者（夏秋，牧野，竹内）と座談会形式で行われた。

（2）調査結果

① 北相木山村留学センターとは

財団法人「育てる会」により21年前に創設。北相木村には村立中学校がないため，長期留学は小学生のみを対象となっている。「育てる会」本部が，保護者からの月約8万円（年間約100万円）と村からの補助金で運営。北相木センターの職員は，二村主任と山口指導員（男性），食事作り補助の女性1人の計3人である。

手伝いの子ども達は，交通費自己負担。高校生以上の手伝いの人はボランティアである。

② 山村留学生の生活

〈月の前半はセンターでの生活〉

午前	6：00	起床 （小学校の運動会の金管バンド練習があると5時45分になる）身づくろい，掃除，犬の散歩
	6：30	朝の集い 自然の話を聞く。マラソン　山道を走る。指導員が車で見回る。 洗濯物干し班（下洗いは各自洗濯板で。洗濯機は2台）朝食の配膳班
	7：30	登校
午後	4：00	下校 宿題センターの学習室で。各自のロッカーがあり，教え合いもする。学校から沢山宿題が出るので，親の持たせる通信添削などはする暇がない。 洗濯物取り込み
	5：30	夕食 村の子ども達と和太鼓交流のある月・水は5：00になる。 食器洗い，掃除。掃除機かけ，風呂，トイレを班に分かれ，ローテーションする。 ミーティング 人の長所，短所を言い合う。相互理解できるので，子どもの方からミーティングをして欲しがる。 入浴（これだけは男女別）
	8：30	消灯 男女全員（今年度は男子6人，女子2人。小学2年以外全学年にわたる）が大部屋に枕を並べて寝る。山村留学生はきょうだいとして生活している。

〈月の後半は農家生活〉

協力農家一軒に2人ずつホームステイする。夏，冬の学校の休業中は，子どもは実家へ帰る。農家でもマラソンをするし，廊下や階段のモップかけのような簡単な掃除もする。

畑で苗植えを手伝ったり，農家のお父さんと民芸品作りの工作をしたりする。

〈年間行事〉

入園式　修園式　保護者会他　（学校行事も含め，親は年8回センターへ）

収穫祭

センターの持つ田の収穫と，子ども達の心の収穫を祝う意味があるセンターの文化祭。

留学生の個人研究発表（村役場・議会，学校・教員，教育関係者が出席）。研究テーマ例としては，村内120軒の調査やジャガイモ栽培の比較，蛇の生態など。村人も協力・指導。工作の作品展示。村の子と合同の和太鼓発表。保護者によるバザー（村民が多数来場）。センター2階の大広間で実父母と農家父母，発表会出席者を交え，会食・懇親会。

〈同窓会〉

山村留学生の同窓会は親が創った。10年も経つと連絡を取れなくなることが多い。

〈村の子どもとの交流〉

・センターに村の子ども達も遊びに来る。

・和太鼓の練習

・地元のソフトボールチームは児童の数が少ないので，留学生も入ってほしいと言われるが，センターの活動日（土，日）と試合日が重なるので，残念ながら断っている。

③ 山村留学の長所と負の面

〈長所〉

・体を動かすこと

家事，マラソン，山道の通学など否応なく体を動かさねばならない機会が多い。

・勉強がよくできるようになる。学校の1クラスの人数が1桁なので，先生がわかるまで教えてくれる。

・集中力がつく

生活そのもの，活動にメリハリがあるためと，周囲の大人の目によって，自分の存在感を感じさせてもらえる＝自分に存在感があるため，と二村指導員。

例：多動の子どもが薬に頼らずに落ち着くようになる。

・友達が沢山できる，絆が感じられること

ミーティングで短所を指摘されると最初は反発する

が，だんだん集団生活の知恵がついてくる。指導員のし向けだけではなく，1年間の生活を通して，子ども達の中で変わってゆき，何でも言い合える関係になる。喧嘩はあるが，根に持つことがなく，陰湿ないじめはなくなる。

〈負の面〉

山村から都会に戻った時（中学，高校入学），都会の絆の少ない生活に苦しむ子どももいるといった，カルチャーショックのようなものがある。（子どもの性格による。）山村留学の仲間との関係も続くし，都会の仲間との関係も別に作るといった割り切りが必要になるということである。

例：都会の私立女子中学のなじめず，区立中学もだめで，カナダに高校留学した子もいる。

④　山村留学をさせる親，する子どもはどんな人達か。

〈親は余裕のある家庭〉

今年の共働き家庭は2/8軒。サラリーマンと医者の家庭のようだ。子どもに体を動かすことをさせたい，自然に親しませたいなどの方針を持っている。短期留学で子どもの反応を見てから来させる様子である。

〈子どもは変わり者？〉

子どもは親の勧めで参加したり，兄姉の参加の影響もあるようだ。短期留学で気に入って親を説得して来るので，脱落はないということである。

問題のある子どもが来るというわけではなく，手伝いのM君によれば「変わり者の子」が多いという印象だそうだ。その子達の良い所が留学によって伸び，かつ社会性もつくということである。

（3）OBと現留学生の話

T. S君 小学5年	留学1年目（21期生） 千葉県の私立大学の付属小学校に通っていたが，学校のカリキュラム・学校行事を「窮屈」に感じていた。公立でないため近所に友達もなく，ストレスを感じていた。 山村には沢山友達がいるので，6年生になっても来たい。ご飯も沢山食べられるようになったのに，当初59kgあった体重は1学期で50kgに減った。双子の弟は家におり，塾通いをしている。親は自分にも中学受験を考えて，6年生は家に戻したがっているが，説得したい。
M. N君 中学1年	千葉県より。（小学4，5年在）
R. K君 小学5年	埼玉県より。留学2年目（今高1の兄も在籍していた） 学校の成績は1番で，詩が得意である。センターに自作の詩「絆」が飾ってある。 面倒見がよく，新入の6年生からも一目置かれている。サッカーやキャッチボールが好き。
D. S君	静岡県より。（13，14期生）
D. M君 21歳 社会人	茨城県より。（小学4，5年在，9，10期生。妹も短期に参加） 運動して欲しいという親の意向で留学。辛かったのは好きなものが食べられないこと，決まった生活，親に会えないこと。
K. K君 中学3年	埼玉県より。短期留学のみ　　中高一貫校在。
Kさん	大阪府出身の母が自然の生活が好きで，勧められた。姉は山（虫がいるから）が嫌いなので来なかった。農家の暮らしがよかったと思う。

（4）山村留学の特徴・成果と課題

北相木山村留学センターの調査から，強く感じた特徴は次の3点である。

①　家事を自分達でする
②　自然の中で暮らす
③　家族以外の人との深い絆

これらはいずれも子ども達の都会生活では得られにくいものである。これらは子ども達に何をもたらしているだろうか。

①　家事を自分達でするということは，布団の上げ下ろしに始まり，掃除，配膳，食器洗い，洗濯と，全て体を動かすということである。マラソンや徒歩通学は都会でもしようと思えばできるが，家事は家に保護者がいればその人がするものと思われがちである。実際インタビューでも，月の半分の農家生活では子どもは食器洗いはしないとのことだった。まして都会では，保護者は子どもが家事をするよりも勉強することを優先させたりする。

家事をすることは体を動かすだけではない。おそらくその分担ややり方をめぐって子ども達の間に小さな失敗や揉め事を引き起こすこともあろう。指導員の指導を仰ぎながら，それらの一つ一つを仲間同士で話し合い，解決してゆくことが子どもの人間関係調整力を養う勉強になる。何事も効率優先になりがちな都会生活では，たかが家事と見過ごされ軽視されることが，子どもに生きる知恵をつけ人間性を成長させる体験となっていると考えられる。

柳生和男は基本的モラルの育成においては，具体的な体験をさせることが重要であると言っている。低学年児童なら行動の方向から心を育て磨く，たとえば「ごみを拾う」という行為も，まずは拾うという現象面の段階を

徹底して行わせることが大切[4]という。実際の生活においては行動が重要であるというその趣旨に鑑みれば，山村留学の家事体験はまさに基本的モラルの育成の訓練になっているし，話し合いを通して好ましい人間関係を構築するきっかけともなっていると考えられる。

② 自然の真っ只中で暮らすことは都会では決して得られないものである。山村留学センターは山の中にあるから，センターから一歩外に出れば山の上り下りをしなければならない。街灯もないから日が暮れれば真っ暗。星が沢山見えると言っていた子どももいる。熊や蛇，虫などの生き物，厳しい冬の寒さや季節ごとの実りも体験できる。その自然の中で，高原野菜作りを中心とする人間の暮らしが営まれる。自然の厳しさと恵み，労働への感謝を言葉の上ではなく肌で実感できる暮らしである。

③ 家族以外の人との深い絆について岡崎は「擬似的な家族・親子関係」[5]と言っている。本来ならば家庭で身につけるべき資質を培うということは，基本的生活習慣，親子・兄弟姉妹の信頼関係を培うことであろう。子ども達の方からミーティングをして欲しいという声が出，言い合いをしながら人間関係を調整してゆく力がつくことは重要である。家庭に兄弟が沢山いれば喧嘩などいろいろなことがあって，それを調整してゆくことで子どもは成長してゆく。指導員の先生や山村留学仲間，農家の里親との関係が家庭の人間関係の不足を補うことになると考えられる。

4.『山村留学総合効果の検証』より

次に，育てる会の行った修園生（OBのこと）とその保護者へのアンケート及び面接調査をまとめた『山村留学総合効果の検証』から，どのような親子が山村留学をするのかまとめよう。この調査の調査票回収率は留学体験者32%，保護者38%であり，回答しなかった人々の意見を知ることができない限界は岡崎も指摘[6]している。

（1）山村留学の動機

山村留学は「親に教えてもらった」というきっかけが7割近く，親の意志が強く働いている。そこで親が子どもを留学させた動機が時代とともに変化する点に注目したい。「自然の中でのびのび育ってほしい」が9割近かったのが，1990年代になると「学校の先生と合わない」「学校に行くのが嫌」「友達と離したい」などの「避難型」が増えてくる。その理由として一つは山村留学の参加者が多様化したために相対的に増えた可能性，もう一つは都会の学校などの教育環境が変化した可能性[7]が考えられている。

（2）山村留学の評価

では子ども達自身は山村留学をどのように評価しているだろうか。

① 農家生活とセンター生活

修園生は農家生活とセンター生活の両方があることを評価している。[8]それぞれどこがよかったかというと，農家では農作業の手伝い，食事がおいしい，生活の体験となっている。センター生活でよかったことは野外活動，農作業が多い。ちなみに学校生活でよかったことは通学路の自然，長い通学路，野外教室だから，学校生活そのものというより自然体験がよかったというほうが当たっていよう。特に通学路の自然については与えられた体験では得られない，能動的自然体験の効果[9]と叶田が指摘している。

この結果と前節での考察を照らし合わせると，子ども達自身には家事の重要性は認識されていないようだ。楽しいことではないから当然とも言える。一方，自然の中での暮らしは子ども達に強い印象を与えている。面接調査からもサバイバルキャンプとか廃屋生活と呼ばれる，山の中で自然の物を採集して食べるキャンプが最も人気があるようだ。農作業もよかったこととして高く評価されている。農作業は食べるものを作ることであるし，食事がおいしいことが評価されていることからも，子ども達にとって食べることは重要ではないだろうか。

② 家族以外の人との関係

山村留学センターの仲間達は擬似兄弟とされる。年長の同性を自分の理想にしたりすることもある。一方で，「集団が大きすぎてどろどろした複雑な人間関係があり，いじめや暴力の発生しやすい状況がある」と指摘する修園生もいる。これはセンターによって，またその年の留学生の数によって状況が異なると考えられるが，集団の規模のことは重要な指摘である。「いじめに近いような状態はあったが，ずけずけ言い合って調整した」との声[10]もあるように，その状態を解消する方策が取れることが子ども達の成長につながる。集団が大き過ぎると解決し辛くなる点に留意する必要があろう。

同様に，農家で一緒だった子とよく喧嘩をしたとの声もある。テレビの番組のことで話し合ったり，年長の子が手のかかる子の面倒を見るようになったりするなど，本当の兄弟のようである。

一方，この調査でも都会へ帰ってきてから不適応を示す子どもの存在がわかる。柴田は水のまずさや手を洗うのに並ばなければならない不便を訴える子どもが，もう一度山村へ戻る例を挙げている。その例では，中学生になり自己をはっきり作り上げ，対人関係調整能力をつけて再び都会へ帰って来られた[11]。

農家の里親は，子どもが悪いことをしたときは叱り，良いときは褒める。放送番組では「失敗してもいい。成功の元だから隠すなと言っている。するとごめんなさいが言えるようになる。」と里親。岡崎は「ある種封建的な形が残っていて，それが家族関係の土台になっている」[12]とも指摘している。農家の子育ての基本には，昔ながらの家庭生活のしきたりがあると考えられる。

センターの指導員の存在は大きいものがある。「指導員といろいろ話すことができた」ことに良い印象を持っている子どもが半数である。柴田はMの親へのインタビューという形で「センター内での指導員の存在は大きく，指導員が変わったとたんに雰囲気が変わり」と事例[13]を記録している。また，「男性の指導員だけなので女子に戸惑いがあった。」「指導員がもっといてもいいのでは。年配の指導員がいないのは考えものだ。」「留学生達は親と離れて，みんな精神的に不安定になっている。その心のケアも含めた精神面・生活面の全般をサポートできる指導員であってほしい。そのために指導員の数を増やし，心理学を学んだカウンセラーの資格を持つ人，子育て経験のある人の採用も必要だと思う。」という修園生の意見[14]もある。

都会の実の親達は，「親の山村留学だった」と述懐するそうだ。「第三者の目を通すことで子どもがよりよく見える。子どもも第三者の目から見た自分を知る。」という言葉が親の実感を表している。行事参観の際の親同士の交流によっても，多様な子どもの見方，育て方を知ることができる。岡崎はここにも擬似コミュニティの形成を指摘する[15]。都会の生活において希薄になっている子育てのコミュニティが，親をも育てる，社会化するということである。

（3）まとめ

以上から山村留学の効果をまとめると，都会の生活では得られにくい家事などの生活体験，自然や農作業の体験，擬似家族体験，擬似コミュニティ体験を通して，子どもと親が成長するということである。すなわち，子どもは人との付き合い方を身につけた，精神的にたくましくなったこと。生活習慣は身についてきても，忘れ物が直ったり，勉強好きになったりすることは少ない。親は他の親の考えが勉強になって，自分の家庭や子育てを反省している。

ただ逆に，都会へ戻ってからの不適応という側面もあった。自然や人間関係の希薄な生活になじめなくなってしまう様子である。自己を確立し，対人関係を自分で調整できるようになる必要がある。

もう一つ注意しなければならない点として，「育てる会」の山村留学に参加する家庭は経済的に余裕があり，子どもの教育への関心が高いということである。決して，公立学校のように様々な家庭背景の子ども達が集まっているわけではない。「大人の社会化」を考えるとき，成人は既に一通り人格が出来上がっているので，自分の意に沿わない社会化は受け容れないということを住田が述べている[16]。拙稿「学校・家庭・地域社会の連携における目に見えない要素について」でも，私が子育てをするとき参考にしたのは，時代や受けてきた教育のかなり違う自分の親の意見ではなく，年齢や立場の近い同じ社宅の主婦達の子育てだった[17]ことを明らかにしている。自分の立場とかけ離れた人の意見は参考にならないのではないか。子どもを山村留学させた親同士のつながりが強まったというのも，そのような家庭背景の似通った人たち同士だから可能だったのではないかと考えられるのである。

この点については今後の研究の課題としたい。

5. 小海町の大人と子ども達

（1）小海町の「三番叟」と町民同士の絆

1，2の調査から，小海町に住む子ども達には自然体験や農業体験が豊富にありそうに見える。ではその家庭的背景はどうだろうか。山村留学生の親子が得たような擬似親子関係が子どもや大人達の間にあるのだろうか。まず親達の暮らしを調べてみよう。

擬似的親子関係については，郷土芸能の伝承形態にもみられる。小海町の山間部に伝承される「三番叟」は，親沢地区の「地域伝統芸能」（郷土芸能・県指定無形文化財）で，250年前から伝わる人形芝居である。「丈」「翁」「千代」の人形と，囃子方を加え総勢20余名。それぞれ異なる家筋の男達が3人一組で「弟子，親方，おじっつあ」になり，弟子が出演者になる。親方がそれを指導し，親方を監督するのがおじっつあで，祭りまでの10日間

に集中的に練習が行われ，擬似親子関係と言えるような付き合いになるという。それが７年ごとに更新されて，弟子が親方になり新しい弟子を迎えるというようになるので，町民の人間関係が深まると考えられる[18]。

小海中学校の教員へのインタビュー調査からは，母親同士のつながりの強さが指摘された。小海中学校は小海，北相木，南相木の３町村が子どもの人数割りで費用分担する組合立中学校である。小海中学校には小海小学校を含め４つの小学校から進学してくる。小海小出身者の母親は行事出席率がよく，自分の子ども以外の子の事もよく知っている。主だった母親達は幼少から小海に住み（アンケート回答者のうち６割ぐらい），互いの呼び名があだ名であるなど，密度の濃い人間関係がうかがわれるという。部活動などへの送迎を気軽にし合い，地域の子どもを地域でみている様子である。

小海町長へのインタビューからは，少子高齢化対策として今年４月から子育て支援課を設置し，５つの支援策を打ち出しているとの事である。即ち保育料の値下げ，町の中心にある中学校跡地に子どもが裸足で遊べる芝生広場を作る計画，中学生までの医療費無料化，子どもの野外活動や年寄りの古い技の伝承を支援するNPO「ジロクラブ」創設，町宅老所「なごみ」に渡り廊下で「よってけや」をつなぎ子どもが遊びに来られるようにした。この町をあげた姿勢に，子どもを包む暖かい視線を感じる。

このように小海町に幼少から住む人たちの間には強い人間関係が築かれているといえる。小海の子ども達はそのような絆の中で育っているのである。

（２） 現地の子ども達

信濃毎日新聞に載った子ども達の記事を拾ってみよう。まず2004年，2005年と小海町の地域おこしグループ「こうみ塾」が生んだ町のキャラクター「森の小人プティリッツア」作りがある。森林整備のボランティアグループ「小海やすらぎ隊」の人たちが切り出した間伐材を利用し，小海小学校の全校児童がペンキで顔を描いた。「こうみ塾」などによるランタン祭りは，８月末小学生や地元有志ら約百人が手作りランタンを持って商店街を練り歩く。寒さが訪れると小学校の校庭にスケートリンクが作られ，児童がスケートを手近に楽しめる。小海中学校生徒会では2002年度からアルミ缶集めを始め，毎年地域の社会福祉協議会に車椅子を贈っている。これらの記事から，小海町の子ども達は地域の人たちの協力の下，様々な活動をし，その恩返しもしている様子がわかる。

教育長へのインタビューでは，給食費の未納はない。携帯電話は中学生は持つ子が多いが，決まりは守っている。中学生の飲酒喫煙が取り沙汰されることもない。しかし親の考え方も少し変わってきており，しつけも学校でしてほしいという親が増えてきている。食育は家庭とも協力しなければならないので親の指導をしている。不登校は小学生で１人，中学生は各学年2~3人とのことである。

小海中学校の教員へのインタビューからは，男子は野球，スケートなどの運動系の部活動参加者が多く（90パーセント位），ほぼ毎日くたくたになっている。部活動のない日は，一部の男子が釣り，川遊び，動物採集などをしている様子であるが，それらの子どもは限られていて，他の子どものことはわからない。女子は買い物がしたい子が多く，佐久平へ出かけたりする。しかし部活動の試合の応援には女子も来たりして，家族でどの子どもとも親しむ様子が見られる。部活動の指導には地域の人も当たり，スケートのコーチは中学の用務員である。中学では去年から学級担任もクラスメートも１年から３年まで変えないことになった。人間関係作りが得意でないからとの理由である。小規模小学校から中学校へ上がる段階で，人間関係作りに緊張が強いられる様子という。その引きずりが長く続くそうだ。完全に不登校の子どもは３人，保健室登校が７人いる。不登校の子どもの原因はそれぞれ異なっている。きっかけは人間関係がうまく作れないことでも，その背景は違い，家庭が原因の子は少ないとのことである。塾へ通う子は少なくて，１クラスに4~5人で，３年生になっても少ないそうだ。学校で補習をするとほとんど全員来るので，塾の選択肢が少ないという理由もあるのかもしれないと教員は言っていた。

最後に『山村留学総合効果の検証』から，受け入れ側の学校教職員の意見を通して地元の子ども達の様子を考えてみよう。教職員は山村留学生を「活発な発言が村の子どもによい刺激になっている」「長い距離を徒歩通学するので給食をよく食べる」「センターではテレビを見せないためか読書量が豊富」「清掃が手際よい」「農家でのホームステイ時には村の子ども達との屋外での集団遊びを見かける」などと見ている。そしてセンターに対する要望として「もっとセンターを開放して，村の子どもも参加させてほしい」との声が２番目になっている[19]。ということは逆に，村の子どもはあまり活発でなく，読書量も少なめ，屋外での集団遊びも少ないということに

ならないだろうか。だからセンターを村の子どもにも開放して，よい体験をさせてやってほしいという要望になるのではないか。たとえ山村で生まれ育っても，放っておいたのでは家事体験，自然体験，農業体験も不十分であるということではないか。この調査は「育てる会」の山村留学全体の結果であるから小海町の子ども達そのものの様子とは言えないが，同様の傾向は考えられる。

（1）（2）とみてくると，第一に小海の子ども達は地域の大人達の強い絆の中で見守られて育ち，山村地域らしい体験をしていることがわかる。そのため飲酒，喫煙，携帯電話の使い過ぎ，給食費の未納といった都会の学校で起こるような問題はない。しつけがほぼ行き届いているといえる。一方で自然に恵まれながらも，子ども任せにしていたのでは自然体験や家事体験は限られたものになる。少人数の限られた集団の中で育つため，より大きな集団の中に入った時，人間関係作りがうまくできない子どももいる。

第二に，親の中にもしつけも学校でしてほしいという人も現れている。学校に顔を出さず，アンケートにも応じない親のことはわからないという，都会の学校と変わらない親子の様子もうかがえた。共同性の強く残る山村地域社会でも，食育には親の指導も欠かせないなど，学校が親を社会化する努力が見られる。そして教職員にも山村留学センターの体験を地元の子ども達にもさせてやってほしいという要望がある。

6. 山村留学の成果を都会の子ども達に広く還元するには

（1）都会の子ども

ここまでの考察から，山村留学生，小海町の子ども，都会の子どもそれぞれの育つ環境と彼らの特徴を簡単な表にして比べてみよう。

山村留学生の環境はセンターでの集団生活と里親農家での生活である。そこには都会の家庭生活にはない家事分担や自然体験，子ども同士の喧嘩や話し合いの時間がある。その上，保護者とは異なる第三者の指導もある。それがしつけや人間関係作りの力（一部に不十分な子もいる）の支えとなっている。小海町の子ども達にも同じ自然環境があるが，子ども任せでは不十分な点もある。家事体験については集団生活でないため，山村留学生ほどの体験がないと考えられる。密度の濃い人間関係の中で育ち，第三者の目もある点では山村留学生と似ており，しつけや人間関係作りの力においても似た傾向になると考えられる。

	環境			しつけ	人間関係作り
	家事	自然	絆		
山村留学生	○	○	○	○	△?
小海町の子ども	△	○?	○	○	△
都会の子ども	?	△	?	?	?

それでは都会に暮らす子ども達の環境はどうだろうか。一口に都会の子どもとは言えない多様さが予想されるので，ここでは今回の現地調査に参加してくれた山村留学センター手伝いの子ども達の例をみてみよう。7人の出身地は千葉県2人，埼玉県3人，茨城県1人，静岡県1人である。首都圏であり，多少の自然は残っていても小海町とは比べ物にならない。親から見ると運動不足と思われていた子どもが2人。学校が窮屈で，友達もできなかった子が1人。二人兄弟の子が3人。さらに山村留学の参加動機として，1990年以降「学校の先生が嫌」「学校にいくのが嫌」「友達と離したい」という理由が増大していることを前に述べた。そのような子ども達が山村留学を頼りにするのは，他に頼りになる第三者の当てがないからではないか。自然も体を動かす機会も少なく，よい友達もできず，学校も子どもを育む第三者の目となっていない状況が推察される。

（2）山村留学の成果を都会の子ども達の生活に還元するには

ここまで山村留学の成果は体を動かすこと，しつけができ，人間関係作りの力がつくことという考察をしてきた。その源となるのは豊かな自然を能動的に体験させる「育てる会」のプログラムと，集団生活，農家生活，また地域の人たちの絆による子育てへの第三者の参加であった。これらの要素を都会の暮らしにも取り入れられたら，広く都会の子ども達にも山村留学の成果の一部なりと分かつことができるのではないだろうか。

学校教育の中にそのような要素を取り入れることはできるだろうか。自然体験や農業体験から考えると，既に少年自然の家の利用や総合学習，林間学校やスキースクールなど様々なプログラムが地域の実情に合わせて行われている。ただしそれらは用意されたプログラムであり子ども達にとっては受動的体験で，山道の長い通学路のような能動的で継続的なものではない。自分達で計画してビオトープを作るとか，近郊の自然を継続して観

察するといった機会が必要ではないだろうか。そのような時間を作り出すことが難しいことは予想される。学校は集団生活であるから，擬似きょうだい関係づくりや，保護者や地域社会の人を巻き込んでの第三者の目のある指導も考えやすい。それらも既に縦割り班による活動や登下校時の安全パトロール，部活動の指導者などとして取り入れられている。しかし限られた活動時間の中では，それらが密度の濃い人間関係を生み出すことの方が稀ではないだろうか。またはその中で起きる揉め事を乗り切っていくだけの指導も不十分ということになり，かえっていじめや不登校の元になる畏れもある。

このように考えると，学校の時間の中では不十分なことであるからこそ，山村留学が求められるのではないか。制約の多い学校の時間とは異なる，自由な生活の時間を考える必要があるのではないだろうか。さらにそこでは子ども達を大集団のままではなく，指導員の目が行き届き，擬似親子・きょうだい関係も作れるような小規模の集団に編成し，指導する必要もある。即ち山村留学センターのノウハウを学んだ指導員が必要になるということである。

そのような可能性が考えられるのは，社会教育の場面ということになる。学童保育には長年の蓄積の中でそれなりのノウハウがあるようだ[20]。児童館や公民館，図書館，子ども会の行事などは参加する子どもが決まってきてしまうという声もある。このような中で2006年度に新たに全児童対策事業というものが少子化対策担当大臣，厚生労働大臣，文部科学大臣の連名で発表された。これは各地の学童保育の満杯状況や，学力低下，児童の放課後の安全対策といった背景から出てきたようである[21]。そしてこれから具体的な内容が作られていくので，そこに山村留学についての研究成果を取り入れることもできるのではないだろうか。

その場合まず考えられるべきは指導員の養成である。指導員の存在の大きさは既に述べてきたとおりであり，その質によって各種体験プログラムも人間関係作りも実のあるものになるかならないかが決まると考えられる。山村留学の理念を理解した専門家が養成されることが望まれる。特に密度の濃い人間関係は，修園生の声にもあったようにいじめや喧嘩も起きやすく，それを児童の成長の糧にするには行き届いた指導が必要である。児童に人間関係の調整力を養わせられる力量を持った指導員が必要となる。

また第4節の（3）で指摘したように，親同士の交流を考えた場合，あまりにも家庭背景の違う家庭同士は互いの子育ての参考にならないのではないかというおそれがある。全児童対策ということは，山村留学や学童保育よりも参加する子どもの家庭の多様性が増すということである。そこにおいて子どもを仲立ちにした親同士の社会化を考えようとするなら，子ども達を何らかの小グループに分ける方法に工夫がされねばならないのではないか。子どもの興味関心ではあっても，親の意向も影響するだろう。どのようなプログラムにどのような子ども達が参加し，その家庭はどのような家庭か。子ども同士，親同士の社会化，指導員との関係作りはどうかなど今後に研究されるべき課題である。山村留学の研究成果は都会でどのようにしたら生かされるのか，これからまだ考えるべきことは多い。

【参考文献】

(1) 岡崎友典（2006）「生徒指導と家庭との連携」新井郁男，住田正樹，岡崎友典編著『生徒指導』放送大学教育振興会，138頁．
(2) 新井郁男「生徒指導の理念と歴史」前掲書『生徒指導』，11～12頁．
(3) 柳生和男「小学校における生徒指導」前掲書『生徒指導』73～79頁．
(4) 柳生和男「小学校における生徒指導」前掲書『生徒指導』73～79頁．
(5) 岡崎友典「生徒指導と家庭との連携」前掲書『生徒指導』143頁．
(6) 育てる会編（2002）『山村留学総合効果の検証』財団法人育てる会，19頁．
(7) 岡崎友典「留学したきっかけ」前掲書『山村留学総合効果の検証』51～52頁．
(8) 高田滋「センター・農家併用式への評価」前掲書『山村留学総合効果の検証』113頁．
(9) 叶田真規子「農山村の生活環境のもつ意味」前掲書『山村留学総合効果の検証」77頁．
(10) 柴田俊一「心の成長と変化」前掲書『山村留学総合効果の検証』84～85頁．
(11)柴田俊一　前掲書『山村留学総合効果の検証』170頁
(12) 岡崎友典「生徒指導と家庭との連携」前掲書『生徒指導』第10回放送授業．
(13) 柴田俊一「心の成長と変化」前掲書『山村留学総合効果の検証』86頁．
(14) 小針誠「留学の影響とその評価」前掲書『山村留学総合効果の検証』45頁．
(15) 岡崎友典「生徒指導と家庭との連携」前掲放送教材・テレビ番組．
(16) 住田正樹（2001）『地域社会と教育』九州大学出版会，12～13頁．
(17) 竹内弘枝（2005）「学校・家庭・地域社会の連携における「目に見えない」要素について」放送大学大学院修士論文．
(18) 岡崎友典（2004）『家庭・学校と地域社会』放送大学教育振興会，52～60頁．
(19) 結城光夫「学校教職員からみた山村留学」前掲書『山村留学総合効果の検証』97～103頁．
(20) 下浦忠治（2007）『放課後の居場所を考える』岩波書店，18～19頁．
(21) 下浦忠治　前掲書『放課後の居場所を考える』39頁．

8. 親や地域住民が子どもを誉めて育てることの実証的考察

元・聖徳大学 准教授，元・学術フロンティア推進事業研究員
夏秋 英房

1. 本報告の目的

誉めることと叱ることは，学習心理学や臨床心理学の研究課題としておもに親から子どもへの働きかけやしつけの効果や技法の観点から研究されてきた。と同時に，子どもに規範を内面化させつつ，子どもを統制し社会的に統合していく社会化の過程としても研究されてきた。本報告では後者の視点に立って，２つの調査データをもとに，親や地域住民が子どもをどのように誉め，叱っているのか，またそれが子どもにとってどのような意味を持つのかを，実証的に明らかにしていくことで，子どもを誉めるまちづくりの研究の一助としたい。

2. 誉めることと叱ることの前提

（1）２つの関係性による受容と誘い

子どもになんらかの望ましい行動を身につけさせようとするとき，強化子としての賞と罰によって子どもを統制・コントロールしようとすることで「しつける」ことが思い浮かぶ。しかし，単に賞や罰を与えるだけで子どもを意のままに操ることなどあり得ない。その子どもとしつけ手との間の関係や，望ましいとされる行為と子どもとの関係など，子どもと環境との「関係性」のあり方が決定的な条件となることは周知の事実である。

たとえば，しつけを行う人物と子どもとの間に信頼関係や情緒的な愛着関係が成立していること，自分にとって大切な人が自分を受け入れてくれていると思っていることは大切な要因である。また，求められる行為の内容が子どもにとって魅力あるもので，内発的動機をいだかせることかどうか，ということも大きな要因となる。

幼い子どもを公園に連れていくと，いち早く遊具に目をとめて親の手を離して子どもは遊具へと走り，遊具が示す課題に全身で取り組み始め，それを達成できると「見て！　見て！」と叫ぶ。一人でできないときには，「やって」「手伝って」というが，自分だけで達成したいときに，大人が「危ないよ」「こうしたほうがいいよ」などといって止めに入ったり手出しをしたりしようものなら，怒りだす。子どもは自分にとって魅力ある課題に自分自身で取り組み，その姿を信頼できる大人や仲間に見守ってもらい，そして課題を達成したときには誉めてもらいたいのである。そのとき，子どもは自分を誉めてもらいたいだけではなく，子どもが取り組んだ課題のおもしろさ，すばらしさや，難しさを認め，共感してもらったうえで，大人も一緒にその課題に向き合って視線を共有してほしいと思うのである。

子どもを誉めて育てるまちづくりを考える場合も，同じことが言える。１つ目は，子どもに関わる保護者，教師，指導者，地域住民と子どもとの間に信頼関係や情緒的な愛着関係が成り立っていること，２つ目は，子どもに期待される行為の内容が子どもにとってお仕着せでなく，子ども自身が魅力を感じ取り組んでいける課題であることである。もしかしたら子どもにとってたやすく達成できない課題があるかもしれない。しかし課題をやり遂げてみたい，あるいはすでにやり遂げている年長の子どものようになりたい，大人のようになりたい，という気持ちが子どもを繰り返し課題に挑戦させる力をもたらす。

まちづくりの課題は子どもにとってけっしてやさしいものではなく，またその面白さを実感することはむずかしい。そこで重要になるのは，課題に楽しそうに取り組む年長者や大人の姿と，その大人からの指示や禁止のことばがけではなく，おもしろいから一緒にやろうよという「誘い」の言葉がけである。

（2）ありか，きりぎりすか

この関係性の原理のほかに，子どもを誉めることに関連して現代の子育ち環境を考える場合に重要なことがある。それは，私たちの社会が高度に消費的な社会になっており，あれがほしい，これをしたいという欲求を金銭をもって即座に満たしてしまうことが良いこととされる世の中であるということである。この即時欲求充足すなわち快の原理は，高度経済成長によって豊かさが達成さ

れる過程で成人した世代が親となって，子育ての中核をなす原理となったようである。

たとえば，スーパーの子連れの買い物客で，子どもの口にとりあえず甘いものを放り込んでおとなしくさせている姿のなんと多いことか。小学生が高額の金銭を持って子どもたちだけでレジャー施設に出かけたり，ファッションショップで買い物をしたり，ということが「楽しい遊び」として容認され歓迎されているのは日常的な光景となっている。コンビニエンスストアーが普及した光景は，それだけ社会が「合理的な便利さ」という言葉で即時欲求充足に高い社会的価値を認めていて，それを子どもたちが内面化することにつながっている。

このことを誉めることと絡めて考えると，誉めることはすなわち快の刺激を与えることであり不快な要素を取り除くことだと考えてしまう危険性がある。保護者は快の刺激を与えることでこそ子どもはよく育つのだから，不快な刺激や否定的評価を子どもに与える教師や近隣の大人や仲間は子どもの成長を阻害するものであり排除の対象であると，保護者から見なされるのである。子どもにとって快適な環境を実現できない，楽しくない学校は，保護者から非難の的となる。子どもを叱る大人は煙たがられ敬遠される。

したがって，誉めることは，子どもの機嫌を取り結んで，当座，「よい子」にさせておくことにたやすく矮小化されてしまう。誉めるのではなく，おだててしつけようとする。逆に叱ることは子どもを不快にさせ欲求不満を蓄積させるので，子どもに同調する保護者から教師はさらに批判されるようになる。快をつうじて親子の情緒的関係を保つことを第一に考える家庭では，個別的で状況依存的なしつけ態度をとるようになるので，誉めることと叱ることで子どもの行動を律し普遍的な社会的規範をしつけを通して伝達していくといった働きは弱くなる。

この即時欲求充足の原理は，日本の学歴社会の伝統であるといわれる努力主義と対抗するものである。努力主義は，将来の達成のために現在の快楽を犠牲にし，不快な訓練に耐えて「頑張る」ことを要求する。努力抜きでは「できる・わかる・知ってる」の学力を達成することはおぼつかないので，低年齢のうちから誉められたり，叱られたりしながら，克己勉励して「勉強」（つとめて強いる）させられる。このような，子どもたちが現代でも大勢いる。

いわば，子どもたちは「ありときりぎりす」の生活に二極化してきており，学力低下にかかわる研究の中では，学力獲得への強いインセンティヴを与えられる「あり」の子どもと，弱いインセンティヴしか与えられない「きりぎりす」の子どもとの格差の広がりが指摘されている。「あり」でも「きりぎりす」でもない第三の道を探るために，ゆとり教育や生きる力の形成が唱導されたのだが，いまや風前の灯火である。つまり，体験学習や自ら課題を見つける調べ学習を展開することによって内発的動機を呼び覚まし，楽しく学ぶことが目指されたのであるが，楽しい学びを実現するには，子どもの基礎学力が必要であり，教師にも相当の教材研究・開発の力量と指導力が要求され，またそのための時間と労力を傾注するゆとりが教室に確保される必要がある。そのような条件整備がないままに，「教育改革」は迷走している。

いずれにしても，社会と個人に共有されていた豊かさの追求という目標が失われた現代では，きりぎりすの原則だけを子どもに押しつけることは，もはや説得力を持たない。個別の快を追求する自己実現志向ではなく，能力による地位獲得にしのぎを削る競争原理でもなく，まちづくりをとおして社会を創造し市民形成の新たな原理と価値を共有していけるのかどうかが問われている。まちづくりをとおした，地域教育の創造が求められているのである。

3. 親から誉められること・叱られること

（1）子どもは親から誉められ，叱られているか

それでは，子どもたちは日常生活において，親から誉められたり叱られたりすることをどのように体験しているのであろうか。ベネッセ研究開発センターの「第1回子ども生活実態基本調査」（2005年）のデータを，特別に許可を得て再分析することで，全国の子どもたちの経験をみていこう。[1]

まず，子どもたちは親からどの程度誉められたり叱られたりしているのだろうか（図8-1）。いずれの学校段階においても，子どもは誉められることよりも叱られることの方が多い。しつけは禁止による行動の統制を中心としているし，親はそもそも口やかましいものだからなのか，それとも減点主義の育ち方をした親は加点主義的な接し方を子どもに対してしにくい，ということなのだろうか。

学校段階別に見ると，小学生では8割前後の子どもが親から誉められたり叱られたりしているが，中学生になるといずれも減少し，誉められることが54%となり，

図8-1
親から誉められること，叱られること（学校段階別）（%）

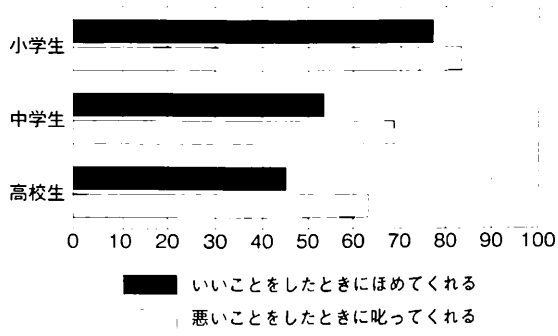


図8-2
親から誉められること叱られること（学校段階別・性別）（%）

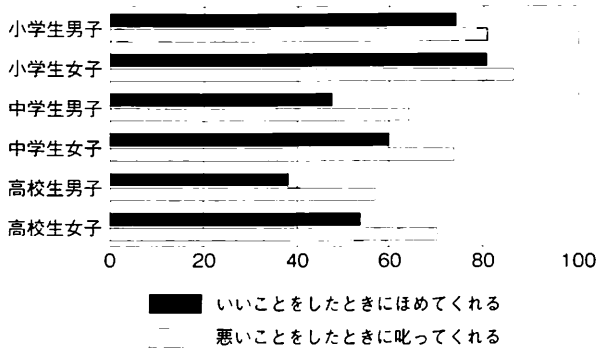


図8-3 誉めることと親の態度（%）

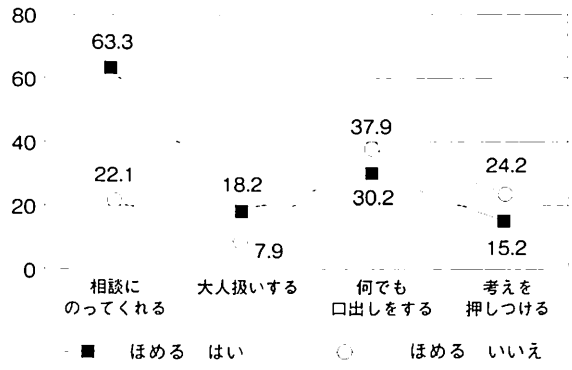
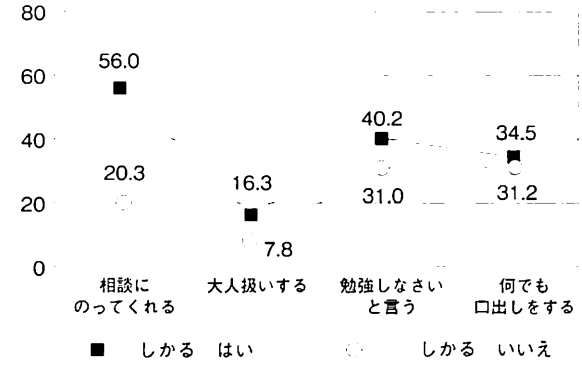


図8-4 叱ることと親の態度（%）



叱られることは69%となる。さらに高校生になると，誉められることは45%まで減少するが，叱られることは63%とそれほど減少しない。年齢が上がるにつれて親から誉められることが大きく減少していくことがわかる。図には示していないが，小学5年生を境に，誉めることは減少し始めるようである。

また，性別による違いを見てみると（図8-2），誉められることも叱られることも小・中・高校生ともに女子の方が多く，また，年齢があがっても率の低下が緩やかであるのに対して，男子はとくに誉められる割合が，小学生から高校生にかけて半減する。

（2）誉める親・叱る親の子どもへの態度

それでは，誉めることと親の子どもへの態度はどのようにかかわるだろうか(図8-3)。誉めることが多い親は，子どもの相談にのり，また，子どもを大人扱いしていると同時に，何でも口出しをしたり，考えを押しつけたりすることが少ない。それに対して，叱ることの多い親は(図8-4)，やはり子どもの相談にのり，子どもを大人扱いすることが多いが，誉める親よりは幾分低めになる。叱る親の特徴は，勉強しなさいと言い，何でも口出しをするなど，口やかましいところである。

しかし，誉めるにしろ叱るにしろ，子どもとのコミュニケーションが多いことによって，

親は「困ったときに相談にのってくれる」存在となることができるのである。

（3）誉めて叱る親と，誉めも叱りもしない親

日頃，親たちは子どもをどのように誉め，また叱ればよいのか頭を悩ませつつも，その場の状況に即応して直感的に子どもへの言葉を出すことが多い。もちろん，意識して方法的に子どもをコントロールする親もいるが，多くの場合，親は親の都合で子どもを誉めたり叱ったりし，子どもは親の気まぐれな態度を見透かしながら親のしつけに対して応答する方略を身につけつつ，親から伝達される規範や価値を習得している。親のしつけ態度の規定要因や子どもとの相互作用に見られる方略の研究はそれ自体大変興味深い課題であるが，本節では，親が日常的に子どもを誉めて叱ることが，子どもの親との関係や，自己イメージや生活などへの満足度にどのように関わるかについて見ていこう。

たとえば，表8-1にあるとおり，子どもを誉めることと叱ることとを掛け合わせてみると4つのタイプの親を分けることができる。その分布を見ると，まず，子ど

もを誉めるし叱りもする親は52%，誉めはするが叱りはしない親は5%，叱りはするが誉めない親は19%，そして誉めも叱りもしない親は24%いる。子どもへの調査結果であるが，誉めも叱りもしないという親が4分の1もいることに驚かされる。

さらに，これを学校種別ごとに見たのが図8-5である。誉めて叱る親は，学校が上がるにつれて減少し，誉めもせず叱りもしない親が増えてくる。また，叱るが誉めない親も中学に上がると増える。これは，子どもの自律性を尊重して評価的で統制的な働きかけを減らしているのだと考えていいのだろうか。それとも思春期の子どもに干渉していやがられ対立することを親が避けているのだろうか。

親が誉めること叱ることと，親が「あなたのことを大人として扱ってくれている」かどうかとを掛け合わせてみる（表8-2）。すると，学校段階によって4つのタイプの親の比率の分布は変化しているが，子どもを大人扱いしない親には，子どもを誉めも叱りもしないか，叱るが誉めないタイプの親が多く，一方，子どもを大人扱いする親には，子どもを誉めるし叱りもする親が多い傾向があり，しかもこの傾向はどの学校段階においても共通していることがわかる。子どもを誉め，かつ叱る親のほうが子どもの自律性を尊重していると，子どもは受け止めているのである。

叱ったり誉めたりといった大人の観点からの評価的で統制的な働きかけは，子どもにとって時には口うるさいことも多いだろう。しかし子どもからの反応をきちんと受け止め，聞く耳をもっていれば，また，良い所を認める目をもっていれば，子どもは親が自分の意見や判断を尊重して大人扱いしてくれていると考えることがわかる。

また，親が誉めたり叱ったりすることと，子どもが困ったときに親が相談にのってくれることとの関連をみると（図8-6），いずれの学校段階においても，子どもを誉め，かつ叱る親は相談にのっている率がもっとも高いのに対して，誉めも叱りもしない親は子どもの相談にのる率がもっとも低いことがわかる。しかも興味深いことに，データは小学校から中学校へと上がるところで低下し，中学校と高校の間ではほぼ横ばいであり，4つのタイプの親の順位は変わらない。相談にのってもらう，というのは社会活動や人間関係の作り方の準拠枠として親の意見をきく，ということであるから，誉めることや叱ることをとおして子どもと取り組んでいる親は，子どもにとっても大事な存在であり続けるということができよう。また，誉めるが叱らない親が相談にのる率は2番目に高いが，

表8-1　誉めることと叱ることの組み合わせ（%）

		悪いことをしたときに叱ってくれる	
		はい	いいえ
いいことをしたときに誉めてくれる	はい	51.6	5.4
	いいえ	19.1	23.9

表8-2
誉めること叱ることと「あなたのことを大人として扱ってくれる」，学校種別のクロス(%)

学校種別			14_2 親の関与（大人扱い）5．あなたのことを大人として扱ってくれる		合計
			いいえ	はい	
小学生	誉める	誉めない叱らない	12.2	> 2.2	10.7
	叱る	叱るが誉めない	13.0	> 6.5	12.1
		誉めるが叱らない	5.9	6.0	5.9
		誉めるし叱る	68.9	< 85.3	71.3
中学生	誉める	誉めない叱らない	28.0	> 9.2	25.8
	叱る	叱るが誉めない	21.5	> 14.0	20.6
		誉めるが叱らない	5.6	4.1	5.4
		誉めるし叱る	44.9	< 72.7	48.2
高校生	誉める	誉めない叱らない	33.9	> 19.7	31.8
	叱る	叱るが誉めない	23.7	> 17.6	22.9
		誉めるが叱らない	5.0	5.0	5.0
		誉めるし叱る	37.4	< 57.7	40.3

図8-5　親が誉めること叱ること×学校種別

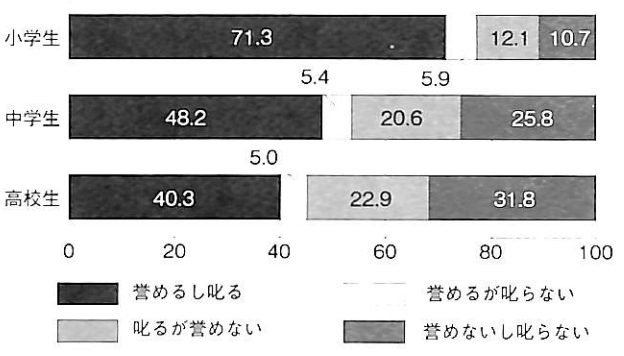
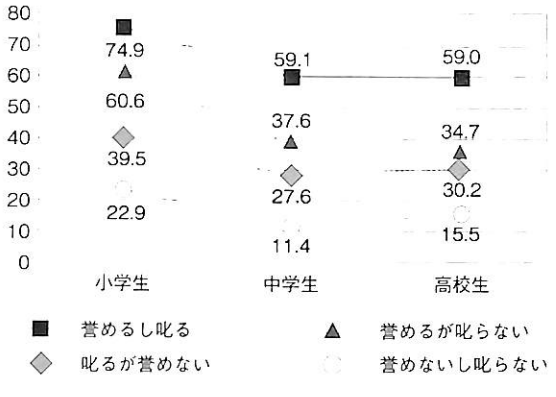


図8-6　困ったときに相談にのってくれる，と誉める叱る
（親が相談にのってくれる率＝%）



誉めて叱る親とは中学以上では20%を超える差がついている。叱る，という禁止と抑制のしつけはやはり親が子どもの準拠枠となるために重要であり，その影響は思春期以降も続くことがわかる。

（4）親が誉めること叱ることと，子どもの自己イメージや生活満足度

それでは，親が誉めたり叱ったりすることは，子どもにどのような影響を与えるのだろうか。子どもの自己イメージと生活に関する満足度との関わりを学校種別に見てみると，中学生や高校生よりも小学生に影響が大きく見られたので，小学生について検討してみよう。

まず，小学生の自己イメージと親の誉めること叱ることとの関わりを見ると（図8-7），詳しい数値は示していないが，「自分のことは自分でする」「やる気になればどんなこともできる」「きまりやルールを守る」「いやなことがあってもすぐに忘れる」「運がよい」のそれぞれの項目について，親から誉められ叱られる子どもの線のほうが，他の子どもの線よりも外側に位置している（数値は，「自分自身のことについて，次のようなことはあてはまりますか」という質問に対する「とてもそう」「まあそう」の合計値である）。

また，小学生の満足度との関わりを見ると（図8-8。数値は「次のようなことについてどの程度満足していますか」という質問に対する「とてもそう」「まあそう」の合計値である），「自分の成績」「自分の性格」「家族との関係」「友達との関係」「学校の先生との関係」「自分が住んでいる地域」の項目について，親が誉めたり叱ったりする子どもは高い満足度を示している。逆に，親から誉められも叱られもしない子どもは，いずれの項目においても低い満足度を示している。

さらに，親から誉められも叱られもしない子どもは，自己イメージがあまり肯定的でなく，全般的に満足度が低い（表8-3）。

このように，親から誉められ叱られる子どもは，他の子どもに比べて肯定的な自己イメージを抱き，また，成績や人間関係，地域生活に満足する傾向がある。基本的に，親が規範の基準となって子どもに豊かな関わりを持っていることは，とくに小学生の生活と考えの基盤となっているということができる。さらに，中学生や高校生の思春期になっても，誉めたり叱ったりする親は，子どもの相談相手となると共に，自律性を尊重しているのである。

図8-7　子どもの自己像と親の誉める叱る（%）

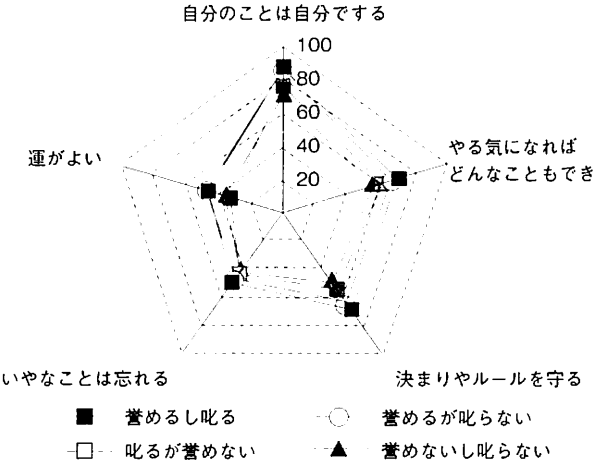


図8-8　子どもの満足度と親の誉める叱る（%）

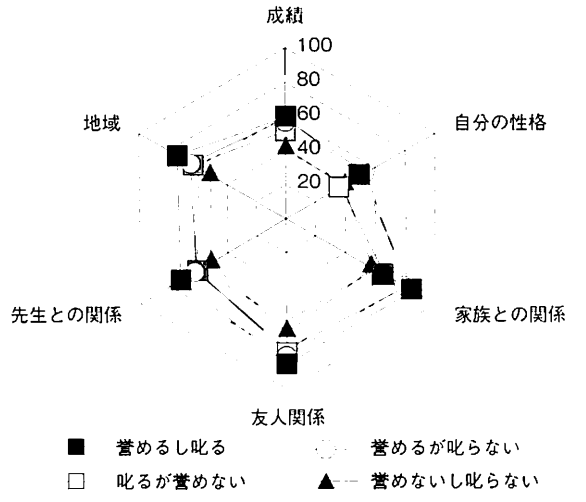


表8-3
子どもの自己イメージ・満足度と親の誉める叱る（小学生）(%)

		親の子どもへの関わり			
		ほめない 叱らない	叱るが ほめない	ほめるが 叱らない	ほめるし 叱る
自分について	自分のことはできるだけ自分でする	71.4	< 76.9	<< 86.9	87.5
	やる気になればどんなこともできる	55.7	< 60.7	< 66.5	70.4
	きまりやルールをきちんと守る	49.6	< 54.6	<< 63.7	< 69.4
	いやなことがあってもすぐに忘れる	42.3	43.2	47.0	50.1
	好きで熱中していることがある	59.5	< 67.3	> 61.0	< 70.4
	運がよい	36.1	32.7	<< 47.8	46.5
満足度	自分の成績	41.6	51.5	< 58.6	59.3
	自分の性格	38.8	37.2	<< 53.8	50.6
	家族との関係	58.1	< 66.3	<< 80.1	84.8
	友達との関係	66.7	<< 78.5	76.5	< 85.2
	先生との関係	51.8	< 61.1	61.8	<< 72.7
	自分が住んでいる地域	51.3	<< 63.2	64.9	< 74.2

（自分については「とてもそう」と「まあそう」の合計値）
（満足度は「とても満足している」と「まあ満足している」の合計値）

4. 地域住民から誉められること・叱られることと子どもの生活と意識

（1）地域の大人との関わり

それでは，地域住民は子どもたちを誉めたり叱ったりしているのだろうか。またそれは子どもたちの生活や意識とどのように関わっているのだろうか。伝統行事や祭りに参加することが多い長野県東部K中学校の中学生とその保護者を対象にした調査データから見ていきたい。[2]

地域の大人との関わりについて，2つの質問項目で尋ねた。1つは子どもがどのような関わりや視点を大人に対して抱いているか。もう1つは，大人から誉められたり叱られたりすることがあるか，についてである。

まず，子どもにとって「相談できる人がいる」「尊敬できる人がいる」「声をかけてくれる人がいる」の3つの項目を尋ねた（図8-9）。

声をかけてくれる人が「たくさんいる」と答えたのは約6割，尊敬できる人がたくさんいると答えたのは約4割，相談できる人については3割が「たくさんいる」と答えている。声をかけられることが基礎となって，尊敬を受け，さらには相談される，という形で関わりが深まり，子どもの行動の準拠枠に大人がなってゆくのであろう。しかし，地域の大人と肯定的な関わりを持つ生徒と持たない生徒の違いが気になるところである。

ところで，K中学生は，地域の大人から誉められることや叱られることが多い。単なる声がけだけではなく，規範的な関わり方を地域の大人はしているのである。大人から子どもが誉められることや叱られることの頻度を，親，教師，近所の人，知らない人の4つの立場の大人についてたずねた（表8-4）。

図8-9　地域の人との子どもの関わり

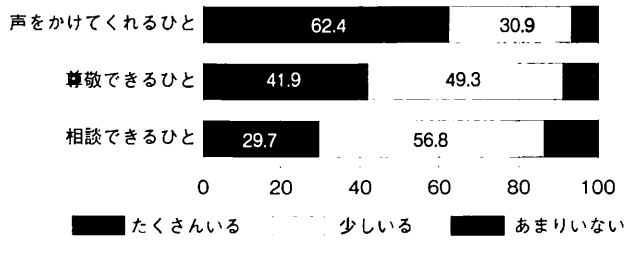


表8-4　ほめられること，叱られること（よくある＋ときどきある）(%)

	ほめられる	叱られる
親から	61.8	83.9
先生から	53.0	61.7
近所の人から	37.6	36.9
知らない人から	18.8	1.3

親から誉められることがあるのは62%，叱られることがあるのは84%であり，これは図8-1に示した全国のデータに比べて高い。調査項目が異なるので直接の比較はできないが，全国では親から誉められるのは54%，叱られるのは69%であった。

近所の人から誉められることと叱られる頻度はほぼ拮抗しており，37%前後である。地域の大人との関わりの濃いK町のならではの数値の高さである。

さらに，知らない人から誉められることが2割近くの生徒にある。

このような賞賛をいったいどのような機会に経験するのだろうか。また，どのような影響を子どもに及ぼすのだろうか。

ところで，大人から誉められることに関わる4つの項目は，相互に相関があり（表8-5），とくに「親からほめられること」と「先生からほめられること」の相関（.470）と，「近所の人からほめられること」と「知らない人からほめられること」の相関（.532）が強い。それに対して，大人から叱られることについては，「近所の人からしかられる」と「知らない人からしかられる」だけに有意な強い相関（.625）が認められた。つまり，大人から誉められる経験を持つ子どもはさまざまな関わりをもつ大人から誉められる経験を重ねて生活するのである。それに対して，叱られる経験は広く子どもたちに見られるもので，近隣の大人や見知らぬ大人との関わって叱られる経験はある程度，集中しているのかもしれない。

そこで，「近所の人からほめられること」と「知らない人からほめられること」との関連に注目すると（表8-6），近所の人から誉められる子どもは知らない人からも誉められることが多いことがわかる。逆に，近所の人から誉められない子どものほとんどは知らない人からも誉められることがない。

さらに，この関係を総和に対する比率でみると（表8-7），近所の人からも知らない人からもほめられることがない（あまりない＋ぜんぜんない，表中網掛け）子どもが57%もいる。近隣の大人との関わりの濃いK町においても，過半数の子どもは近隣の大人からほめられる経験が少ないことがわかる。

（2）誉められること・叱られることと大人との関わり

それでは，子どもが大人から誉められたり叱られたりする経験が，大人へのまなざしをどのように左右してい

るのだろうか。

「声をかけてくれる人がいること」は，近所の人からほめられること（.243），知らない人からほめられること（.200）と有意な相関をもつ。また，「尊敬できるひとがいること」も，近所の人からほめられること（.197），知らない人からほめられること（.191）と有意な相関をもつ。さらに，「親からしかられること」は，相談できるひとがいること（.181），尊敬できる人がいること（.163）と有意な弱い相関をもつ。

つまり，声をかけてくれる人が地域にいる生徒は，近所の人から誉められることが多く（表8-8），知らない人から誉められる体験にも結びついている（表8-9）。そしてそのような体験が，地域の大人に対する尊敬といった，大人を準拠枠とする社会化を促進している可能性を指摘できよう（表8-10，表8-11）。

（3）親が自分の子どもを誉めると，子どもの地域の大人との関わりが深くなる

それでは実際に，親が自分の子どもを誉めたり叱ったりすることと，その子どもが地域の大人とむすぶ関係との間には，どのような関わりがあるのだろうか。生徒へのアンケートと保護者へのアンケートを親子ペアにしてデータを関連づけてみよう。

K町の保護者は81％が知り合いの子どもを誉め，40％が知らない子どもを誉めている（表8-12。「よくある」と「ときどきある」の合計）。また，56％が知り合いの子どもを叱ることがあり，23％が知らない子どもを叱ることがある，と答えている。誉めるにつけ叱るにつけ，近隣の子どもとの関わりが深いことがわかる。

「親が子どもをほめる」ことは生徒が地域に「尊敬する人がいる」ことと有意な相関があり（.256），また，「親が子どもをほめる」ことと，生徒に「声をかけてくれる人がいる」こと，生徒が「相談できる人がいる」こと，「尊敬できる人がいる」こととをクロスすると有意差があった（表8-13）。一方，親が自分の子どもを叱ることと，その子どもと地域の大人との関わりについては，有意な相関も有意差も認められなかった。親から誉められることを中心として，子どもは大人との関わりの根拠を得ていくのかもしれない。

果たしてどのような仕組みで，親が子どもを誉めること，叱ることと，子どもが地域の大人と関わることが関連しているのだろうか。今後検討すべき課題である。

（4）地域の人に誉められると，人間関係に関わる自信や規範意識が育つ

それでは，このような地域の大人との関係が，中学生

表8-5　大人からほめられることの相関係数（Pearson）

	親からほめられる	先生からほめられる	近所の人からほめられる	知らない人からほめられる
親からほめられる	1			
先生からほめられる	.470(**)	1		
近所の人からほめられる	.282(**)	.285(**)	1	.532(**)
知らない人からほめられる	.147	.209(*)	.532(**)	1

** 相関係数は1％水準で有意（両側）。　* 相関係数は5％水準で有意（両側）。

表8-6　「知らない人からほめられる」と「近所の人からほめられる」
（表頭項目の％）

		近所の人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
知らない人からほめられる	よくある	42.9	＞0.0	0.0	0.0	4.0
	ときどきある	7.1	＜31.0	＞10.9	3.4	14.8
	あまりない	35.7	＜50.0	＞40.6	＞13.8	37.6
	ぜんぜんない	14.3	19.0	＜48.4	＜82.8	43.6

表8-7　「知らない人からほめられる」と「近所の人からほめられる」
（総和の％）

		近所の人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
知らない人からほめられる	よくある	4.0	0.0	0.0	0.0	4.0
	ときどきある	0.7	8.7	4.7	0.7	14.8
	あまりない	3.4	14.1	17.4	2.7	37.6
	ぜんぜんない	1.3	5.4	20.8	16.1	43.6
	合計	9.4	28.2	43.0	19.5	100.0

表8-8　「近所の人からほめられる」と「声をかけてくれる人がいる」
（表頭項目の％）

		声をかけてくれるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
近所の人からほめられる	よくある	10.8	8.7	＞0.0	9.5
	ときどきある	35.5	＞19.6	＞0.0	28.4
	あまりない	36.6	＜58.7	＞33.3	43.2
	ぜんぜんない	17.2	13.0	＜66.7	18.9

表8-9　「知らない人からほめられる」と「声をかけてくれる人がいる」
（表頭項目の％）

		声をかけてくれるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
知らない人からほめられる	よくある	6.5	0.0	0.0	4.1
	ときどきある	17.2	13.0	＞0.0	14.9
	あまりない	37.6	39.1	33.3	37.8
	ぜんぜんない	38.7	＜47.8	＜66.7	43.2

表 8-10 「尊敬できる人がいる」と「近所の人からほめられる」
（表頭項目の %）

		近所の人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
尊敬できるひと	たくさんいる	57.1	52.4	＞31.3	42.9	41.9
	少しいる	35.7	＜45.2	＜62.5	＞32.1	49.3
	あまりいない	7.1	2.4	6.3	＜25.0	8.8

表 8-11 「尊敬できる人がいる」と「知らない人からほめられる」
（表頭項目の %）

		知らない人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
尊敬できるひと	たくさんいる	100.0	＞54.5	＞33.9	39.1	41.9
	少しいる	0.0	＜36.4	＜60.7	＞48.4	49.3
	あまりいない	0.0	9.1	5.4	＜12.5	8.8

表 8-12 保護者が子どもをほめることと叱ること
（表頭項目の %）

〔ほめること〕	自分の子ども	知り合いの子ども	知らない子ども
よくある	14.1	11.6	2.3
ときどきある	71.8	69.8	37.2
あまりない	12.9	18.6	47.7
ぜんぜんない	1.2	0.0	12.8
〔叱ること〕	自分の子ども	知り合いの子ども	知らない子ども
よくある	47.7	2.3	1.2
ときどきある	47.7	53.5	22.1
あまりない	4.7	37.2	46.5
ぜんぜんない	0.0	7.0	30.2

表 8-13 子どもの地域の大人との関わりと，親が自分の子どもをほめること
（表頭項目の %）

（子ども）		（親） 自分の子どもをほめる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
声をかけてくれるひと	たくさんいる	66.7	67.2	＞36.4	0.0	62.4
	少しいる	16.7	＜31.1	27.3	100.0	29.4
	あまりいない	16.7	1.6	＜36.4	0.0	8.2
相談できるひと	たくさんいる	33.3	32.8	27.3	0.0	31.8
	少しいる	50.0	＜60.7	＞27.3	0.0	54.1
	あまりいない	16.7	6.6	＜45.5	100.0	14.1
尊敬できるひと	たくさんいる	50.0	52.5	＞18.2	0.0	47.1
	少しいる	41.7	39.3	＜54.5	0.0	41.2
	あまりいない	8.3	8.2	＜27.3	100.0	11.8

にどのような影響をもたらすのであろうか。表 8-14 と 8-15 は，子どもの規範意識と地域の大人から誉められる・叱られる体験とをクロスして，有意差と有意な相関が認められた項目である。いずれも近隣の大人から誉められることによって，人の気持ちになれるという共感性の自信や，また気の合わない人ともつきあうという包容力が育っていることがわかる。

また，表 8-16 は，相談できる大人や尊敬できる大人がいることと子どもが人間関係の広がりを好むこととが関わることが示唆されている。

(5) 地域の人との関わりで地域への評価も高まる

最後に，中学生の地域社会への評価は地域住民との関わりによって変わるのだろうか。

アンケートでは，地域に対する評価を 100 点満点でたずね，60 点までを低評価，61 点から 80 点までを中評価，81 点以上を高評価と区分することができた。表 8-17 と 8-18 は，地域評価との間に有意な相関が認められた地域の人との関わりである。自分に声をかけてくれる人がいたり，尊敬できる人がいると，地域への評価が高まっている。地域に誉めたり叱ったりしてくれる人がいることとの間には関連は認められなかったが，中学生にとって地域社会の意味が，具体的にどのような人と関わりを持つかで左右されることがわかる。地道に地域で声かけ運動を展開することには重要な意味があるのである。

中山間地という不便さや刺激の少なさを特徴とする地域ではありながら，K 町では伝統行事や祭りに中学生が参加することが多く，地域の大人達から声をかけられ誉められたり叱られたりする経験を比較的豊かに持っている。そのことが，子どもの人間関係を広げ，包容力や共感性の自信が育つことにつながっているのである。とくに，地域の大人による賞賛や叱正によって，子どもは社会規範を伝達され，さらに，相談相手や尊敬の対象となることによって，「社会的オジ」と言われるように，地域の大人は重要な権威ある他者として子どもの言動や判断の準拠枠となるのである。地域の教育力は具体的には地域住民と子どもとの関わりにこそあることを考えると，K 町は豊かな教育力を備えた地域であるということができよう。

表 8-14
人の気持ちになれる・気の合わない人ともつきあうことと，近所の人からほめられること（表頭項目の %）

		近所の人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
人の気持ちになれる	とてもそう思う	35.7	> 14.3	> 4.7	< 17.2	12.8
	少しそう思う	57.1	< 73.8	> 67.2	> 48.3	64.4
	あまりそう思わない	7.1	11.9	< 25.0	< 31.0	20.8
	まったくそう思わない	0.0	0.0	3.1	3.4	2.0
気の合わない人ともつきあう	とてもそう思う	21.4	> 14.3	> 6.3	> 0.0	8.8
	少しそう思う	50.0	> 35.7	33.3	31.0	35.1
	あまりそう思わない	7.1	< 38.1	< 52.4	> 44.8	42.6
	まったくそう思わない	21.4	> 11.9	7.9	< 24.1	13.5

<> 10%以上の差，<> 5%以上の差を表す

5. おわりに

以上，第2節では子どもを誉めることと叱ることの前提と現代の状況について考察し，第3節では，Benesse教育研究開発センターによる全国調査をもとに，親が子どもを誉めることと叱ることの実態と子どもの生活や意識との関わりを分析した。第4節では，地域住人が子どもを誉めることや叱ることの実態と子どもの人間関係や生活との関わりを，中山間地の町の中学生のデータをもとに考察してきた。

「ウザッタイ」という言葉がよく子どもたちから聞かれる。価値観が多様化し相対化するなかで，親や大人が自分の考えや価値観を押しつけて子どもの世界に侵入しようとすると，子どもにとってはまさに「ウザッタク」感じられ跳ね返そうとする。子どもとの情愛関係の保持を家庭円満の第1条件としている親にとっては，子どもたちから拒否的な言葉を投げつけられ関係が悪化するのは厳しく不安な体験となる。そのため，誉めるというよりもおだてる子育てになりがちである。

また，地域住民にとっては，へたな声がけを子どもたちにして，しかも叱ったりすれば「逆ギレ」されてなにを仕返しされるかわからない，といった不信感やおそれを子どもたちに抱きがちである。日常的な接触が少なければ少ないほど，そのような距離感と不気味さを子どもたちに対して抱きがちである。

表 8-15　気の合わない人ともつきあうことと，知らない人からほめられること
（表頭項目の %）

		知らない人からほめられる				合計
		よくある	ときどきある	あまりない	ぜんぜんない	
気の合わない人ともつきあう	とてもそう思う	33.3	> 13.6	> 5.5	7.7	8.8
	少しそう思う	16.7	< 40.9	< 47.3	> 24.6	35.1
	あまりそう思わない	16.7	< 36.4	< 41.8	< 47.7	42.6
	まったくそう思わない	33.3	> 9.1	5.5	< 20.0	13.5

<> 10%以上の差，<> 5%以上の差を表す

表 8-16　友達は多い方がよい と 相談できるひと・尊敬できる人
（表頭項目の%）

		相談できるひと			合計
		たくさんいる	少しいる	あまりいない	
友達は多い方がよい	とてもそう思う	93.2	> 65.5	> 60.0	73.0
	少しそう思う	2.3	21.4	10.0	14.2
		尊敬できるひと			合計
友達は多い方がよい	とてもそう思う	85.5	> 65.8	> 53.8	73.0
	少しそう思う	9.7	19.2	7.7	14.2

表 8-17　町への評価3段階 と 声をかけてくれるひと
（声をかけてくれるひと の %）

		声をかけてくれるひと						合計
		たくさんいる		少しいる		あまりいない		
町への評価3段階	低評価	29.0	<	41.3	<	62.5		34.7
	中評価	44.1		41.3		37.5		42.9
	高評価	26.9	>	17.4	>	0.0		22.4

表 8-18　町への評価3段階 と 尊敬できるひと
（尊敬できるひと の %）

		尊敬できるひと						合計
		たくさんいる		少しいる		あまりいない		
町への評価3段階	低評価	25.8	<	38.4	<	58.3		34.7
	中評価	46.8		41.1	>	33.3		42.9
	高評価	27.4	>	20.5	>	8.3		22.4

しかし，本報告の考察を通じて，親が誉めたり叱ったりすることは，子どもの生活や意識の基盤となっており，自律を認められているという気持ちを子どもが持つことが多く，さらに年齢が上がってもそのような親は子どもの相談相手として重要な役割を担っていた。

それに対して，親から叱られも誉められもしない子どもは，自己イメージが良好でなく，生活や人間関係についての満足度も低かった。

また，地域の大人との関わりが深ければ，子どもたちにとって地域の大人は尊敬の対象となり，困ったときに

相談する相手となる。さらに，地域の大人と関わる経験とつきあいの深さは，子どもたちの人間関係や社会性の基盤ともなるのである。親とは異なった視点から子どもたちを誉め，子どもたちの社会生活のモデルとなることに，地域の大人との関わりの意義があろう。

子どもの個性や意志を尊重しようとすることと，生活の規律と社会的な規範を伝えることは，必ずしも対立することではない。「枠の中の自由」という言葉があるように，野放図に振る舞うことが自由ではなく，意味や目的のはっきりとした規範と規律の中で，子どもたちは大人から誉められることをとおして育っていく。自分の生活を守るだけで精一杯であり，他者との関わりをもとうとせず，見て見ぬふりををすることが身を守る手だてというぎすぎすした社会的雰囲気が子どもたちを取り巻いている。「愛情の反対語は憎しみではなく，無関心である」という言葉がある。子どもに関わりを持とうとしないのは，愛情の乏しさの現れかもしれない。子どもに好かれる先生は「厳しいけれどやさしい先生」である。これは親や地域住民との関わりにも当てはまるだろう。

流動的で不安定な時代に，自信に満ちた「大人らしい」姿を子どもに見せて接することはむずかしい。また，やたらと管理的・干渉的に関われば逆効果となる。大人たちが大人の文化や価値を創り，共有し享受するなかで，社会生活には魅力と意義があり，人と関わることは楽しいことであるという姿を子どもに示し，誘っていく力を増すことが大切であろう。子どもたちは大人の本当の姿を見透かして，さまざまなメッセージを大人の姿から読み取っていく。子ども達と共にまちづくりの活動を進めるなかで，まちづくりに本気で悩み，取り組む大人の姿に触れ，関わることは，子どもたちにとって重要なモデルとなり生きる手がかりとなるだろう。

※　本章は，『子ほめ運動と地域の教育力の向上に関する研究（学術フロンティア推進事業平成17年度研究成果報告書第2部門）に掲載したものを加筆・訂正して再掲したものである。

【注釈】

(1)　第3節のデータは，Benesse教育研究開発センターによる「第1回子どもの生活実態基本調査」の再分析によるものである。データの使用と再分析を許可してくださったことを深謝するものである。もとの調査結果は「第1回子ども生活実態基本調査報告書」(2005.8研究所報vol.33)にその詳細をみることができる。調査方法は，学校通しの質問紙による自記式調査で，調査時期は2004年11月～12月，調査対象は，市区町村の人口規模および人口密度を考慮した有意抽出法によってサンプリングされた学校の，小学4年生から高校2年生まで14,841人（有効回答数）である。

(2)　第4節のデータは，長野県東部，千曲川中流域に位置するK中学校2年，3年の全生徒（149人）およびその保護者(86人)への意識調査にもとづいている。K町およびその近隣2村から通う中学生たちとその保護者のデータをペアにして分析し，K中学校の生徒が地域の大人とどのように関わっているか，とくに大人が誉めること叱ることと子どもの関わりについて基礎的な考察を本節で行った。調査時期は2006年6月～7月，生徒に対しては学校留め置き法で全員から回収，保護者には学校を通して配布し郵送にて回収する方法をとった（有効回収率，57.7%）。

なお，本調査は聖徳大学学術フロンティア事業第2部門「青少年の健全育成」の研究プロジェクトの一貫として，放送大学「『地域の教育』研究会」(代表：岡崎友典）と共同して推進している「中山間地における子育てと地域意識の形成に関する基礎研究」の一部である。調査結果の第1次報告は，夏秋英房，岡崎友典（2007）「中山間地における地域社会と中学生との関わり～長野県K中学校生と地域の大人との関係に焦点をあてて～」，聖徳大学生涯学習研究所紀要第5号を参照してほしい。本節はその一部を加筆修正したものである。

【参考文献】

- 岡崎友典，岩瀬章良（2002）「高度経済成長期における農山村の新規学卒者の「定住・移住」に関する研究」放送大学研究年報第21号，57～73頁．
- 岡崎友典（2004）「改訂版　家庭・学校と地域社会　～地域教育社会学～」放送大学教育振興会．
- 柴野昌山編（1989）「しつけの社会学」世界思想社．
- 住田正樹（2001）「地域社会と教育　～子どもの発達と地域社会～」九州大学出版会．
- 住田正樹・南博文編（2003）「子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在」九州大学出版会．
- 聖徳大学生涯学習研究所編(2005)「生涯学習まちづくり」．

・地域社会学会編（2000）『年報第12集　生活・公共性と地域形成』ハーベスト社.
・地域社会学会編（2001）『年報第13集　市民と地域…自己決定・協働，その主体』ハーベスト社.
・放送大学「地域の教育」研究会編（2004）「高度経済成長期における農山村の新規学卒者の「生活体験」に関する調査研究報告書　～長野県M郡K町・N村の中学卒業生の追跡調査～」.

資料1

調査票

～ 生徒票・保護者票 ～

【地域社会と子育てに関する調査】

（生徒用）
2008年　3月実施

アンケート調査のおねがい

☆　これは、みなさんの学校・家庭また地域での生活や勉強のようすについて、お聞きするアンケートです　テストではありませんので、自分の思ったことや考えたことなど、そのまま答えてください

☆　個人の名前を書く必要はありません．また回答結果は数字としてまとめて、コンピューターで処理するため、みなさんにごめいわくをおかけすることはありません

☆　この調査には、生徒のみなさんと保護者（おとな）の方との意見とを、くらべる質問が含まれています　両者を対（セット）にして比較・分析するため、下に調査票番号がありますが、保護者と組み合わせるためのものなので、回答者が特定されることはありません

☆　保護者用のアンケート（調査票）、は家に持ちかえり、保護者・ご家族（おとな）の方に記入していただいてください。調査票は封筒に入れ、学校ではなく私たちの研究会あてに直接ご郵送していただくよう、おねがいしてください。

回答のしかた

あなたはカレーライスが好きですか

1．とても好き　　②．好き

3．きらい　　4．とてもきらい

あなたが、もし「好き」だと思ったら、
上のように番号のところを○でかこんでください。

放送大学「地域の教育」研究会
岡　崎　友　典

【1】 あなたは男ですか、女ですか。

1 男　　2 女

【2】 あなたの学年（がくねん）を教えてください。

［　　］県［　　］中学校［　　］年生

【A】まず、あなたとあなたの家族と地域についての質問です。

【3】 つぎの（1）～（6）のそれぞれについて、あなたの家族やあなたの考えにいちばん合うものをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

（1）私の家族は、みんなで何かをするのが好きです。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

（2）家族がまとまっていることは、とてもだいじだと思う。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

（3）私の家族では、何かを決めるときに家族で相談することが多い。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

（4）親には学校のことをあまり話したくない。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

（5）親子で意見が合わないとき、親は自分（あなた）の言い分を聞いてくれない。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

（6）こまったことがあっても、親は本気で相談に乗ってくれない。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

【4】 あなたのまわりには、家族のほかに、つぎのような人がいますか。（1）から（3）のそれぞれについて、あてはまるものをひとつ選び、番号に○をつけてください。

（1）こまったことや、なやみごとなどを相談できる人がいる

1. たくさんいる　2. 少しいる　3. あまりいない

（2）尊敬できる人がいる

1. たくさんいる　2. 少しいる　3. あまりいない

（3）声をかけてくれる人がいる

1. たくさんいる　2. 少しいる　3. あまりいない

【5】 あなたには、つぎのようなことがどれくらいありますか。（1）から（8）のそれぞれについて、あてはまるものをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

（1）親（保護者）からほめられる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

（2）学校の先生からほめられる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

（3）近所のおとなの人からほめられる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

（4）知らないおとなの人からほめられる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

（5）親（保護者）からしかられる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

(6) 学校の先生から注意されたり、しかられる

1 よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

(7) 近所のおとなの人から注意されたり、しかられる

1 よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4 ぜんぜんない

(8) 知らないおとなの人から注意されたり、しかられる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

【6】 つぎの (1) ～ (4) のそれぞれについて、あなたの考えにいちばん合う答えを ひとつ選び、番号に○をつけてください。

(1) 自分の家が大きな都市にあれば、私立学校、塾や予備校などがたくさんあって 勉強や進学に有利なのにと思う。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(2) 自分が住んでいる町や村には、遊ぼうと思えばどこでも遊べるので不満はない。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(3) 町や村で行われる行事には、子どもにとって楽しいものがたくさんある。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(4) この町や村でくらしていると、ときどき、息がつまると感じることがある。

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

【7】 つぎの (1) ～ (3) について、あなたが感じることをそのまま書いてください。

(1) いま住んでいる町（村）のいちばん良いところは何ですか。

[　　]

(2) いま住んでいる町（村）のいちばん嫌いなところは何ですか。

[　　]

(3) あなたは、いま住んでいる町（村）がどのくらい好きですか？　最高点を 100 点 として、あなたがどのくらい好きなのかを点数であらわしてください。

[　　] 点

【8】 あなたは、学校の部活動のほかに、町や村で行われる行事に参加していますか。 つぎのなかで、あなたが実際に参加しているものの番号に、いくつでもよいですので、○をつけてください

1. 子ども会
2. スポーツ少年団やスポーツクラブ
3. ボーイスカウトやガールスカウト
4. 神社やお寺で行われる夏祭り、秋祭りなどのお祭り
5. お祭り以外に、寺、神社、教会などで行われる宗教行事
6. どんと焼きなど、子どもたちがくわわって季節ごとに行われる、伝統的な行事
7. 清掃活動など、町や村で行われる美化運動
8. 清掃活動や美化運動以外のボランティア活動
9. 学校、幼稚園、保育所などで行われるバザーや行事
10. 公民館、センター、児童館、病院などで行われる行事や活動
11. 町や村で行われる文化祭、音楽祭や展覧会などの文化的な行事

【B】 つづいて、あなた自身のことについての質問です。

【9】 あなたには、きょうだいがいますか。

1. いる　　2. いない

↓

「1. いる」と答えた方への質問です。
つぎの中であてはまるもの番号に○をつけて、（　）の中に人数を入れてください。

1. 私には兄が（　　）人います。
2. 私には姉が（　　）人います。
3. 私には弟が（　　）人います。
4. 私には妹が（　　）人います。

【10】 あなたの祖父母（おじいさん、おばあさん）の方はどちらにお住まいですか。
父方母方についてあてはまるものすべてを選び、番号に○をつけてください。

1. 同じ家や敷地に住んでいる
2. 同じ町村にいる
3. 同じ町村以外の佐久地方にいる
4. 佐久地方以外の長野県にいる
5. 長野県外にいる
6. 祖父母はいない

【11】 あなたは学校で部活動に入っていますか。(中学3年生の方は、入っていましたか)

1. はい　　2. いいえ

↓

「1　はい」と答えた方にうかがいます

SQ-1　入っている部の名前を［　　］の中に書いて下さい。
(中学３年生の方は入っていた部の名前を書いてください)

［　　］部　［　　］部

【12】 将来の仕事について質問します。

(1) あなたは将来、どんな仕事をしたいですか。できるだけくわしく書いてください。

［　　］

(2) その仕事は、どのようにして知りましたか。つぎの中からあてはまるものをすべて選び、番号に○をつけてください。

1. 親がしているから
2. 身近な人のすがたを見て
3. 学校で勉強して
4. テレビ番組や映画を見て
5. 本や雑誌を読んで
6. その他（どのように知ったのかを書いてください）

［　　］

(3) どうして、その仕事をしたいと思ったのですか。つぎの中から<u>あてはまるものをひとつ選び</u>、番号に○をつけてください。

1. 親の仕事を継ぎたいから
2. その仕事を好きだから
3. おおくの人の役に立つから
4. たのしそうだから
5. 収入がおおそうだから
6. 仕事をずっと続けられるから
7. その他（理由を書いてください）

［　　］

【13】 あなたは、おとなになったらどこで生活したいですか。つぎの中で最もあてはまるものをひとつ選び、番号に○をつけてください。

1. ずっと地元で生活したい
2. ずっと都会で生活したい
3. 一度は都会に出るが地元で生活したい
4. 地元でも都会でもないところで生活したい
5. まだ、はっきりしていない

【14】 つぎの (1) から (8) のそれぞれについて、あなたの考えに最もあてはまるものをひとつ選び、番号に○をつけてください。

(1)「自分の気持ちが言葉で伝わらない」と思うことがある

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(2) 目上の人やおとなに、敬語で話をする

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(3) 人の気持ちになって、考えたり行動したりできる

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(4)「人生とは何か」と考えても、意味がないと思う

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(5) なかの良い友だちでも、悪いことをしたら注意できる

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(6) 友だちはできればたくさんいたほうがよい

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(7) 気の合わない人ともつきあったほうがよい

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(8) 友だちといるよりも一人でいたほうが気楽だと思うことがある

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

【15】 つぎは、携帯電話やPHSについての質問です。あてはまる番号に○をつけてください。

(1) あなたは携帯電話やPHSを、ふだんの生活で使っていますか

1. 使っている　2. 使っていない　3. 持っていない

↓

「1. 使っている」と答えた方にうかがいます。

(2) 携帯電話やPHSをつぎのように使うことがありますか

	ほとんど使わない	週に何度か使う	1日に1~2回くらい使う	1日に3~10回くらい使う	1日に11回以上使う
1. 家族と話す	1	2	3	4	5
2. 家族にメールを送る	1	2	3	4	5
3. 友だちと話す	1	2	3	4	5
4. 友だちにメールを送る	1	2	3	4	5

【16】 つぎに、パソコンについて質問します。

(1) あなたはパソコンを、学校以外のふだんの生活で1週間にどれくらい使っていますか。あてはまる番号に○をつけてください。

1. 使わない　2. 週に1~2日くらい　3. 週に3~5日くらい　4. 週6日以上

↓

2、3、4を選んだ方はつぎの質問に答えてください。

(2) パソコンをどのように使っていますか。つぎの中で、あなたの使い方にあてはまるものすべてを選び、番号に○をつけてください

1. 勉強や宿題で使う
2. 趣味や遊びで調べるのに使う
3. メールのやりとりをする
4. チャットをしたりブログなどに書き込みをする
5. ホームページやブログを作る
6. 家族と連絡をする
7. 友だちと連絡をする
8. 地域の人と連絡をする
9. ゲームをする
10. 音楽を聞いたり録音したりする
11. 写真を記録したり送ったりする
12. インターネットで買いものをする
13. その他（どのように：　）

【17】 最後に、今暮らしている地域の人たち（子どもやおとな、または家族）への期待や希望、伝えたいこと、やって欲しいこと、そしてこのアンケート調査についてなど、どんなことでもかまいませんので、下の欄に書いてください。

以上です。最後までご協力いただいて、ありがとうございました。調査結果がまとまりましたら、みなさんにご報告します。これからのみなさんの学校や家庭、地域での生活や学習の参考にしてもらえれば幸いです。

【地域社会と子育てに関する調査】

（保護者用）
２００８年　３月実施

アンケート調査のおねがい

☆　この調査はあなたのお住まいの地域の「教育環境」について、中学生とその保護者のご意見をお聞きするアンケートです。中学生の皆さんには、「学校・家庭また地域での生活や勉強の様子」について、学校にて調査させていただいています。

☆　お名前を書く必要はありません。回答結果は数字としてまとめて、コンピューターで処理するため、皆さんにご迷惑をおかけすることはありません。

☆　この調査には、生徒（子ども）と保護者（大人）の意見を、比較する質問が含まれています。両者を対（セット）にして比較・分析するためです。下に調査票番号がありますが、生徒（子ども）と組み合わせるためのもので、これにより回答者が特定されることはありません。

☆　調査票は返信用封筒に入れ、封をしてポストに入れてください、大変お手数をおかけしますが、**一週間以内にご返送ください。**なお、**調査対象のお子さんが２人（２、３年生）いる場合には、**ご記入いただくのは１通ですが、無記入のものも同じ封筒に入れ２通ともご返送ください。

回答のしかた

あなたは映画が好きですか

1．とても好き　　②．好き

3．きらい　　4．とてもきらい

あなたが、もし「好き」だと思ったら、
上のように番号のところを○でかこんでください。

聖徳大学 生涯学習研究所
夏　秋　英　房
Tel　047-365-5691　Fax　047-365-5692
放送大学（地域と教育研究会）
岡　崎　友　典
Tel　03-5395-8690（研究室）/ 8688(代表)

【１】あなたの性別を教えてください。

1. 男　　2. 女

【２】あなたの年齢を教えてください。

［　　］歳

【３】お子様は何人いらっしゃいますか？　性別ごとに教えてください。

男［　　］人　　女［　　］人

［A］　まず、あなたとあなたのご家族のことについてうかがいます。

【４】つぎの（1）から（6）のそれぞれの質問について、あなたのご家族やあなたのお考えにいちばん合う答えをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

(1) 私の家族は、みんなで何かをするのが好きです。

1. とてもあてはまる　2. 少しあてはまる　3. あまりあてはまらない　4. ぜんぜんあてはまらない

(2) 家族がまとまっていることは、とても大事だと思う。

1. とてもあてはまる　2. 少しあてはまる　3. あまりあてはまらない　4. ぜんぜんあてはまらない

(3) 私の家族では、何かを決めるときに家族で相談することが多い。

1. とてもあてはまる　2. 少しあてはまる　3. あまりあてはまらない　4. ぜんぜんあてはまらない

(4) 子どもは学校のことをよく話してくれる。

1. とてもあてはまる　2. 少しあてはまる　3. あまりあてはまらない　4. ぜんぜんあてはまらない

(5) 子どもと意見が異なるときは、お互いに納得するまでよく話し合う。

1. とてもあてはまる　2. 少しあてはまる　3. あまりあてはまらない　4. ぜんぜんあてはまらない

(6) 何か困ったとき、子どもはよく相談してくれる

1. とてもあてはまる　2. 少しあてはまる　3. あまりあてはまらない　4. ぜんぜんあてはまらない

【5】 あなたは、お子さんが進路を決定する際にどのようなことを重視して欲しいですか。つぎの (1) から (4) のそれぞれについて、あなたのお考えにいちばん合う答えをひとつ選び、その番号に○をつけてください

(1) 仕事につながるような技術や資格を身に付けること

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(2) 幅広(はばひろ)い教養を身に付けること

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(3) ちがった環境で育った人と知り合いになること

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(4) 今、生活している所とは、ちがった環境の中で、一度は生活すること

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

【6】 あなたご自身は、将来お子さんと同居したいと思いますか。

1. できれば同居したい　2. 同居はしないが近くに住んでほしい　3. 同居しないですごしたい
4. まだ決めかねている　5. 特に考えていない

【7】 あなたはお子さんに、将来のご自身との同居について、あなたのお考えを話したことがありますか。

1. ある　2. ない

【8】 あなたは、お子さんに、将来どこで生活してほしいと思いますか。つぎの1～7の選択肢の中から、あなたのお考えに最も近いものをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

1. できれば長男は地元に残ってほしい
2. できれば長女は地元に残ってほしい
3. 男の子の1人は地元に残ってほしい
4. 女の子の1人は地元に残ってほしい
5. 子どもの1人は地元に残って欲しい
6. 子どもは地元に残らなくてもかまわない
7. できれば皆、地元に残ってほしい

【B】 つづいて、子育て環境としての、あなたのお住まいの地域についてうかがいます。

【9】 つぎの (1) ～ (7) のそれぞれの質問で、お住まいの地域やあなたのお考えにいちばん合う答えをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

(1) 都市部と比較して、学校・塾・予備校などお子さんの教育や進学の面で、お住まいの地域に不満はありますか？

1. とても不満である　2. 少し不満である　3. あまり不満はない　4. まったく不満ない

(2) 犯罪の発生、遊び場の危険性、環境の汚染など、お子さんを育てる環境として、お住まいの地域の安全性に不安がありますか？

1. とても不安である　2. 少し不安である　3. あまり不安はない　4. まったく不安はない

(3) 都市部と比較して、お住まいの地域の自然環境はお子さんを育てるのに良い環境だと思いますか？

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う 3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(4) お住まいの地域の行事には、お子さんが楽しんで参加できるものが多いと思いますか？

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う 3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(5) お子さんを育てるとき、地域の人々がいろいろ支えてくれて良かったと思いますか？

1. とてもそう思う　2. 少しそう思う　3. あまりそう思わない　4. まったくそう思わない

(6) あなたのご家族やお子さんのことについて、お住まいの地域の人々が言うことや話すことが、わずらわしく感じられることはありますか？

1. よくそう感じる　2. ときどきそう感じる　3. あまりそう感じない　4. まったくそう感じない

(7) 子育てや子どもの進学などを考えると、できればお住まいの地域からよその地域に移りたいと考えることはありますか？

1. よくそう考える　2. ときどきそう考える　3. あまりそう考えない　4. まったくそう考えない

【10】 つぎの (1) ～ (2) のそれぞれについて、あなたがお感じになることをお書きください。また (3) には、お住まいの地域の「評価点」を入れてください。

(1) 子育て環境として、お住まいの地域のいちばん良い点は何ですか。

[　　]

(2) 子育て環境として、お住まいの地域で不満に感じる点は何ですか。

[　　]

(3) 総合的に評価すると、お住まいの地域は、子育て環境として何点くらいですか？あなたが考える理想的な環境を 100 点として、お住まいの地域に対するあなたの評価点を記入してください。

[　　] 点

【C】つぎに、お住まいの地域の中での、あなたご自身の生活についてうかがいます。

【11】 あなたは、ふだん、つぎのようなことをどれくらいされていますか。(1) から (6) のそれぞれについて、あてはまる答えをひとつ選び、その番号に○をつけてください。

(1) 自分の子どもをほめる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

(2) 知り合いの子どもをほめる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

(3) 知らない子どもをほめる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

(4) 自分の子どもをしかる

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

(5) 知り合いの子どもを注意する

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

(6) 知らない子どもを注意する

1. よくある　2. ときどきある　3. あまりない　4. ぜんぜんない

【12】 あなたは、お住まいの地域にある子どもを育成する団体やサークルで活動していますか。

1. はい　2. いいえ

↓

「1. はい」と答えた方にうかがいます。

(1) あなたが参加されている団体やサークルをいくつでもお書きください。

[　　]

(2) それらの中で、あなたが最もやりがいを感じるのはどれですか。

[　　]

【13】 お住まいの地域で行われている行事や活動で、あなたが現在参加している番号に○を、今後参加してもよいとお考えの番号に△をつけてください。いくつでもかまいません。

1. 毎年決まった時期に開催されるお祭り
2. お正月やお盆の行事
3. 神楽、歌舞伎、獅子舞などの郷土に伝わる伝統芸能
4. ゲートボール、スケート、ゴルフなど、運動やスポーツ
5. 文化祭、音楽祭、コンクールなどの文化的行事
6. 自治会や町内会の会合、集会、役員会など
7. 地域の清掃や美化運動など、自治会や町内会が主催する活動
8. 保育園や学校で行われる行事
9. 公民館や地域のセンター、病院などで行なわれる行事
10. 地域の人々が行う自主的なサークル活動やボランティア活動
11. 商店街や商工会、農協などが主催するイベント
12. 地域の防災・防犯活動
13. 学校のPTA活動
14. 子ども会、ボーイスカウトなど地域の子どもたちの活動の指導・支援
15. その他（　　）

【14】 あなたはご近所の方々と、ふだん、どのようなおつき合いをされていますか。つぎの1から9の中で、あてはまるすべての番号に○をつけて下さい。

1. 顔を合わせたときに挨拶（あいさつ）をする
2. 一緒に買い物に行く
3. 病院に送っていく
4. お互いの家にお茶を飲みに行く
5. 道ばたで会ったときに世間話をする
6. 日頃の生活で起きた問題を相談する
7. 葬儀などの不幸があったときは、その家の手伝いをする
8. 家族の結婚の時に、披露宴に招待する
9. その他（　　）

【D】 最後に、あなたご自身のことについてうかがいます。

（本来これは個人のプライバシーですが、子どもたちの育つ環境を考えるために、まことに恐縮ですが、お差し支えない範囲でお答えいただければ幸いです。）

【15】 家計の中心となる方のご職業をお教えください。

1. 公務員・団体職員　2. 民間企業勤務　3. 商工自営業　4. 農業・林業
5. その他（　　）

【16】 よろしければ、あなたのご家族の構成についてお教えください。

(1) あなたのご家族は2世代家族（親・子）ですか、3世代家族（祖父母・親・子）ですか。

1. 2世代家族　　2. 3世代家族

(2) 同居していないご家族・親族の方で、日ごろ行き来している方はどなたですか。1～14はご回答していただくご本人からみた関係です。あてはまるすべての番号に○をつけてください。

1. 自分の父	2. 自分の母	3. 自分のきょうだい	4. 自分のおじ
5. 自分のおば	6. 自分のいとこ	7. 自分の甥・姪	8. 配偶者の父
9. 配偶者の母	10. 配偶者のきょうだい	11. 配偶者のおじ	12. 配偶者のおば
13. 配偶者のいとこ	14. 配偶者の甥・姪		

(3) 同居していないご家族・親族の方で、電話・手紙・メールなどでよく連絡を取り合う方はどなたですか。1～14はご回答していただくご本人からみた関係です。あてはまるものすべての番号に○をつけてください。

1. 自分の父	2. 自分の母	3. 自分のきょうだい	4. 自分のおじ
5. 自分のおば	6. 自分のいとこ	7. 自分の甥・姪	8. 配偶者の父
9. 配偶者の母	10. 配偶者のきょうだい	11. 配偶者のおじ	12. 配偶者のおば
13. 配偶者のいとこ	14. 配偶者の甥・姪		

【17】 今お住まいの町村での居住年数はどのくらいですか。

約 [ ] 年

【18】 現在の町村で生活されるようになったのはなぜですか。つぎの中であてはまるものすべての番号に○をつけてください。

1. 生まれたところだから　2. 親が住むようになったから　3. 結婚のため
4. 仕事を得るため　5. 住宅を得るため　6. 子どもの教育のため
7. 家業を継ぐため　8. 親の扶養のため　9. 家族の健康のため
10. 先祖のお墓を継ぐため　11. その他 (　　)

【19】 あなたはどちらのご出身でしょうか。出生地ではなく、あなたが中学卒業まで(15歳以前)にいちばん長くすごしたところを、お教えください。

1. 小海町・北相木村・南相木村
2. 上記以外の佐久地方 [　　] ← 市町村名をお書きください
3. 佐久地方以外の長野県 [　　] ← 市町村名をお書きください
4. 長野県以外 [　　] ← 都道府県名をお書きください

【20】 あなたは、中学卒業後(15歳以降)、今お住まいの町・村以外の地域（市町村）で生活されたことがありますか。

1. ある　2. ない

↓

「1. ある」と答えた方に。次の《20－1》《20－2》についてお教えください。

《20－1》 中学卒業後(15歳以降)に生活した地域なかで、いちばん長くすごしたところはどこですか。

1. 佐久地方 [　　] ← 市町村名をお書きください
2. 佐久地方以外の長野県 [　　] ← 市町村名をお書きください
3. 長野県以外 [　　] ← 都道府県名をお書きください

《20－2》 中学卒業後(15歳以降)にいちばん長くすごしたところと、今お住まいの地域と比べて、生活して行く上で一番違うと思われるのはどのような点ですか。どのようなことでもかまいません。できるだけ具体的にお教えください。

【全員の方に】

最後に、子どもたちの教育環境について、地域の方々や子どもたち、また学校や行政に対して、期待や要望、やって欲しいことやご意見など、そしてこのアンケート調査についてご助言など、ございましたらどのようなことでもかまいません。遠慮なくお書きいただければ幸いです。

以上です。長時間にわたり最後までご協力いただき、どうもありがとうございました。

なお、調査の結果につきましては、まとまり次第、協力いただいた中学校と教育委員会にお届けさせていただきます。

資料2　地域評価　良い点，不満に感じる点

総合評価の生徒と保護者の比較

生徒				保護者		
性別	良い点	不満に感じる点	地域評価点	良い点	不満に感じる点	地域評価点
女子	親切なところ	車の運転のしかた（？）	80	自然が多くのどかな所	広い公園がない	70
女子	自然が多いところです。	いなか…	60			
男子	自然がたくさんあること	店が近くにない	89	自然が多い 空気がきれい	児童館・図書館・公園がない	50
男子	緑が多くサバゲをやるのにとてもよい	エアガンショップがない	80	近所に子供たちの仲良しおじいさんたちがいます。昔ながらのしつけをして下さいます。大人にしかられる事の大切さを子供が自信で納得しています。	人のうわさをよろこぶPTAのお母さん方のグループがあり，子供に家族のことをいろいろ質問してくるのがイヤだとなやむお母さん方が多いです。 大人のモラルを大切に考えてほしい方々です。	90
男子	自然	金使い	50	自然が豊かで，子供が小さいときは児童館などもあって助かった		100
女子	自然がいっぱいあるところ	山と畑ばっかりで建物がぜんぜんないところ	20	自然がある事（緑・山）	学校等への通学手段（遠い）	70
男子	空気がおいしい		70			
男子	自然が多い	山しかない	30	のどか	・遊び友達が遠いこと。 ・ダンス・スケートボード・球技等のできる子供の集まるための施設がないこと。	65
女子	自然がきれいで，村の人はみんな優しい	村長が大嫌い	100	社会環境が良い	交通の利便性	80
女子	緑がいっぱい	借金だらけ	80	自然環境がとても良い	公園など遊ぶ場所がない	60
女子	自然がすごい	買い物とかするところがない	70		交通の便が悪い	70
男子	自然が多い	遊ぶ場所が少ない	65	村独自の施策として，海外ホームステイ事業など教育環境が充実している	自動う数が少ないことによる競争性の欠如	65
女子			70	自然に接することが出来る	なし	70
男子	森がいっぱいある	借金がある，熊に出くわす可能性がある	90			
女子	緑がたくさんあるところ	お店とかが少ないところ	100	地域の人たちが皆知り合い／自然がいっぱい／歩道も整備された	若い夫婦がいないので子どもがいない／子どもに近所で遊べる友達が全然いない	70
女子	自然がたくさんある	特にない	80			90
女子	自然がたくさんあるところ	金がないところ	65	四季の自然と生活がとけあっており良いと思う	公共交通手段が少ないため，通学時の送迎が必要となる	80
男子	自然がたくさんある	余計なところにお金をかけすぎ	80			50
女子	自然が豊かな所。	お店が少ない所。	80	顔見知りの人が沢山いる	公園・図書館などの不備	75
女子	静か。	行事がつまらない。	65			
女子	自然がたくさんあって景色が良い事	お店が少ない事	80	子供同士の縦のつながりが密で，年上の子から年下の子へと受け継がれていくものがあり，子供にとってとても良かった。	中学・高校と進学するにつれ遠くなるので，子供の負担はもちろんの事，交通費等親の負担も大きい。	78
男子	人がすくない	バスがすくない	50	自然がいっぱい	冬場の遊び場	80
女子	水がそのまま飲める	外にゴミが捨ててある事	70	自然が豊かである事 静かな地域（環境）である事	交通機関（村営）のダイヤ数が少ない ＪＲのダイヤ数が少ない 料金が高い	80

生徒				保護者		
性別	良い点	不満に感じる点	地域評価点	良い点	不満に感じる点	地域評価点
女子	山が側にあるから自然が多いところ	人口が少なくて出会いがないところ	42	近所の人が子どもを知っている	子どもが少ない	75
男子	森が多い	あっても意味のないものを造る	70	交通量が少ない所なので，安心して外で遊ばせることができる	交通面で不便なので，休みの日など友達との交流がもてない	60
女子	木がたくさんあって落ちつける	コンビニなど店がない	30	特にない	特にない	50
女子	自然が近くにあること	人間関係	70	学校施設が新しい	文化的に遅れている／子供の数が少ないので役員は必ず回ってくる／教育費はかかるのに老齢人口が多いので，地域の役が否応なくやってきて仕事に専念できない	30
女子	自然とか村の人が優しいところ	お店があまりないところ	75			60
女子	他人なのに優しくしてくるところ	とくにない	50	都市部に比べて犯罪が少ない	塾が少ない	80
男子	町民が分けへだてなく話したり，色々なこと	特になし	100	静かである	文化的刺激が少ない	80
女子	人が少ない。	お店がぜんぜんなくてつまんない。	25	交通費の補助がある	交通便が悪い	70
女子	空気が澄んでいる。	お店が少ない。	70	自然がある。地域の親同志のつながりがある	学校，文化施設，情報がとぼしい 近くにない	60
男子	自然が多い	近くに遊げるところがない	50	自然が多い	文化施設，公園，広場がない	30
女子	空気がすんでいる，みどりがたくさんある。	買い物するところや，ゲームセンターがない	62	恵まれた自然環境，人情（子供の姿を見かけると声をかけてくれる）	過疎化。同部楽内に中学生が２名しかいない。（１年生と３年生）	70
男子	平和！	色々な事の競争率が低い	40	のんびりと時が流れていること	・文化的なこと（コンサート・演劇など）に出会う機会が少ない。 ・移動手段が車になり，親（他人）の手を借りないと出来ないこと。	70
女子	自然がたくさんある	お店が少ない	90	自然がたくさんある	人の家のことを干渉しすぎる	50
1	自然が多い	店が少ない	70	自然に恵まれている	大学に行くには遠い	70
女子	自然が多くてきれい	お店が少ない	75	自然にかこまれていて元気いっぱい外で活動できたり，遊んだり，自然に触れることができる。	他人の事を干渉したりウワサすることが多い	80
女子	自然が多いところ	店とかが少ないところ	70			80
男子	事件や事故がほとんどないところ	借金がけっこうあるのに，金を無駄に使うと	93	近所の人も見守ってくれること（アドバイスをしてくれたり，手を貸してくれたりすること）	色々な経験ができる機会が少ない（塾，講演会，博物館，コンサートなどがほとんどない）	60
男子	自然が多い	お店が少ない	70	自然が多い	別にない	90
男子	自然が豊かで空気がいい	携帯電話がauしか使えない	70	自然が豊か	交通の便が悪い	70
男子	お祭	借金	65	自然が多く，農業を営む家が多いので親の働く姿を見たり手伝って育っている子どもが多く，新鮮な野菜や果物に触れる機会が多い	子どもが少ないので，友達が限られる	70
男子	自然がいっぱいあるところ	あまり遊べる場所がない	75	子どもの数が少ない分，学校で一人一人が良く見てもらえる	交通の便が悪いので，習い事や友人の家に行くのにも親が送り迎えをしなければならない	50

生徒				保護者		
性別	良い点	不満に感じる点	地域評価点	良い点	不満に感じる点	地域評価点
女子	行事がたくさんあるところ	特にありません	100	比較的小さなクラス単位で授業を受けられる	ムダなことにお金を使う	50
女子	人口が少ないので，村内の人同士はみんな知	店が３つしかなくて少し不便なところ	90	自然環境が豊か，近所に住む人は顔見知りで話しやすい	子どもが少ない，高校まで遠い	70
男子	冬に雪がたくさん降ること，身近に遊べる川	特になし	97	自然にあふれ，（家族以外の）人間関係も豊富	特にないが，あえてあげるならば学習環境があまり良くない	60
女子	自然が豊かなところ	大きな店とかがないところ	70	静かなこと	様々な不便さ	60
男子	自然がたくさんあって，易しい人が多い	店が少ない	80	自然・緑が多い	子供の遊べる場所（公園など）がない	60
男子	自然が多いところ	店が少ない	50	自然が多い	学力の差	90
男子	空気がきれい	あまり店がない	87	自然に恵まれている。あくせくした雰囲気がない。少人数なので，子ども同士・親同士が家族的な感じでつきあえる	全てに於いて選択肢が少ない。競争も少ないので，子どもが広い社会に出たときにどうなのか心配。	60
男子	自然や昔の行事が残っている	店がない	40	のんびりとして，犯罪の危険が少ないところ	通学に時間がかかる，競争心のないところ	50
女子	自然がたくさん	特にない	90			
女子	色々なクラブがあること	遊ぶところが少ない	80			60
女子	空気や水がきれいなところです。	お店があまりないところです。	65			60
男子	自然がたくさんある。	ゴミが多い。	70	自然が多い	施設が少ない通学路のキケン箇所が多い 大きい公園が近くにない（子どもの遊ぶ所が少ない）	60
女子	自然豊かで暮らしやすいし，小さい町だから	ムダな建物などを建てるところ	90			
男子	静か	ない	90	自然に恵まれている事	町の財政が豊かでなく支援が少ない	75
女子	自然がいっぱいなところ	大きなお店とかがなかったりするところ	75	自然に恵まれている	子供が安心して遊べる屋外施設がない	75
男子	森林があり，空気がとてもよい	大型なお店などがない	91	自然に恵まれている	交通の便が悪い	70
女子	空気がいい，自然がいっぱいある		70	自然に恵まれている	なし	80
女子	地域の人同士が仲が良いところ	山しかない	70	自然	子供が少ないため（子供の）人間関係（友人関係）に変化がない	50
女子	自然がいっぱいあるところ	行事がつまらない	70	自然が豊か		70
男子	しらない人でもあいさつをすればかえってく	なし	100	のんびりしてる	今は子どもが大きくなったのであまり感じなくなった	50
女子	小海町	嫌いなところはありません	100	特にありません	特にありません	100
女子	自然がたくさんなところ	遊ぶところが少ない。	90	自然とふれあう事ができる	特になし	80
男子	自然が豊かな所	家が少	45	自然が多い事	交通（通学手段）	80
男子	とくにない	差別が多い	0	自然環境が良い	人間関係がうるさい	70
男子	自然がたくさんあるところ	自動販機が少ない	95	自然豊たかでよい		70
女子	自然がいっぱいで人が優しい	あまりない	90	子どもに目が届く	留守宅が多く，子どもが少ない	70
男子	自然があること	町の経済	83	自然が豊かである。地域の人々の暖かさ	交通の便	70
男子	建物がつまっていない所	大きめの店がないところ	60	自然がたくさんある	近所に子どもがいない	60
男子	祭りが年に一回あるところ	公民館がとても狭い（バスケットができると	70	自然が多いこと	交通事情が悪い	70
女子	特に思いつかない	金の使い方	50			
男子	自然にあふれている	山奥だからいやだ	50			50
男子	学校	家	50			80

生徒				保護者		
性別	良い点	不満に感じる点	地域評価点	良い点	不満に感じる点	地域評価点
女子	自然が良い	お店が少ない	45	40点	50点	50
女子	自然がとてもきれい	あまり人が親切じゃない	85		小さな町なので，すぐに人のことに対して噂になったり，いつも何かないか聞きたがる性格の人が多い	50
男子	自然がたくさんあるところ	借金があること	100	自然が多い	交通	75
男子	祭があるところ	冬になると寒いところ	50	特になし	小さい子どもにとっては恵まれているが，中・高生になるとやりたいことができなくて恵まれていないと思う	40
男子	自然豊かなところ	大きな店やスポーツショップがない	80	教育に必要な事柄にはかなりの理解で資金なども出してくださるところ	PTA活動など役員任せのところが大きく，ほとんどの役員がクジなどによって決められるところ	90
男子	広くて遊びやすい	川がきたない	59	自然が多い	せまい地域なので回りの人の目が気になる	70
女子	自然がいっぱいで静かなところ	お店がまったくないところ	69	自然が多いこと	田舎すぎてなにもないこと	70
男子	ボランティアをよくやる		80			
男子	自然が多い	特にない	80			80

資料3

「小海中学校保護者懇談会」要約

実施日　2006年6月13日　16時から18時
会　場　小海中学校校長室・会議テーブル

出席者
保護者　　母親3人（1年＝Y，2年＝I，3年＝K）と表記
学　校　　学校長，生活指導主任，学級担任　計3名を　S（教師）と表記
研究会　　岡崎　　夏秋　　春日（記録）
＊　学校長に生徒調査終了後の夕刻に，各学年の保護者と懇談の機会を設けさせていただきたいと依頼。人選を学校長にお願いしたところ，PTA役員としてではなく，学校の近隣で都合を付けてくださった3人の母親に，今回の調査（保護者用）の趣旨を伝え，音声記録することの了解を得て懇談を行った。

（学校長の挨拶と研究会メンバーの紹介）

【生徒の日常生活1　学校と地域・保護者】

岡崎：地域の中で子ども達を育てることについて，住民は非常に熱心ですか。この学校を中心にして地域の人々のつながりが，「子どもを育成」するということで，具体的にどのような活動があるかお教えください。

夏秋：小海町には「子ども会」というのはないんですか。

Y　：中学になるともうまったく子ども会にはタッチしなくなります。どうしても部活が忙しくなったりして，離れてしまう感じです。

岡崎：保護者の方々が学校と連絡を取り合うということはありますか。たとえば進路の問題とか生活指導の面とか。

Y　：していません。私の場合は本当にもう先生方にお任せになってしまって，お便りを読むぐらいです。

岡崎：学校の方では2年生・3年生の保護者の方々と生活指導に関して話し合ったり，情報公開したりというのは結構ありますか。

S　：いろいろな問題行動があれば，ですね。予防的に来ていただくということは余りないです。授業参観日などにこういうことに気をつけてほしいという話をしたり，夏休み前にそれぞれの地区で地区懇談会があります。

夏秋：懇談会はどのぐらいの単位ですか。

I　：それぞれの部集落単位です。

夏秋：1･2･3年一緒にやるわけですね。

S　：そうです。

I　：25家庭ぐらいで子どもが30人ぐらい。

夏秋：地区自体の数は。

S　：20もないですよね。先生も大体1人ないし2人入って，15人前後の先生ぐらいにはなります。

夏秋：どのぐらいの出席がありますか。

Y　：ほとんどが出席します。

夏秋：地区懇談会で話し合われるテーマというのは，夏休み中の生活態度とか。

S　：そうですね。あと，この辺は7月下旬に「祇園」(二日間にわたる町民の祭）がありますので，その後に生徒がごみ拾いをするとか，夏休み中の各種行事について話し合うところもあるのです。

夏秋：ごみ拾いというのはだれがさせているのですか。

S　：あれは各地区でやってくれると思うんですが，例えば川向こう（旧北牧村の中心市街地）の地域の人たちは小中学生が一生懸命，祭りの翌日にごみを拾うために，朝歩いていくということが毎年の行事になっているようです。自治会か何か声をかけると思います。

岡崎：そこへ先生方が参加されることはないですか。

S　：ないです。

岡崎：都会の場合，先生が来るから出るみたいなところがあります。私もPTA会長をやっていたものですから，大きな違いを感じますね。祇園に住民の皆さんの多くが参加しているというのも違いますし。都

会では見に行くだけですから。

夏秋：祇園のときには何かそういう特別な食べ物とか，家でも何か行事をされるんですか。

Y　：うちはちょうど場所的に花火がよく見える場所にあるので，皆さんがお集まりになります。実家の父母や子どものお友達ですが。祇園で遊んで，花火はうちに来て見るみたいな感じで。

I　：うちも主人の両親や兄弟を食事に誘ったり，あと，中学校ぐらいになると子どものお友達がやっぱり遊びにきて，そのまま泊まっていくというようなこともあります。

岡崎：いつの時期ですか。お盆とは違うのですね。

I　：7月30日

＊（佐久地方の祇園は7月初旬から北部の小諸市に始まり千曲川の上流に向けて，佐久市（旧岩村田町），）臼田町など順に開催され，小海町が最後となる

岡崎：都会の行事は，土日にずらして合わせることが多いのですが，昔から30日に決まっているんですね。千曲川の下から上の方へ祇園が上がっていくこの地方の伝統行事なのですね。

夏秋：他にはこの町の行事というのは何かありますか。

Y　：5月の子どもの日あたり，球技大会というのを地区対抗でします。中学生はソフトボールとバスケット。小学生はソフトボールとドッジボール。あと，スマイルボールといって室内競技なのですけど，こういうゲートボールみたいなゲートの中をくぐらせて，向こうにボーリングのピンみたいのが10本並んで，そのピンを何本倒せるかという。

夏秋：主催者は。

Y　：町です。場所は町内の各集落のなどのコートで。

【生徒の日常生活2　部活と塾】

夏秋：都会の子ども達は，中学生は部活にスポーツのクラブチームと塾，小学生でさえスポーツクラブの他に英語塾にも行って，というように忙しい生活なのですが，こちらの小海の子ども達の生活も忙しいですか。

Y　：うちはそういう塾には行っていないので。本当に中学に入ってから部活だけです。3年生も1年生もいて，高校生もいるのですが，3人とも部活を頑張ってやっています。佐久大会というのがあるので，それを目標に頑張ってという感じです。女の子は部活のあとにピアノを週一回やっているぐらいで，そのくらいですね。あとは家庭学習というか，宿題をやる。

K　：うちも3年生でバスケを一緒にやっていましたが，本当にバスケをやりに学校へ行っているというか。小学生の男の子もいますが，やはり少年野球していますが，今（高学年になって）はバスケットと両方やっているのでほとんど毎日ですね。忙しい。かわいそうだなと思うぐらい忙しい。土日はもうほとんど練習と練習試合といった感じで。でもとてもいいことではないかなとも思っていますけれどね。うちにいると，ゲームだけになってしまうので。うちにいるともう遊びは何をやっていいかわからない。今の子どもはそういうところもあるのですね，やっぱり田舎でも。

外で遊ぶって何しようという感じなので。野球とかスケートなどをやっていると本当に忙しいながらも，遊びより良いようです。そのスケートも11月になると始まるのですが，それまではもう野球がほとんどの毎日です。

岡崎：今回の生徒用の調査票を作成・ご相談したときに，校長先生から部活の記入欄は一つですかと聞かれたのですが，冬は部活でスケートをやっているのですね。そこで記入欄を複数にしたのでした。この地域の特性ですね。

K　：野球も町のスポーツ少年団，スケートは学校の部活でやっているので塾はいいと言うのです。様子を聞くとやっぱり勉強はそれなりに頑張ってやっていると言うので，その上に塾というと本当に毎日忙しい感じになってしまうので，やらせてもちょっと同じかなと。

夏秋：夜は何時ぐらいに就寝しています。

K　：9時には寝かせたいと思いますけど，でもちょっと宿題をやったりしたりとなると，今日も行っているんですけど，終わるのが7時なのですよね。行って帰ってきてお風呂に入って食べて勉強というと9時過ぎてしまいますかね。本当に何もさせないで早く早く寝なさいという感じですよね。

岡崎：Kさんのところは自営ですか。

K　：はい，商売というか。

岡崎：では生活のリズム，サイクルとしては子どもと一緒ですか。

K　：ええ，食事なんかも一緒にできます。

岡崎：お子さんは何人ですか。

K　：３人です。高校２年生が１人いて，部活をやっているとその子は遅くなってしまうので，その子だけ外れてしまいますけど。

I　：うちは３人男の子で，上が高校１年生で，中学が２年生で，下にうんと離れて保育園の年中さん，今，４歳，いるんです。もう生活の時間帯も全く違うので。こっちには転校してきて，ちょうど７年目になります。住宅は小さい子もいるので，とにかく駅の近くで親の送り迎えがなくても行けるところというのが一番の選ぶ基準でした。塾は一番上の子が自分で行きたいと言ったので，小学６年生から中学の３年間，週２日の塾と部活と生徒会でした。その後，高校に行ってもまた塾を続けたいと言ってまた同じ塾に行き始めました。

２番目の，今中学２年生の子にも，同じ塾へ行ったらと言ってやりましたが，週２日の塾と毎日の卓球部と，部活の続きで社会体育の卓球を２日やって本人がフラフラ。僕には余裕がないと言って，塾も全然合わなかったようでやめたいと言うので，自分で先生にお話ししてやめてきなさいと言ったら，自分で行ってやめてきました。少しその生活で見つめようと思って，今，もうやっぱり卓球に夢中です。

私も卓球を自分がやっていたので，その社会体育に行けるときはお邪魔して，中学生の男の子たちと一緒に卓球をやって，主人の帰りが遅いので，小さいのも連れて，小さいのもラケットを持ってこうやりたがるので，部活の時間過ぎても下の子にもちょっと相手をしてやったりしながらですね。

結構いろんな大会へ行くときもできる限り見にいってやっていますけど，親の方がいろいろ常に学校行事の確認を毎日しているのですけど，歳のせいかうっかりすることもあります。

岡崎：今の部活と社会体育の切りかえというのは，場所は変わらないのですか。

K　：変わらないです。小海中学にいてもほかの部活に入っている子が今度は卓球の社会体育にというのはできないように，一応，参加する資格というのは決まっています。

岡崎：教育委会が委嘱した指導員も１人いるわけですね。

K　：お母さんも１人，一応コーチといった形で。

【生徒の日常生活３　遊びと学習】

夏秋：通信教育や学習教材の勧誘などについて，いかがですか。

Y　：電話はよくいただきました。本当にどこで調べたかというぐらい多いです。もう出た雰囲気でわかるので，最近は子どもも慣れて，うち，お母さんいませんとそのまま切っちゃうんです。

夏秋：遊びはどうですか。小学校の頃と中学２年生となると大分遊びの中身は変わりますでしょう，遊ぶ範囲でもいいですけど。

K　：小学生はとにかく学校からうちへ帰るというだけなのですけど，中学生になるとやっぱり友達もゾロゾロと一緒に帰ってきて，うちのなかでいろいろやったりして。次は外でバスケなどで遊んだりとか，友達のうちへ行ったとか，そういうのもものすごく。

夏秋：中学に入った方が多くなるのですか。

K　：そうですね。小学生の方がやっぱり出歩かないというか，うちの近所だけで遊んでいたのですけれども。

Y　：そうですね。

K　：バスケの友達が皆，「ぞろっと」やって来て，でも３年生で部活がこれで終わったのですけれども，やはりそのグループはまたそのまま動いて，友達のうちへ行ったりきたり。

Y　：中学校はいろんな地域から来ているので，やっぱり違う地域の子達も一緒に行きます。

夏秋：交通機関は何を使いますか。

Y　：バスだったり，親を使ったり，いろいろです。

夏秋：親を使うときの連絡手段はどうやってやるんですか。

Y　：連絡は，それは休みのときだったりもするので。

夏秋：では，そういう時は帰ってくるのは夜遅くなんですか。

Y　：いや，そんなには。余り遅い時間はやはり行けないので，時間を見て迎えに行って。

S　：そういうお互いの家に行ったり来たりする友達関係というのは部活の友達がやっぱり多いのですか。

Y　：女の子はそう。うち，上の子は男の子でサッカーだったのですけど，来るお友達は皆，野球部。帰ると，もうその子たちがただいまと帰ってくるのですよ。そのくらい，そんな感じだったのですけれど。

やっぱり自分に合った子たちが自然と集まるようですね。

S　：部活はほとんどの生徒が入っています。

夏秋：運動部以外の文化部は。

S　：文化部は吹奏楽だけです。合わない子はやっぱりどうしても出るので，そういう子は帰宅部になってしまいますけどね。人数は少ないです。

夏秋：都会では信じられないね。ほとんど帰宅塾部ですかね。

I　：結構，塾の先生は学校の部活の終わりに合わせて塾の時間を組んでくださるんですよ。だからこれで3年生の部活が引退するので，そうすると3年生の授業は早い時間に移動して下さったりして。うちの子が行っているところはそういうふうにしてくれる。学校の行事とか終わり時間を子ども達に聞きながら時間割を組んでくださる。助かりますよね。そうでないとやっぱり3年生が部活が終わって，4時ごろ学校が終わるのに塾が7時からとかとなるとその辺でたむろしたりしている。買い食いしたりとかというのがよくないし，時間もロスなので。

夏秋：やはり中3になると塾に。

I　：多いですね。3年になるとどっとふえますよね，同じ塾でも。

夏秋：小海はやっぱり進学というのはすごく大きな課題として出てきますか。

I　：偏差値を理解している子はいない，偏差値でものを考えるというのはないでしょう。学校のテストで何点とった，そんな程度ですかね。

岡崎：ここは5段階評価ですか。

S　：5段階です。

岡崎：あそこの高校へ行くには大体，これじゃだめだとか。そのぐらいでね，偏差値がどうまではいかない。

夏秋：やはりそうすると，のんびりしているというか。

S　：子ども達は結構気にはしているんだとは思いますけども，でもうんとこだわってはないですよね。勉強にのんびりということはあるとは思うんだけども，でも3年生になって2学期になってくればそれなりに皆，勉強に向かいますし，勉強に押しつぶされるようなことはないのではないかなと思うんですけれど。

K　：塾とか，勉強に熱心なお母さんというのはとても熱心なのですけれども，私の場合は本当に，今，高校2年生が中学3年のときにも受験に向かって塾に通うのだったら行っていいんだよ，今の中学3年生にも行っていいんだよと言うんだけれども，自分でやるからいいと言うんです。高校2年生の子は商業高校に行ったんですけれども，もうそれなりに部活をやりながらいろんな検定をとって，それで私はいいという，そういう感覚でいるので本人に任せているのです。やるからには最後までと，そういう約束でいろんなことをやらせています。それがいいのか悪いのかというのはちょっと，今，考えるとわからないんですけれども，今の中学3年生の子もいいと言うので，これから先，あと1年あるのでどうなるかわからないのですけれども，自分でやりたいと言うのですね。

岡崎：今うかがっていると皆さん子どもの主体性をすごく尊重されて育てている感じですね。周りの親を見たときに，前の地域と比べて，親の過剰な期待とか仲間に入ってこられないとかはいかがですか。

I　：私の実家は川上村ですが，川上は結構大きな農家がとても多いので，今はもう村の人が自分の娘を村の中に嫁がせたくないというのがあり，皆，都会とか，関西とか九州とか，すごい県外，遠くからバイトで来て，そのままお嫁に来られたような方が多いので全く雰囲気が違っています。ここに来て感じたのは，町なのに地元で生まれ育ったお母さんがすごく多いなと。

小海町から小海町にお嫁に行っていらっしゃる方とか相木から小海とか，ちょっと遠くてもこの辺，佐久市とか。だから川上村にいたときの方がもっと都会的なPTAの感じというのがすごくあって，物事もはっきりおっしゃるお母さんとか，いろんなことにもすごく，スポーツでも何でも熱心な方とか多かったです。

地元で生まれ育ったというのは本当に関係のない，そういう活発なお母さんたち主体のような感じですけど，ここは本当にここで生まれ育ったお母さんたちが多いので，何かすごくつながりは温和な感じが。村から町に来たという感じではなくて，逆にこういうところに子どもの方が何か穏やかな感じが，PTAとか見ていてもすごくします。皆，地元ですねみたいな感じで，たまに違うといっても佐久町から来ましたとか。

岡崎：で同化してくるのですね，皆が。

I　：そうですね。川上村でもお父さんは皆地元でも，やっぱりPTAのことはお母さんが多いので，そん

なにね。やっぱりお母さんが地元の人が多いというのはすごく雰囲気的に違うなと来て感じます。

【地域特性：子育て支援と地域の人間関係】

岡崎：貴重なお話有難うございます。ただ同じ小海地域のなかでも，北の方へ行くとやはり小海は町場の人と違うみたいな話を聞いていますが，どうですか，そんなに大きな差ではありませんか。

Y　：どうなんでしょうかね。家族構成とか，そういういろいろな要素はありますよね。生活感の違いを子ども達が感じているかどうかわかりませんけれど。親として私は余りどっぷりつかるというのが好きな方ではないので，もうつき合っていても一線は引く，私の生活はあるし，そちらも生活があるからというのはあって，たまにちょっと申しわけないけどというときもありますけど。

岡崎：Y さんの場合には南相木村で小学校を卒業，まだ中学校も村内にあったころですよね。

＊　現在は組合立中学校（小海町・北相木村・南相木村）として統合されたため村立中学校は廃校となり小海町内の中学校スクールバスと村営バスで通学

Y　：そうです。

夏秋：冷たいとかいうふうに言われませんか。

Y　：どうなのでしょうか。結構自分にも甘いですからね。

岡崎：都会的なのですね，やっぱり合理的にきちっと割り切れるところはきちっとする。南相木村というのはどちらかというと，3 世代世帯，高齢者が多く近所付き合いがあったりして，嫌であっても避けられないしがらみがあるようですが。

Y　：やっぱり昔はもういつまでも近所の人たちが飲みにきてというか，父親が何か近所の人と一緒に。それに比べたら今は夜遅くまで大人たちがそこらに行って出入りしているというのはないですよね。急に家に来るということもないですから。本当にもうそれぞれの生活になっているというような気がしますけれど。

夏秋：結婚して小海町にいらして，この町はお互いに助け合うということが多いですか。例えば仕事を持ちながら子どもが熱を出したとか，いろいろ困った事態がありますね。とくに 3 人もそれぞれお子さんを抱え，お互いさまだから助け合いましょうみたいな，そういったことがあるのか，それとも今おっしゃったように一線を引くから余りそこら辺まで踏み込まないで，あとは自分でやりなさいとか。

Y　：うちの場合はお舅さんがいたので，周りの方にお願いするということは余りなかったのですけれども。

K　：うちもお姑さんと一緒なので，そういうことになります。

I　：主人は町内出身の長男で，両親健在で元気でいるのですけれど，別に暮らしています。今日もここに来るのに終わりの時間がよくわからないし，余り薄暗くなって保育園に行くのも子どもに気の毒なので。いくらでも見てくれるのですけど，同じ町内なのですけども，やっぱりちょっと距離があるので，終わってまた迎えにいって戻ってきて夕食，上の子たちとか食べさせてというとちょっと頼みにくくて。

今は上の子と一緒の PTA のお母さんが見てくれるよと言うので，そのお宅に預けてきました。私の帰りが遅いとそこで御飯も食べさせてくれたりします。夜，あるときはお風呂に入れてくれたりとかというようなこともしてくれています。

K　：うちも，逆に預かるときもありますし。2 番目の子と 3 番目の子でやっぱり 10 年ぐらいあきがあるのですけど，今はその下の子の保育園で付き合いのできたお母さん達とまた何かすごく仲間とか，結構活発で。

下の子が保育園へ行かないような赤ちゃんがいる人も，お昼寝になる前の午前中の家事が終わってからお昼までの時間を使って，月に一度とか二度，集まって話をしてストレス解消したりとか，いろいろ一品持ち寄って話をしたりという会をつくり。お母さんの年代層は結構いろいろなのですけど，今のすごく若い，小さい子を持っていらっしゃるお母さんはまた結構いろいろ活発だなと思います。

私と同じくらいの人でも適齢期がぐっと上がったので，その 10 年ぐらいの間に，大きい子はいなくて，歳は私ぐらいだけれど子どもは小さいというお母さんたちも結構いらっしゃるんですけど，熱心ですね。あと手づくりのおやつとか，食事なんかにしても若いほどレトルトという感じでなくて，今の人の方が結構手づくりですね。逆に上の子たちのお母さんたちに話すとすごくびっくりする感じで，私もすごいびっくりしましたね。

夏秋：誰かからそういう会を作ってみたいなり，そういう持ちかけがあったのですか。

K　：いや，二三の人達で，自分達は小さい子どもを育てて，そういえばお母さん達の誕生日，祝ってもらえないよねとかということから，では月に一度集まってその月のお誕生日の人のお誕生会を兼ねてやろうと始まって，募って，最初は皆の家を持ち回りしてやっていたんですけど，それも大変だから公民館を借りました。

公民館活動にしていろいろ子育てについて話ししたりしながら子育てサークルにしようとか，私なんかありがとうと言って，ただついていけば結構，もっとやってくださる方がたくさんいて，皆，すごく若いのにすごいですね。そこではこんなおやつを作ったよとか，こんなのを夕食に作ったら子どもが喜んだとか，そういう情報交換をしています。

夏秋：それは世代の違いですかね。

Y　：世代の違いですかね。

K　：ではもし私たちがやりたいと思っても，結局お姑さんと一緒にいるとそれができないわけです。私の場合は本当にうちで商売をやっていましたし，子どもがいても，子どもにも言ったことがあるけれど，私は乳母車を突いて子どもを散歩に連れて歩いたことなんかないぐらい，うちで事業をやっていると何が忙しいと言われてもちょっと言えないのですけども，そのくらいなので，ではお茶会しようとか，何かしようといっても，そんなふうには出ていかれないし，気兼ねもありますよね，ある程度。

今になると，おばあちゃん，こうだからお願いねと言えるけど，最初の何年間というものはちょっとそういうのは言い出せないし，学校へ行くのにもやっぱり気兼ねというのもあったし，ではあそこでお茶をやるから行くのだよというのはちょっと，そういうのが言い出せないというのが世代というか，それはうちの体質というか，あると思いますよね。

I　：だからそういうのがあるから出たいという人もいるので，そういう人を誘って，それには午前10時から12時というのは，すごく差し障りない時間。その中にはやっぱりすごいお年寄り，年とった親，お姑さんと暮らしていて，それがストレスになるとか，フィリピンからお嫁に来ていらっしゃってなかなかお友達ができないとか，いろんなストレスあるとか，そういう人たちも誘ったりというふうに，皆さんがしていますよね。

私たちが主になってつくっているグループは，私は親としては3人目で，上の子もいてという感じなのですけども，そこに行くと，本当，お膳立てしていただいた中ではありがとうという感じです。

岡崎：Yさん，何か地域でそういう活動の役職，学校ではなしにやっていらっしゃいますか。

Y　：前には保健推進員とか福祉委員もやったり，たまたま家の順番で回ってきたのでやらせていただいたというぐらいです。

岡崎：Kさん，Iさんは。

K　：保健推進員です，やっぱりうちの順番で。

I　：うちもやはり家の回りで歳の順にこう。お年寄りしか周りに住んでいないのでまだ今のところ回ってきません。でもまた自分達より下がいないのですよ。

岡崎：今日は長時間にわたり，本当にありがとうございました。また次の機会にもよろしくお願いします。

(了)

【要約担当　竹内弘枝】

資料4 「小海町地域住民組織・教育懇談会」要約

実施日　2006年9月11日　18時から20時
会　場　小海町総合センター・会議室

【懇談会実施の経緯】

＊　長野県教育委員会佐久教育事務所管内の小・中・高等学校の「第3回連合佐久校長研修会」が，9月11日に小海町内の小・中学校3校と小海高等学校を会場に開催された。小海町総合センターでの記念講演を，研究会代表の岡崎が依頼され「世代間交流に果たす学校の役割～地域社会と子育て～」をテーマに，「学術フロンティア推進事業」のもとで行った今回（6月実施）の小海中学校生徒・保護者対象の調査結果を中心に講じた。

＊　この研修会には小海町の教育委員会と学校長が出席しているが，折角の機会なので，調査結果の報告も兼ね，町内の教育関係者（地域住民組織）との懇談会を，当日の夜に設定していただいた（出席者は以下のとおり）。懇談会は，調査結果（集計表と自由記述）を出席者に配布し，およそ2時間にわたって意見交換を「音声(映像)録音」の了解を得て行った。

＊　なお，組合立小海中学校は，小海町，北相木村，南相木村の1町2村による学校組合が設置。また小海町には北牧小学校と小海小学校の2校がある。

【出席者】

小海町教育委員会委員長	鷹野氏
小海町教育委員会教育長	新井氏（挨拶）
小海町青少年健全育成会長	山下氏
小海町主任児童委員	畠山氏
組合立小海中学校長	高見沢氏（中途出席）
小海中学校　PTA会長	小池氏
同副会長	黒澤氏
同副会長	峯尾氏（北相木村在住）
同母親委員長	篠原氏（中途退席）
小海小学校PTA会長	篠原氏
北牧小学校PTA会長	小池氏
放送大学「地域の教育」研究会	岡崎，春日，夏秋

【教育長　挨拶】

新井(教育長)：今日，佐久地域の小・中・高の校長先生方が一堂に会した研究集会があり，そこで講演をされた放送大学の岡崎先生より，町の教育についてざっくばらんな意見交換をお願いされました。皆さん，ご協力をよろしくお願いします。

岡崎：岡崎です。こちら同行の春日，夏秋です。

（続いて上記の出席者が自己紹介。主任児童委員の畠山氏とPTA母親委員会の篠原氏が女性で他は男性　学校長の高見沢氏は住民の皆さんが話しやすいようにと，後半から参加）

（新井教育長はここで退席）

春日：メモ代わりにビデオを取る許可をお願いします。

【研究会代表　挨拶】

岡崎：今日の講演会には，佐久教育事務所管内の74校の校長先生方が見えました。その中で私が講演しましたのが，今お手元にある小海中学校での調査です。

生徒用，保護者用の調査票もセットになっています。これは去る6月に実施し，まだ集計中です。保護者用は生徒が自宅へ持ち帰って記入してもらい，大学宛に郵送で回収するという方法でした。小海中学校はK中学校ということで全国に発表します。長野県東部千曲川上流地域の日常生活圏の周辺にある一町二村の組合立の学校で，生徒の調査は2･3年生全員ということです。これにつきましては調査結果がきちんとまとまりましたら，後日御報告致します。

この中学生用のアンケートの最後に「今暮らしている地域の人達・家族への期待，要望，伝えたいことや，このアンケート調査についてなど，どんなことでも書いて下さい。」という自由記述欄を大きく設けました。子ども達が書き込んだことをなるべくそのまま載せてあります。

途中の質問の中に，「自分の生活している地域のよいところ，嫌いなところ」という項目，「あなたの地域は100点満点で何点ですか」という項目もあります。ある2年生の男子は，「よいところは自然豊かなところ。嫌いなところは無駄にお金を使うこと」と書いてあります。得点は66点だと。希望する職業は「人に夢や希望を与える仕事。」職業選択理由の4というのは「テレビの番組や映画を見て。」あとは「学校で勉強して」とか「身近な人の姿を見て」です。「無駄にお金を使う」というのは，「何でこの町は無駄にお金を使っているのか」ということ。それから「もっと店や施設を増やしてほしい。もっと町のためになることに税金を使って。」とか「野球を教えてほしい，お小遣いがほしい」などいろいろ出ています。「調査結果を必ず知らせてください」というのもありましたので，遅くとも3年生の卒業までに結果をお返ししたいと思います。少なくとも簡単な調査結果はなるべく早く生徒と保護者にお返ししたいと思います。

今は学校経由の調査は個人情報の関係で難しいことがあります。今回，調査対象の数は非常に少ないかわりに，一人ひとりの子どもの意見・希望を詳細に分析していきたいと思います。今日お配りした報告書は，今月の日本教育社会学会大会で報告します。自由記述についてはプライバシー等の問題があり，町外にはまだ出していません。それで今日はむしろ「教育展望」という教育の雑誌を中心に話しました。

私は長野県生まれで，妻も長野県出身。小学4年生から高校まで島根県で，それからずっと東京で生活していますが，出身大学の研究室が1970年代に長野県上田・小県地域を中心に「地域教育の総合調査」を実施し，私もこれに参加していました。その縁もあってその後，私が東京学芸大学在職中に文部省（当時）の科学研究費補助金をえて，小海町で調査を始めた次第です。小海町は東京から遠くなくて地域の教育が見えやすいところということで，長野県の教育委員会の方で長野県教育史を編纂されている方がご紹介くださいました。

調査は昭和30年度から5年おきに45年度まで，小海中学校卒業生全員の進路調査をしたのが御縁の始まりです。今66歳，61歳，56歳，51歳になる方々全員です。一番協力していただいたのが「小海町人会」で，町人会名簿や同窓会名簿などで約7割近い方の現住所を調べ，アンケートをして報告書*を作りました。その後も町長，教育長始めいろいろな方々のお世話になりまして，小海全体は難しいということで，親沢と川平の集落を中心に進路調査を続けています。この調査は町の問題だけでなく，日本全体の教育の問題に関わることなので。もう20年以上になります。

＊「高度経済成長期における農山村の新規学卒者の『生活体験』に関する調査研究報告書」（2004年3月）

今回はこちらの聖徳大学の夏秋先生と合同で調査を実施いたしました。先生は文部科学省の学術フロンティア推進事業という形で，「少子社会における子どものための地域活動の展開」という5年計画の調査プロジェクトの責任者をしておられます。地域の調査をいきなりというのは難しいので，私たちの研究会と合同でという形になりました。私の放送大学の番組では，これまで何回か佐久地方を取り上げてきましたが，最近は小海町親沢地区の三番叟，北相木の山村留学などを素材にしていますし，そのビデオテープは役場と教育委員会には届けておりますので，御利用下さい。

長野県の教育委員会の紹介で入ったわけですが，小中学校へ入る場合はやはり地元の教育委員会を通すべきだと教えられたこともあります。この20数年，集落移転など小海町もいろいろあり，今も大変だと思いますが，子ども達の教育環境をよくしていくためのスタート地点であると考えまして，御指導をいただき，その成果を小海町，佐久地方はもとより全国に伝えていきたいのでよろしくお願いします。

司会・進行は，夏秋先生にお願いします。春日先生には随時，質問などお願いします。

【意見交換】

夏秋(司会)：よろしくお願いします。少子社会における子どものための，地域活動をどう展開したらいいか，という点を中心に進めさせていただきますが，お手元の３点の資料，「中学生の意見」「親の意見」「両方併記」のものという３点を用意してあります。御覧いただいて，皆様の地域に対する考えといったものをうかがいたいと思います。

まずはじめに，小池さん，小海の子ども達の遊びはいかがでしょうか。

小池(北牧小)：今のここの小学生はやはりゲームで遊んでいます。友達同士，外で野山を駆け回って遊ぶということは，私らの年代より少ないのではないか。北牧小ではPTAが裏山を整備して，探検みたいなことができるようにしていますが，子どもは学校でしかしない。家へ帰れば一切しないのではないかと思います。

夏秋：そういう場を設定してもらわないと，子ども達，自分ではどうでしょうか。

小池：私が見る限りでは，自分達で計画して物事を考えて遊ぶということがない。親に言われないと動けないというか。親も教えていないからか。野山でどうやって遊ぶかわからないというのが現状ではないですか。

夏秋：遊び方そのものを知らない。その点，篠原さんいかがですか。

篠原(小海小)：やはり川や山で遊ぶといったことを，子ども達同士だけでやることが多分少なくなってきたと感じます。

夏秋：PTAとして，子ども達の活動を活性化しようというような仕掛けはありますか。

篠原：小海小学校は裏が川なので，学校も地域でも川遊びの行事があります。部落によっては地元でキャンプをし，ほとんどの子が参加します。

夏秋：父母や地域の人達が企画しているのですね。

篠原：そうです。PTAの役員と地域の育成会とタイアップして，夏休みや冬に子ども行事をしています。

岡崎：母親の方はいかがですか。

篠原(小海中)：住んでいるのは結構山の中で，女の子が２人いますが，細い坂が多いので自転車は危なくて乗ることができません。国道も危険で，親もちょっと過保護かもしれませんが，あまり手放しで遊びに行かせられません。やはり女の子なので山に遊びに行くということもほとんどなく，中学生になれば部活で忙しく３年間過ごしました。

その後は一応受験生ということで，いずれ中学生になると遊ぶという感覚ではなくなるみたいです。私自身は佐久の山間部の出身で，女の子ですが兄と弟と一緒に男の子に混じって山にも川にも人の家にも入り，野球をしたりという具合でしたが，今の子はやりませんね。

夏秋：中学生は携帯電話を持つ子どもが増えていますが，人間関係の持ち方は昔と違ってきていますか。

峯尾(小海中)：我が家は子どもも私も携帯電話を持ちません。電話ならまだしも，挨拶もメールではコミュニケーションの仕方が不自然ではないかと思います。子どもは大人のまねをしますので，大人の方も携帯に縛られた生活はどうかと感じます。また，話し言葉も最近の中学生はおかしくなってきました。相手と話す言葉ではなくて，単語だけの話し方をしている。それはメールのせいではないかと察しています。

夏秋：もしや峯尾さんのお宅にはゲームはないですか。

峯尾：ゲームはくじでもらいましたが，１時間やったら１時間家の手伝いをしなさいと，子どもと話し合ってやっています。小学生の女の子，中学生の男の子，高校生の女の子がいます。

先程の小学生の遊びについて，子どもの本音はやはり友達と一緒に遊びたいのです。ただ北相木という地域が上から下まで長いので，そういう条件も外遊びを制限しているのではないかと思います。特に冬はやはり厳しいので。

黒澤（小海中)：一番下の子は小海中学にいまして，小海なので川も山も近いですが，山は手入れしていないと危険で入れません。狐や鹿，いのししが出たりして危ないから入ってはいけないと。そうなると子どもは一人二人で遊ぶということになり，うちの中や周り，坂はないので自転車で遊ぶことになります。

昔は田んぼの水路など土でできていたので，ドジョウがいたりして遊べましたが，今はコンクリでいません。子どもも今は周りにいないので，ほとんど家で親と一緒にいます。

夏秋：子ども達はなかなか遊ぶのもままならない環境にいるので，昔のような形で遊べなくなったと。そ

れは時代の一つの結果としてやむをえないと考えますか，それとも小海の大人として何か変えられるのではないかということはありますか。

小池：確かに私達の子どもの頃は子どもが多かったので，近所の子どもと遊びの中でルールを考えて成長しました。では今大人が子ども達にどうしてやればいいかというのは難しいです。やはり室内でテレビゲームでは，友達同士のコミュニケーションができない人間に育ってしまうのではと心配です。ですから家庭の中の挨拶，手伝いなど，家の中でしっかりしつけをやって，世の中の大事なことを教えなくてはと思います。

（ここで小海中の篠原さん所用のため退席）

岡崎：篠原さんからの伝言ですが，（子どもが自分で判断する力をつけるため）ゲームもある程度体験させることは必要ですと。いろいろ体験させたいけれど，危険を考えると過保護になってしまうのが悩みですということでした。

夏秋：すると，小海の子ども達は家族の中で充実したコミュニケーションが取れているでしょうか。また，小池さんは謙遜した言い方をされましたが，むしろ小海の皆さんはたくさんのことを，子どものためにしていらっしゃると思いますが，いかがですか。

山下（青少年健全育成会）：小海町の公民館は分館単位で11あり，青少年育成会事業を公民館活動のなかに入れてもらって，おのおの年に3~4回あるのではないですか。それを大人も応援するというような形。分館の事業内容は，子どもの人数と分館単位でかなり違いがあります。あと，「子ども探検隊」を年間行事のなかに何回か取り入れています。

それから，今は危ないから無理ということですが，昔は中学生が子どものまとめ役の縦割り社会だったですね。それで学校の休みに，皆をまとめて遊んでいた。あと今の親，学校，PTAは，何かあったときの責任を気にする。学校で規制して欲しいと（責任を）任せている気がします。今年，川平地区の子ども達に小海（街場）の子がバスで合流して，川遊びをしていましたが，それを許している親は立派だと思います。子どもが危険のなかでも，遊びを見つけて工夫するということを，大人もさせてやらなくてはいけない。

畠山（児童委員）：20年前，私が子育てをした時は子どもに外を歩かせられたのに，今はPTAから危険でできませんといわれるのが悲しいです。（大人が）作ってあげた自然体験しかない。見ていると全ての子が生きていく力が弱くなっている，人間同士のコミュニケーションが短絡的になっています。

私達はよく親御さんに，家での子どもさんの様子を聞かせて下さいと言いますが，全然子どもが見えないのです。地域の中にも。家庭のなかで家事体験などが，親も子も忙し過ぎてなされていない。もう少しゆとりのある家事とか会話が必要ではないかと思います。

山下さんが子どもの工夫する力と言われましたが，子どもはもっと力があって，危ないこともやはり体験していけると思います。農村にいるのに，うちの手伝いをしないとか，自然が豊かなのに野外体験ができない，というのが矛盾だと感じます。子どもが手伝うと邪魔なこともありますが，それをさせる大人のゆとりが必要だし，危険と隣り合わせでも野外体験が自然にできるような工夫を，地域のなかでするしかないかなと思います。

山下：それについてちょっとテレビで聞いたことを思い出したのですが，親の愛情というものを測る物差しは，子どもへの関心があるかどうかだということです。口先ではきれいごとを言えても，現実には親も仕事で余裕がない面もあるので，子どもの行動に無関心なところが多いというのが現状ではないでしょうか。

夏秋：小海中の生徒のアンケートでは，家族以外の町の人との接触が6割と多く，しかも尊敬できる大人が多いと考えている割合も4割と高い。相談できる人も3割いるということで，皆高い数値だと思います。皆さんは実はかなり関心の高い親達・大人達と子ども達には見えていると思います。

一方，子ども達の生活がこれだけ変わってきているということは，地域の皆さんの生活も変わってきているということかと思いますので，春日さんの方から，沖縄の事例などを紹介してください。

春日：私の研究している沖縄の例では，集落単位で自治公民館というものを持っていて，青年会，婦人会も含めた大人の人間関係のネットワークがあり，その中へ子どもも巻き込まれて育っていく。結果として子どもを地域で育てるということなのですが，小海ではどうですか。

山下：小海は昔からスケートクラブがあり，今も北牧小，小海小含めて50人以上の子どもが入っていま

す。その子達の行事には親も付いてくるので，その指導者も含めた大人とのコミュニケーションの中から信頼関係ができる面も大いにある気がします。夏は少年野球もあるし。

岡崎：アンケートでも冬はスケートと書く子がかなりいましたね。

春日：　皆さんが地域のなかで育てた子ども達が，大きくなった後，またこの地域に帰ってくることを期待しているような取り組みになっていますか。

篠原(小海小)：私もスケートに携わってきて，子ども達の中から世界に通用する選手をとか，またその子が帰ってきて下の年代に教えてくれたらとか思いますが，実際には小海には仕事がない，人口もどんどん減っていくというのがマイナスかなと思います。

鷹野：松原地区あたりはUターンでなくて，親と同じ仕事を子どもが継いでいる人は何人かいます。旅館業には多いですね。

先程からのお話で考えると，私達の世代が戦争中で物がなかったので，せめて自分の子どもにはと思って育てた今の30~40代が，裕福に慣れてしまったということがあるのではないでしょうか。さらにその子ども達は今の小中学生になりますが，もっと贅沢になってきて困るというような。だから今，いろいろの問題というのを，もう一世代前で本当に真剣に考えれば，もっと何とかなったと思うのですよ。それが一世代遅れたことによって，いろいろな経済問題もありましたが，今問題になっていて大変だと感じます。

しかし一度そういうものに慣れてしまうと元に戻すのは大変なことで，もっと子どもは歩かせろとか，スパルタでやれという意見もあると思うのですが，それはなかなかできないというのが現状です。その責任は我々の年齢層にあると思います。さっきゲームの話も出ましたが，ある程度はいいけれどそれ以上は害になるというか，子どもに民放テレビは見るなと言ったってちょっと無理ですよね。

峯尾：いえ，子どもとの話し合いで大丈夫だと思います。親から反省して，親も見ない，うちはこうするということを，子どもが小さい頃からしつけていけば，そういうものだとなります。高校生までそういう生活をさせていると三つ子の魂で，その子が大きくなった時に，また親がやっていたことを実践してくれるのではないかと思っています。うちではそういう感じで高校生までは，親の言うことを聞かせるようにしています。あとはわからないですね。

夏秋：東京都の調査では，1985年からの15年間ぐらいでテレビのしつけをする家庭が崩れまして，親自身の子どもをしつける力がなくなっているようです。

峯尾：親の反省が大事だと。

夏秋：うちは小学6年生と親の戦いになってしまって，話し合いでというのがうらやましいです。

峯尾：ただ一つ困るのは，高校生の子が友達同士の会話に混ざれないというのが出てきました。やはり子ども同士の会話がテレビやパソコン，メールの話題で全てつながりができているみたいで，ちょっと怖いですね。

山下：今のお話ですが，あまり親が立派過ぎると，その反動で少年犯罪が出るというのもあるのではないですか。確かに今のマス・メディアの力はすごいですが，だからこそ子ども達自身が物事を考える力を養っていけるようにするのが大切だと思います。自由な発想ができるように工夫して。

今，自分は町営バスの運転手をしていますが，スクールバス的に毎朝子どもに挨拶し，騒いでいる子を叱ったり，お年寄りに席を空けてやってくれたときは大いに褒めたりとか実践しています。これで小海の中で少しは子ども達のマナー，モラルができていったらいいと思います。

夏秋：地域の中に子ども達のことがスーッと伝わるような，親同士のネットワークというか，見守る眼はあるでしょうか。パトロールとか。

小池：危ないからと中学生には言えても，高校生ぐらいになるとちょっとやはり勇気がいりますね。

峯尾：お祭りとか特別の時はPTAが出てパトロールをやりますが，ふだんはしていないです。

山下：青少年健全育成会の方で，7月に青少年健全育成強調月間，11月に街頭指導を小海駅前で。いろいろな組織と合同で防犯とかも。松原湖の駅から小海駅まで乗車し，列車内での指導などをしたりしています。

あと，自分の考えでは，学校は知識を教える場なので，子どもは学校の中ではある程度縛ってもいい気がする。親やPTAはあまり騒がないで，先生方に自信を与えた方がいい。もう少し学校を大事にしたらいいと思います。周りの大人は生きる知恵を教えるというのがいい気がします。

（後半から出席された高見沢校長がここで発言）

高見沢（小海中学校長）：やはり時代時代によって子ども達がものすごく変わってきていますね。今は親がしつけみたいなものをきちんと身につけていない，そういう親達が自分の子どもをしつけるのは不可能です。しつけが世代ごとに伝わっていない。私はもう30年以上の教員生活になりますが，小海はかなり家庭のしつけを一生懸命やって下さっているほうです。それでも，親がこれでは子どもも無理ないかな，という例はかなりあります。

夏秋：山下さんが言われたように，学校は知識を教えるところ，家庭や地域で生きる知恵を教えるといった棲み分けというのはいかがですか。

高見沢：そういうふうになると一番いいのですが。

山下：今の学校は，両方やらなくてはいけないのですよね。

高見沢：本当に生徒指導の問題で対応することが多いです。

夏秋：子どもの指導とともに，裏にはその親御さんもいらっしゃる。

高見沢：当然です。だからその日のうちに親を呼んで，一日でも延ばさないというのが大事です。遅れると問題がものすごく大きくなるので，何かあったらいつでも校長，教頭に言うようにと言っています。

夏秋：地域の教育という観点からはどんなことを期待されますか。

高見沢：子ども同士がメールや携帯電話で連絡し合うために，大人を介さなくなっている。それで，大人が間に入れば注意できたのに，それがないために問題を引き起こしてしまうことが多くなっています。

峯尾：先ほど，愛情の反対は無関心ということを言われましたが，やはり親が子どもをあまり見ていなかったというところに，今の問題があるのではないかと思います。僕は東京の育ちで北相木に来て20年になりますが，ここは地域社会のなかにしきたりとか因習があって，それが文化なのですね。うちの子も自然にたくさんそのしきたりや因習を学び，常会とか道普請などへの親の参加などもですが，嫌な面ではなくて，培われてきた歴史みたいなものをわかってきている，そのなかで育ってきていると思います。

春日：沖縄でも今の親達世代に地域的共同性がどんどん薄れているとか，「字」に未加入の人達が非常に増えているという状況が生まれています。若い人のなかでいろいろな自由度を高めることによって，人間関係作りが廃れ，個人化してしまって，地域の文化がどんどん廃れていってしまいます。

しかし，その家族関係をとばして，個人個人につながるような文化のなかで，これから後，子ども達が生きる環境をどのような形で展開してゆくか，地域のアイデンティティーみたいなものを，どう立ち上げて大人から子どもへ教えていくかが求められているのではないかと考えています。

岡崎：子育て期の人達がどのようなネットワーク，支え合いをしていったらいいか。PTAがその役割を実質的に果たしているかどうか。仲良しサークルみたいに，PTAグループとそうでないグループに分かれてしまってはいないか。学校は子どもの背後の家庭が見えにくいので，PTAがどれだけ保護者をつかんでいるかが大事になってきますね。

今日のお話でも，親が子どもに無関心になってしまうのは，一つ上の世代でそういうしつけがなかったからだと指摘してくださいましたが，やはり親を，大人自身を何とかするときに，隣近所あたりで本当に助け合っていくしかないのではないかと思います。一番の原点は，生まれた子どもに，小さい時から地域社会の皆が関心をもっていくことだと実感させられました。

長時間にわたり貴重なお話を，本当にありがとうございました。今後とも私たちの研究・調査によろしくお力添えください。

（了）

【要約担当　竹内 弘枝】

〈　学術フロンティア推進事業報告バックナンバー案内（聖徳大学生涯学習研究所所収）　〉

	タイトル	発行年月日	判型	頁数	部門
1	「少子化に関する地域システムの研究」	2004. 3	A 4	100	1
2	「韓国の平生学習とまちづくりの推進」	2004. 3	A 4	155	5
3	「高齢者の生きがい対策と人材活性化に関する研究」	2004. 3	A 4	198 (+100)	3
4	「少子社会における子どものための地域活動の展開」	2005. 3	A 4	196 (+100)	2
5	「生涯学習指導者の養成と活用に関する研究」	2005. 3	A 4	46 (+162)	5
6	「第６回生涯学習フォーラム報告書」	2005. 3	A 4	120 (+58)	総
7	「地域の教育力の向上と子ほめ運動の現状」	2005. 3	B 6	202	2
8	「地域福祉まちづくりの現状と実践的展開」	2005. 3	A 4	102	4
9	『地域で子どもをほめて育てよう「子ほめ条例のまちは変わるのか」』（発行：イザラ書房）	2005. 5	四六判	202	2
10	「生涯学習まちづくり」	2005. 7	A 4	323	4
11	「創年学　- 中高年の新しい生き方の創造 -」	2005. 8	A 4	30	1
12	「創年学入門」	2005. 8	A 5	242	3.4
13	『仕事と子育ての両立を支援する職場環境づくり (管理者研修用テキスト)』	2005	A 4	65	3.4
14	「北欧視察研修報告－北欧の子育て支援 - デンマーク・スウェーデンを訪ねて」	2005. 11	A 4	71 (+15)	1
15	「第７回生涯学習フォーラム報告書」	2005. 12	A 4	97 (+34)	総
16	「創年学入門　Vol. 2」	2006. 5	A 5	65	3.4
17	「生涯学習指導者の養成と活用に関する研究Ⅱ」	2006. 3	A 4	183	5
18	「中学生・高校生の育児体験学習プログラムの開発」	2006. 3	A 4	124	1
19	「定年退職前教育と生きがいに関する研究」	2006. 3	A 4	188 (+98)	3
20	「子ほめ運動と地域の教育力の向上に関する研究」	2006. 3	A 4	159	2
21	「市民と創る生涯学習地域に拓かれた大学を目指して」	2006. 3	A 5	52	総
22	「少子化における子どもの食生活に関する研究」	2006. 9	A 4	115	1

	タイトル	発行年月日	判型	頁数	部門
23	「創年時代」	2007. 1	A 5	54	3.4
24	「第８回生涯学習フォーラム報告書」	2007. 2	A 4	84 (+16)	総
25	「中高年の地域活動の拠点に関する実態調査」	2007. 3	A 4	211	3.4
26	「生涯学習指導者の養成と活用に関する研究Ⅲ」	2007. 3	A 4	129	5
27	「世代間交流国際フォーラム－世代間をつなぎ地域を再生するために－　世代間交流についての国際研究集会」	2007. 4	A 4	252	3
28	「創年時代２号」	2007. 6	A 5	63	3.4
29	「まちづくり活動の支援方策に関する研究 －支援センター及びアドバイザー派遣制度と福祉・防災・環境に配慮したまちづくりの実践例－」	2007. 9	A 4	97	4
30	「第９回生涯学習フォーラム報告書」	2008. 2	A 4	100	4
31	「創年時代３号」	2008. 3	A 5	60	3.4
32	『創年のススメ』　（発行：ぎょうせい）	2007. 3	四六判	248	4
33	『旅のもてなしプロデューサー養成講座テキスト』 （発行：ぎょうせい）	2008. 3	A 5	102	4
34	『若者がまちを創る』　（発行：悠雲舎）	2008. 3	四六判	112	2
35	「大学における生涯学習指導者養成カリキュラムの研究」	2008. 3	A 4	77	5
36	「短期大学のコミュニティカレッジ機能の開発に関する研究」	2008. 3	A 4	95	5
37	「社会教育指導員初任者研修プログラムに関する研究」	2008. 3	A 4	123	5

学術フロンティア推進事業　叢書

	タイトル	発行年月	判型	頁数	部門
1	少子社会の子どもと生活環境―少子社会における地域システムの研究―　（発行：ぎょうせい）	2008. 3	A 5	407	1
2	大学と地域の協働　（発行：ぎょうせい）	2008. 3	A 5	268	2.4.5
3	高齢者の生きがい対策と人材活性化　（発行：ぎょうせい）	2008. 3	A 5	258	3

執 筆 者 一 覧

● 岡崎 友典
（放送大学 准教授，学術フロンティア推進事業外部研究員，放送大学「地域の教育」研究会代表）
……はじめに，1章

● 春日 清孝
（明治学院大学 非常勤講師）
……2章，4章

● 牧野 修也
（神奈川大学 非常勤講師）
……3章

● 岩瀬 章良
（ELC Research International Canada）
……5章

● 冨江 英俊
（日本女子体育大学 専任講師）
……6章

● 竹内 弘枝
（児童福祉施設 非常勤職員）
……7章

● 夏秋 英房
（元・聖徳大学准教授，元・学術フロンティア推進事業研究員・第2部門主任，國學院大學准教授）
……はじめに，8章

第2部門 「少子社会における青少年の健全育成」報告書

中山間地における地域社会の変容と子どもの生活
～長野県・組合立小海中学校区における調査から～

平成15年度～19年度文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「学術フロンティア推進事業」
「生涯学習の観点に立った『少子・高齢社会の活性化』に関する総合的な研究」

2008（平成20）年3月31日　聖徳大学　生涯学習研究所

聖徳大学　生涯学習研究所　学術フロンティア推進事業
住所：〒271−8551　千葉県松戸市松戸 1169　聖徳大学生涯学習社会貢献センター　6階
電話：047−365−5691　　Fax：047−365−5692
E-mail：frontier@seitoku.ac.jp　　学術フロンティア URL：http：//hello.smilies.jp/lll-studies/